



教会学校教案誌

2007.4.5.6月号

日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会

No.25

2007年4～6月カリキュラム（第25号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
4月1日 受難週・進級式	キリストの受難	ルカ23:13-25	使徒2:36b	46 65
	ピラトによって死刑に定められた主イエス。ここに神の御業を見る。			
4月8日 イースター	復活のキリスト	ルカ24:36-49	コリント一15:14	
	主はよみがえられた。復活され、平和を告げる主イエスの御姿を仰ごう。			
4月15日	ヨルダン川を渡る	ヨシュア3章	ヘブライ13:8	40
	主が共にいてくださることが私たちの勇気である。試練と向かい合おう。			
4月22日	エリコの攻略	ヨシュア6章	ヘブライ11:1	41 18
	主が私たちの先に立ち、主がたたかってください。勇気をもってたたかおう。			
4月29日	ギデオンの精鋭	士師記7章	出エジプト14:13a	47 19
	数ではなく、人間の力でもない。主が勝利を与えてくださることを知ろう。			
5月6日	サムソン	士師記16章	イザヤ55:9	49、50 20
	愚かなサムソンを主が用いられる。主の不思議な御業を仰ごう。			
5月13日 母の日	ナオミとルツ	ルツ記1章	ローマ12:15	51
	神は夫と息子を失ったナオミにルツを与えられた。信仰の絆の深さを知ろう。			
5月20日	ルツとボアズ	ルツ記2章（～4章）	ローマ8:28	51
	信仰者として生きる異邦の女儿ルツを主は憐れみたまう。主の憐れみを知ろう。			
5月27日 ペンテコステ	新約の教会の誕生	使徒言行録2:1-13	ルカ24:48-49	51 70
	聖霊が注がれ新約の教会が建てられた。教会のえたとされていることを喜ぼう。			
6月3日	ダビデとゴリアト	サムエル上17章	サムエル上17:45	56 23
	主に依り頼む少年ダビデの勝利。主は、素直に信頼する信仰を喜ばれる。			
6月10日 花の日	ダビデとヨナタン	サムエル上20章	ヨハネ15:12-13	57 26
	友情、信仰のきずなに結ばれた友だちが与えられることを喜ぼう。			
6月17日 父の日	ダビデへの契約	サムエル下7章	サムエル下7:13	59
	ダビデ契約。神殿建築を願うダビデを喜び、主はダビデの家を祝福される。			
6月24日	ソロモンの神殿建築と祈り	列王記上8:22-53	列王上8:29a	62 31
	神殿建築を成し遂げたソロモン。その祈りを通して、信仰の姿勢を学ぼう。			

※「対応表」欄の上段は、『教会学校教師指導書（旧約編・新約編）』（日本基督改革派教会大会教育委員会発行）の該当する単元を示しています。「対応表」欄の下段は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

も く じ

2007年4・5・6月カリキュラム	
まえがき	木下裕也 4
巻頭説教	吉岡契典 5
日曜学校・教会学校訪問	
園田教会教会学校の紹介	高畑博司 9
特別寄稿	
キリスト教主義学校に遣わされて	中山 仰 13
特別企画・教育基本法「改正」とわたしたち	
教育基本法改正に関する座談会	20
教育基本法「改正」とわたしたちの姿勢	木下裕也 27
「宗教教育・徳育を越えて —私どもの目指すべき日曜学校伝道—」	相馬伸郎 33
本誌の基本方針～教会（日曜）学校像について～	相馬伸郎 40
聖書研究・説教展開例・分級展開例 43	
4月 1日	44
4月 8日	51
4月15日	58
4月22日	66
4月29日	74
5月 6日	81
5月13日	88
5月20日	95
5月27日	102
6月 3日	109
6月10日	116
6月17日	124
6月24日	131
成人科	138
自由募金のお願い	144
いのちのパン（こども聖書日課）	145
2007年7・8・9月カリキュラム 159	
2007年度年間カリキュラム 160	
執筆者よりひとこと・あとがき 162	

まえがき

木下裕也（中部中会教育委員会委員長）

『教会学校教案誌』の発行も七年目に入ります。中部中会にとどまらず、また教派をもこえて多くの教会の日曜学校で用いられ、執筆陣も大会的に広げられています。財政的にも中会の支援のみならず、自由募金等によって大会的に支援をいただいております。深く感謝を申し上げます。ここまで発行を継続できた恵みを覚えつつ、より一層皆様に用いていただける教案誌をお届けできればと祈り願っております。今後ともお祈りとお支えを賜りますよう、お願い申し上げます。また、教案誌についてのご意見やご感想を編集部宛お寄せいただけますと感謝に存じます。

昨年度も例年と同じ11月23日に、中部中会の教会学校教師研修会がもたれました（この号をお届けする頃には、かなり時間がたってしまうと思うのですが）。今回は遠く東京から他教派の牧師先生が、また四国中会からもひとりの姉妹が参加してください、私たちに励ましてくださいました。昨年と同じ「教会学校教師会の形成」という主題のもと、教案誌編集部三名の教師が発題した後分科会と全体討議の時を持ったのですが、活発な意見交換がなされ、とくに若い世代のCS教師方からも次々に発言がなされました。「本誌の基本方針」が徐々に根づいてきているのではないかの思いも深くされ、感謝いたしました。

各教会の教師会のさらなる充実を願う声が続きました。それぞれの教会で、さまざまな創意工夫がなされている。けれども、それがいまだ

中会的なつながりとはなっていないように思える。どうしたら「点」を「線」にしていくことができるだろうか。

このことについて、まず中会的な教師訓練のプログラムが必要性については、従来から指摘されていることです。教育委員会としても議論をかさねています。他中会では、すでに参考となるいくつかの取り組みがなされていると聞いています。そうしたものも検討しながら、教師方の要望におこたえできればと考えています。

もうひとつ、『教会学校教案誌』が教師方の交わりの、また情報交換の場として用いられることを願っています。「教師の声」の欄をぜひ活用してください。語り合うべきことはいくつもあります（全体会では、主題別に意見をつるといった案も出されたかと思います）。

いじめによる自殺の連鎖、政府主催の教育タウンミーティングでのやらせ問題の発覚といった状況の中、教育基本法が改悪されました。暗たんとした気持ちにかられます。

しかし、信仰によってこの気持ちをふりはらいたいと思います。教師研修会の開会礼拝で、井上教師は「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」（使徒5：29）とのみ言葉にかたく立つとき、神は必ず豊かな報いをくださるのだということを語られました。この世の有様がどのようであろうとも神に忠実に生きる姿勢をつらぬきたいと思います。この信仰（と、そこに約束される恵み）を子どもたちにしっかりと手渡したいと思います。（名古屋教会牧師）

「キリストにある優しさ」

—コリントの信徒への手紙 二 10章1～11節による説教—

吉岡契典（仙台カナン教会牧師）

さて、あなたがたの間で面と向かっては弱腰だが、離れていると強硬な態度に出る、と
思われている、このわたしパウロが、キリストの優しさと心の広さとをもって、あなたが
たに願います。わたしたちのことを肉に従って歩んでいると見なしている者たちに対して
は、勇敢に立ち向かうつもりです。わたしがそちらに行くときには、そんな強硬な態度を
とらずに済むようにと願っています。わたしたちは肉において歩んでいますが、肉に従っ
て戦うではありません。わたしたちの戦いの武器は肉のものではなく、神に由来する力
であって要塞も破壊するに足ります。わたしたちは理屈を打ち破り、神の知識に逆らうあ
らゆる高慢を打ち倒し、あらゆる思惑をとりこにしてキリストに従わせ、また、あなたが
たの従順が完全なものになるとき、すべての不従順を罰する用意ができています。

あなたがたは、うわべのことだけ見えています。自分がキリストのものだと信じきってい
る人がいれば、その人は、自分と同じくわたしたちもキリストのものであることを、もう
一度考えてみるがよい。あなたがたを打ち倒すためではなく、造り上げるために主がわた
したちに授けてくださった権威について、わたしがいささか誇りすぎたとしても、恥には
ならないでしょう。わたしは手紙であなたがたを脅していると思われたくない。わたしの
ことを、「手紙は重々しく力強いが、実際に会ってみると弱々しい人で、話もつまらない」
と言う者たちがいるからです。そのような者は心得ておくがよい。離れていて手紙で書く
わたしたちと、その場に居合わせてふるまうわたしたちとに変わりはありません。

（コリントの信徒への手紙 二 10章1～11節）

クリスチャンとして生活していて、そして特
に教会で奉仕をしながら、時々思い浮かべる思
いがあります。これは誰もが一度は考えられた
ことのある思いなのではないかと思うのです
が、それは、「ここにイエス様がいたらいいの
に。」という思い、この自分なんかよりも、イ
エス様がここに来て、わたしの代わりに語って
くれるなら、どんなに良いかという思いです。
そしてこの「もしここにイエス様が居てくだ
さったら」という思いの背後にある大きな期待
は、イエス様がもしここに居ればすごいことが
おできになるだろう、という期待です。イエス
様がもしここに居れば、自分や他の人にはでき
ないような大きな力で、奇跡のようなことまで

も、主イエスはきっとしてくださるだろう。そ
ういう期待があるのだと思います。

けれども少し冷静になって、この御言葉を読
みながら、「もしイエス様がいたら」という思
いを突き詰めて考えてみるならば、その結論は
必ずしも先程のイエス様への期待がその時華々
しく実現する、私たちが望むかたちで全てがま
んまとうまくいく、というようには実はならな
いのではないかと、とも思うのです。

この御言葉の中でパウロは、コリント教会の
中のある一部のパウロ反対派の人々から悪口を
浴びています。その悪口とは、一体どんなもの
だったのかといいますと、それは「パウロは口

先だけの者であり、面と向かってはいじけていて弱々しく、話しも聞くに堪えないような人間なのだ、そして手紙では威厳のあるように語っているけれども、それは遠くから遠吠えを吠えて、我々を脅かそうとしているにすぎない。パウロは弱く、彼は全く恐れるに足りないのだ。そんなパウロの言葉など聞くに値しないのだ。」というものでした。

激しい対立です。教会の中にこのような意見の人々がいたのです。

その批判に対して、パウロはまず2節の言葉を語りました。これは、例えて言うならボクサーがパンチの素振りをするようなものかも知れません。「私には、あなたがたに向かってパンチを繰り出す力がある、勇敢に立ち向かうその用意もある。けれども、なるべくならば、私はパンチの素振りをするだけで済ませたいのだ。あなたがたに実際に拳をふるうようなことはしたくないのだ。あなたがたの、パウロは口だけだという悪口に答えて、そうではないことを証明するために強硬な態度を取ることは、私の本望ではないし、そのようにはしないことを、私パウロは願っている。」これはそういうパウロの言葉です。

そしてパウロは3節から6節で、パウロが戦っている戦いについて、さらに踏み込んで語ります。パウロはここで、「私は肉には従わない。私の戦いの武器は、肉のものではない」と語りました。そして続けて、「神に由来する力によって、理屈を打ち破り、神の知識に逆らうあらゆる高慢を打ち倒す」と語りました。特にここで注目したいのは、4節終わりの「理屈を打ち破る」という言葉です。これは、「計算や打算を打ち砕く」「理論を破壊する」という風にも訳せる言葉です。つまりパウロは、「力強さや華々しさを武器として、肉に従って戦うのではなく、逆にその肉が持つ理屈や、打算や、理論を破壊してそこにある高慢を神様からの力によって打ち倒す。」と言うのです。

パウロは結論的には、パウロ反対派の人々の挑発に乗らないのです。「お前は弱くて力がない。口先だけだ」と攻撃して挑発する彼らに対して、パウロは「俺は口だけじゃなくて、力も強いぞ。パンチ力もこんなにあるぞ」と言いながらも肉の力、外側に見える、華々しい腕力に頼ることをしないのです。パウロはかえって、そういう彼らの理屈や理論を、1節に語られていますように「キリストの優しさと心の広さをもって」破壊すると言うのです。

パウロという人は、実際にその容姿や風貌について、あまり立派な人ではなかったようです。コリント教会のパウロ反対派の人々は、パウロのことを弱々しく、特に雄弁でもない人間だと攻撃しましたが、彼らのその悪意に満ちたパウロ像も、それがすべて極端な言いがかりであるとは言い切れない部分もあったのではないかと思います。そういう弱いところを彼は持っていたのでしょう。人間的に見て、また先程の言葉で言えば、人間的な理屈や理論から見て、弱々しく見える部分が彼にもあったのだと思います。そしてそれは、当然覆い隠したい部分であり、そこを改善した方が伝道者としても、有利になる点であったと思うのです。

そしてパウロは実際、弱さを隠して、強く強硬な態度に出ることもできたのです。どんな議論をしても決して負けないような、当時稀に見る頭脳と知識の持ち主でしたから、手紙など書くよりも何人かで乗り込んで行って、ボクサーが拳をふるうようにして反対者たちを論駁し、打ち倒して強いパウロをアピールして、その力によって教会を従わせる、キリストの使徒としての権威をそういうかたちで発動させると言うやり方もパウロには、やろうと思えばできたはずなのです。

けれどもパウロはその肉に従う力、外側に見える華々しさや、力強さ、人間の評価や理屈を満たすような力についてはそれを求めませんで

した。そうではなくて、神の力を求めました。肉の力強さによってではなく「キリストの優しさと心の広さをもって」コリント教会の人々に向き合うのです。

説教冒頭で、もしイエス様がここに居れば、と思うことがある。もし今ここにイエス様が居てくださるなら、奇跡のようなことまでも主イエスはきっとしてくださるだろうという期待が、頭をよぎると語りましたが、その思いは恐らくコリント教会の人々においても同様であったと思われる。彼らもそういう華々しい、使徒パウロを通して働く奇跡のような神の力を、期待していたのではないかと思います。

つまり彼らが求め、思い描いていた神様の姿は、スーパーマンのような姿だったのではないかと思います。人並み外れた力があり、空も飛んで、魔法のような力も持っていて、知性も兼ね備えている。彼らは単純に、神様はスーパーマンのように強いと思っていたのだと思います。だからこそ、その神の使徒であるパウロにも、そのスーパーマンの僕としての強さ、立派さ、力を求め、パウロがそのような力を持っていないと知るやいなや、パウロは使徒にふさわしくない人物だとして、コリント教会からの非難の矢面に立たされました。

スーパーマンのように困っているところに飛んで来て、救ってくれる分かり易い力。分かり易いストレートな強さ。これがパウロの反対者たちが誇示しようとしていた強さでした。しかし、パウロは表面的には弱く見える人で、そのようにストレートに強くなかった。そして、パウロどころか彼が従っている主イエス・キリストも、主イエスを通して現わされた神様の力も、そのようなストレートな強さ、分かり易い強さとは違った強さを持っていました。

「あなたがたは、うわべのことだけ見えています。」とパウロは7節で語っています。そして

そのうわべではないパウロの中身には何があるのかというと、8節にありますように「あなたがたを打ち倒すためではなく、造り上げるために主がわたしたちに授けてくださった権威」があると、パウロは語りました。

パウロの強さはストレートな強さではありませんでした。うわべは弱く見えた。そしてパウロはそのまま、弱さに留まるのです。彼は弱いままで。けれどもその弱さは、キリストの優しさと心の広さを映し出す弱さでした。それは何より、キリストの弱さに倣う弱さだったのです。

人間の理屈では、肉に従う人間の価値観では、馬小屋の飼葉桶で生れ、十字架に架かられたキリストは、強い方ではなく弱い方、貧しい敗北者のようなあり方をされた方です。けれども主イエスは、その弱さの生涯を通して、神様の救いの力強さを証しされ、今復活されて、敗北者としてではなく勝者として天におられます。この主イエスこそ、人間の理屈を打ち破り、高慢を打ち倒す神様の力を、それも暴力的な絶対君主のような肉の力ではなく、優しさと心の広さ、愛の深さに拠る神の力を示してくださった方です。

パウロはこの主イエスを良く知っていましたし、この主イエスによって救われ立てられた使徒ですし、その主イエスの愛を、何にもまして諸教会に届けようと奮闘した使徒でした。イザヤ書42章も、その主イエスの優しい愛を預言して語ります。「彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。傷ついた葦を折ることなく、暗くなっていく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする。」

主イエス・キリストも神の御子ですから、十字架につけられたとき、怒って十字架から降りてきて、反対者たちを一瞬にして打ちのめすということもできたに違いありません。けれども、力による服従を主イエスは誰にも求められませんでしたし、パウロもそれを教会に求めること

はありませんでした。パウロの教会形成は、ストレートに現われる分かり易い権威、分かり易い力に拠るものではありませんでしたが、しかし弱さの中に宿る、真実に優しく、広い心による愛を備えたものでした。

神様はわたしたち人間を本当に愛して、大事に私たちの人格や意思を尊重して、扱ってください。だから無理矢理従わせようとはされませんし、上からの力によって圧迫して愛させよう、従わせようとは考えておられません。それは、傷ついた灯心を、なお消さないで保ち、いとおしきで包んで守るような優しい愛です。良き牧者主イエスの愛は、羊たちがその羊飼いに支配されているのを全く苦痛に感じることなく、むしろその支配を心地よく感じ、進んでその囲いの中に留まって、自然なあり方として、その羊飼いに喜んで引っ張られていくような、そんな穏やかな愛です。

パウロはそのキリストの優しさと心の広さを持っていましたし、そのような愛で、神様がこの私たちのことさえも、しっかりと見つめてくださっていることをパウロは示して、この眼差しの中に私たちを導こうとしてくれているので

す。

「イエス様がここに居てくれたらなあ」と思うことは確かにありますが、しかしもし主イエスが本当にここにおられても、かつて無言で十字架に架かれたこの方は、すぐに人がどやどやと集まってくるような、華々しいこと、派手なことは、あるいは何もなさらないかもしれないのではないかと思うのです。ただ、ロウソクの火を消さないような優さで、弱いところに届く仕方であを語り、与えてくださるのではないかと思います。

私たちの教会形成も、教会学校教育も、「造り上げるために」主から権威を委ねられて教える者たちの指導原理も、パウロが主イエスの後ろ姿から読み取っていた、この「キリストの優しさと心の広さ」を欠いてはならないのだと思います。主イエスはここにおられないのでは決してなく、目には見えませんが、御霊において共におられます。主が私たちの弱さ足りなさをういて、その場所を、御自身の穏やかな愛の注ぎ口としてくださいますように。

園田教会教会学校の紹介

高畑博司（園田教会教会学校校長）

1. はじめに

園田教会は大阪（梅田）から電車で10分、阪急神戸線園田駅で下車し、徒歩5分のところにある教会です。今年、伝道開始60周年を迎えました。現住陪餐会員は60名ほどで、都会にありながら家庭的な雰囲気をもつ教会です。教会学校には、毎週8名の子どもと9名の大人が出席しています。契約の子が中心ですが、行事の時は近くの小学校に通っている子どもたちが多く集まります。毎年、神戸改革派神学校から神学生を受け入れ、教会学校の教師に加わっていただきます。行事の時など大活躍をしてもらっています。

2. 教会学校の礼拝

教会学校は日曜日の9時から9時50分に、幼稚科の年齢の子どもから中学科の年齢の子どもまで合同で行います。以前はそれぞれのクラスに分かれて行っていたのですが、子どもの人数が少ないため、合同で行うようになりました。前半は礼拝の形式で行い、後半はギターに合わせてゴスペルソングを歌ったり、クイズをしたり、ゲームをしたりします。教会学校には、教師以外にも子どもの親が出席し、ゲームなども一緒になって楽しんでいます。子どもより大人の方が張り切ることもあり、あの人はある特技を持っていったんだ、などと感心することもあります。

聖書の話は、神学生を含め5人の教会学校教師が担当し、それぞれ教師の個性を生かした内容になっています。カリキュラムは、いのちのことば社の『成長』を使っています。以前は大会のカリキュラムを使っていたのですが、教材が



充実している『成長』にしました。出席する子どもは、ほとんどが小学校低学年以下の子であるため、成長の視覚教材を使って話し、小さな子にも分かりやすい話をするよう心がけています。また、小学科下級ワークブックのクイズや迷路、幼稚科ワークブックの工作などを使い、楽しみながら学べるよう努力しています。

プログラムの中につのぶえ社の『初歩教理問答書』を取り入れています。毎週3問程度を読み、簡単な説明をしています。小さな子どもが多いので、うさぎとかめのパペットを使い、ショートコントのような形で内容を説明することもあります。

3. 教師会

毎月、第一日曜日の朝拝後に教師会を行っています。午後からは小会もある日なので、時間はなかなか十分には取れませんが、行事のことや子どもの事など、様々なアイデアが出されます。

昨年度は、長年続けた第一土曜日の土曜学校をやめて、子どもの伝道集会的な行事を増やすことにしました。イースターからクリスマスま

で二ヶ月ごとに行事を行い、一年間に何度か教会に来てもらおうという計画を立てました。

4. 年間の行事

①進級・進学式 (4月)

学年が変わる4月に合わせて、教会学校でも進級・進学式を行います。特別な事をする訳ではありませんが、新しい学校に入学したり卒業した場合には、聖書などの記念品を贈っています。

②イースター (4月)

今年のイースターは、伝道的な行事の一つとして扱い、小学校の校門前で宣伝のチラシを配りました。内容的には普通の教会学校でやっていることを行い、イースターにふさわしい聖書の話の後、恒例になっているチョコレート探しをしました。教会学校で使っている部屋と隣の母子室に、あらかじめ小さなチョコレートを隠しておき、みんなで大騒ぎをしながら見つけました。一人でいくつも見つけてみんな満足そうでした。イースターの卵ももらって、楽しいひとときを過ごしました。隠しておいたチョコレートがずっと後になって見つかり、「これ、まだ食べれるかな？」と嬉しそうに持つて帰ることもありました。残念ながらこの時には、チラシを見てやってきた子どもはいませんでした。

③アイスクリームパーティー (6月)



アイスクリームパーティー

一昨年度、教会学校では初めて、食べることを



アイスクリームパーティー
チラシ

を前面に押し出した集会を開きました。予定していた以上の子どもが集まり、用意していたクレープが足りない程でした。そこで、昨年と同様の集会を開くことにしました。子どもたちへの人気や準備のし易さなどから考え、アイスクリームパーティーとしました。一昨年度の経験から、当日アイスクリームを用意していたのでは間に合わないと考え、前日にアイスクリームをカップに詰め、レンタルした冷凍庫で保存することにしました。事前に教会内でアイスクリームの試食会を開き、カップにはコーンフレークを詰め、アイスクリームの上にはトッピングをすることにしました。子どもにアピールできるように、たっぷり時間をかけて見本のアイスクリームの撮影をし、いかにもおいしそうなチラシを作ることができました。小学校の校門前で配る際には、チラシを拡大したポスターを手で下げて配りました。遠くからポスターを見つけて駆け寄ってくる子どもも多く、確かな手応えを感じました。

当日は子ども50名の出席で、聖書の話、ゴスペルソング、ゲーム、聖書・教会クイズと、大いに盛り上がりました。教会員の方も様々な形で応援してくださり、アイスクリームもおかわりし放題でみんな大喜びで帰っていきました。

④水遊び (7・8月)

園田教会では、夏の行事としては子どもたちと一緒にプールに出かけたり、花火大会を開いたりしていましたが、昨年は8月にも伝道的な行事を持つということ、毎年行っているような大がかりなことはやめることにしました。け



水遊び

れども、内向きにちょっとしたお楽しみの行事をしたいという事で、教会の駐車スペースにすこし大きめのプールを用意し、水遊びをしました。日曜日の午後、水遊びをしておやつを食べるというプログラムでしたが、8月の水遊びでは、教会学校に来ている子どもが友だちも誘い、小さなプール2つに17人の子どもが入るようになりました。プールには大人も入って大いに水しぶきを飛ばしました

⑤貯金箱工作 (8月)



貯金箱工作

夏休みにふさわしい行事が何か無いものかと考えていたところ、郵便局が毎年やっている貯金箱コンクールに思い当たりました。小学生は夏休み宿題で、多くの子が貯金箱を作ります。というのも、このコンクールでは入選するしないにかかわらず、ちょっとした参加賞をもらえるからです。夏休みの後半に貯金箱を作る工作



貯金箱工作 チラシ

同じくペットボトルと紙粘土とビーズを使った宝石箱貯金箱。気合いを入れて見本を作り、前回と同じように慎重に撮影をし、チラシを作りました。チラシは夏休みが始まる前に配る予定でしたが、雨のため、夏休みのプールの時に配りました。チラシを配ってからの期間が長かったため、忘れてしまうかもしれないと心配したのですが、子ども32名の出席があり、会の規模としてはちょうど良い人数になりました。その上、保護者が3名出席するという思わぬ収穫がありました。材料は教会員から集めたペットボトルと100円均一で買ったものを使用した割にはなかなか立派なものを作ることができました。

⑥クレープパーティー (10月)



クレープパーティー

クレープパーティーは一昨年も行ったので、そのときの反省を生かしました。クレープを多めに用意し、配るのもスムーズに行くように準



クレープパーティー
チラシ

備しました。子ども37名の出席でした。

子どものクリスマスは以前から12月23日の午後、伝道的な行事として行っていました。12月に入ると教会の壁面に巨大な看板を掲げ、チラシを配って宣伝をします。クリスマスの降誕劇を人形劇でやり、毎年来る子がいるほど恒例になっていました。昨年は久しぶりに降誕劇ではなく、「魚に飲み込まれたヨナ」の話を上演しました。人形劇の脚本は毎年新しいものを作り、音声は予め録音しておいて、それに合わせて人形を操作します。声の出演も人形の操作も毎年行っているので、わずかの練習でかなりのものが出来上がります。効果音も入って迫力満点。ちょっとした人形劇団のようです。

昨年のクリスマスには新しい出し物として、腹話術が登場しました。人形の「けんちゃん」がクリスマスに関係した三択のクイズを出し、みんな一生懸命答えていました。キャンドルサービスで賛美歌を歌った後、ココアタイムでココアをいただき、プレゼントをもらって帰り



子どもクリスマス

ました。子ども43名の出席でした。

⑦子どものクリスマス (12月)

子どものクリスマスは以前から12月23日の午後、伝道的な行事として行っていました。12月に入ると教会の壁面に巨大な看板を掲げ、チラシを配って宣伝を

しました。子ども43名の出席でした。

昨年度は四回の伝道的な行事を行って多くの子どもたちが教会に集められ、聖書の話をする事が出来たのは大変感謝です。準備した者の思いを越えて、毎回、祝された会になりました。集められた子どもたちが日曜日の教会学校に直接つながったわけではありませんが、二人の姉妹が日曜日の教会学校にも続けて出席してくれ、教師一同の励みになっています。

5. 子ども説教

最後に、教会学校の働きではありませんが、昨年2月から朝拝の中で、子ども説教が行われるようになりました。5分程度の時間で、礼拝の中で子どもが前に集められ、牧師も座ってその日の説教に関係のある聖書の話が易しい言葉で語られます。小さな子どもからお年寄りまで共に礼拝に預かる喜びを実感できるときとなり、子どもだけでなく、大人にも好評です。

子ども説教は、インターネットで音声を聞くことが出来るようにしています。インターネットで宣伝もしましたが一日に250件ほどのアクセスがあり、2006年12月いっばいでアクセスが20000件を越えました。今はやりのiPodでも聞くことができます。iTunes StoreのPodcastsからカテゴリの宗教&スピリチュアルには入り、更にサブカテゴリのキリスト教にはいると「やさしい聖書の話」で登録されています。園田教会のホームページからもリンクしていますので、ぜひ一度お聞きください。また、聖書を知らない方にも聞いていただけるのではないかと思います。ご利用ください。

園田教会ホームページ

<http://www.geocities.jp/sonodach/>

キリスト教主義学校に遣わされて

中山仰（東広島伝道所宣教教師）

〔はじめに〕

まずはじめに公立学校と私立学校の違いに、関心を積極的にもっていただきたいと訴えます。ご存じの方も多いと思いますが、明治維新後、列強の国々に追いつくために国立の教育機関を建て上げました。はじめに帝国大学を創ったのは、国の役に立つ人物を養成するためでした。私立大学は、国のためというよりか、純粋に学問を通して立派な人物を養成する人格形成に重きが置かれていたように思います。その後国民は教育される権利があるということから公立の小中学校や高校ができてきました。私立学校は、寺子屋から始まって独自の教育理念を実現することから営まれていると思います。

その中で特に、宣教師たちがいち早くキリスト教主義の学校の必要性を感じ、着手しました。現在、私立学校では授業料が高いので敬遠されがちで経営上苦難を強いられています。その主旨を理解し応援していただきたいと願います。聞いた話ですが、オランダでは、教会が学校を創るとかかった費用を国が供給するシステムがあるそうで、日本もそうなることを願っています。日本では、私立へかなりの助成金が払われていますが、まだまだ公立と比べると少ないものです。教育関係の赤字が少なくない現在、暴論かも知れませんが、教育こそ民営化したらよいのではないかとさえ思います。そうしたら塾もいらなくなるはずです。ただしその時、国民の間に真の教育への理解が乏しいならば、進学校へなだれ込む現象に変わりはないこととなるでしょう。

キリスト教学校の理念は、そのようなわけで非常にはっきりしています。聖書の理念から出

発しています。キリスト教主義学校に進学校もあります。表面的、画一的な勉強ではなくて、真の主キリストにある人格形成という面からの教育を構築することを絶えず目指しています。

〔清和学園〕

さて、私の遣わされた学校法人清和学園、清和女子中高等学校（以下清和）は、高知県唯一のキリスト教学校です。ミッションスクールとは、宣教団体による経営・管理のことを言います。清和も初めは米国南長老派によって始められましたが、現在ではミッションから独立して自主経営で営んでいます。香川県善通寺にある四国学院と名古屋の金城学院も同じ宣教団体のバックアップによって形成されました。

清和を創立された宣教師アニー・ダウド先生は、高知の山中を大方は徒歩で伝道されていた時、貧しいがゆえに学校へ行くことのできない二人の子女を引き取って教育を授けました。当時子どもたちへの義務教育が開始されたのですが、女の子は家計のために学校などいかに働くものだという風潮がまだ根強く残っていました。ですから学校史によりますと、預かった女子の親が連れ戻しに来たのですが、ダウド先生は断固譲らないという戦いがあったそうです。

〔クリスチャンコード〕

清和は、創立以来、教職員は全てクリスチャンであることが条件になっています。多くのキリスト教主義学校が拡大化のため、また教師確保や進学レベルを上げるために、クリスチャンコード（以下コード）を外して行くなかで、清和は少人数ということもありますが、頑なにそ

のコードを守っています。その分教員集めには苦勞しますが、何とか支えられています。キリスト教学校教育同盟という団体がありますが、その修養会で、せめて校長だけはクリスチャンで行きたい、というような要望が深刻に話し合われています。

ノンクリスチャンの教師が多い学校では、チャペルのあり方にも議論があります。まず彼らにチャペルをやってもらうのか否か。外しているという学校もありますし、ノンクリスチャンがチャペルで話しをする場合には、非常な準備をされているので逆にクリスチャンにとって刺激になるという声も聞きます。ノンクリスチャンのチャペルでの話しは、聖書に基づいていないものがあることは避けられません。また、クリスチャン教師が極めて聖書的な話しや正統的なキリスト教な話しをすると、ノンクリスチャンの先生からの抵抗があるという話しも聞いています。いずれにしろ、戦いを避けることはできません。

〔教育理念〕

また、保護者から進学的なレベルアップを迫られるケースは当たり前で、その圧力は小さくないことをお聞きします。親御さんたちは、キリスト教主義学校にその理念に共感して子どもたちを送り込んでいるのではなく、公立に負けない進学レベルを期待しているからです。

清和では、進学を目標にしていません。清和の理念を理解し、聖書の御言葉を柱に、主の薫陶と訓戒に基づいた全人的な形成を目指しています。実際、清和の歴史の中で経営上、幾多の危機がありました。その度に守られてきたことは、一般の方から驚異に写っているようです。もちろん主の助けと導きがなければ、一歩も立ちゆきません。ですから、清和がクリスチャンコードをもし外してしまったならば、主の祝福を得ることはできないことは明白です。小さな群れであるイスラエルと並び置いて考えても間

違いないことと思います。

戦争中、軍部により、敵国の宗教であるキリスト教を看板から外すなら学校として認可しようという圧力がありました。悩んだ結果、時の松山高という校長は、生徒にも相談したところ、生徒たちは清和には聖書が必要であるから、それが外されるならば高等学校卒業の資格などいらないと答えてくれたのでした。これほどまでに生徒たちに影響を及ぼした教育の効果に戦慄さえ覚えます。

さて、そのような伝統の中で、清和では毎朝授業の前に全校一斉に礼拝堂に集まってチャペルを行っています。他のキリスト教主義学校で人数の多いところは、曜日毎に学年別で礼拝堂に集まり、他の学年は教室の放送で礼拝を守ることがなされています。清和では、体育大会の朝もチャペルをもって始め、修学旅行へも責任者（校長、教頭か宗教主任）が引率してチャペルを守り、かかすことはありません。

一昔前、日曜日は絶対に私的に使用しないということで、日曜日のスポーツ試合が禁じられていました。土曜日に準決勝で勝利した後、明日は日曜日ですので不戦敗となることを生徒も受け入れていました。ある時から、それでは何のために練習して来ているのかわからないということで、試合についての日曜日だけは解禁となりました。

〔チャペル・礼拝〕

チャペルの当番は、月曜日が校長、火曜日は聖書科教師、水曜日は近隣の牧師、木・金曜日は教員が順に奉仕しています。先生方はいろいろな教派に所属しています。それぞれの先生の考えや証しを聞くことは、私にとっても大きな力と励ましになりました。感動した時には、説教で披露させていただいたことも度々ありました。

春と秋に一回ずつチャペルデイという特伝を持ちます。春はチャペルウィークということで

一週間、毎日一時限目をそれにあてます。新入生を主に対象としてキリスト教のことを知ってもらおうと、日替わりで近隣の牧師にお話を依頼しています。「罪、キリストの贖い、神の愛、教会について」をテーマにしてお話をしてもらい、その後担任が各教室で質問を受けたり、フォローします。最終日に、教会紹介をして今年一年間出席する教会を案内します。その時、すでに教会に通っている生徒や教師に前に立ってもらい、道順や待ち合わせ場所などを説明してもらいます。

秋のチャペルデイは、「教理・証し・実践」の三年サイクルで、様々な分野で活躍するクリスチャンや普段チャペルで聞くことのできない牧師たちを招く機会としています。教理編は牧師に、証し編は卒業生に、実践編は社会で活躍しているクリスチャンにお願いしています。実践編では、詩人・福音歌手・国際饑餓対策機構主事などできるだけ広いジャンルの方々に依頼しています。

講師には、卒業を間近に控えた高校三年生のフォローをしていただいています。卒業後に社会へ出てからの問題点とか、対処の仕方などを経験から語っていただきます。

〔召命感・受洗者〕

私の務めていた時には、「シャロンアワー」という名で木曜日の放課後に相談日を設けていましたが、誰一人相談に来る生徒はいませんでした。がっかりしていると、同僚の先生方から、「点数を付ける先生にはほとんど相談に来ないもんだよ」と慰められたものです。生徒は担任に一番よく相談します。また個人的な悩みなどは、養護の先生に相談して甘えています。

生徒の受洗者がほとんどなかったことは、ショックでした。何のために清和に遣わされているのかと悩みました。そのような悩みも、同僚の先生たちに聞いてもらって助けられました。現在在学中に自ら教会に行き、礼拝を守り

続けて洗礼を受けるまでに至るという生徒はほとんどいません。でも卒業してから、社会人になって教会を訪ねて結びつくというケースがあります。そこにキリスト教教育の効果を見出しますし、学校ではその下地をつくる時期であると考えていいのではないかと、慰められもしました。

前々任者で高名な橋本亘先生は、改革派教会ではめずらしいカリスマ的な指導者で、逸話は数え上げることができないくらいあります。先生が授けた洗礼者の数は何百人に及びます。全寮制というシステムは、特に良い感化を与える上で理想的です。先生の牧会された山田教会と南与力町教会には、教え子たちが残っています。その受洗者たちのかなりの人は残念ながら残っていませんが、残っている方々は教会の中心的な働きをされています。卒業後大学へ進み、そこで就職したり結婚されたりして教会生活を続けておられますので、特伝で奉仕させていただいた時、「私は清和の出身です」と言われる方に接し嬉しく、また懐かしい気持ちになります。

〔教会礼拝出席〕

教会出席について、私が赴任した時には自由出席でした。その結果ほとんど礼拝出席はなされず、春、秋の特伝の次の主日にわずかの生徒が出席するだけでした。自主性を重んじるという理由から自由にしたということでしたが、その主旨は生かされませんでした。私が赴任して、夏休みの宿題として1回礼拝に行くことと各学期に一回は出席することを義務づけて、年間4回は出席することを義務としました。さらに数年経て、各学期毎に3回、夏休みの1回を入れて、年間10回の出席を課しました。ただし、その出席を聖書のテスト点に30%前後で加味することとしています。この方法ですと、零点近い生徒でも、教会礼拝に全出席の場合30点ぐらいは下駄を履いていることになりますから、授業態度点やノート出席点などで真面目に取り組

んでいると欠点にならないメリットがあります。逆に100点取っていても、日曜礼拝に出席していなかったり、授業態度が不真面目ですと五段階評価の5は採れません。清和高校では欠点が4つあると、原級留置といって進級できません。また、キリスト教学校教育同盟の有名大学・短大の推薦制度を使う場合に大きく影響してきますので、ないがしろにはできないのです。

礼拝出席をこのように半強制的にすることがいいことかどうか、いろいろな考えがあることと思いますが、この方法で続けるならば、何時の日か教会に行きたくなくなったときに敷居が低く、門をたたきやすくと信じています。実際、しぶしぶであっても礼拝の中で福音に触れ、信仰を持つ人がいることを思うとき、決して悪いことであると思いません。

各キリスト教主義学校でもいろいろ苦慮していて、聖書科の試験をしない代わりに、教会出席とレポートで評価する方式をとったり、私のように成績に加味する方法を用いています。大阪の梅花女子高校では、年間26回の礼拝出席が義務づけられています。これは伝統的になっていて、その回数が多過ぎるのではないかとその学校の聖書科の教師は研修の時言われていましたが、年間礼拝日のおよそ半分に出席するというに興味をそそられます。ある学校においては、強制的に礼拝に行かせていますが、生徒たちが礼拝中におしゃべりをして迷惑をかけていることを心配していました。礼拝態度やフォローに関して教会側の対応にも期待したいところです。清和では、「教会と清和の懇談会」を秋のチャペルデイとセットして教会側の意見を聞くと同時に、講演の後の各クラスのフォローに回っていただいて牧師の人柄とそのお顔を見知っていただいて、次に礼拝に行きやすいように配慮しています。

〔カリキュラム〕

さて、いよいよカリキュラムについてです。

聖書科の副読本として、昔から新教出版社のものや創元社、教団出版局のものが使われています。清和では伝統的に聖書のみで、副読本を使っていません。橋本亘牧師は、授業でも聖書からお話をされていました。チャペルも聖書の授業も聞く者を引きつける良い賜物をもっておられたと聞いています。二代目に当たる中山求(兄・私の前任者)は、試行錯誤したことと思いますが、ウエストミンスター小教理問答を口頭で語り、それを生徒に筆記させ、その説明を加える方法がスタイルでありました。授業終了と同時に、毎回ノートを集め点検していました。この方法は生徒が授業中内職せず、お話しができない点で考慮されていたと思います。ただし、毎回のノート提出・点検は膨大な時間とエネルギーを要するので、ある親しい先生は、その方法が遠因で命を縮めたのではないかと心痛めておられました。

さて私もご多分に漏れず試行錯誤しました。兄は国語の教職免許をもっていて、橋本亘先生が宗教主任の時代に、国語の講師から始めています。途中で橋本先生が引かれた後に宗教主任に就いています。免許がないということは、教育実習の経験がないということです。牧師としては、10年間栗林教会牧師としての説教の経験はありますが、授業については全く初めてのことです。後任の後登雅博先生も苦勞されていることと思います。45分授業の学校もありますが、清和は50分授業です。教会学校・日曜学校の先生方もお話の準備で苦勞し、苦心されているのではないのでしょうか。

兄からの引き継ぎに、カリキュラムとして聖書箇所一覧はもらいましたが、それをどのように教えるかという点については何もありませんでした。兄の病気は、パーキンソン病でしたが進行が早く、語ることも困難になってきていましたので、聞くことをはばかりました。

はじめは、教会で既に説教していたマルコによる福音書を優しくかみ砕いて話しをしまし

た。それですと、20分から25分で終わってしまい、一時限の中で二つの説教をすることになります。それを飽きさせずに聞かせるということは、至難の業です。さらに清和は中高一貫教育で、全学年を持たなければなりませんので、学年に応じて程度を変えなければなりません。マンモス校では、一学年5クラス以上あり、2学年もって学年が同じならば一つの話しを回して用いることもできますが、そうも行きません。当時清和は高校の上に専門科がありましたので、週1時間の授業であっても12種類の違うものをつくらねばならなかったのです。初めの年は、生徒も初めてですので、高校も中学も3学年同じことを教えることが可能です。しかし3年目からはそうは行きません。1~2年やってみて、定着して来たものがあります。最後の9年目ぐらいになって新しい方法に挑戦してもみました。また、2、3年毎に新しい方法を取り入れていきました。

〔指導要録〕

授業の初めは、聖書朗読と祈祷で始めました。これはよいことで、生徒たちも新しい讃美歌や聖句を覚えるのに役立ちました。

中1の一学期は、聖書入門として「主の祈り」と「聖書の目次の歌」を教えます。それを授業の始めに歌ったり、一緒に「主の祈り」を祈って、二学期に小テストを行い成績に加算しました。紙芝居を用いて「タラントンの話し」で神から与えられている資質を伸ばすこと。「レプトン銅貨」では献金について、「思い悩むな」で神様の愛と恵みなど有名な聖書の箇所を分かり易くお話しします。それをノートに取らせ、どの程度書けているかをチェックします。聖書の試験は、はじめから“聖書、ノート持ち込みあり”でやり通しましたので、中1でノートを取る練習を始めます。

二学期からは創世記を学びます。途中クリスマスやイースターなどの時には、それらを学び

ます。視覚教材として、ビデオ版『創世記』全6巻でフォローします。中2は出エジプト記を学び、昔の字幕スーパーですが、チャールトン・ヘストン主演の『十戒』を見せながら、聖書の壮大なスケールを共に味わいます。中3では、旧約聖書の各書から有名な記事を学びます。

高1は、高校から入学してくる生徒もいますので、中学から上がってきた生徒もまじえて「キリスト教入門」を学びます。キリスト教の歴史を救済史の視点から興味をもってもらうという試みです。高校2年から、授業の前半を「ウエストミンスター小教理」の学び、後半を「愛・罪・赦し・恵み・癒し・社会問題」などを聖書からテーマ別に取り上げました。副教材にヒントを得て作ったこともしばしばありました。

〔聖書科教師の位置づけ〕

聖書の授業については、どこの学校の先生も試行錯誤で苦闘しています。キリスト教学校教育同盟の聖書科研究会に出席して、他校の先生方がどのように教えているかを教えられ、良いところを盗みました。関東方面の先生方はおおむねオーソドックスな方法で教えているような気がしました。私として大いに参考にさせてもらったのは、同志社神学校出の聖書科の先生たちです。同志社大神学部の教師たちで牧師の資格のない先生はかなりおられます。牧師でないから聖書科の教師になるのかもしれない。人間的にだけけている連中が多いのです。ただし牧師仲間からは異質な目で見られているようで、少しすねている観もしなくもありません。

そもそもキリスト教主義学校の働きの位置づけが低いのではないかと思います。キリスト教学校は教会と違って、中高生が毎日通ってきてチャペルで礼拝を守り、聖書の時間が週1回はあり、学校によっては寮制度が充実していて、そこでは夕拝や祈祷会が行われています。その点、教会は伝道しますが、いわば“待ち”の状態です。改革派教会でのキリスト教主義学校へ

の働きは「規定外奉仕」となります。この名称からみても、その働きは少し消極的扱いに見えます。日本キリスト教会では、牧師がそのようなキリスト教主義学校の働きをしている人はないそうです。日本キリスト教団は、「教務主任」といって一応一つのポジションが与えられています。

〔授業方法〕

教師としてどのように授業を進めるかということで、私は何冊かの本で学びました。向山洋二先生は教えることにおいてはプロ中のプロで、何冊も著書があります。その中に、教師も「黒帯」にならねばならないということで、その条件が書かれています。その一つは、公開授業を年に何十回かしなければならぬというものなのです。卒業した生徒たちがやがて教職免許をとるために教育実習生として母校に帰ってきて実習します。その時に、授業計画を出して、ねらい、導入から、前回のまとめ、主題、ふりかえり、まとめなどを内容と必要時間に区切って進めて行きます。実際に在校生を前に授業を進め、それを先輩教師たちが見ていて、後で意見や注意、感想を述べて、指導教官が採点をして書評と共にその生徒の学校へ送ります。向山先生は、教師になってからも、授業計画をきちんと書いて先輩教師や同僚に見学してもらい、生徒たちの反応なども交えて評価してもらう方法をかかなりの回数で毎年もたなければ「黒帯」にはなれない。それがプロの教師たるものなのだと思います。まさにその通りです。批評の仕方が難しいと思いますが、何が伝えられたか、どうやったら伝わるかということを研鑽することです。教会学校の教師研修会なども、子どもに実際お話しをしているビデオを使って研修してもよいかと思います。

教会学校教師にレベルアップを要求するならば、まして牧師が率先して行わねばならないのではないのでしょうか。向山先生の話で覚えて

いることは、プロは、一文で（または一行で）1時間の授業をすることができると言われ、実際に松尾芭蕉の句だったと思いますがそれを小学生に分かり易く面白く、語り聞かせる例をあげています。ウエストミンスター小教理問答1問で、ゆうに1回の説教することができるようにならなければ、牧師のプロと言えないのかもしれない。

〔聖書科研究会〕

なぜ同志社系の先生方の授業方法に惹かれたかと言いますと、実に生徒たちの心をつかまえることに関して上手であり、工夫しているという点です。説教を作るときに言葉の調べ方とは少し異なりますが、実に生徒たちを飽きさせず、彼らの心をつかむことに生活を賭けている姿に打たれ、教えられました。清和を会場にして、研究授業がなされた時の例をあげておきます。

(1) 『百万回死んだ猫』という有名な絵本一冊での授業です。人間嫌いの猫がいろいろな人に飼われて百万回死にますが、百万回生き返ります。それゆえに猫の間でも人気があり、雌猫たちからもてました。ある時自分の魅力に対して全く興味を示さない猫が現れ、気を引こうとしますが、一向になびきません。そうこうしているうちに彼が捕らえられ、求婚子どもができて平和な家庭が営まれ、子どもたちも成長して出て行きます。そんなある日愛する奥さん猫は亡くなります。その猫はしばし泣きに泣いて、泣き疲れてついに彼も死にます。しかしもう二度と生き返りませんでした。このような話しをした後で、生徒たちに「なぜこの猫は最後には生き帰らなかったと思う」と振り向けて、答えを引き出しながら授業を進める方法です。

(2) またある先生は、聖書の写本について実体験をさせてくれました。初めに先生が描いた絵を列の先頭の生徒に前に出て来てもらい、記憶してもらいます。その後、その内容を言葉だけでそれぞれの列の後ろの生徒に伝えて行きま

す。列の最後の生徒に画用紙を渡しておいて、聞き伝えられた内容を描いてもらいます。ついでに列の一番前の生徒に伝え終わった後、やはり画用紙に今見た絵を思い出しながら描いてもらいます。列の一番後の人全員に絵を提出してもらい、それを黒板の下にマグネットで貼っていきます。その上には、列の一番前に座った生徒の絵を貼ります。さらにその上に、教師が描いた最初のサンプルを置きます。そして、元の絵との違いなど、一つ一つの絵の特徴を説明します。最前列の生徒の絵は、実際に見たのですからサンプルにかなり近いものとなります。最後列の絵を比べると、それが伝わっていく内はどこかが省略され、あるところだけが強調されていることが分かります。その解析作業は楽しいものです。絵のうまい下手がありますが、生徒たちは恥ずかしいとかいいながら案外描いてくれます。教師は、解析が終わってから次のように質問します。「サンプルと最後の絵はかなり違ったものもあるけれども、これらは偽物なのでしょうか」と。生徒たちは、「いいえ」と言います。「そう、それぞれ個性が発揮されているけれども、みんな本物だよね」。「聖書の写本もこのように、初めものが口頭で、書いていく内に多少異なったり、筆者の個性が出たりするけれども間違いではありません」と。この授業を見て、また味わって、写本の持つ意味を感じ取ることが私にもできたものです。

(3) ルカ10：38～42の「なくてはならないものはただ一つ」の箇所を、人称の違いに分けて分析して教えてくれた授業もありました。いろいろな雑用にかまけていたマルタは自己中心的になっており一人称であり、イエス様に対しても他人行儀に三人称の関係でした。やおらイエスに対して、「主よ、……（マリアに）手伝ってくれるようにおっしゃってください」と不平を言ったときに、主イエスは「マルタ」と名を呼んでくださいました。この時、イエスはマルタに憐れんで二人称で親しく接していただき、

目覚めさせてくださるのです。これは、ヨハネ20：11以下の主の復活の場面で、目の前に復活の主が現れているのに見えなかったマリアに対する主イエスの応答に応用できます。「婦人よ、なぜ泣いているのか」と問うたときには、マリアは園丁だと思って接していますが、「マリア」と名を呼ばれた瞬間に、「ラボニ（先生）」と目が開かれます。アニメ映画『千と千尋の神隠し』で、主人公の千尋は油屋へ売られたとき、名を千尋ではなく千と改名させられ通常の社会から隔離されたことにもつながります。自分の名を思い出すことで、再び本来の自分を取りもどします。

【おわりに】

これらのことから、説教、奨励、絵本朗読やお話しも、まず受け手である私たちの内に感銘を呼び起こすことから始まらなければならないことが分かります。その感銘がなければ、どんなに上手に語っても相手に伝わりません。これは特に学校の現場では、必須の条件です。科目は違っても毎日6時間も教室の椅子に縛り付けられているのですから、語る教師に感銘がなければどうして生徒たちが楽しいでしょうか。

ある人の言った、「教育とは、すべてを忘れた後に残ったもの」という名言が指摘する通りです。学校でも教会学校でも、大きくなって生徒たちは何を聞いたかを覚えていないと思います。でも先生方との人格的触れ合いは一生忘れることはできないでしょう。

教会学校の先生方におかれまして、準備は大変であると思いますが、その業は一人の魂が主に向かい、主を知る機会となるのですから、祝福は計り知れないものがあります。その光栄を覚え、主の御栄えを表す尊い働きに参画されている思いを強くされ、奉仕に励んでいただきたいと心から願うものであります。

(前清和女子中高等学校宗教主任)

教育基本法「改正」とわたしたち

教会学校教案誌編集部

昨年末の国会で、教育基本法が「改正」されました。「いじめ」やタウンミーティングでのやらせ問題などが大きく取り上げられる中で、十分な議論も行われないうままの「改正」でした。教育基本法は、日本国憲法と並んで、信仰者の信仰の自由、「思想・良心の自由」の磐となっている法律です。その「改正」は、子どもたち一人ひとりの信仰の歩みに大きな影響を及ぼしかねません。この問題を取り上げて、特集とすることにいたしました。

教育基本法「改正」に関する座談会

2007年1月22日(月) 午後1時～3時、於犬山教会

出席者：井上二郎（世と教会委員会委員長、教育委員会委員）

漆崎英之（世と教会委員会委員、教育委員会委員）

木下裕也（教育委員会委員長、教会学校教案誌編集委員）

相馬伸郎（教会学校教案誌編集長、世と教会委員会委員）

【辻 幸宏（教会学校教案誌編集委員、速記録担当）

はじめに

相馬：今日は、お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。

この座談会は、まず、第一の読者である日曜学校教師方のためになされるものです。しかし、それだけに限定することもないと思います。ざっと、三つの点をめぐって話し合えればと考えています。

1. 教育基本法改正の問題点の確認
2. 改正された現時点での私たちの立場
3. この座談会において改革派教会全体で意味していること。

木下：日曜学校教師会でも、現状をふまえての協議が必要と思います。

井上：実際に子どもたちに影響していることに対して抗していくことが必要です。どの様に抵抗していくか、具体的なことが必要です。

木下：岩波『世界』に特集があります。学校の先生方が非常に苦悩しておられます。先生方

の多くは、改正に反対しておられたと聞きます。学校現場での締めつけも強まり、健康を害する先生も増えています。

井上：これまで以上に、自由にものが言えなくなっています。具体的に、この改正法を受けて、学習指導要領がこれまで以上に悪くなっています。教育再生会議(2007年1月18日)では7ポイントの報告をしていますが、早く改正法にのっとった学習指導要領を準備することが必要であることを語っています。

木下：状況をよく見抜き、信仰的な対応ができるように、教会が感性を磨き、力を蓄えることが大切だと思います。

「改正」教育基本法の問題点

相馬：教育基本法「改悪」（以下：「改正法」）となり、旧教育基本法（以下：基本法）との間で断絶があります。この「改正法」の問題点の整理が必要です。すでに大会で声明が出

されていますが、漆崎先生に短く、説明して頂きます。

漆崎:第一は、個人の尊厳を重視したものから、公を重視する根本的な方向転換をした「改正法」となっています。本来は憲法の理念を実現するのが教育基本法です。憲法は、国家を縛るもので、憲法の理念を実現する教育基本法も、国家を縛るものです。「改正法」が公を重視するよう転換したことによって、個人を縛るものとなってしまいました。

次に、公の重視により、愛国心条項が盛り込まれ、思想・良心の自由、信教の自由といった人権を、国家が侵害することとなります。「改正法」では「態度を養う」という言葉が5回出ています(2条)。安倍首相は、10月に国会で、「国を愛する信条について、内面に入り込んで評価することはない」と語りました。一方、心の教育、国を愛する心の教育をすべきだと語りました。「心があって態度がないのは欺瞞である」とも語っています。つまり子どもたちの心も国に捧げるべきだと語っています。信教の自由・基本的人権を侵害することを公にしたこととなります。これは教会にとって信仰告白的事態です。

相馬:基本法を日本キリスト改革派教会として支持することは、教会内でコンセンサスを得ていないですね。

井上:そうです。

相馬:しかし、いかにこの基本法がキリスト教的な思想に裏打ちされたすばらしいものであったかと、痛切に思います。

木下:憲法に関しては、一般恩恵として位置づけるコンセンサスが一応あったと思います。基本法は、憲法との精神と一致しています。「改正法」前文で、憲法とのつながりを示す文言が削除されました。これは大きいことです。憲法は思想・信条・信教の自由を規定しています。「改正法」は憲法との関わりを断つことで、国家が特定の価値観を植えつける準備

をなしたと見るべきです。30周年宣言の中に「神のみが、からだと良心との主であられる」という言葉があります。国家が特定の価値観を強いようとするなら、それは国家の権能をふみこえています。30周年宣言は、そうした場合には教会は公的に抗議し、抵抗すべきことを教えています。

井上:私たちは、基本法は、改正されなかったとの立場に立ちたい。国会では改正法が成立しましたが、基本法を手元に置いておき、抗していくことが重要であります。「改正法」の分析を行い影響を受けるより、「改正法」で心を乱したりすべきではありません。Iペトロ第3章15節に「心の中でキリストを主とあがめなさい。」とあります。これが中心です。条文は変えられたが、その土俵の中で考えるのではなく、今まで通りの考えの中で、私たちの信教の自由・思想の自由が変わらない状態で保たれていく。法律が変えられようが変えられまいが、影響を受けない、これが子どもたちの中に伝わるような教会学校教育を行うことが必要です。教会学校の教師たちのする事は重要になっています。「キリストが主」であることを、子どもたちにさらに明白に伝えていく必要があります。改めて、教会の責任が問いかけています。

愛国心について

漆崎:改正法の誤りを論駁し続けることが必要です。キリスト者の中にも「愛国心は必要だ」とか、「国を愛することは自然なことだ」と思われている方もあります。これを「内なる愛国心」と呼ぶことができると思います。しかし、国を愛するとか、伝統・文化を尊重するか否かという問題は、根本的にその人の思想・信条に根ざす事柄です。受け入れることも、無関心であることも、嫌悪することも自由にできなくてはなりません。にも関わらず国家が、愛国心や伝統と文化の尊重を押しつ

けることは、その前提となる思想・良心の自由、信教の自由を国家が既に踏みにじっていることになるのです。

相馬：「キリスト者こそ、愛国心を持っている」と、明治以来語られてきています。しかし注意しなければなりません。神の国への愛国心だけが、愛国心であり、それ以外は、警戒しなければならないのです。もしキリスト者が、「日本を愛するがゆえに『改正法』に反対している」と言うなら、その言い方にも危険があります。「愛国心」なるものを払拭する必要があります。

漆崎：キリスト者には、この世の国に対する愛国心というものはありません。

木下：愛国心を論じる前に、ローマ書13章の国家観を学ぶべきです。愛国心について言えば、日本では明治の中央集権国家になってから言われるようになってきたとも考えられます。つまりそれは自然なものと言うよりも、政治的なものです。明治のキリスト者たちは確かに愛国心を論じていますが、彼らの場合には国家の上に神がおられたのです。無条件に国を受け入れるものではなかったのです。

相馬：改正法には、「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた、わが国と郷土を愛する」とあります。たとえば、法案成立を目指した政治家ばかりではなく、日本の知識人たちはしばしば、キリスト教は、砂漠の過酷な自然の中から発生した宗教で、厳しい神、排他的な神、戦う神、云々などと平然と言います。対して、日本は、四季折々の豊かな自然と風土に恵まれ、そこで発生した宗教は、温和、寛容であるなどと言います。しかしいったい、日本ほど、地震におびえさせられ、台風がある厳しい夏、豪雪の厳しい冬を過ごさなければならない国も珍しいのではないのでしょうか。むしろ、過酷な自然環境にあるのではないかと思います。日本という郷土はすばらしいというイメージを植え付け、それに育ま

れた伝統と文化も、すばらしいもの、だから愛しなさいと仕向けられる、巧妙です。

漆崎：他国と比較して愛国心を掻き立てる考え方が、差別的、自己中心的なのです。卑しい考え方です。愛国心は、ふるさとを恋しく思う、なつかしく思うことの延長線上にあるものではないのです。

井上：和らげた表現で、抵抗を弱めようとしています。今回、改悪された愛国心とは何か、高橋哲也著の「教育と国家」の中に、民主党西村議員の言葉が引用されています（p35）。

もう一つの伝統とは、天皇制です。多くの自民党の議員が、教育勅語の線で、天皇制の復活を願っています。今、この改悪された基本法を作った人たちの中にある恐ろしさを見て、これが子どもたちに押しつけられていくのです。子どもたちが戦場に行かされ、新しい徴兵制の準備がなされています。これが安倍総理の最大の政治課題と言っている点だと思います。わが国を、戦争を行える国にして、その戦争に子どもたちを送り出すことを意識しています。

教育の目的——人格の完成について

相馬：話を戻してしまうかもしれませんが、そもそも教育、あるいは義務教育とは何かを考える必要があると思います。これまでの基本法では、教育の目標は人格の完成でした。ここでは、個人の尊厳がうたわれていました。ところが、今回、国家のための教育に変えられました。わたしは、多くの人たちが、「義務教育を施す学校は、国や地方のおかげでなされているのだから、国に従うことを教えることは当然ではないか」と思われているように思うのです。しかし、そこが危ないと思います。税金によって、成り立っている義務教育、学校の制度です。つまり、子どもたちを送り出しているわたし達の思想や信条、価値観などの一切を、お上にあずけること、丸

投げするようなことであってはならないと思います。そもそも教育は、どこまでも個人の人格の完成をめざすものであって、キリスト者であれば、それは、神さまのために生きるよう造られた人間のための教育になるでしょう。ですから、国家が自分の利益のために、教育を利用することは、あってはならないことなのです。国民は、国家のために教育される義務はないのです。

漆崎：教育の目的は人格の完成にあるという基本法を精神を、取り立てて問題とはしてきませんでした。教育により人格は完成されません。教育によって人格が完成するという教えは異教的です。キリスト教教育も人格の完成に寄与しますが、人格の完成はイエス・キリストによってしかされないのです。

井上：子どもたちが、自分で判断する力を身につけていかなければなりません。教会では、教会学校の子どもたちが、自分の信仰的判断を持ち、学校で教えられることにおいても判断することを身につけさせたい。これは親の判断、教会学校教師や、牧師の講壇から語るメッセージとの関連も出てきます。今改めて、信仰教育のあり方を改革派の立場で、再確認する必要があります。

相馬：最近、人間としてのしつけすら学校に押し付ける、学校に期待する親御さんが増えていと聞きます。これが日本の状況です。そこに、改悪を許してしまうひとつの大きな状況があると思います。そのような中で、ますます、わたし達の日曜学校の使命や役割の重みが増していると思います。「規範意識をもった子どもを育てる」と安倍総理が声高に言いますが、その意味では、まさに日曜学校こそ、それになう場所でしょう。しかし、今日、世間では、教会に対する期待、関心がもたれていません。そこに、私どもの教会の伝道力の弱さが問われています。

井上：我々の生ぬるさが問われているのです。

どういう姿勢に立つかチャレンジされているのです。教師たちは、この自覚を持つべきでしょう。「改正」の事態に直面して、目覚めることが必要です。

木下：教会が福音をどのようにして語り、信じているかにかかわるでしょう。ハイデルベルク信仰問答問1に、わたしがキリストのものであることがわたしの慰めであると語られています。このことのすばらしさが理解されれば、国家の強いる価値観がいかにつまらないものかがおのずからわかってくるでしょう。み言葉に生きる喜びを通してすこやかな批判力も育ってくると思います。

井上：私たちは、これを問い直せと問われていると思う。

相馬：日本のキリスト教界、日本キリスト改革派教会は、この状況を、まさに信仰告白にかかわる事態として認識しているのでしょうか。それは、福音理解そのものの反映でもあると思います。

各教会の対応

井上：中部中会は、世と教会に関する委員会の呼びかけによって断食を行いました。断食祈禱をして抗したことに福音にとらえられている真摯な姿があります。ここで実践例を紹介して頂きましょう。

木下：名古屋教会の場合、小会で大会からの要請文と中会からのアピールをどう受け止めるかを話し合い、合同教会学校（家長会・婦人会・青年会）で学び、祈りの時を持つことにし、昨日それを行いました。発題は私と長老が行い、5人の方が祈禱をささげました。大人だけで40名ほどが集まりました。「断食の日」として守り、昼食を抜きました。

相馬：実は、名古屋岩の上伝道所は、アピールの前から、一個の教会としてすべきであると、委員会で決議しました。そして、改悪後の翌週に、水曜日の祈禱会を断食の日として実行

しました。「一食抜きましょう」と呼びかけたのです。もちろん、何人がそれに応じられたかを把握していません。その必要もないと思います。断食の目的の一つは、何よりも、私たちの悔い改めです。教会こそが、この基本法の価値を知っているはずなのに、改悪を食い止めることができなかったこと、宝物にできなかった責任を思います。これを悔い改める意味です。そしてもう一つは、いよいよ厳しい時代が来たことをわきまえて、抵抗する教会であるべきことを自覚するためです。

井上：非常にスムーズに出来たことは、勉強の成果であり、通常の学びの継続が必要なことです。中部中会では、「憲法9条や20条を貫く」声明、靖国問題でも戦ってきました。2.11「信教の自由を守る集会」、8月の平和集会、文書活動の意味が、各教会・伝道所に波及してきていると思います。しかし、改革派教会も一枚岩ではありませんでした。これが国家に対して強く抵抗することが出来なかった原因です。一つとなっていれば、もっと違ったのではないのでしょうか。西川さんと一緒に活動することも出来たと思います。国会議員会館でも反対集会を持つことが出来たでしょう。

相馬：私は、浜松伝道所の代理宣教教師を担っていますが、実は、昨日の主の日の午後、一人の委員が「教会と国家」についての勉強会の発題をされました。それは、断食の日のアピールにたいしての一つの応答だと思います。先ず何よりも、このことについて学ばなければ、教会としての誠実な対応ができないと委員会が判断されたからです。これは、すばらしいことだと思います。このような学びが進んだところで、断食の日をするかしないかについて、教会としての判断もできるようになると思います。「創立30周年宣言」の学びを基盤にして、教会の戦争責任、罪責、平和についての学びを継続することが重要だと思います。それなしに、日本に真実にキリス

トの教会を建てることはできませんし、まして、日本キリスト改革派教会の形成は望めないと思います。

井上：教会学校の教師が子どもたちに教えようとする時、創立宣言や30周年宣言や60周年宣言を学び、終末的な事柄であることを十分に咀嚼してから語る事が重要です。

「改正法」16条の問題点

相馬：「改正法」の問題点として補足はありますか？

井上：16条（教育行政）ですね。

漆崎：「国家が行う教育行政は、不当な支配にあたらぬ」と伊吹文科相は答弁しました。基本法の16条は、これまで、国や行政による教育への干渉に一定の歯止めをかけてきました。しかし、このような答弁は、国の行う教育行政には誤りはないということになります。もう一つは、学習指導要領についても、法律と同じ拘束力があると答弁したことです。これでは指導要領で決めれば、国家の願う教育行政は何でも行えることになってしまいます。

井上：1958年、文部省告示という形で、改悪がされる以前に学習指導要領に、日の丸・君が代の導入が指示され、戦前、戦中の負の遺産がきちんと清算されずに戦後も続いてきたのです。

漆崎：文科省が、学習指導要領が法律の一部であると国会の場で言い切ったのは、これが初めてではないでしょうか。

井上：指導要領も改正されるべきであるとの立場での発言でしょう。

相馬：恐ろしいですね。

漆崎：態度を養うだけでなく、心も体も国家に捧げるための法律です。

井上：戦争を行うための道具にしようとしています。全てをなげだせ、心も命も、天皇に！これで天皇制国家がイメージされていること

が意識するべきです。

相馬：教育勅語の復活ですね。今回は、改悪の後に、憲法の改正が出て来ます。

木下：現時点では、憲法との矛盾が生じています。

井上：憲法の改正と教育基本法の改正が、逆になってしまったのです。戦前と戦後を連続させてきたことの問題が、表面化して、実体化してきたのです。歴史の過ちです。

子どもたちへの配慮

相馬：牧師として、日曜学校の先生方に対して、どのように語りかければよいでしょうか。契約の子どもたちにどのように語り、配慮すればよいでしょうか。かつて、日の丸・君が代に対する配慮をしていただくように、自分の子どもが通う小学校の校長に手紙を送ったことがあります。具体的な知恵はないでしょうか。漆崎先生は君が代の替え歌を紹介していました。

漆崎：替え歌については、私も若干、消極的になりつつあります。メロディーに従わなくてはならないからです。それよりも、相応しい御言葉を子どもたちに記憶させて、君が代が強制されているとき、子どもたちが楽しく御言葉を口ずさんで抵抗してはどうでしょうか。実際の抵抗の仕方は、教会の実情・力量・学び・戦うための知恵の集積と関わってきます。同じことを画一的に押しつけることはできません。しかし、改正法の恐ろしさを知るならば、キリストから子どもたちを引き離し、子どもたちを国家の道具にしようとする悪の力に対して抵抗せざるを得なくなります。

井上：学校の先生方も、ほとんどが、「改正法」に反対だと思います。ここに教会と学校の接点があります。学校の担任を大事にして、担任とのコンタクトを取り、教会の子どもが信徒であることを伝え、学校との絆をはっきりさせていく必要があります。出来れば校長先

生ですが、現場の先生に対して語ることで、職員室の中で話題となることに繋がるでしょう。先生方を励ますこと、我々の子どもを守ることに繋がります。

犬山教会では毎年2.11、8.15の近くなりますと、平和に関する説教をしますが、子ども向けの説教でも話題にしていました。そして昨年、ある子どもが、「卒業式の日、座っていただけませんでした。立ってしまいました。しかし君が代は、歌いませんでした」と私に告白しました。この子は信仰の戦いを戦ったのです。このような子どもを励ます教会学校であるべきです。これを教えていく教会であるべきです。慣習化していくことが必要です。子どもたちが強制的に君が代を歌わせられ、日の丸に頭を下げるのが求められていきます。だからこそ、真摯に教会が取り組む必要があるのです。教会が、学校との関わりを持つことが必要だと思います。強いては、子どもたちを戦場に送らないことに繋がり、憲法「改正」に繋がらないことになると思います。

木下：このことを政治の問題とするのではなく、教会的な、信仰の事柄ととらえることが大切です。小会や日曜学校教師会等による牧会的配慮が必要です。信仰の良心に痛みを覚えている子どもがひとりでもあるなら、教会は彼に寄り添い、彼の信仰を守るべきです。個々の事態については、み言葉に従う姿勢において一貫していれば、その時々語るべきこと、なすべきことが示されていくと思います。たとえば私自身は愛国心評価が通知表に盛り込まれることがあるなら、何らかの対処をなすことを考えています。

相馬：わたしたちの置かれている立場は、戦後最悪だと思います。しかし、教会に危機感が乏しいように思います。これは、私たちが日本の教会の歴史を学び、反省してこなかったことにあるのだと思います。実は、このいわば体質は、日本国民そのものと同じだと思

ます。当時の為政者はもとより、国民もまた本当に、過去の戦争を加害者として反省、悔い改めをしていません。忘れっばいのです。簡単に水に流せると思い、水に流したのです。しかし、何よりも問題なのは、この日本におかれている教会のこです。二度と同じ罪を犯してはならないはずで

す。何よりも、嵐の真ん中にさらされてしまう子どもたちのことを思います。これまでも、さまざまな式典において日の丸、君が代への対応に、子どもたちは大変なプレッシャーを強いられてきました。しかし、これからはそれ以上の強制がなされることは、ほとんど避けることはできないかと思

います。子どもたちへの指導として、はっきりしている一線があると確信しています。それは、入学式や卒業式のような式典について、「別に、君が代を歌ってもよいのだ」と指導すること、あるいは、口を濁してしまうということ

です。**井上：**第一戒のきめ細かいメッセージが必要です。伝統と対峙すること、箇条的にメッセージ化することは重要だと思います。

相馬：中会の集会で、美濃ミッションの迫害についての講演を伺いました。あのとき、他の諸教会は、「美濃ミッションは特殊な教会で、自分たちは神社参拝をしている、それは、日本の伝統、文化であるからだ」などと言って、彼らを切り捨てたわけです。どんなにわずかであっても、このような戦いの只中にいる方々と共に生きる、連帯する教会であるかどうか、日本キリスト改革派教会であるかないかの試金石にもなると思うのです。私ども

は、二度と、あのような偶像礼拝の罪を犯さない、犯してはならないと神と隣人に誓って、創立したのだと、わたしは考えます。神の主権に服する教会の形成でなければ、神のみを神とする教会の形成でなければ、キリストの教会にならないと思います。

子どもたちに、「わたしはイエスさまのもの、神さまによって贖われたものだから日本のものではないのだ」と、自分の存在の尊さを心から認めさせてあげられるように励みたいと思います。

漆崎：国家が、愛国心や文化・伝統・社会的儀礼等といった文言によって、どんなに人間を国家に屈服させようとしても、国家は「思想・良心の自由」「信教の自由」「表現の自由」といった人権に打ち勝つことはできないのです。なぜならこれらの人権は、神の似像にその根源をもっているからです。

おわりに

相馬：あっという間に、終わりの時間が来てしまいました。事柄の重大さを考えますと、中途半端で不十分な議論で終わってしまったかもしれません。しかし、私どもの戦いは、いよいよこれから、本格的にならざるを得ないということなど、お互いの共通理解を、あらためて確認できたかと思

います。契約の子どもたち、日曜学校に来ている子どもたちの信仰を、神がお守りくださるようにと祈ります。そして、日曜学校教師方や、牧師が先頭に立ち、教会をあげて、彼らの信仰を育み、守るように、日曜学校の働きにいよいよ仕えてまいりたいと思います。

教育基本法「改正」とわたしたちの姿勢

木下 裕也 (名古屋教会牧師)

はじめに

昨年12月15日、参議院本会議で「改正」教育基本法（改正とは正しく改まるということですので、以後この言葉を用いるときには括弧をつけるか、もしくは「改悪」という語を用います）が可決、成立しました。「教育の憲法」と呼ばれる法律が、1947年の制定から実に59年ぶりに、しかも「改正」の理由も説明されず、議論も尽くされないままに大きく変えられました。政府主催の教育タウンミーティングでのやらせの発覚、いじめによる自殺の連鎖といった出来事がたて続けに起こる中でのことでした。

日本キリスト改革派教会は昨年10月の定期大会において「教育基本法「改正」に反対する声明」（以下「反対声明」）を採択しました。年末には大会宣教と社会問題に関する委員会から、「信仰に基づく祈祷の要請文」が届けられました。それに先立って中会世と教会に関する委員会からも「緊急アピール」が出されました。可決成立の翌日の「朝日新聞」社説は、同じ日に成立した防衛庁を「省」に昇格させる法律をも踏まえて「長く続いてきた戦後の体制が変わる／日本はこれからどこへ行くのだろうか」と、さらに「この臨時国会が、戦後日本が変わる転換点だった。後悔とともに、そう振り返ることにならなければいいのだが」と述べています。教育基本法改悪はそのように戦後日本の大きな節目を象徴する出来事であるとともに、教会とキリスト者のひとりひとりの信仰、ことに子どもたちの信仰を守っていくうえでも大きな、深刻な出来事です。

それゆえ教育基本法改悪の意味についてここであらためて確かめ、この出来事を聖書に立ちつつ受け止め、こののちの信仰の歩みにふさわ

しく備えることが必要です。「反対声明」は、改悪された教育基本法が「思想・信条の自由」「良心の自由」を侵害するおそれのあることを警告し、そのような法のもとでの強制に対しては「信仰の良心」に従って断固拒否することを表明しています。そのような信仰の対処をなすために、今しっかりと足場をかためておくことが大切です。

1 教育基本法はどのように変えられたのか

(1) 「改正」前の教育基本法からの変更点

今回の「改正」によって、まさにこれまでの教育基本法の根幹の理念そのものが変更されました。成立翌日の新聞紙面にも「「個」から「公」重視」「国家色強まる恐れ」との見出しが大きな活字で刻まれています。「改正」教育基本法によって「国家色」を「強」めることが、これまで「改正」をおしすすめてきた政府、有識者たちのねらいなのです。それこそが改悪の眼目にはかならないということをも踏まえておきたいと思います。

では、「改正」前の教育基本法と、「改正」されたそれとの条文を照らし合わせながら、どこが変更されたのかを（大づかみにではありますが）見ていきます。

1) 前文

①1946年に公布された日本国憲法と、その翌年に施行された教育基本法とは、表裏一体の関係にあります。従来の教育基本法の前文には、「民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献」するとの日本国憲法の「理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである」と記されていましたが、「改正」教育基本法の前文からはこの文言が消えま

した。これは、憲法と教育基本法との関係が明示されていた部分が削除されたことを意味しています。

②従来からあった「個人の尊厳を重んじ」に加えて「公共の精神を尊び」「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育」といった文言が加えられています。

2) 第2条5

教育の目標として「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」ことが掲げられます。

3) 第5条2

義務教育について規定された条文ですが、ここでも義務教育の目的が「国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養う」ことであるとされます。

4) 第16条

教育行政について規定された条文です。従来(11条)は「教育は、不当な支配に服することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行われるべきものである」でしたが、「不当な支配に服することなく」以下が変更されました。「国民全体に対し直接に責任を負って行われるべきものである」が削除され、かわりに「この法律及び他の法律の定めるところにより行われるべきもの」との文言が加わりました。

5) 第17条

文部科学省が教育行政に関する長期的計画を策定すべきことが定められています。教育現場に対する国の介入の権限がこれまでも増して強化されることが懸念されます。

(2) どこが問題なのか

以上のような条文の変更の意図は、どこにあるのでしょうか。

まず前文、第2条5、第5条2には、国家が教育の場に介入し、特定の価値観を子どもたちに注入しようとする意図が明確に読み取れます。日本国憲法は個人の心の内面に国家が立ち入る

ことを禁じていますし、憲法の精神を反映した「改正」前の教育基本法も個人の尊厳を重んじる姿勢において一貫しています。「そもそも伝統や文化に対する尊重の仕方や、国の愛し方、その表現の仕方は個人々人において多様であるべきであり、法律によって国家が国民に上から強制すべきことではありません」(「反対声明」)。

にもかかわらず「改正」教育基本法によってそのようなことが強制されるなら「特定の立場に立った「愛国心」や「伝統や文化の尊重」が子供たちに強制され、国家による「思想・信条の自由」、「良心の自由」の侵害に道を開くこととなります」(同)。それそのものが憲法の定めるところに反することですが、加えて国家が子どもたちに求める「国と郷土を愛する」(第2条5)心とは何なのかが問題です。それは儒教的な色彩の濃い、親や家族から学校、地域社会、国家へと自然にひろがっていく報恩感謝の心とされる一方で、この国が近代史においてなしてきた数々の「負の歴史」にはいっさい触れず、さらにそうした歴史観への検証も批判もいっさいゆるさない「愛国心」なのです(高橋哲哉『心と戦争』)。義務教育において国家が頭から、そのような価値観を一方向的に押しつけるなら、子どもたちの心は彼ら自身のものではなく、国家のものとしてしまうでしょう。

そのような教育の国家主義的再編ともいえるべき事態は政府与党、文部科学省によって、学習指導要領の改訂や『心のノート』の配布(2002年)等のしかたでかなり早い時期からすすめられてきましたが、教育基本法の改悪はその総仕上げの意味を持っています。

首相は、日本の伝統と文化を学ぶ姿勢や態度は評価対象とすると明言しています。すでに今現在、いくつもの地域で通知表に「愛国心」の評価が盛り込まれています。しかし「反対声明」も言うように、国を愛する愛しかたを決めるのは国家ではなく、個人個人です。たとえば在日コリアンの子どもたちも、日本人の子どもたち

と同じように公立学校で学んでいます。かつて日本がなした侵略戦争の犠牲者である彼らにも、この一方的な「愛国心」が強制されるのです。

1999年には国旗・国歌法が成立しました。そのおりには国旗・国歌の義務づけは考えていないと言明されていましたが、周知のように卒業式の国歌斉唱のさいに起立しなかったなどの理由で多くの教職員が処分を受けています。今年、東京地裁で東京都教育委員会に対して、こうした処分を禁じる判決が出されました。しかし先に見たように、「改正」教育基本法第16条によれば「不当な支配」かどうかは「この法律及び他の法律の定めるところ」によって判断されることとなります。従来の教育基本法は「不当な支配」とは何よりも国家による教育への介入と理解しており、これを厳しく禁じる姿勢が明確でしたが、このように条文が、つまり法律そのものが変えられることによって、その関係が逆転する（つまり、国家による教育への介入をいましめること自身が「不当な支配」と見なされる）おそれが生じます。そのことが今後裁判の判決等にも影響をおよぼすことにならないだろうかと心配されます。

キリスト教信仰における愛国心—これは大切な、また興味深いテーマですが、ここでは多くを語らないことにします。ただ、明治のキリスト者たちのことには一言しておきたいと思います。彼らの多くが愛国心について論じています。しかし植村正久にせよ、内村鑑三にせよ、決して国家を絶対のものとはしませんでした。つまり国家よりも上位に神がおられ、国家が神のみこころを行っているのかどうかを見守る姿勢がありました。「ふたつのJ」への愛に生きた内村は、日露戦争のおりには戦争に突き進む日本の姿を深く嘆きました。内村の薫陶を受けた矢内原忠雄も（時代はくだりますが）日本の軍国主義化を憂えて「神よ理想を失ったこの国を一度葬ってください」と語りました。愛国心とは国家のありようをそのまま肯定してしまうこと

ではないのだということを、少なくとも踏まえておかなければならないと思います。

「改正」教育基本法のもとでもうひとつ懸念されることは、学校現場におけるあからさまな競争原理の導入です。新聞報道によれば、2007年4月には「全国学力テスト」が40年ぶりに復活し、さらにパウチャー制度の導入も検討されているとのことです。このことによって教職員も子どもたちも管理と競争に追い立てられ、学校現場の「市場」化がすすみ、自由な議論が圧せられ、教育のほんらいのすこやかさが損なわれるおそれのあることはあきらかです。

2 教育基本法「改正」と「戦後体制からの脱却」

教育の国家主義化を強引におしすすめる以上のような動きを見るときには、ことは教育基本法の改悪に終わるものではなく、政府与党のねらいはその先にあるということをも理解しておく必要があります。

先の12月16日付「朝日新聞」朝刊で、ある論者は国民に対して何の説明もなく教育基本法「改正」がなされたのは、「改正」が教育の改善にあるのではなく、首相が宣言している「戦後体制からの脱却」のためであろうと、また憲法と一体の教育基本法を「改正」したことで、内閣は今後改憲の動きを強めるのではないかと述べています。教育基本法の改悪や防衛庁の「省」への格上げは、首相の言う「戦後体制からの脱却」の第一歩であり、憲法改悪へのひとつの段階にほかならないのです。そしてそれは有事法制の整備や靖国神社問題等とも連動した、まさに一連の動向なのです。

明治維新のおり、日本は欧米諸国ともわたりあうことのできる国家となるべく、近代的中央集権国家をきわめて短期間のうちに築き上げました。そのスローガンとされたのが「富国強兵」すなわち資本主義の整備と軍備の増強でした。そして、国家を支える精神的支柱として着目されたのが天皇の権威です。1889年に発布され

た大日本帝国憲法は、大日本帝国は万世一系の天皇が統治し（第1条）、天皇は神聖不可侵の存在である（第3条）と定めています。

明治政府はさらに、天皇の宗教的権威を国家支配に利用するため、国家神道なるものを編み出しました。その下では天皇を現人神として崇拝することが求められ、天皇崇拝は国民の自然な感情であり、国民儀礼であるので、神道は宗教ではない（神社非宗教論）とされました。

近代天皇制国家の支配のしくみを浸透させるために利用されたのは学校教育です。帝国憲法発布の翌年に煥発された教育勅語は、天皇が国民に「臣民」としての道を教え示した文書です。教育のみなもとは国体の精華—古代から連綿と続く天皇中心の国柄にあるとうたわれ、忠孝といった儒教的徳目によって天皇と国家への忠誠が求められ、いったん事あれば天皇に命をささげるべきことが求められています。こうした思想がキリスト教信仰と見合わないものであることは、1891年に起こった内村鑑三不敬事件なども示しているとおりですが、このような価値観が戦前の国家主義的、ないし軍国主義的教育を支えていたのです。こうした国家体制と、これを支える教育体制のもので、日本は明治期からアジア諸国への侵略戦争をかさね、ついに十五年戦争にいたって日本的ファシズム—天皇制ファシズムの嵐は吹き荒れ、敗戦によって近代天皇制国家体制は崩壊にいたりました。

戦後、旧憲法にかわって平和主義と戦争放棄、基本的人権の尊重をうたった日本国憲法が発布され、教育勅語にかわって憲法の精神に立ち、個人の尊厳の尊重と人格の完成をめざす（「改正」前の）教育基本法が制定されました。そこに「天皇を国民道徳と国民教育の中心においた戦前の国家主義教育に対する大きな反省」（「反対声明」）があったことは言うまでもありません。

しかし残念ながら戦後の60年の歴史は、この憲法と教育基本法の理念が巧妙になしくず

しにされていくプロセスでもありました。2003年、有事法制三法案が成立しました。これは「有事」すなわち戦争のさいに、「軍隊」すなわち自衛隊がどのように行動するのかを定めた法律です。憲法9条を持っているはずの国が、このような法律を定めるにいたったのです。平和憲法のもとで、戦争のできる国への整備が、いわゆる解釈改憲をくりかえしながら着々となされてきたのです。

この有事法制の整備と、教育基本法改悪のプロセスとは、足並みをそろえてすすめられてきたものです。帝国憲法と教育勅語との関係の思い合わせるまでもなく、戦争に勝利するためには「国民精神」が必要であり、それは教育の現場でこそ養われるものであるからです。政府与党には、教育勅語を理想とする人々が少なくはないようです。「反対声明」も「教育勅語には、時代を超えて普遍的な哲学がある」（森元首相）「教育基本法を変えて小学生が伊勢神宮に行けるようにしなければならない」（町村元文科相）「神道を日本人の宗教心として教育に基本的に入れるべきである」（同）といった発言が引かれています。かつて別の文科相経験者も、教育基本法「改正」を教育勅語を念頭に置いてなすべきであると語りました。

さらにここに、靖国神社問題が介在します。靖国神社は国家のなした戦争のために犠牲となった人々を「英霊」として祀ってきました。ここにも「改正」教育基本法とまったく同じ問題、すなわち有無を言わせぬ国家的価値観の強要があります。安倍首相も「教育基本法を変えて、今後も国のために命をささげる若者を出していかなければならない」とどこかで発言していたと記憶します。

人間の生き死にの価値は国家が決めるものではありません。そのような領域には、国家は決して踏み込んではいけません。わたしたちにとっては「神のみが、からだと良心との主」（創立30周年記念「教会と国家にかんする信仰

の宣言) であられます。

戦前の国家神道体制への反省から、憲法20条は信教の自由と政教分離とを明確に規定しました。けれども靖国神社問題に見るように、この大切な規定はこの国ではいとも易々とあいまいにされてしまうのです。

このように見てきますと、確かに新しい憲法と教育基本法のもとに戦後の出発をなしたものの、この国にあっては戦前と戦後とはそれほど明確に切り離されてきたわけではなかったことがわかります。旧憲法と勅語のもとでの国家主義の尻尾がまだ残っています。それゆえに「反対声明」は教育基本法の改悪が「戦前の国家主義教育の復活に道を開くものである」と警告しているのです。もちろん現代におけるナショナリズムにあっては戦前の方向性そのものが企図されているのではないにせよ、グローバリゼーションの進行にともなうアメリカ一国支配の流れの中で、日本もまたアメリカ型の軍事優先社会へとシフトしていこうとしていることはあきらかです。その弱肉強食的な発想を、わたしたちは神の国の秩序から検証しなければならぬと思います。

天皇を頂点とする「国体」思想の伝達・教化を目的とした日本の近代教育は、「画一化原理」と「競争原理」というふたつの原理によって構成されてきたとの指摘があります。前者においては「臣民」的な一君万国の人間像が、後者においては近代化を急速に推進するための国家有用の人材の養成が期待された(小野静雄『日本プロテスタント教会史(上)』)のです。今教育基本法「改正」によって、一方では「愛国心」があまねく子どもたちに強制され、他方ではごくひとにぎりの「エリート」を大多数の人々が下支えする構図のもとに、教育現場に露骨な競争原理が導入されようとしています。「画一化」と「競争」の二大原理は、戦前から今にいたるまで変わることなく息づいているのです。

3 教育基本法「改正」の流れに抗して

——わたしたちの姿勢

以上のような一連の動向ゆえに、現在の日本は1945年の敗戦後最も深い危機の時代であると言われます(高橋『心と戦争』)。ことに教育基本法の改悪にともなって、キリスト者の教師たちや契約の子どもたちがすこやかな信仰を守り抜いていくための祈りと支援、適切な配慮が求められています。小会、日曜学校教師会、両親の間にも連係が必要でしょう。おしまいに、わたしたちが信仰的にどのように対処していくべきかについて、まとまりのないかたちではありますが考えてみたいと思います。

(1) 教会と国家に関する学びをしっかりと積み重ねることです。教会と国家とのあるべき関係について、聖書や信条、宣言(とくに30周年記念宣言)、大会や中会の世と教会に関する委員会刊行の文書等を通して今一度確かめたいと思います。

さらに、日本の近代史と教会史を学ぶことによって、かつて日本の教会が近代天皇制下においてどのような歴史の歩みを余儀なくされ、神の言葉よりも人の言葉に従う罪を犯したのかを検証することも不可欠です。それは日本キリスト改革派教会の創立のころごしに今一度たしかえることでもあります。歴史を学ぶことで、教会は真の悔い改めへと導かれます。

(2) 教会が預言者的見張りのつとめをしっかりと果たすことです。30周年「教会と国家にかんする信仰の宣言」は、国家もまた神のたてたもうた制度であり、キリストの主権のもとに置かれており、為政者たちも神の権能を委託されたしもべであるゆえに、教会とキリスト者は国家と為政者のために祈り、国家の求める義務を果たすことが求められると教えています。キリストは教会のかしらであるとともに国家のかしらでもあられます。それゆえ、教会は国家のことに関わるべきではないという姿勢は誤りです。

しかし、国家や為政者が神のみこころに背く

統治をなすということも起こり得ます。あるいは、国家が神からゆだねられた固有の権能をふみこえて、あたかもみずからが神のようにふるまうということも起こり得ます。実際にそれが起こり、また起こり続けていることは日本近代史も含め、この世の歴史の証明するところです。この場合、教会は国家に警告することによって、預言者的使命を果たさねばなりません。

(3) 神のみこころに背くことを国家が強制しようとした場合には「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」(使徒言行録5章29節)。通常の、あたりまえの礼拝生活を守ることができるなら、それでよいのです(それこそが「ただ一つ必要なこと」(ルカ10章42節)です)。しかし礼拝の自由や信仰的良心の自由があきらかに侵害され、苦痛を感じる場合には、国家の命ずるところに従わないことで神のみこころを行うということもあります。教育の現場でもしそのようなことが起こったなら、わたしたちは信仰の知恵と手だてとをよく用いて、抵抗することを考えるべきです。すなわちこれは教会的な、神学的なたたかいはほかなりません。

わが家では子どもたちの家庭訪問のときに、それぞれの担任の先生たちに必ずキリスト教信仰ゆえに「君が代」を歌わせることに抵抗を感じる旨を伝え、国旗国歌への配慮をお願いすることにしています。前任の教会では「君が代」を歌うことの苦痛を覚えていた契約の子のご両親が校長先生に手紙を書かれたことをきっかけに、同様の手紙を書く場合の文案を作って教会員の方々に配布しました。事柄を個々の家庭に預けるのではなく、教会全体の取り組みとすることが重要ではないかと思えます。神に従う姿勢をつらぬいて生きているなら、どのような事態に遭遇したとしても、神が必ず知恵を授け、信仰を守るたたかいを守り支えてくださるとの確信に立つことです。

(4) 教育基本法が変えられてしまったからといって、「改正」前の教育基本法を捨ててしま

わないことです。大江健三郎氏は、従来からの教育基本法を小冊子にしてポケットに入れ、これを記憶し、伝えていくことを提案しています(2006年12月19日付「朝日新聞」朝刊)。わたしたちは平和憲法と教育基本法とを、一般恩恵と位置づけて大切にしてきました。そうであれば法改正によって、この文書の価値が失われてしまうわけではないのです。

さらに、改悪された教育基本法は現憲法の定める思想・良心の自由と見合いません。成立翌日の新聞に、小さな記事ですが愛知県の小学校の先生が、通知表に「愛国心」の評価を盛り込むことは憲法違反であるとして訴訟を起こしたことが報じられていました(同様の訴訟は、すでに各地で起こされています)。平和憲法が変えられるに先立って教育基本法が変えられたことによって、本来一体であるべき両者に齟齬が生じているわけです。これは今後もたたかいの論点となり得ます。

(5) 最後に、祈ることの大切さを確認しておきます。時代と歴史がどのような局面に立ちいたろうとも、この世界の歴史は摂理の神のみ手のうちにあります。人間が力をほしいままにして歴史をあやつっているかのように見えても、実はこの世の歴史に今も神のみ手が伸ばされており、神のみこころが行われています。ろばの子に乗ってエルサレムに凱旋されたお方こそが、世界とわたしたちのまことの王であり、支配者です。このことはわたしたちを励まし、確かな希望に立たせます。そして国家と為政者が神のみこころを反映し、地上に正義と平和をうちたてる政治を行うことができるよう、また教会とキリスト者とが平和の証人としてのつとめを担って生き抜くことができるよう、たゆみなく祈り続ける力を与えます。祈りこそが教会に神のみこころを行わせる勇気と力の源なのです。(本稿は2007年1月21日に名古屋教会で持たれた家長会・婦人会・青年会合同教会学校でなした発題に加筆・修正を加えたものです。)

「宗教教育・徳育を越えて

—私どもの目指すべき日曜学校伝道—

相馬伸郎（名古屋岩の上伝道所宣教師）

教案誌発行の志、問題意識の、第二番目のことは、「教会学校教案誌」がなかったということの背後に、日本キリスト改革派教会としての「日曜学校像」が確立されていないのではないかという問題意識がありました。私どもは、教会の実践を絶えず検証する必要があります。そのために必要なフィルターとして、先ず決定的に重要なこと、大前提は、聖書に即しているのかということです。第二に、教理（改革派信仰）に即しているのか。第三に、子どもたちの現実に即しているのかということです。つまり、今日の日本において、日本キリスト改革派教会においてどのような日曜学校が求められているのか。あるべきなのか、それを常に考えることが私どもにとって大切であると思います。

これは、単に、日本キリスト改革派教会という一つの教会だけの課題ではありません。日本の教会は、これまでの日曜学校とは何であったのか、何をしてきたのか、その過去の検証から、今後、どうあるべきなのか、これらをきちんと考えなければならないとも考えたのです。

わたしは、日本における日曜学校の歴史を振り返るとき、あらためて名称そのものすら一度、考え直してみる必要もあると思います。いわゆる「日曜学校」の歴史を考えると、大抵は、1780年、イギリスの印刷業者、ロバート・レイクスの働きから語り始められると思います。ごくごく簡単に歴史を見てまいります。

レイクスはグロスターの出身で、21歳で、父親の事業を引き継ぎます。それは、産業革命が進展していたときでした。45歳のときに、教育の機会を与えられことなく、労働力として狩り出される幼少年の者たちの現実を目の当た

りにしました。多くの子どもたちが、道に迷い、不道德、退廃的な生活へ誘われて行く姿でした。レイクスは、そのような彼らの健全な成長を願い、毎日曜日に、4つの学校を開きました。その私塾に、女性教師を雇い、6歳から12・3歳の子どもたちに、いわゆる読み書きを教えたのです。あわせてカテキズム教育を施したのです。日曜日の朝10時から夕刻5時半までの、この「日曜学校」が、急速に支持を集め、イギリス中に広まり、やがてアメリカに渡り、世界的な運動へと展開されて行きました。

このように、日曜学校運動とは、当初、伝道的、福祉的な動機に裏打ちされていました。ただ、見逃せないのは、より良い労働者の確保という実利的な側面をもあわせ持ちつつ進展して行ったことです。そしてもう一つの特徴は、これを主体的に担ったのは、信徒であったということです。ひとつの「信徒運動」とも呼びうるものです。やがてアメリカにおいて、政教分離の原則のなかで、宗教教育のみを扱う場所として、私塾ではなく、教会の中に設置されて行ったようです。

そのおよそ百年後の、1889年には、「日曜学校世界大会」がロンドンで開催されます。ローマにおける第5回大会では、「世界日曜学校協会」(Sunday School Association) が組織されます。つまり、日曜学校運動はその最初から、「超教派運動」であったのです。1907年には、世界キリスト教教育協議会と改称されます。この運動の特徴や意義を三点挙げる研究者がおられます。

①いかにして子どもたちを回心に導くか（魂の救い）に焦点をあてるというもの。回心運動。

②女性キリスト者が教会のなかで公的な働き場を見出すことに寄与したこと。

③信徒のボランティアによって担われたことによって、エキュメニカル（世界教会）運動として展開されたこと。

わたしは、そこで見逃せない歴史的背景として、19世紀のリバイリズム（「信仰復興運動」）があると思います。つまり、神学的に教会の教育を考えた上での働きであるというより、むしろ伝道（回心・救霊）最優先の空気のなかで、信徒を中心とした熱意に支えられ、超教派的に急速に拡大されていたわけです。

ここで簡単に整理すれば、日曜学校運動の性格とは、①「子どもたちを回心に導く救霊運動」②「信徒中心の運動」③「超教派運動」④「慈善運動」とすることができると思います。特に4番目の慈善運動は、日曜学校運動の成り立ちの動機の主要部であり、全体の通奏低音として流れていると思われます。

横道にそれますが、後でも触れますが、慈善活動という点の「危うさ」については常に心していなければならないと思いますが、私どもの教会は、開拓伝道12年を迎え、今年、「ディアコニアに生きる教会の形成」という年間目標を立てて、学びを始めました。そこで、日曜学校の働きを教会の地域社会へのディアコニアという視点から、捉えなおしてみることもできるのではないかと、教会員に促しています。これまでの私どもの発想になかったことでした。

さて次に、日本における日曜学校の歴史もごく簡単に振り返りたいと思います。それは、1872年、つまり、その最初の教会（日本基督公会・横浜基督公会）にまでさかのぼります。つまり、日本にとって教会のスタートと日曜学校のスタートとは同じになされているのです。それほどまでに、教会の働きに不可欠のものであるという理解があったと言ってよいのではないのでしょうか。しかし、日曜学校伝道の先駆的

働きを担った、田村直臣牧師（日本基督教会）は、その頃の日曜学校の状況を「教会の付録のごときもの」であり、「宣教師が外国の教会に日曜学校というものがあるということを教えてくれたから、子供の好きなキリスト者が物好きに子供に手を出し始めた。」と批判的に述べています。しかし、たどい思い思いに聖書の話をし、聖画を見せ、カードを配る程度のものであっても、子どもへの伝道の熱い思いにあふれたこの働きは大変な勢いで進展して行きます。

1882年の東京宣教師会議録によれば、日曜学校49校、教師156名、生徒4,060名。1888年は、267校、教師360名、生徒16,820名、つまり、生徒数は6年間で4倍です。驚くべきことに、当時の教会数は206教会ですから教会より多いのです。つまり、60校は、教会の外で、分校として開設されたのです。日曜学校は、子どもへの伝道であることはもとより、開拓伝道の拠点でもあったわけです。このことは、後でも申しますが、日本伝道を考える意味で、今日でも新しい意味を持っているとわたしは考えています。

先を急がなければなりません、生い立ちが既にそうであるように、実に日本教会史と日本日曜学校史とは、そのまま一つの線で結ばれてゆきます。前述した、「日曜学校世界大会」は、日本でも、1920年（大正9・第8回）と1958年（昭和33・第14回）、東京で開催されました。1920年の東京における大会では、海外32カ国から1,800人を迎え、明治開国以来最大の国際会議であったと言われます。財閥の渋沢栄一が募金委員を務めたように、日本の財界、政界から積極的な協力がありました。さらに、後日、日曜学校会館建築の際には、宮内省から千円が寄付され、キリスト教界は、歓喜しました。徳育教育が国家体制の中にすでに絡めとられている現実を、当時の関係者は気づくことができませんでした。

そして、ついに1930年代に至り、37年には、日曜学校協会理事長が、日中戦争支持の姿勢を表明し、加盟校宛に「質素を旨とし、反戦思想ありと誤解されるごときなきよう」と、主事名で通告します。38年には、当時の教案誌である「日曜学校の友」で、神社参拝に理解を示すように訴えています。さらに40年には、皇紀2600年記念日曜学校大会を各地で開催しました。諸教会が、日本基督教団に統合された際には、当時の教案誌では、繰り返し、天皇の赤子としての使命、つまり天皇のため、お国のために従軍することが、神の御心であると推奨され、これを鼓舞する説教がなされ続けます。

わたしの手元には、1941年の日本基督教団の教案誌である「日曜学校の友」のコピーがあります。今回のために、日本キリスト教団の宣教研究所の職員の方をお願いしてコピーを送っていただきました。たとえば、1940年11月3日の明治節の日の幼稚科の「おはなし」の一節にこうあります。

「汽車、飛行機、電車、自動車。学校もお役所も郵便局も電気も。そして今のように強い国になったのです。明治天皇様が、こんなにさせてくださったのですね。だから、日本の国中の人が明治天皇様を、お父様のように思って、いつでもいつまでも、おしたい申し上げるのです。神様は日本の国が弱そうになったときに、こんなにお偉い天皇陛下を下さって、強い国にして護ってくださいました。私たちも強い子どもになって、天皇陛下によくお仕えて、ほんとうに良い日本の国にいたしましょう。」

これは、ほんの一例です。小学科になれば、さらに国策にすりよった奨励がなされています。いったい、どうしてこのような惨めでおそるべき教会、神の御前に罪を犯し、キリストの教会であることを実質上日曜学校の営みがなされてしまったのでしょうか。

たとえば、わたしも日本キリスト改革派教会は、戦前の日本基督教団の歴史を担っている

教会ですが、この教会の最大の指導者は、植村正久牧師でした。植村の日曜学校についての認識は、その後の日本基督教団の日曜学校像とその実践に大きな影響を及ぼしたはずですが、植村の考えていた「日曜学校像」の一端をうかがい知ることのできる言葉にこのようなものがあります。「【日曜学校を】宗教教育及び徳育をしくに有るべき機関たらしめなば、国家の利益、教会の勢力、キリスト教の声価いかにたかめらるべきか」

ここに「宗教教育」と「徳育」という言葉が記されています。彼によれば、日曜学校とは、この二つを地域になすための機関としようということです。今日の私どももまた、このことを真剣に考えなければなりません。

植村の時代の社会状況の一端を伺い知ることのできる事件として、有名な内村鑑三の不敬事件があります。内村が教育勅語に拝礼しなかったことから、国家権力、文化人からの厳しいキリスト教批判がなされていました。そのような厳しい逆風のなかで、彼は、日本の教会が、子どもたちに聖書を説くことによって、道徳教育に貢献し、国家の利益と教会の勢力、キリスト教の名声を高めようとしたわけです。

ただし、誤解してはならないと思いますが、彼にとっての国家の利益とは、単純に国家権力者、為政者の利益を指し示しているわけではありません。彼は、キリスト教こそ日本という国家を進歩発展させるために最大の力を発揮するものであって、キリスト教によって日本は、「国家の元氣」を高揚させ、その天職を全うさせる力となると考えていたのです。植村は、著しく国家を肯定的、楽観的に見ていました。ここに植村が後の日本の教会、いわゆる主流派教会をして、国策に迎合する教会となってしまうその方向性の弱点を見逃すことはできません。植村の神学の系譜を継ぐのは、熊野義孝先生ですが、そこでも「国民教会」構想が語られています。これ以上に横道にそれてはいけませんが、この

構想の危うさも、今日の日本の教会があらためて考えてよいことと思います。

このような日曜学校像は、実は、植村自身の福音理解に根ざしています。同時にその限界にも言及せざるを得ない深い問題があると思います。端的に申しますと、植村は、「志」という武士の精神的遺産を土台にして、人間としての確立、道義的な、高い倫理観をもった人間としての確立をキリスト教によって実現させられたという体験的な理解をその神学の土台にすえてるように思います。植村にとっての罪とは、「靈性の病」あるいは「靈性の死」でした。ウエストミンスター大教理問答のような、神の言葉への違反ではないのです。「神の律法に少しでもかなわないこと、またそれを犯すこと」ではないのです。子どもカテキズムは、「神さまの御言葉を破って、それに背くことです。」神の御言葉なしに、私どもは自分の罪の現実が分かりません。その罪の刑罰がどれほどおそろしいものであるのかも真実には分かりません。植村にとっては、この罪の理解が、聖書的に徹底していない恨みがあるわけです。それが、彼の国家論や教会論にも及んでいるとわたしは見ています。

宗教教育と徳育教育とは、おそらく連動している概念であると思います。いずれにしろ、それは「国家の利益、教会の勢力、キリスト教の声価いかにたかめらるべきか」という発想です。彼の中には、社会改良、社会人民の「木鐸」とするための教会という発想があります。福音による救いを個人に与え、神の御前に人格の完成を、そして社会や国家には、福音をもって人々の生き方の改良、国力の発展を求めたわけです。そして、彼は、当時のキリスト教のオピニオンリーダーとして、教会の内外に渡って、指導し、戦ったのです。

このように戦前の日曜学校には、伝道的な側面が強くありました。その結果、多くの子どもたちが教会に足を踏み入れたわけです。しかし

当時の日曜学校は、福音の伝道というより、福音による「徳育教育」「宗教教育」をなし、それで満足していたのではないのでしょうか。その結実によって地域社会における教会、キリスト教の声価を高めることを第一とし、満足したのではないのでしょうか。実に、そのような理念や次元に基づく日曜学校像、それをなおさずその日曜学校を営むのは教会ですから、教会の未熟さと罪を見つめなければならないのです。教会は、実に、簡単に、国策に迎合し、すりより、戦争遂行の一翼を担うことになっていったわけです。

わたしは、もしかすると今なお、日本の日曜学校は、「徳育」「宗教教育」の次元を越えていないのではないかと危惧します。わたしは、機会があるごとに、「日曜学校は種まき伝道なのか」という問いかけをさせていただいています。それは、どういうことかと申しますと、こういう言葉をしばしば聞き、実は私自身語ったことがあるからです。「日曜学校は、種まきです。子どもたちが、教会から離れても、いつか大人になったら、イエスさまを信じるようになる人も出ます。日曜学校は、自分たちの知らないところで実を結ぶことを期待し、信じて行うのです。」

私どもは、地域の子どもたちにどのように向き合っているのかを、問われます。万一、最初からこのようなことを前提として、語っているなら、語られている福音そのものを再検討しなければならないとすら考え始めています。主イエス・キリストは「子どもたちをわたしのところに来させなさい。」(マルコによる福音書第13章)とお命じになられ、弟子たちを叱られました。弟子たちが、子どもたちを近寄らせまいとしたからです。弟子たちが、子どもたちを来させないということは、まだ早い、まだ幼なすぎるということも一つにはあったのでしょうか。しかし、主御自身は、そうはお考えになっておられません。教会は、この主イエス・キリ

ストを子どもたちに伝えるのです。まだ、早い。実を結ばない。大人になったら、いつか。というのでは、そこで伝えている主イエス・キリストとはどのようなお方になっているのかが問われると思うのです。薄っぺらな福音というのは、ありません。福音は、深いものです。そして福音を聴くと子どもたち自身も深くなります。そうなれば、教師はますます全存在、全人格を注いで、子どもたちに向き合わなければならないはずです。そこにこそ、日曜学校教育の姿、伝道の姿があります。牧会的に伝道する、人格と人格とが響きあうような対話が基本になる、共に神の前で祈りあう関係が作られる。福音が、伝道の方法やあり方も規定するわけです。

主イエスは、「目を上げて畑を見なさい」（ヨハネによる福音書第4章35節）と仰せになりました。弟子たちは、「収穫までまだ四ヶ月ある」と見ているのです。それは、いわば、宗教教育とか徳育教育の次元でのことではないでしょうか。私どもは、刈り入れなければならないし、それができるのです。それが主イエス・キリストの福音なのです。主は、すでに十字架について、救いの御業を完成してくださったからです。私どもは、福音伝道をするのです。生ける主イエス・キリストを紹介し、このお方の前に悔い改めることと信仰へと招くのです。救いを伝え、招くのです。そのためにこそ、教理教育に励んでいるのです。地域の子達にもカテキズム教育をもって向き合うのです。

（「本誌の基本方針」参照）

ついでのことですが、今日、いわゆるキリスト教主義の学校が、宗教教育を施すということが言われます。宗教の時間というのがあり、そこで、礼拝がなされ、聖書が教えられます。宗教主事が置かれます。わたしは素朴に、なぜ、「宗教」なのか、と思うのです。「キリスト教」でよいではないかということです。日本において宗教という言い方をどうして、キリスト教主義

学校で使うのかと思うのです。何か、及び腰だと思うのです。宗教教育と道德教育をリンクさせるとき、これも大雑把な結論しか申し上げられないで、申し訳ないのですが、とても危険なことです。教育が個人のためではなく、国家のため、国家体制のためになされるときそこでなされる道德教育なるものは基本的に、疑いの目で見なければなりません。宗教教育を道德教育としてなすことが、キリスト教教育であるという理解では、少なくとも教会の営みである日曜学校、日曜学校伝道は成り立たないはずです。

横道にそれたついでにまた横道にそれるかもしれませんが、日曜学校像の確立の課題で、なぜ、植村のことを取り上げざるを得ないのでしょうか。それは、植村を克服しない限り、正しい福音伝道とその実りを期待できないと考えるからです。このように申し上げるわたしは、実は、植村正久牧師のことを、日本の教会が誇るべき牧師であり、指導者であると考えています。あの当時、この先生の戦いの水準は、きわめて高いものがあったことは、比較してみれば一目瞭然です。その意味で、偉大な指導者であったと評価することができると思います。今日の日本のキリスト教界で、彼のように論陣を張って、教会の意見を社会へ発信する力量のあるキリスト者、牧師、神学者がおられるかと思いません。出て欲しいと願います。しかし、それと同時に、現代の日本の教会特に、旧日本基督教会の流れにある教会であれば、自覚的に植村を批判し、克服する備えがなければならないと思います。そうでなければ改めて、私どもはこの時代のなかで、同じ弱さを露呈し、罪を重ねるのではないかと恐れているのです。

9月末に召集される臨時国会において「教育基本法」の改正が審議されようとしています。教育基本法改正の問題は、私どもの教会にとってきわめて憂慮し、そして何とか廃案にさせるべき大変な時代錯誤の悪法であると考えます。

自民党の「新憲法草案」が「大日本帝国憲法」への著しい回帰を目指しているように、教育基本法は、現代版「教育勅語」のようなものです。

子どもの先輩たちは、残念ながら、大日本帝国憲法、国家神道、天皇制に完全に敗北し、自らキリストの教会、神の教会であることを放棄してしまいました。かろうじて、非制度的な一部の教会、キリスト者が抵抗したにすぎませんでした。それは、あまりにも惨めな教会の敗北であり、神の御前に神社参拝、宮城遙拝などの偶像礼拝の罪を犯しました。どうして、そうなったのか、それを今日、お話する場ではもちろんありません。しかし、日本における日曜学校を考えると、どうしても避けて通ることはできないことがあります。

なぜなら、当時の日曜学校においても、「教育勅語」にすりより、国家神道体制を完成させるために、1937年に文部省教学局から各学校に配布した「国体の本義」に絡めとられてしまったのです。要するに、戦前の日本の日曜学校教育は、公立学校に劣らず、戦争推進の国策にすりよったのです。実は最近、はじめてこの「国体の本義」という文章を読みました。国家神道の教科書です。国家神道の教理の本と言ってもよいかと思います。そうであれば、日本の教会は、このいわば、神道カテキズムに絡めとられてしまったということです。日本の教会の敗北は、教理の敗北でもあったわけです。

敗戦によって、当時のGHQ（連合国総司令部）は、「神道指令」を出して、国家神道の解体に取り組みます。そこで、すぐに、日本の歴史教科書は、国家神道にもとづく天皇制、八紘一宇的な歴史、軍国主義教育を推進した部分はすべて黒塗りにされてしまいました。しかし、当時の教会の教科書はどうだったのでしょうか。むしろマッカーサーは、宣教師たちを日本に派遣することをアメリカに呼びかけます。日本の教会は、一躍、立場が逆転し、新しい日本建設

のために絶好のときが到来したと考えたわけです。しかし、本当は、教会こそ、まっさきに自らの手によって、「教案誌」を黒塗りにしなければならなかったはずです。誰に強制されるのでもなく、自ら、自分たちの戦争責任を認め、悔い改めなければならないのです。しかし現実には、それがなのまま、戦後の日本の教会の歴史は始められてまいりました。

三浦綾子さんは、その頃、教師をしていましたが、戦争の責任を痛感して教師を辞職しました。しかし、当時の日曜学校の教師が説いた「ほかの福音」（ガラテヤの信徒への手紙第1章6節）つまり、異端の教えをなした罪に対して、教会は、牧師は、教師はどのような責任をとったのでしょうか。

GHQは、キリスト教に対して積極的な好意を示しました。日本の支配層は、手のひらを返したように支配者であるアメリカの好意を得るために、教会に好意的に対処しました。このような状況のもとで、敗戦後5、6年の間は、空前のキリスト教ブームの時期を迎えます。来日したアメリカからの宣教師たちもまた、日本基督教団の存在を日本伝道の便宜上、利用することが得策と考えたと思われます。諸教派のミッション団体は、教団への資金援助を惜しみませんでした。

そして、空前のキリスト教ブームが到来しました。大勢の子どもたちをも日曜学校に招き入れることになりました。しかしそのとき、ほとんどの教会は、自分たちの罪責について、社会に言明せず、子どもたちにも謝罪しませんでした。ここでもはや、疑うこともできないほど明らかな事実は、日本キリスト教史に顕在化するのは、日本の教会が、支配者への迎合、すりよりによって存続、発展しようとする傾向性です。

それなら現代の教会はどうでしょうか。あのときの罪は神の御前に残り続けているのではないのでしょうか。それゆえに、今日もなお同じ弱さや罪の中にあるのではないのでしょうか。私ど

もの教会は、あらためてこの罪をわきまえ、悔い改め、克服することなしに、本当の意味での日本の教会の再生の道も、日曜学校伝道再建の道もないのではないのでしょうか。

その点で、私ども日本キリスト改革派教会の創立の意義がどれほど大きな、重みのあることであるか、まさに日本の教会の歴史にとって画期的な事件であるわけです。日本キリスト改革派教会はその創立宣言で、戦前、戦中の自分たちを「我等は之を神の御前に恥ぢ」たと告白しました。これは、客観的、厳密に言えば、教会の戦争責任、罪責告白とまではならないという批判はありますし、その批判について、弁明することはほとんど意味がないと思います。しかし、私は、「創立宣言」を、神港教会の田中剛二牧師の教団脱退届の線で理解していますし、するべきではないかと考えております。

「一、教団成立は日本にある教会の信仰的妥協であったことを確信すること（悔改のためには教団を解体すべきである。）

一、教団があった故に、日本の教会が迫害と弾圧より守られ、今日の宣教の自由を得ることができたのだといふ考えのまったく誤っているこ

と（今日の伝道の不振は寧ろ迫害を回避して信仰的妥協をしたことに就いて、日本の教会が徹底的悔改めをなさないことに起因すると確信する）。

一、私の教団脱退は私の悔改である。」

わたしは、田中先生の、悔改めに生きようとのこの志こそが、日本キリスト改革派教会の創立者たちの志であると理解しております。何よりも、先輩たちの戦いを継承する今日の私どもの志であらねばならないと強く考えております。そうでなければ、この画期的な出来事が結局、歴史のあた花になる危険性を、危機感をわたしは強く抱いております。

今こそ、私どもが、今日の日本の政治状況を私どもの信仰告白そのものにかかわる事態であると認識し、日本キリスト改革派教会の創立の使命をよく果たすために、立ち上がりたいと心から願っております。

（本稿は、2006年9月10日に行われた東部中会CS教師研修会（於東京教会）で行った講演「教会学校教案誌発行の志——伝道する日曜学校を目指して——」から一部を抜粋して書き改めたものです。）

本誌の基本方針

～教会（日曜）学校像について～

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ第56章7節、マタイ第21章13節）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするので、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

子どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は

神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私どもはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることになります。

2. 分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なのではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです。」準備したものの全部をやれたかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

3. 子ども礼拝式における説教の重要性

——日曜学校の目標——

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活を確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（公同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかとなると思います。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでしよ

う。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわかまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

4. 説教の完成としての牧会

——分級の目標——

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「牧会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずで

す。説教（神の言葉の共同的伝達）と牧会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

5. 教会形成の一環としての日曜学校

——教師会と教師——

およそ教会的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているものであり、そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められているのです。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

6. 伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子どもたちを捉える伝道の場として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

私どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

私どもの目に子どもたちは、どのように映っているでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさへすれば、子どもらこそはっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

私どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria（ただ神の栄光の為に！）

聖書研究・説教展開例・分級展開例

テキスト ルカによる福音書23章13～25節

今週は主イエスの受難週である。主はこの週の木曜日の夜に逮捕されてから、金曜日の朝にかけて六回にもわたる裁判を受けられた。①アンナスの前での予備審問、②大祭司カイアフアと最高法院の前で、③さらに夜が明けてからの最高法院での裁判、④ピラトの前で、⑤ヘロデ・アンティパスの前で、⑥再びピラトの前で。このピラトはAD25年から36年にかけてユダヤの総督であった。今回のテキスト、ルカ23：13～25はピラトによる最後の裁判で、彼がユダヤ人たちの死刑要求を受け入れ、最終決定を下した重要な裁判である。最高法院のメンバーとおそらく彼らに煽動された民衆も加わって、ピラトの前で「その男を殺せ、十字架につけろ」の大合唱となった。ピラトが四回も繰り返しているように（23：4, 14, 15, 22）、主イエスには死刑に当たるような犯罪は何ひとつ見つからなかった。主イエスの無罪性こそは贖罪の根拠であった。しかしピラトの言葉などが、主イエスの神の聖前における無罪性の根拠ではない。主は聖霊によってマリアの胎にやどられ原罪を持たれなかった。さらにこの世の法や人間の基準ではなく、神の聖なる律法に対する完全な服従こそが、贖い主として要求される無罪性であった。それを主イエスは生涯かけて、とくに最後の十字架において、完全に果たされたのである。

死罪不当というピラトの言葉に対して、人々は主イエスの死刑を強要した。そして過越の祭りの恩赦として（マタイ27：15）、バラバの釈放を要求した。バラバは暴動と殺人罪で投獄されていたホンモノの罪人であった。しかし彼は、無罪である主イエスの身代わりの受刑によって釈放されたのである。バラバが後ほど悔い改めてキリストの救いに与ったかはどうかは定かでない。しかし少なくとも私たちはキリストの代理受苦によって、罪なきものとして神に受け入れられているのである。ピラトは主イエスの無罪を確信しながら、人々の要求に押されて不当な判決を言い渡した。この人々とは誰か。祭司長たちと議員たちと民衆

であろう（13）。もしかしたらユダヤ教指導者である祭司長たちと議員たちは後ろに控え、民衆を興奮させ煽動していたのかもしれない。この民衆こそは、主イエスの愛と憐れみの御業や神としての力ある奇跡を目の当たりにし、三年余にわたって真理の言葉をいろいろな機会に聞いてきた人々たちであった。いとも簡単に一斉にこのような叫び声をあげるようになるとは、何という人間の愚かしさか。群集心理を巧みに操作する劇場型政治が、今昔どの時代にもあったようである。主イエスの真理や愛・憐れみよりも、さらに神の御子としての栄光よりも、人間の憎しみ・傲慢が圧倒しているように思えるときがある。しかも私たち自身の心にこの傾向が潜んでいることをいつも自戒すべきである。

朝日新聞に「天声人語」というコラムがある。これは天も人もともにという意味合いであろう。しかし人の声はしばしば大きな誤りを犯す。何としてもイエスを十字架にという人々の声にピラトが屈し、主イエスの死刑を決定したかのように見えた。しかし天の声は決して敗北どころか、人がだれも成し得ない救いの成就をもたらした。主イエスの十字架は、神の愛と勝利の印であった。人間の罪の集積の最たる十字架こそ、神の人類に対する永遠の救いの計画であった（使徒2：23, 3：18, 4：27－28）。これほど大きな驚きはない。恩寵ここに窮まれりである。殉教者ステファノのようにユダヤ人による私刑はあったが（使徒7：57－60）、ローマ法のもとでの正式な死刑判決の責任と権限は、ユダヤ教の最高法院にはなく、ローマ帝国の総督にあった。総督ピラトはユダヤ人たちの強要だったにせよ、最終的に主イエスの十字架刑をローマ法のもとで決定した責任者である。ピラトは正しいことをすることを恐れ、途方もなく大きな罪を犯した。「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と、長く使徒信条にその名を留めることとなったのである。（中根汎信）

テキスト ルカによる福音書23章13～25節
参照カテキズム 子どもカテキズム問1, 24
ハイデルベルク信仰問答 問1

(単元のねらい)

信仰の中心であるイエス・キリストの受難と復活を伝えるために、子供たちの心に響くように御言葉をどのように語ることができるのか、祈りつつ備えたい。その意味では、教師の全存在をもって、救い主イエス・キリストにある幸いを語ることでしかできないのではないのか。生きるにしても死ぬにしてもわたしたちの唯一の慰めは、わたしたちの体も魂もすべてがイエス・キリストのものであることを、語るときにしたい。

「荒れ狂う人の心」

4月は、皆さんにとって新しい始まりを迎えるときですね。新しいことには必ず、不安が付きまといますが、神さまがいつも一緒にいてくださるようお互いに祈り合っていきましょう。

さて、今日からの一週間は、教会では受難週として過ごすことになっています。イエスさまが苦しみを受けられ、十字架につけられ殺されてしまいましたが、三日目に復活されるまでの一週間は特別に覚えるためです。

今朝は、ルカによる福音書23章に書き記されていますイエスさまの裁判の場面です。改めて、イエスさまの裁判の場面を読みますと、鳥肌が立つような感じがします。どうしてイエスさまは裁かれ、殺されなければならないのか、という思いが湧き起こってきます。こんなことが許されているのだろうか、とさえ思います。もちろん、それは私たちを十字架によって救うためだと教えられます。ところが私たちは、イエスさまの十字架は当然のごとく起こったかのように思い込んでいます。神さまの救いのご計画に従って救いの道を切り開いてくださったことは、神さまの御心に適ったことだと思っています。確かに、神のご計画に従って進められています。イエスさまの裁判において、人々は「十字架につけろ」と叫びました。なぜ、人々は、こんなにも考えられないことをしてしまったのでしょうか。そのことを見てみま

しょう。18節から読みます。

「しかし、人々は一斉に、『その男を殺せ。バラバを釈放しろ』と叫んだ。」21節にはこう記されています。「しかし、人々は、『十字架につけろ、十字架につけろ』と叫び続けた。ピラトは三度目に言った。『いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。』この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」そして、いよいよ人の荒れ狂う思いは頂点に達したと23節で語っています。「ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。そこで、ピラトは彼らの要求を入れる決定を下した。そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおり、釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。」

ピラトは、イエスさまを鞭で懲らしめる程度で釈放しようとしていました。親が子供に二度と悪いことをしてはいけないよと、ポコンと頭を叩くようなことで済ませようとしていました。ここで叫んでいますのは、普通の人々です。

イエスさまは、この人たちによって殺されることをご存知であったかもしれませんが。群衆の背後には、煽動者がいます。群衆よりももっと悪い奴らがいました。しかし、ルカによる福音書は、「人々が叫び続けた」と記しています。人々の叫びが勝

利したというのです。私たちの中に存在している罪は、このように不思議なものです。

大勢の人々の声に脅えてローマの役人であるピラトが、イエスさまを死刑に定めてしまうのは、まことに愚かなことです。しかも、ここでもう一つ群衆が犯してしまった、言い訳できない罪があります。17節です。「祭りの度ごとに、ピラトは囚人を一人彼らに釈放してやらなければならなかった。しかし、人々は一斉に、『その男を殺せ。バラバを釈放しろ』と叫んだ。」

バラバという男は、19節では「都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである」、あるいは25節では、「暴動の殺人のかどで投獄されていたバラバ」と言っています。バラバを人々は釈放しろと要求しました。マタイによる福音書によれば、このバラバの名前は、バラバ・イエスであったと言われます。そうすると、人々は、バラバと呼ばれるイエスを釈放して、キリストと呼ばれるイエスを殺せと要求したことになります。これこそ、恐ろしくおかしな話になってしまいます。人々は何をしたかったのでしょうか。人々の心にあったものは何でしょうか。そのことについて、聖書は記していません。どうしてバラバの釈放を人々は願い、イエスさまを殺そうとしたのか。人々は、バラバを高く評価していたから釈放してほしいと願ったわけではないはずですが、しかし、それにもかかわらずバラバを釈放しろと要求した

のは、バラバよりもイエスさまの方が許せなかったからです。どうして許せなかったのか。それはイエスさまの存在が邪魔になってきたからです。

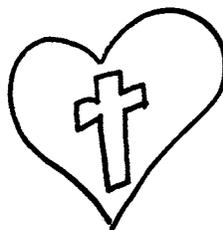
イエスさまがご自身の存在をかけて教えてくださった神の愛に生きる道が邪魔になってきたからです。人々は、イエスさまに向かって「十字架につけろ」と叫びます。それはまさしく、もうあなたは私たちにいらない、邪魔な存在でしかないとの意思表示でした。

このとき、バラバとイエスさまが並んで立っていたのかもしれませんが。人々はバラバの赦しを求めます。そして、バラバが釈放されたとき、イエスさまご自身は、これは愚かで、不当な審きだと思ったのでしょうか。決して、そうではありません。愚かなことをしている人々の罪の深さを、誰よりも悲しんでおられたのは、実はイエスさまであります。そして、変な表現かもしれませんが、喜んでご自分が十字架につけられて殺される道を定められたのではないのでしょうか。父なる神さまからの苦い杯を、人々の愚かさにもかかわらず、引き受けてくださいました。そこにこそイエス・キリストによる罪の赦しの道が開かれています。人々の荒れ狂う叫びの中で、イエスさまは黙って、ご自分が受けなければならない苦い杯を受け止めてくださるのです。この主イエス・キリストの姿に、まさに神の愛の勝利があるのです。

(安田恵嗣)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録2章36節後半

あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。



〈ねらい〉

イエス様が私たちの罪のために十字架につけられたことを子供たちに優しくわからせたい。

〈展開例〉

「十字架って何だか知ってる？一番悪いことをした人がつけられる死刑台だよ。でもね、イエス様が一番良いことばかりをしてこられたお方だよ。法律で正しい裁きをする裁判官のピラトも、イエス様には悪いことが一つもないと言いました。でもピラトは、最後にはイエス様を十字架につけてしまいました。周りの多くの人々がイエス様を十字架につけるように叫んだからです。どうしてイエス様は黙って十字架にかかれたのでしょうか？」(子どもたちに考えさせます)

「私たちはたくさん嘘をついたり、いじわる

をしたり、お友達の物が欲しくなったりする悪い心があるし、悪いことをしてしまう時もあるね。そういう私たちの代わりに十字架について下さったんだよ。悪いことばかりしていたバラバさんはイエス様と交替で赦されたけれど、後でどう思っただろうね。」

「イエス様が十字架につけられて私たちを罪から救ってくださったのです。救い主、イエス・キリストに感謝しましょう。」

〈祈り〉

イエス様は何も悪いことをしていないのに、十字架につけられて、私たちを罪から救って下さいました。そのことを信じて感謝できますようにお祈りします。

〈やってみよう〉**画用紙を使って十字架を作ろう**

- ①図1のテープ(画用紙)を用意する。
- ②Aの線をはさみで子どもに切らせる。
- ③図2のように、子どもにのりではらせる。

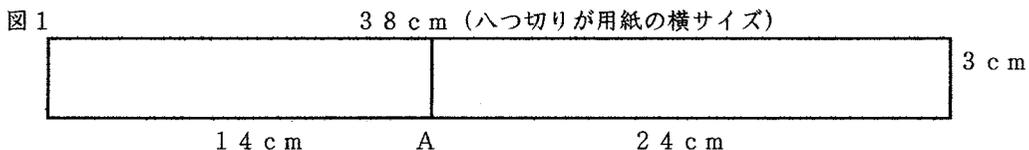
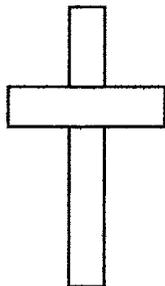


図2



〈ねらい〉

ピラトと人々との動きを通して人間の罪がイエスさまを十字架につけたこと、そして、それを神様は黙して耐えられたことを教え、神様の大きな愛と忍耐を子供の心に覚えさせる。

〈展開例〉

ピラトはイエスさまを調べましたが何も悪いことはありませんでした。

みなさんがマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネなどの福音書を読んでイエスさまがどんなことをなさったか知っていますね。病気で苦しむ人を治してあげましたね。家族が死んで深い悲しみのなかにいる人を憐れんで生きかえらせ、喜びに溢れさせてくださいましたことも幾度もありましたね。神様の御国がどんなに素晴らしいところか、そしてそこに入るためにはどうしたらよいかを、子供から大人の人、それに人々からのけ者にされていた人などに教えてくださいましたね。こんな素晴らしいことをしてくださったイエスさまを、なぜ

人々は死刑にしようとしたのでしょうか。不思議ですね。しかし、ここに人間の罪があるのです。人間は自分の罪を認めることができないのです。ですから、ほかの人が言うことをよく考えもせずに賛成してしまうことがあるのです。（ここで例話として「いじめ」のことを取上げ、いじめる側に立ちやすい自分の罪を指摘してイエスさまを十字架につけるように叫んだ人々と同じ自分をはっきり自覚するようにさせ）その罪を許すためにイエスさまが十字架から私たちを招いていてくださることを子供たちの心に覚えさせたい。

〈いのり〉

神様、すぐ、悪いことを言ったりしたりする弱い私達を許して神さまの子供にしてくださいるためにイエスさまを十字架につけられた、神様の大きな愛に感謝します。この神様の愛を忘れないで、神様にお従いできるようにしてください。イエスさまのお名前によっておいのりします。アーメン。



ピラトは三度目に言った。

〈ねらい〉

イエス・キリストが苦しみを受け、私たちの罪を贖うために十字架につけられ、死んで下さった受難の出来事を覚える。

また主イエスを十字架につけた責任は、自分本位な思いを優先する私たち自身の罪にあることを実感する。

〈展開例〉

主イエスは不当な裁判によって十字架という最も苦しく、呪われた方法で死刑とされました。勿論、主イエスが十字架にかかって下さったのは神様のご計画でした。

また主イエスは、神様の御旨に喜んで従われました。しかし、直接的には人間の大きな罪が主イエスを十字架つけたということも事実です。

本日の聖書箇所から、

- (1)ユダヤの指導者・祭司・律法学者
- (2)ピラト
- (3)民衆

のそれぞれの罪とは何かを聖書から学び、私たち自身の罪との関係を考える機会としたい。

1. ユダヤの指導者・祭司・律法学者の罪は？

主イエスの人気が高まり、自分たちが築いてきた地位や名誉を失うことを恐れ、主イエスをねたましく思い、罪のない主イエスを殺そうと企んだ罪。自分たちの考えを振り返り、正義や真理を追究することをせず、自分勝手な思いで謙虚な態度を失った罪。主イエスを自分たちで殺すことはせず、手をよごすことを他人の手に委ねようとした責任転嫁の罪、などが考えられる。

2. ピラトの罪は？

主イエスが無罪であることを知りながら、民衆の「イエスを十字架につけろ、十字架につけろ」

という声に負け、裁判官としての正義を貫くことを放棄した罪。この背景には、主イエスを釈放すれば民衆たちの暴動が起こり、ローマ総督としての監督責任を問われ、現在の役職、地位を失ってしまう恐れがあり、正義より自己保身に走った自己中心的罪が考えられる。

3. 民衆の罪は？

「イエスを十字架につけろ」「バラバを釈放せよ」と主イエスを拒み、主イエスを殺した罪。

民衆は主イエスに、政治的なローマからの開放者としての期待、この世的な反映をもたらす力ある王としての期待を持ち、まことの魂の救い主としての主イエスを理解できず、主イエスを見限ってしまったのではないだろうか。神様の思いより、自分たちの思いを選んだ罪が考えられる。

4. 私たち自身の罪との関係は？

私たちも神様の思いを選ぶか、自分たちの思いを選ぶかのどちらかです。この世的な幸せを選ぶか、永遠の幸せを選ぶかのどちらかです。私たちも、自分勝手な思いや、自分自身を喜ばせることを一番大切に、神様から離れてしまう罪で主イエスを十字架にかけたのです。

しかし、主イエスはその十字架によって私たちの致命的な罪をも赦し、欠けのある、そのままの私たちを受け入れ、今も愛し続けて下さいます。

〈祈り〉

主イエスを十字架につけたのは私たちの罪であったことを知りました。罪の力は大きく、私たちの力ではどうすることもできません。

神様、どうぞ、罪に陥ることがないように、あなたの力をお与え下さい。私たちを支えて下さい。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。

〈ねらい〉

イエス様の死刑判決に神様に御業を見る。

27:18、41)、群衆の移り気(ルカ23:18、19、36)、ピラトの保身(ルカ23:23、24)など。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えようと無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださいと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. イエス様は死刑にされるような罪を犯したのでしょうか？

→イエス様が無罪であったことは、群衆の暴動を恐れて不当な裁判の判決をくだしたピラト自身が14、15、22節で三度も語っている。

Q. ピラトによって不当な死刑判決を受けたイエス様でしたが、このように至った要因として十字架に架けられるイエス様を巡る人々の罪が指摘できます。これを挙げられるだけ話してください。

→イスカリオテのユダの裏切り(ルカ22:3~6)、弟子達が見捨てたこと(マタイ26:56)、長老、祭司長、律法学者達のねたみ(マタイ

Q. イエス様の死刑判決の一つの面は人間の罪の暗黒が猛威を振ったことでした。もう一つの面があります。それは何でしょうか？

→「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」(使徒2:36)と書かれているように、イエス様の十字架刑は神様の御業であった。それは、「このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまっただけです。」(使徒2:23)神様の救いの計画の成就であった。イエス様はこれを成し遂げるために、この世に来られたのである。「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を捧げるために来たのと同じように。」(マタイ20:28)

Q. 罪のないイエス様が罪人バラバの身代りに刑を受けることによって、バラバが釈放されました。聖書はこのことで何を教えていますか？バラバとは一体誰のことでしょうか？

→罪なき神の子が私達を罪から救うために身代りに裁かれ、刑罰を受けて、私達に罪の赦しをもたらして下さること。自らの犯した罪のために投獄され死刑判決の裁判を待っていたバラバとは、神様の御前に罪人で滅びに向かって歩んでいる私達自身の象徴である。

4. お祈り

私達の身代りとなって赦しをもたらして下さったイエス様の救いに感謝。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

主イエスの復活は、AD30年4月9日（日）の出来事と、いのちのことは社の聖書辞典という（578頁）。この一日の経過を簡単に記そう。それはまずこの日の早朝、婦人たちが墓へ行き、復活の主イエスに出会ったことから始まった（マタイ28：1以下）。続いて知らせを聞いたペトロとヨハネが駆けつけ、空虚になった墓を見た。マグダラのマリアもこの墓で復活の主に会い、そのことを弟子たちに伝えた。墓の数人の番兵もこの出来事を祭司長たちに報告した。復活の日曜日の午前中は、弟子たちもユダヤ教側も、大騒ぎになったことであろう。その日の午後、エルサレムから11kmほどのエマオという村へ向かっていた二人の弟子に、復活の主イエスが現れ、その道すがらお話くださった。目的地に着くと共に食事の席に着かれ、パンを裂いてお渡しになったとき、二人の弟子の目が開け、主イエスであると分かった。二人はさっそくエルサレムに帰り、事の次第を弟子たちに報告した。今日のテキスト、ルカ24：36～49はその報告集会のときのことを記す。彼らの真ん中に主イエスが立たれて、恐れおののき疑う弟子たちに語られ、魚まで食されて肉体の復活を証明された。これが復活の日の一日である。この一日は弟子たちにとってどれほど大きな興奮や驚きの連続であったことか。

ルカ24：36～49の記事は、エマオの夕食後11km離れたエルサレムに引き返してからのことで、少なくとも夜の10時ごろにはなっていたであろう。彼らはまだ主イエスの復活を明確には信じていなかった。異常な状態の一日で、心身ともに疲労もあったことであろう。ここに記されている弟子たちの心理状態はたいへん流動的であった。「恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った」（37）、「うろたえている」「心に疑いを起こす」（38）、「喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっている」（41）、「心の目を開」かれた（45）と多様なありさまであった。夜の薄明かりのもと、復活の主を亡霊と勘違いしたのもこの段階ではやむ

を得ないことであろう。この不安定さは、私たちがキリストの救いを求め始めたときの感情にも似ていよう。

亡霊と訳されているのは、単に霊（1954年改訳口語訳・新改訳）である。霊には肉や骨はない。しかし最初のクリスマスのとき以来、神性とともに、受肉されて人性をとられた二性一人格の主イエスは、肉体の復活をもって永遠に神と人との仲保者となられたのである。キリストは肉体を持たず、主イエスの人性や苦難は主観的な幻影にすぎないという「キリスト仮現論」の異端を聖書は排除する。肉体や物質は悪、霊は善と考えるギリシャ思想の影響を受けたこの異端は、相当早い時期から教会に現れてきた。ヨハネの手紙一1：1，2：18，4：1～3など参照。弟子たちの前で手や足を見せられ（39）、焼いた魚を召し上げられた（42，43）のは、肉体の復活の確かな証しであった。

完全に肉体の復活を証明された主イエスは、メシアの苦難と復活が旧約聖書（44節では律法と預言者の書と詩編）の実現であると言われた。主イエスご自身が別のところで「聖書（旧約）はわたしについて証しをするものだ」と言われたとおりである（ヨハネ5：39）。主イエスをこのように信じないユダヤ教的な旧約聖書の読み方は正しいものではない。「モーセは、わたしについて書いているからである」（ヨハネ5：46）。類似の「聖書読みの聖書知らず」がいろいろな形で現れてくる。苦難と復活の主イエスが私の救い主であるとの信仰的理解は、主が私たちの「心の目を開いて」（ルカ24：45）くださるのでなければ不可能である。聖書をとおして・聖書とともに主の御霊が働いてくださるとき、罪の中にあり霊的に全能的無力となっている者もこの真理を悟ることができるようにされる。使徒9：18，16：14参照。このようにして主の救いを悟られた私たちに、主イエスは「このことの証人となる」ように召しを与えられたのである。（中根汎信）

テキスト ルカによる福音書24章36～49節

参照カテキズム 子どもカテキズム問24

ハイデルベルク信仰問答問45

〔単元のねらい〕

パウロが聖書の最も大切なこととして語った主イエスの十字架の死と復活について（コリントの信徒への手紙一15章3～11節）、教えることに集中したい。もし、キリストの復活がないのに語っているとすれば、これほど虚しいことはない。喜びをもってイースターの出来事を語りたい。

「心を開かれて」

イースターおめでとうございます。今日は、イエスさまがよみがえられたことを記念する喜びの日です。お友達と一緒にイエスさまのよみがえりを覚えて礼拝をしましょう。

さて、ルカによる福音書の第24章は、同じ日の出来事を書き記しています。ずいぶんと長い一日です。その日の朝、イエスさまが復活されました。同じ日に二人の弟子たちがエルサレムからエマオの村に帰ろうとしています。その二人とイエスさまと一緒に歩んでくださいました。日が暮れたので泊まってくれるように求めます。そのとき、一緒に歩んでくださった方がイエスさまだと分かったとたんに、主の姿は見えなくなりました。二人はエルサレムに戻ります。エルサレムにいる弟子たちに、イエスさまが現れたことを話していると、そこにイエスさまが現れてくださいました。

このとき、夜も更けて、あたりは寝静まっていたことでしょう。その静かな夜に、イエスさまが御言葉を語り続けておられます。イエスさまが復活された夜、新しい朝に向かって弟子たちに決意を促しておられるわけではありません。上から霊の力を授けられるときまで、都に留まって、祈り続けなさいということでした。新しい時が来るまで、暫くの間、待つように話されています。

キリストが復活されて、食卓を共にして、御言葉を説き明かして下さっておられる姿は、教会の礼拝の姿そのものです。

新しい時代に備える時に、最も大切なことは何

でしょうか。45節に、「そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて」とルカは記しています。「心の目を」開くことがまず大切なことでした。しかも、そのことをしてくださったのは、イエスさまご自身でした。

それもイエスさまは、「聖書を悟らせるために」なさっておられます。「悟る」とは、ただ知ることではありません。納得することです。自分の内側に、聖書の真理がしっかりと入り込んでくることです。ここでイエスさまは、ご自分が語っていることは、何も今初めてではないことを明らかにしています。「まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである」と言われました。弟子たちとの生活においてイエスさまご自身が、毎日、聖書の言葉を語っておられました。しかし弟子たちは、まだ悟っていませんでした。聖書の言葉の知識はあったことでしょうか、イザヤの言葉についても、心を捕らえて、根をおろすまでにはなっていませんでした。

心を開くとは、どういうことでしょうか。私はある時に、留学された先生の経験談を聞いたことがあります。学校の教師をしていた老婦人が癌になり、その後、教え子たちが聞きつけてお見舞いに来たりしていました。訪ねて来た元生徒たちは、励ますつもりで来ましたが、反対に励まされて帰って行くということだったそうです。また、会うことができない生徒たちのためには手紙を書くことに励んだそうです。手紙が書けなくなると、

今度は祈り続けたそうです。自分が、どれほど惨めか、どんなに苦しいかということだけに思いを至らせるのではなくて、そのような時にも、他者のために祈る心に生きることができたというのです。

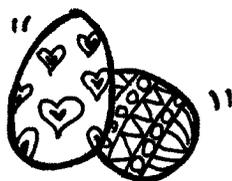
心を開くとは、そういうことではないでしょうか。自分のことだけを考えているならば、心は開きません。しかし、自分のことだけから、私たちは簡単に解放されるわけではありません。イエスさまは、聖書の言葉が分かるように、心を開くと言われました。それから46節でこのように語られました。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」何でもないことが記されているようですが、弟子たちにとっては驚くべき言葉が主の口から語られました。それは、「あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。エルサレムから始めて」ということです。ユダヤ人だけではなく、どこの国の人たちにも、イエス・キリストの福音が宣べ伝えられるようになるとイエスさまは言われました。この主の言葉は、弟子たちには十分に分かり

ませんでした。なぜならば、このあと、聖霊が降って弟子たちが喜んで伝道に出て行きました時に、初めはユダヤ人にだけにしか福音を伝えませんでした。異邦人への伝道は、パウロの登場を待たなければならなかったのです。ユダヤ人であることを誇りとしていた弟子たちは、なかなかその心を変えることができませんでした。やはり、自分のことだけしか考えていませんでした。イエスさまは、弟子たちの頑なな心に向かって、聖書の核心を語られました。イエスさまが死んで復活されることです。そして、そのことのゆえに、罪の赦しが与えられるのです。罪の赦しを得るために、人々の心に悔い改め、心が変わることが起こります。聖書は、そのことに集約されています。

罪は、悔やむだけではダメです。罪人である私たちに対して心を開こうとしておられるイエスさまを見ることが大切です。私たちは、自分のことは自分がいちばんよく理解していると思いついていられるかもしれませんが、それよりもっと深く私たちを理解し、受け入れ、私たちを神の子としてくださるイエスさまの御業を知ることの方が大切です。大切なことは、神によって心を開いていただくことです。 (安田恵嗣)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 ー 15章14節

キリストが復活しなかったのなら、
わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。



〈ねらい〉

イエス様が、一切の罪や死の力に勝利され、栄光の主として復活して下さったことを、子どもたちと共に心から喜び合おう。そして、この喜びを全ての国々に伝えるために、イエス様ご自身が聖霊をくださると約束して下さい、私たちの心の目を神様へと開いて下さることを、心から感謝しよう。

〈展開例〉

①「イースターおめでとう！……ところで、何で『おめでとう』なのかな？」

——今日がどういう日なのかをもう一度確認します。

②「もう会えないと思っていたイエス様が、全く新しい身体によみがえって、栄光の主として会いに来てくれたんだね。お弟子さんたちはどう思っただろう？みんなだったら、どう思う？」

——今日が喜びの日であることを、子どもたち自身に実感させたい。

③「大好きで、尊敬していたイエス様が死んでしまって、悲しんでいるお弟子さんの中に現れたイエス様は、まず最初に『あなたがたに平和がありますように』とおっしゃいました。イエス

様は、『ほら、もう大丈夫。わたしはちゃんと一緒にいるよ。安心なさい。』と励ましてくれたんだね。そして、イエス様こそが聖書に約束された本当の救い主であることがよくわかる清い心を、お弟子さんたちに与えてくださいました。そして、イエス様のことを信じて幸せに暮らすように、世界中の人たちに伝え、広めるようにとお命じになりました。」

——先生方の言葉で、復活のイエス様が与えて下さった恵みと召命について語ってください。

④「さあ、今日は喜びの日です。教会に来るみなさんを、『おめでとう』でお迎えしましょう。」

——工作に入ります(下記参照)。出来上がったら、首にかけてみんなでお祈りをしましょう。その後、教会の入り口に並んで、来会者を元気良く迎えます。

〈祈り〉

イエス様、私たちのために罪と死にうち勝ち、復活して下さいありがとうございます。いつも私たちと一緒にいて下さってありがとうございます。この喜びを、みんなにお伝えすることができますように。

〈やってみよう〉

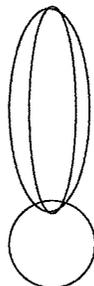
首飾りを作るう

用意する物

厚紙(ワッペン用)、リボン、色鉛筆か色ペン



子どもたちが
絵を描いて
色を塗ります。



リボンを通して
でき上がり。

〈ねらい〉

よみがえり（復活）の情景を聖書に従ってリアルに語ることを通して、子供の心に事実性を強く植え付けましょう。

〈展開例〉

イエスさまはお弟子さんたちの真中にお立ちになられました。その時のお弟子さん達のおどろきはどんなであったでしょう。イエスさまは確かに十字架の上で死なれたのです。そしてお墓に入られたのです。お墓には重い石でふたをしておきましたから、外からも内からも出入りはできないはずですが、それなのにイエスさまがこうして自分たちのところに来られるとは、いったいこれは何が起こったのでしょうか。お弟子たちはイエスさまにお会いできたのですからもう飛び上がるくらいに嬉しいのですが、でもやっぱりふにおちないのです。

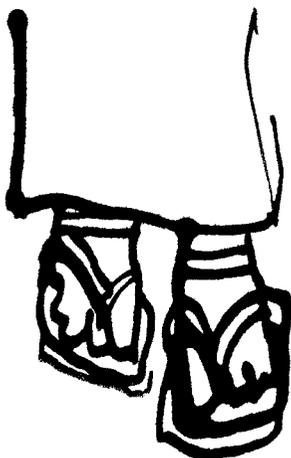
イエスさまはこうしたお弟子たちの様子を見てやさしく言われました。「わたしの手と足を見てごらん。私にさわってごらん。」そしてどうとうイエスさまは、「ここに何か食べ物があるか」とおっしゃいました。お魚を焼いたのが残っていたのでしょうか。お弟子がそれを差し出すと、イエ

スさまはその焼いたお魚を皆の前でお食べになりました。それで、お弟子たちとこれまでの三年間を過ごしてくださった、あのイエスさまであることを、もうお弟子たちは誰も疑うものはなくなりました。

そこでイエスさまとても大切なことをおっしゃいました。それは聖書とご自分との関係についてです。「聖書の中で私について書いてあることはみなその通りになるのです。たとえば『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。』と書かれていたことはこうして私が復活した通りです。あなたがたは他の人々に自分が今見ていることを教えてあげるのですよ。」とおっしゃいました。お弟子たちはイエスさまが聖書の中で預言されていたことを全て行ってくださったことを確信できたのです。

〈いのり〉

神様、イエスさまが復活してくださったことを感謝します。お弟子さんたちと同じように私たちもイエスさまが復活されたことを信じることができるよう、聖霊のお力で助けてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



あなたがたが見ているとおり、わたしにはそれがある。

〈ねらい〉

1. 主イエス・キリストは、激しい受難と痛み、苦しみ、苦しみの極みである十字架を経て一度死に、そして私たちに新たな命と希望とを与えるために甦って下さったことを知る。
2. 甦りの主が今も生きて確実に働いておられることを信じて受け入れる。

〈展開例〉

本日の聖書箇所を通してイースターの喜びを共に分かちあいたい。聖書の理解のために以下の観点から学んでいきたい。

1. 主の復活の意味と恵み

復活は主イエスが死を打ち破り、死に勝利したことを意味する。もし主イエスが復活しなかったなら、私たちは罪の中にあり続けます。しかし、主イエスが肉体を持って復活されたことにより、私たちは罪の裁きによって滅びることなく、新しい命を得ることができます。

2. 主の復活を理解できないで弟子たち

弟子たちにとって主イエスの復活は理解しがたく信じるのができない出来事でした。主イエスが十字架につけられた後、弟子たちはひっそりと集まり、部屋の戸に鍵をかけ、息をひそめていました。主イエスが復活したとの知らせは届いていましたが、甦りの主イエスに出会ったのは一部の弟子たちだけでした。甦りの主イエスに出会っていない他の弟子たちは心細い思いで、心にも鍵をかけて閉じこもり、主イエスの復活を信じるのができませんでした。

3. 弟子たちの絶望と恐れ

主イエスを救い主と信じ、主イエスのために命を捧げることも厭わずに従い続けてきた弟子たちでしたが、最後にはその主イエスを裏切ることになりました。そのような弟子たちにとって、主イ

エスの十字架の死は、深い絶望と共に恐れがわきました。一つ目の恐れは、ユダヤ人が主イエスの仲間とみなし、自分たちを襲ってくるのではないかという恐れです。二つ目の恐れは、主イエスを裏切ったことによる、後ろめたさと後悔の念からくる恐れでした。

4. 主イエスが立たれ、出会ってくださる

堅く閉ざされた部屋に、甦りの主イエスが来て、弟子たちの真ん中に立って下さいました。

幽霊となって恨みを言いに来たのではないかと弟子たちは恐れましたが、主イエスは釘跡のついた手や足を見せ、また焼いた魚を食べ、幽霊ではなく、肉体を持って復活した主であることをお示しになりました。また予想外の「あなたがたに平安があるように」と赦しの言葉をいただき、弟子たちの恐れは消え、主イエスの十字架の贖いと罪の赦しを、この時、実感し、喜びました。

5. イエスが弟子たちの心の目を開かせた

主イエスは弟子たちに聖書の真理を悟らせる為に、彼らの心の目を開き、その目から覆いを取り去りました。この時まで、主イエスの十字架と復活の真理は弟子たちに理解されませんでした。

今、神様が、ここぞという時に生きて働かれた時、弟子たちは初めて聖書の預言を理解することができたのです。また同時に、イエス・キリストによる悔い改めの福音が全世界に述べ伝えられるという約束を得、聖霊を都で待つようにという伝道命令をいただきました。

〈祈り〉

神様、私たちが、恐れ、絶望し、どうすることもできない時、十字架と復活の主を信じる信仰を与えて下さい。あなたが私の心に入り、共にいて働いて下さり、助けて下さい。

イエス様の御名によって祈ります。アーメン。

〈ねらい〉

イエス様の復活を喜ぶ。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えようと無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださいと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお使いくださいと思います。

Q. 復活されたイエス様と会った弟子達は、最初どのような反応を示しましたか？

→「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。」(37節) イエス様に、「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。」(38節)とおっしゃられるような状態であった。

Q. 今日の御言葉の中で、イエス様が弟子達に御自分の肉体の復活を証明された箇所を挙げてください。

→39節、42、43節

Q. イエス様は他に何を弟子達になさったでしょうか？ そして私達に何をしてくださるでしょうか？

→「聖書を悟らせるために彼らの心の目を開い」

(45節) た。イエス様は私達にも同じようにしてくださる。これによって私達は、救い主イエス様について聖書が書いていることを理解することができるようになる。

Q. イエス様は、聖書が御自分について何と書いているとおっしゃいましたか？

→「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」(46、47節)

Q. もしイエス様が復活されなかったのなら、どうなるでしょうか？ イエス様の復活は私達に何をもたらしたのでしょうか？

→「そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」(コリント一15:14)とパウロが述べているように、イエス様の復活がなかったのなら、十字架の死は全ての終わりであり、信じる私達の罪からの救い、復活の希望、イエス様の福音を伝える意味はなくなる。復活によって、十字架のあがないは私達に罪の赦しをもたらしものとされ、昇天、神の右の座への着座から始まった世界と教会の支配の中で守られていることを確信でき、救いの完成であるイエス様の再臨も続くのである。復活こそキリスト教信仰の要である。

Q. 復活された御自分を信じる者達はどうなるとイエス様はおっしゃいましたか？

→聖霊降臨によって復活の証人となるとおっしゃった。イエス様は彼らを通して「罪の赦しを得させる悔い改め」(47節)をあらゆる国の人々に宣べ伝えられ、私達のことも御自分の証人としてお使いくださるのである。

4. お祈り

イエス様の復活を感謝して。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がった課題を祈っても良いと思います。

テキスト ヨシュア記3章

〈契約の箱を先頭に〉

荒れ野を旅する間、民はずっと契約の箱に従ってきました。契約の箱は主の臨在の見えるしるしでした。同じように、契約の箱に導かれて民はカナンの地に入ることとなります。ヨルダン川の岸に着いたとき、民の役人は命じました。「あなたたちは、主の箱を祭司たちが担ぐのを見たなら、立ってその後が続け。これまで一度も通ったことのない道であるから、主の箱があなたたちを導く。ただ主の箱に余り近づいてはいけない」と。民の中であって主のご臨在のしるしであった主の箱が先導して民をカナンの地へと導くのです。かくして主御自身がまずこの地を御自身のものとされるのです。

〈大いなる者とされたヨシュア〉

主はヨシュアに告げられました。「今日から、あなたを全イスラエルの見ている前で大いなる者とする。そして、わたしがモーセと共にいたように、あなたと共にいることを、すべての者に知らせる」と。ヨシュアはすでにモーセの後継者、イスラエルの新しい指導者とされていましたが(1:1-9, 16-18)、実際にはこのヨルダン渡河において大いなる者とされるのです。

ヨシュアは民に言いました。「主の箱を担ぐ祭司たちの足がヨルダン川の水に入ると、主は川の水をせき止め、あなたたちは川を渡ることができる。このことによってあなたたちは、生ける神があなたたちの間におられ、確かにカナンの地をあなたたちにお与えくださることを知るようになる」(9-13)と。この時、ヨシュアは主から告げられたことを民に告げただけですが(7, 8)、主はヨシュアに告げられたとおりのことをなしてくださいました。それで、ヨシュアはこのことに

よって名実ともにモーセに替わる新しい指導者となることができたのです。

〈主は力ある業によって契約を果された〉

祭司たちは主の箱を担ぎ、民の先頭に立ってヨルダンの岸辺までやってきました。季節はちょうど春の刈り入れの時期(4月初旬)で、ヨルダン川は雪解けと春の雨とで水かさが増し、堤を越えんばかりの勢いでした。ところが、契約の箱を担ぐ祭司たちの足が水際に浸ると、川の流れば上流の町アダムでせき止められ、「壁のように立った」ということです。それで、祭司たちが川の真ん中の干上がった川床に立ち止まっている間に、イスラエルの人々はすべて渡り終えることができたのでした(14-17)。

この時実際に何が起こったのか、色々の説明がなされます。急に山崩れが起こって、一時川の水がせき止められたという説明もなされます。しかし、それでは、なぜ主の箱を担いだ祭司たちが水際に達した時にこれが起こり、また民がすべて渡り終えた時に水が戻ったのか、説明ができません。

やはり、私たちは、出エジプトの時の「葦の海」での奇跡と同様、主の驚くべき御業としての奇跡そのものと解する他はありません。このために次の四つの理由を挙げる事ができるでしょう。①あらかじめ指導者ヨシュアに告げられたということ、②水は「全く断たれた」(せき止められた)と言われていること(16)、③民が渡り始めてから渡り終えるまでせき止められていたこと、④この奇跡のスケールの大きさ。

主は大いなる御業によって、ご自身の契約(1:2-4)を守り、イスラエルの民を約束の地カナンへと導かれたのです。(宮崎彌男)

テキスト ヨシュア記3章
参照カテキズム 子どもカテキズム問70

〔単元のねらい〕

ヨルダンの深い川は、信仰者の生涯の歩みにおいて立ち足はかかる試練や困難の象徴である。荒れ野の旅路を導かれた神は、今しも約束の地に入ろうとしていたイスラエルの信仰を、旅の終わりに今一度問いたもうた。そしてヨルダンを乾いた地となすみわざによって、み言葉に信頼して歩むならいかなる試練にあっても守られることを鮮やかに示したもうた。このことは時代と場所をこえた真実である。私たちもみ言葉に踏みとどまる信仰をあらたにしたい。

「み言葉に踏みとどまる」

神さまの選びの民イスラエルが、エジプトの国、奴隷の家から救い出されたときに、すでに神さまはイスラエルに、乳と蜜の流れる豊かな土地、カナンをお与えになって、そこに住まわせると約束してくださっていました。そのカナンを目指す旅は、40年の荒れ野の旅でした。それは厳しく苦しい旅でしたが、神さまはそこでイスラエルの人々を訓練して、信仰に生きる民としてとどめてくださいました。その旅路のすべてを、神さまは守ってくださいました。そして、その旅もいよいよ終わりに近づき、約束の地カナンはもう目の前でした。もうこれで長く苦しい旅も終わる、これからは安らかな日々が待っているとイスラエルの人々は喜びいさんで、最後の歩みを踏み出そうとしたにちがいありません。

ところが、その足取りを棒立ちにさせるものが立ちふさがりました。ヨルダン川です。とても深い川です。とくに春先には、雪解け水と春の雨の水とで、とてつもなく水かさが増すのです。

イスラエルはこのときに、絶望的な思いであったかもしれません。もうカナンは目の前だということに、こんなに深い川を渡っていくなどということが、果たしてできるのでしょうか。これまでの40年も苦しい旅を耐えてきたのに、ここですべてが水の泡になってしまうのか、そのように思いたくもなります。

このときのイスラエルのリーダーは、すでに

モーセからヨシュアにかわっていました。ヨシュアは、前に進むのか、それとも引き返すのか、とても悩んだと思います。もう目の前にカナンの地がひろがっています。けれどもそこに入るには、この深い川を渡っていかなければなりません。ヨシュアの目は、ヨルダンのおびたしい水の流れをとらえたことでしょう。それから、これまで荒れ野の旅で労苦をともしてきた民、とくに子供たちや年老いた人々、女の人たちといった弱い人々に注がれたことでしょう。この人々をあえて危険な目にあわせるような無謀なことをするよりも、いっそ引き返したほうがよいという考えが、ヨシュアの頭をかすめたのではないのでしょうか。

そのときヨシュアの目は、民の列のうしろのほうで、契約の箱をかついでいた祭司たちをとらえたのです。契約の箱には、十戒の記された二枚の石の板がおさめられていました。神のみ言葉のおさめられた箱は、生ける神のご臨在のしるしです。契約の箱は、これまでの40年の命がけの旅にあって、いつもイスラエルとともにありました。つまり、これまで神さまはイスラエルから離れることなく、この民を守り続けてくださったのです。そして、これからもどのような試練や困難のときにも、神は自分たちから離れたもうことはない。必ず守り助けてくださる。そのことにヨシュアは気づかされたのです。

神さまはヨシュアとイスラエルの民にこうお命

じになりました。契約の箱をしっかりとついでま
ま、深い川の中に足を踏み入れなさい。そして、
川の中に立って、踏みとどまっていなさい。

イスラエルがそのとおりにしたとき、契約の箱
をかついだ祭司たちの足が水際にひたると同時
に、ヨルダン川の水は両側で立ち、川は乾いた地
となり、民はみなそこを歩いて渡りました。民が
すべて渡りきったときに、水はもとどおりになり
ました。こうしてイスラエルは約束の地カナンに
入っていきました。わたしはあなたがたに乳と蜜
の流れる地を与えるとの神さまの約束は、まさし
く確かであったのです。

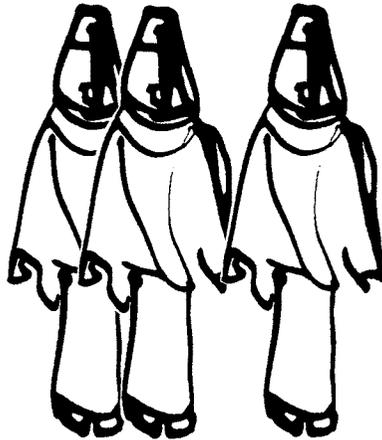
私たちの日々の歩みにおいても、ときにヨルダ

ンの深い川のように、試練や困難が立ちはだかる
ことがあるかもしれません。けれどもどのよう
なときにも、神さまは私たちとともにいてくださ
います。そして、必ず私たちに最もよきことをな
してくださいませ。この約束は確かです。

私たちは、どのようなときにも変わることも、
揺らぐこともないイエスさまのみ言葉にしっかりと
踏みとどまっていましょう。そのようにする
ときに、神さまは私たちの命を支え守ってくださ
います。昔イスラエルの人々に大いなるみわざを
見せてくださった神さまは、今私たちをも守り導
いてくださるのです。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙13章8節

イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です。



キリスト・イエスは、きのうも今日も、
また永遠に変わることはない方です。

〈ねらい〉

私たちは生きています。もう今度はだめかもしれないと思うほどの苦しみや窮地に立たされることがあります。そんな時に、必ず神様が共にいて助けて下さることを感謝しよう。

〈展開例〉

「神様の約束の地カナンは、ヨルダン川を渡ればもうすぐです。でも、ヨルダン川は台風の時の川のように水がいっぱいで、深くて渡ることができません。子どもも女の人も老人も、そして動物も一緒です。どうやって渡ればいいでしょうね。神様は奇跡を起こして助けて下さったのです。どうやってでしょうね？契約の箱を担いだ人が川に足を入れると、川の水が流れてこなくなったのです。それでみんな渡ることができました。全部の人が渡り終わると、川は元のようにいっぱい

く流れ出したのです。どんな時も神様は信じる人を助けて下さるのです。私たちは、生きています。うれしいことやいいことばかりではありません。泣きたくなるほど辛いことや困ることもあります。みんなのお父さん、お母さんもそんな時があります。病気になったり、仕事がうまくいかなかったり、台風などで家が壊されたり流されたり。でも、神様が共にいて下さいます。だから心配せず、感謝しましょう。」

〈おいのり〉

神様、いつも一緒にいてくださりありがとうございます。苦しいこと、悲しいことのために、神様のことを忘れてしまわないように、弱い私たちを強くして下さい。私たちをいつも守って下さり、ありがとうございます。

〈やってみよう〉

深いヨルダン川にも神様の創造された魚がいることでしょう。

魚を作って川に泳がせよう。

- ①先生が大きな画用紙に川を描いておく。
- ②色紙に川に住む生き物（魚、かになど）を描いておく。
- ③子どもたちに切らせる。（できない子は先生が切ってやり、目など色をぬらせる）
- ④それらを川に貼り付ける。



〈ねらい〉

困ったときにも神さまがごいっしょなら大丈夫であることを、ヨシュア記3章の物語から生徒の心に刻む。

〈展開例〉

ヨシュアは、ある朝早く起きてイスラエルの人々全員をヨルダン川のところまで連れて行き、三日間そこでテントを張って泊まりました。そのあいだ皆はとても緊張していました。ヨシュアが出す命令をかたずをのんで待っていたのです。やがてヨシュアは役人に命じて、こういうふうに伝えました。「みんなは契約の箱をよく注意して見ていなさい。祭司さんたちが契約の箱をかたずで動きだしたら、そのあとに続き、あなたがたも出発するのです。すぐにテントをたたんで、荷物をラクダやロバにくくりつけ、忘れ物のないように、そして小さい子どもたちはだっこしたり手をつないだりして、みんなに遅れないように歩き出すのです。よいですか。だれ一人遅れてはいけませんよ。みんなそろって行くのですよ。そのとき、先に契約の箱がいきますから、それについていくのですが、契約の箱のすぐ後ろにだれもいてはなりません。必ず二千アンマ（一アンマは45センチメートルですから900メートル）、先に行く契約の箱から離れてついていかなければなりません。列の先頭の人にはよく前を見て進んでください。」

イスラエルの人々は役人のひとからこのようなことを伝えられたのですが、心の中は心配でいっぱいです。なぜなら目の前には大きなヨルダン川が流れているのです。どのくらい深いかだれもわからないのです。川が狭くなるどころがどこかにあるのでしょうか。それとも浅いところを見つけてそこを渡っていくのでしょうか。ヨシュアさんがいったいどう考えているのか、みんなはとても

不安な気持ちでいっぱいでした。そのとき、ヨシュアさんが不思議なことを言いました。「あなたたちは自分自身を真の神様にささげなさい。なぜなら、神様は明日、みんながびっくりするようなどても不思議なことをなさろうとしておられるからです。」このことを聞いたイスラエルの人々は、さあ、いよいよ出発の時がきたのだと感じました。そして、それぞれの家族が自分のテントの中で神様にお祈りをささげて、自分たちは真の神様にこれまで従いましたが、神様はわたしたちをどんなときにも怖いことからお守りくださり、食べ物が無くなったときにもわたしたちが困らないように不思議な方法（マナやうずらで助けてくださったこと：出エジプト記16章13節、16章13節）で助けてくださったことを思い出して、今度も神様はきっとわたしたちを守ってくださるに違いないと思いました。

次の日、神様はヨルダン川の水を流れないように、ダムで水が止まるように止められて、イスラエルの人々は川底の乾いた土の上を歩いて渡ることができました。

〈いのり〉

なんでもおできになる神様。イスラエルの人々が神様を信頼してヨシュアさんの言葉にしたがったように、わたしたちも神様に信頼していこうことができるようにしてください。イエスさまのお名前をとおしてお祈りいたします。アーメン。



〈ねらい〉

人生の困難に直面して、その時神が不思議な業で私達の道を開いて下さることを今日のテキストを通して学ぶ。

〈展開例〉

神様が約束されたカナンの土地にはすでにカナン人が住んでいた。

そこは偶像礼拝と道徳乱れの地であったが彼らは強力な軍事力を持っていた。

ヨシユアに率いられたイスラエルの行く手を遮るのはその拠点エリコであり、今日のテキストの記事ヨルダン川である。降水量の少ないパレスチナ地方とは言え、雪解けの水源をヘルモン山にもつヨルダン川はあふれるばかりの水量であった。敵前で橋のない川を渡る。ちょうど出エジプトで葦の海を前にして背後からエジプトの軍が迫って来るに似ている。これらの知識を前提に生徒達の持っている出エジプトの知識等を尋ねながら進める。復習になるが今日の説教で話された内容を生徒に確認させたい。

1. ヨルダン川を渡る必要性。
2. ヨルダン川の様子。(聖書地図)
3. カナンとエリコの様子。カナンとエリコの写真や絵が有れば見せる。
4. 先頭を進んだのは誰か。(何か)

5. なぜ契約の箱が前を進んだのか。
6. その時何が起こったか。
7. 出エジプトの奇跡との違い。
8. 契約の箱(写真が有れば見せる)を映画「レイダース/失われたアーク」の様に単にその神秘性と見てはならない。
9. 奇跡は物理的に説明できるかも知れないが聖書は説明できない記事で満ちている。
- 10 今日奇跡の中で一番驚いたのは誰か、それはイスラエルの民であり、エリコの人々をも驚かせたのではないか。
又教師の体験で困難が信仰によって解決された事が有れば短く話すのもよい。又生徒に話してもらうのもよい。
11. 3章5節のヨシヤの宣言と従ったイスラエルの人々の信仰に注目したい。

※以上の課題を○×式にして質問用紙を作ってもよい。

〈祈り〉

※生徒に祈らせてもよい。

天の神様、私達の人生には色々な苦しいことがあります。けれども神様は何時もいっしょにいて助けると約束して下さいました。ありがとうございます。イエス・キリストの聖名によって感謝してお祈りします。

〈やってみよう〉**靴下でつくる人形**

次のページに掲載しています。

ソックス人形の作り方

千里摂理教会
辻 やすお



9 かぶせた裾を折り返してつばにして完成頬に紅をつけたら可愛い女の子



1 かかとを上につま先を左に折る



2 更にもう一度左に折る



3 左のくるぶし部を袋にして右にかぶせる



4 目と口を張り付ける
(最後でも良い)



5 色物をかかとを下にしてくるぶしを図のように充分挿入する



6 下に折り左に持ってくる



7 頭の部分になるように1-2回折り返して袋にしてかぶせる



8 かぶせた状態

〈ねらい〉

主が共にいてくださることに信頼する。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えようと無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださればと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいばと思います。

Q. モーセの後継者ヨシュアの率いるイスラエルの民は約束の地カナンに入ろうとしていましたが、彼らの眼前には深いヨルダン川が立ちふさがっていたのです。彼らにとって、この川はどのような存在だったのでしょうか？

→越えられないように思える試練や困難。

Q. 主の契約の箱を担いだ祭司たちが民に先立って進むということには、どのような意味があったのでしょうか？ 主の契約の箱にはどのような意味があったのでしょうか？

→契約の箱は主の臨在の見えるしるしであり、

この箱が民に先立って進まれることは、主御自身が民の先頭に立って約束の地へと導いてゆかれることを意味した。

Q. 「春の刈り入れの時期で、ヨルダン川の水は堤を越えんばかりに満ちていたが、箱を担ぐ祭司たちの足が水際に浸ると」(15節)川はせき止められました。これは何を教えていますか？

→神様がヨルダン川をせき止めて、道を作ってくださいしたこと。神様はイスラエルの民の目の前の不可能と思えるような試練、困難を御自身が何とかしてくださいました。

Q. そもそも主は何故、ヨシュア率いるイスラエルの民を助けられたのでしょうか？

→「強く雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。」(ヨシュア記1:6)とあるように、主がイスラエルの民の先祖たちに誓った約束(契約)に対する真実による。

Q. 主は私達をも助けてくださるのでしょうか？

→私達はイエス様によって恵みの契約に入り、「神のイスラエル」(ガラテヤ6:16)とされている。イエス様は、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタイ28:20)とお約束くださいました。私達の目に乗り越えることなど不可能と思える困難や試練に直面しても、「主が何とかしてください」そう主のお約束への真実を信頼することができるのである。

4. お祈り

神様が共にいてくださるとのお約束への信頼が強められるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト ヨシュア記6章

〈主が戦って勝利される〉

エリコの住民は、イスラエルの民がヨルダン川を渡る前から、この民のこ^とについて聞いておりました。主が出エジプトの時以来どのように力強い御手と御業をもってこの民を導いてこられたかについて聞き、恐怖に怯えておりました(2:9-11参照)。今やそのイスラエルがヨルダン川を渡り、すぐそばまで来ているのですから、エリコの住民は「城門を堅く閉ざし」、その堅固な城壁に自分たちの安全を託す以外にありませんでした。

そのとき、主はヨシュアに言われました。「私はエリコとその王と勇士たちををあなたの手に渡す。町を一周し、それを六日間続けなさい。七日目には町を七周し、七人の祭司はそれぞれ雄羊の角笛(ショーファール)を吹き鳴らしなさい。祭司たちが雄羊の角笛を長く吹き鳴らしたとき、民は皆いっせいに、関の声をあげなさい。町の城壁は崩れ落ち、あなたは町を得ることができる」と。

ヨシュアは主の命令を民に繰り返し伝えました。この戦いにおいて軍事的戦略は何もありませんでした。主ご自身のご自身のみこころに従って町を征服されるのです。民は主のご命令に従って第一日目に城壁を一周します。その行進は、武装兵が最初で、民が一番後です。真ん中に契約の箱を担いだ祭司たちが行進します。主はそこで王座について裁きを下し、民の只中^とにあって町を包囲するため進まれるのです。主の箱の前を担いだ七人の祭司たちは七つの角笛を吹き鳴らしながら、今や裁きのために主が来られたことを告知知らせます。

民は、七日間、毎日城壁を一周するという同じ行進を繰り返しました。その七日目には、民は黙って角笛を吹き鳴らしながら、エリコの町を七周しました。その日七周目の行進が終わった時、ヨシュアは民に命じます。「関の声をあげよ。主はあなたたちにこの町を与えられた。町とその中にあるものは、ラハブの家に属する者たち以外命あるも

のはことごとく滅ぼし尽くしなさい。自分のものとして何も取ってはならない。貴金属はすべて主の宝物倉に納めなさい」と。

次いで、角笛が鳴り渡ると、民はいっせいに関の声をあげ、町の城壁は崩れ落ちました。

〈エリコの奉獻〉

民はそれぞれその場から町に突入し、町を占領しました。そして、「男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣にかけて滅ぼし尽くし」ました(21)。ここの「滅ぼし尽くした」を新改訳聖書では「聖絶した」と訳しています。この言葉は「主への献げものとするために滅ぼし尽くす」ことを意味します。

エリコは、主に献げられるべき最初の占領都市、約束の地の初穂でありましたので、聖絶され、主のもの^ととされる必要があったのです。そして、エリコの聖絶はカナン全土が主に献げられるべきこと^とのしるしでした。

ラハブとその家族だけが、斥候たちとの契約のゆえに聖絶を逃れました。周りのすべてが破壊し尽くされた中で、ラハブは主の恵みの生きた証拠となりました。彼女はその後、イスラエルの民に加えられ、主イエス・キリストの系図にも出てきます(マタイ1:5)。

このように、民のカナン入国後の最初の町エリコは主ご自身によって戦い取られました。それは、民の力ではなく、主がカナンの全地を戦い取ってくださること^とのしるしでした。そのため、エリコの町はこの後永久に再建(要塞化)されてはなりません(26)。これは、イスラエルの民を守る力は主にあるのであって、決して堅固な城壁にあるのではないことをいつまでも民に思い起こさせるためでした。エリコはこのようにして主の力と裁きの永遠の記念碑として覚えられるべき場所となったのです。(宮崎彌男)

テキスト ヨシュア記6章
参照カテキズム 子どもカテキズム問76

〔単元のねらい〕

エリコの城壁を崩したのはイスラエルの力ではなく、神の力であった。神の民のたたかいはつねに信仰によるたたかいであり、神が勝利をもたらしてくださる。ここでも先週のヨルダン渡河と同様、契約の箱の先導ということが重要であろう。信仰者の生活にも、ときにエリコの城壁のような困難や試練が立ちはだかることがある。しかしみ言葉に従って歩むなら、必ず神のみわざを見ることができ、この朝も心に刻みたい。

「信仰によるたたかい」

先週は、イスラエルの民がヨルダンの深い川を渡って、神さまの約束の地カナンに入ってしまったことを見ました。そのとき神さまはイスラエルの人々の目の前で、ヨルダンの流れの真ん中を乾いたところとし、道をつくるというすばらしいみわざをなしてくださいました。

今朝も、神さまがイスラエルのためになしてくださいましたすばらしいみわざを学びます。それは、エリコの町を与えてくださったことにともなうみわざです。

神さまはカナンの地を、約束どおりにイスラエルに与えてくださいました。けれども、実はカナンの地には、すでにいくつかの民が住んでいました。そしてその民は、まことの神さまに背いて偽りの神々を拝んでいた民でした。それでイスラエルは、まずこの民をこの場所からしりぞかせ、その民たちが残した偽りの神々を拝む習慣や、それにともなって築かれていたさまざまのものをきよめる必要がありました。神さまがくださった地をほんとうに神さまのものとしてささげることによって、はじめてイスラエルはこの地に住み、この地で神さまを礼拝して、安らかに生きることができたのです。

そのためには、先にカナンに住んでいた民とたたかいをまじえる必要もありました。これは聖なるたたかいです。ただ、この聖なるたたかいはイスラエルの民が自分の知恵と力によってなしたの

ではありません。イスラエルの背後で神さまがおんみずからたたかってください、そして勝利をもたらしてくださいました。イスラエルの人々に求められたのはただひとつのことです。それは信仰によってたたかうということです。つまり、神さまのみ言葉に従うということです。

そのことは、カナンの地をほんとうに神さまの地とするための最初のたたかいである、今朝のエリコのたたかいを見ても、鮮やかに示されています。

エリコの地はカナンの中心にあって、ここを攻め落として偶像を拝む民の手から取りもどすことはとても大切な意味を持っていました。けれどもエリコはとても防備が固かったのです。この町はびくともしない鉄の壁と石垣で守られていました。この町を攻め落とすことは、どんなにすぐれた戦士たちにも不可能だと思われました。

けれども神さまはイスラエルの民に、エリコを攻め落とせと仰せになりました。というよりも、わたしはこの町をあなたがたの手に渡すと言われたのです。わたしがあなたがたとともにいて、みずからたたかうので、あなたがたは勝利すると約束してくださいました。

では、エリコのたたかいはどのようなたたかいであったのでしょうか。六日の間、エリコの町の周りを一周しなさい。そして次の日、七日目は、

エリコの町の周りを七周しなさい。そして、祭司たちは角笛を吹き鳴らしなさい。その角笛の音があなたがたの耳に届いたなら、あなたがたはときをあげなさい。そのときわたしはエリコの城壁を崩す。だからあなたがたは町の中に攻め入りなさい——これが神さまがイスラエルにお命じになったことです。

イスラエルがみ言葉のとおりになると、神さまの約束のとおりになりました。七日目にエリコの周りを七周し、祭司たちが角笛を吹き鳴らし、民がときをあげると、あのがんじょうだったエリコの城壁はがらと音を立てて崩れ落ちました。こうして神さまはおんみずからイスラエルのためにたたかい、勝利をもたらしてくださったのです。

先週も、契約の箱がヨルダンを渡るイスラエルとともにあったことを学びました。今朝のエリコでの出来事でも、契約の箱が戦士たちに先立ってイスラエルを導いたのです。祭司たちのかつぐ契約の箱は、生ける神さまのご臨在のしるしです。神さまがともいてくださるなら、どんなにがんじょうな壁も、鉄の扉も、恐れることはありません。エリコの城壁は、私たちの前にたちはだかる試練や困難をあらわしているとも言えます。しかし今それが私たちの目の前にたちはだかっていたとしても、神さまの御目から見れば、すでにならと崩れ落ちているにちがいありません。神さまはいつも私たちとともにおられます。私たちはどんなときでも神さまに信頼して、み言葉に従っていけばよいのです。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙11章1節

信仰とは、望んでいる事柄を確認し、見えない事実を確認することです。



角笛を吹き鳴らしなさい。

〈ねらい〉

エリコの町の城壁を工作し、エリコの攻略ごっこをして遊び、神様の不思議な御業を追体験しよう。

〈展開例〉

最初に工作をして、城壁を作って、お話しをしながら遊ばせる。

7人の祭司さんが、雄羊の角笛を吹きながら、契約の箱の前を歩きます。それから、4人のレビ人が契約の箱を担いで進みます。闘いの準備をした兵隊さんは、祭司さんの前と、契約の箱の後ろを進みます。

祭司さんは角笛を鳴らしながら、他の人たちは黙って町を一周して、帰ってきます。6日間、続けます。その間、声を出してはいけません。

1日目。1回まわって（指でぐるっと、城壁の周りをなぞる）、はい、帰ります。2日目、1回、帰ります。3日目、1回、帰ります。4日目……6日目、1回、帰ります。

7日目、この日は、朝早くおきます。「1回、2回、

3回……6回、7回。ぷーー！祭司さんが角笛を長〜く吹き鳴らすと、ヨシュアさんがイスラエルの民に命じました。「闘いの声をあげよ。主はあなたたちにこの町を与えられた！」イスラエルの人々が、みんなで「わー！」って、闘いの声をあげると、城壁が崩れ落ちました。そしてイスラエルの人々はそれぞれ、その場から町に突入し、この町を占領しました。でもね、赤いひもが結んである窓の家は壊れていません。ラハブさんと家族は、約束通り、助かりました。

☆1日目から闘いの声までは、何回でも遊べます。砂場でエリコの町を作って遊んでも面白いです。

〈祈り〉

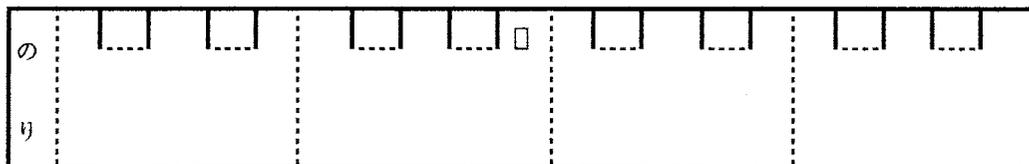
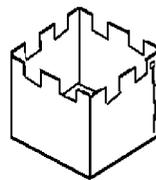
神様がすばらしいお力で、エリコの町の城壁を壊してくださったことを感謝します。わたしたちも、いつも神様に従って黙ってついて行くことができますように。そして、闘いの声を上げて、神様の勝利と一緒に喜ぶことが出来ますように。

〈やってみよう〉**エリコの城壁をつくろう****準備する物**

下図の拡大コピー、はさみ、のり、赤ペン、色鉛筆（ぬり絵の時間があれば）

作り方

- ①——線をはさみで切る。
- ②窓の赤いリボンを赤ペンで書く。（時間があれば、城壁のぬり絵もする）
- ③-----線を山折りにする。
- ④のりで貼る。



〈ねらい〉

エリコのような堅固に固められている敵を攻略するためには、人間的な方法でなく神様の方法が必要であり、イスラエルの人々はヨシュアに従って忠実にその方法を用いてエリコを攻略することができたことを教えて、わたしたちも同じように神様の方法を聖書をとおして学び、それを行うように励まそう。

〈展開例〉

エリコは、イスラエルの人々がヨルダン川を神様の奇蹟のおかげで全員無事に渡ることができた後、最初に出会った町でした。このエリコの町は高い堀に囲まれていました。ですから、堀のところどころにある門がガチャンと閉められると、もう誰も出ることも入ることもできません。さあ、こんな町をどうして神様のものにすることができるのでしょうか。イスラエルの人々は不安な気持ちになりました。でもヨシュアさんは、神様から教えていただく方法を実行すれば、必ず神様はこの町を下さることを信じていました。その方法というのは、次のようなやり方でした。「兵隊さんたちがエリコの町を一周まわるのです。それを六日間続けます。七人の祭司さんが雄羊の角笛（雄羊の角から作られたラッパ）を持ち、神の箱をかついで先頭を行います。七日目には、町を七回まわります、祭司さんたちは角笛を長く吹き鳴らし、その音を聞いたらみんなが大きな声で「ときの声」（戦いの最中に兵隊さんが敵に向かうときに出す大きな声のこと）をあげなさい。そうしたら町の高い城壁は粉々にくずれ落ちるからみんなは町の中に入りなさい。しかし六日目まではみんなは声を出してはいけない。静かにしていなさい。」ヨシュアさんはみんなにこのように伝えました。

イスラエルの人々は、ヨシュアさんの話した通りに始めました。六日目までは一回づつまわりま

した。一周してくとテントで休みました。翌朝また同じように一回だけ回ってきました。六日間それが続きました。そして、いよいよ七日目です。その七日目は、朝早くまだ暗いうちにみんなが起きました。何故なら今日だけは昨日までと違って七回も回らなければならないのですから。誰もがとても緊張していました。本当にヨシュアさんが言ったように町の城壁は崩れ落ちるのでしょうか。

みんなは出発しました。一回、二回、三回、ちょうど真中です。四回、五回、六回、ああ、とうとう最後の一回だけになりました。人々は、緊張でぶるぶる震えながら、手をぎゅうと力いっぱい握り締めたことでしょう。最後の七回目を回りきりました。祭司さんたちが角笛を一斉に響き渡らせると、ヨシュアさんはみんなに命じました。「ときの声をあげよ。主はあなたたちにこの町を与えられた！」このヨシュアさんの合図に合わせてみんなが「わぁー」とときの声あげました。するとどうでしょう。高くそびえていた町の城壁はガラガラとすごい音をたてながら粉々になって崩れ落ちてしまいました。イスラエルの人々はいっせいに町に入っていました。

ヨシュアさんの言った通りになりました。神様のみ手が働いてくださったのです。神様の約束とそのみ言葉は何と確かなことでしょう。聖書にある神様のみ言葉は全てこのように確かなのです。この神様のみ言葉に励まされ心から信頼して神様にしがっていきましょう。

〈いのり〉

神様、神様のみ言葉をわたしたちが大切に、心にいただいて従っていけますように導いてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈ねらい〉

目の前の困難（例えば受験戦争・いじめ）に対して神様は選ばれたイスラエル（私たちキリストを信じる者）にはどんな方法で解決をされるのかエリコの陥落の記事を通して学ぶ。

〈展開例〉

先週に続いてヨシュアに導かれるイスラエルの民のカナン入場の勉強です。

ヨルダン川の流れが堰き止められたその奇跡を体験した民でしたが、その目の前に立ちはだかるのはエリコの要塞でした。聖書の記事は「イスラエルの前に堅く門を閉ざして」とありますが、これは門以外に蟻の入るすき間も無いことを意味します。要塞堅固と言えるでしょう。古今東西、戦争の歴史を考えてみましょう。そしてイスラエルはどんな作戦を考えたのでしょうか。

作戦と言えば渡河前にエリコの町を斥候を使って探る記事がありますから（2章の遊女ラハブの記事）少しふれてください。

三択問題にしてみます。

- 目の前に立ちはだかるエリコの要塞を攻めるのにイスラエルはどんな作戦を考えましたか。
 - 武器を増やして戦いに備えた。
 - 力のある戦士を選んだ。
 - 特に考えなかった。
- 神様はヨシュアにどんな事をするように言われましたか
 - 民と兵士達は五日間町の周りを回りなさい
 - 民と兵士達は契約の箱を前にして祭司と共に七日間町の周りを回りなさい。
 - 民と兵士達は契約の箱の横で寝なさい。
- その時ある楽器を使いましたが何ですか。

〈やってみよう〉

ハンカチで作る小鳥

準備するもの

色付き子供用のタオルハンカチ（正方形） 目玉（紙を切って作る）2個 ゴムバンド1

リボン用ひも

次ページに掲載しています。

（角笛の写真があれば準備）

- a：ギター b：角笛 c：トランペット
- 七日目に何をしましたか。
 - エリコの城壁の前で歌を歌った。
 - エリコの城壁の前で大声で叫んだ。
 - エリコの城壁の前で昼寝をした。
 - その時何が起こりましたか。
 - 門が開いた。
 - 嵐が起こった。
 - 城壁が崩れた。
 - そこからイスラエルの兵士達が突入し、勝利しました。勝利の理由は何でしょうか。

城壁が崩れた事を物理的に説明し、超音波で崩れた等の説明も出来るが、聖書は神の業で人間の工夫ではないことを語っている。ヨルダン川と同じ奇跡であることを知らせたい。

 - 神様への信頼
 - イスラエルの武力
 - 兵士達の勇氣

激しい戦いでしたが一つの嬉しい記事があります。それはエリコに住んでいた遊女ラハブの救出です。ラハブは敵方の異邦人しかも不道德な女でしたが救われました。パウロの異邦人伝道を覚えましょう。

〈祈り〉

※生徒に祈らせてもよい。

神様。私達は困難の時、自分で何とかしようと思ひ、それが難しい時は落ち込んでしまいます。イスラエルの民を救われた神様がいつも側にいてくださることを覚えさせて下さい。イエスさまの聖名によってお祈りします。

ハンカチの小鳥の作り方



リボンを付けて完成

千里摂理教会
辻 やすお



- 1 20センチぐらい薄いタオルのハンカチを三角に折る



- 4 折り曲げた三角を包み込む様に下方の両端を手前に曲げ、更に向こうに折り曲げる



- 2 下方1・5センチ程を内に折る



- 5 両端が翼になるようにゴムバンドで縛る



- 3 頂点を手前に折り曲げる



- 6 上下逆さにして目玉を付ける
三角の頂点がクチバシになる

〈ねらい〉

信仰の戦いは主の戦いであることを知る。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えようと無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださいとしたいと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいとしたいと思います。

Q. エリコの城壁は堅固で、攻め落とすことなど不可能に思えます。しかし神様はこの時、ヨシュアに対して「見よ、わたしはエリコとその王と勇士たちをあなたの手に渡す。」(2節)とおっしゃいましたが、その具体的な方法については何とおっしゃったのでしょうか？

→3~5節、「あなたたち兵士は皆、町の周りを回りなさい。町を一周し、それを六日間続けなさい。七人の祭司は、それぞれ雄羊の角笛を携えて神の箱を先導しなさい。七日目には、町を七週し、祭司たちは角笛を吹き鳴らしなさい。彼らが雄羊の角笛を長く吹き鳴らし、その音があなたたちの耳に達したら、民は皆、関の声をあげなさい。」

Q. 神様のこの指示は、普通に考えて城壁攻略にとって意味があると思いますか？

→戦略もなにもない、人間的には愚かしいようにしか思えない指示であった。

Q. それではヨシュアたちは何故このような命令に従ったのでしょうか？

→彼らがその通りに実行したのは、このご命令を出されたのが主であったから。主はその御言葉のお約束をちゃんと果たしてくださるお方であることをヨルダン渡河において学んでいた(ヨシュア3:13)ので、今回もそうしてくださると信頼したのである。

Q. 七日目にエリコの城壁は崩れ落ち、イスラエルはこの町を攻め落とすことが出来ました。この出来事は何を教えていますか？

→神様の民の戦いは主の戦いであり、主が勝利をもたらしてくださるということ。エリコ攻略がただ主の御力によったことは、主が約束の地を勝ち取ってくださることのしるしであった。

Q. 主が共にいてくださり、戦ってくださるとのお約束を与えられている私達は、不可能に見えるような試練や困難に直面した際、どのようにしたらよいのでしょうか？

→神様を信頼して、御言葉に従うこと。そうすれば神様は必ず御業をなしてくださる。私達に求められていることは、御言葉への信頼と服従であり、これらは表裏一体。主を信頼して、一步を踏み出す勇氣、決断である。

4. お祈り

主への信頼が増し、御言葉に従う思いが強められるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト 士師記7章

ヨシュアの死からサムエル登場までの約300年間、士師と呼ばれる12人の指導者が活躍し、悪を行っては危機に陥ったイスラエルを救った。

ギデオンはサムソンと共に重要な士師として覚えられている（ヘブライ11：32）。7章は、ギデオンが民を率いてミディアンを撃退する場面である。ギデオンは召命のときに「わたしの一族はマナセの中でも最も貧弱なものです。それにわたしは家族の中でいちばん年下の者です」（6：15）と自らの人間的な非力を認めていたが、このことがすでにギデオンの活躍がただ神の力によることを予言的に物語っている。

(1) 心がおそろないために（7：1－8）

ギデオンがミディアンの陣営と向かい合ったとき、ミディアンの軍勢が13万5千人（8：10）であったのに対し、イスラエルの軍勢はわずか3万2千人であった（7：3）。しかし主はギデオンに、二回にわたり民の数をさらに減らすよう命じられた。それは、イスラエルが「自分の手で救いを勝ち取った」（7：2）と言っておごることがないようにするためであった。

まず、「恐れおののいている者」（7：3）2万3千人が帰った。戦う前から恐れを抱いている者は他の者にも影響を与えかねないということもあっただろう（申命記20：8）。次に、水の飲み方によって民を選別した。「犬のように舌で水をなめる者、すなわち膝をついてかがんで水を飲む者」（7：5）は帰され、「水を手にくっつけてすすった者」300人が残された（7：6）。これは注意深さを見るテストであったかもしれない。主はただ民の数を減らされたのではなく、戦いにふさわしい確固たる信仰とすきのない注意深さを備えた精鋭を残されたと言える。13万5千人対300人、人間の目には圧倒的な力の差と映る戦いも、主の約束は「あたかも一人の人を倒すように打ち倒すことができ

る」（6：16）というものであった。

(2) 恐れを取り除く（7：9－15）

戦いを前に、主はギデオンと従者プラを敵陣への偵察に遣わす（7：10）。すると、敵の一人が仲間に夢の話をしているのを聞く。それは、ミディアンがイスラエルに倒されるという内容の夢であった（7：13）。この話を聞き、ギデオンは主を礼拝し、勝利を確信する（7：15）。通常、偵察は敵陣の配置などを探るものであるが、この偵察においては大軍である敵の中にも恐れがあることを見出した。このことによって、ギデオンの心になお残っていたかもしれない恐れ（7：10）は取り除かれたのである。

(3) 戦いの勝利（7：16－25）

ギデオンは300人の民を三つの小隊に分け、深夜に敵陣に入っていく（7：19）。数に劣る民が大軍を攻め落とすために最もふさわしい時を、主は備えられたのである。民は角笛を吹き、水がめを割り、大声で叫んだ（7：20）。眠っていたであろう敵はこの音に驚き、また一齊にかざされた松明（7：20）に目がくらんだかもしれない。敵は同士討ちさえもはじめ（7：22）、敗走していった。ギデオンは、残された300人以外の民をも招集し（7：24）、彼らはミディアンの二人の将軍を捕らえて殺した。ギデオンの攻撃は成功した。しかしすべては主の御業であった。

ギデオンの戦いと勝利には、小さな者やわずかな民を豊かに用いられる神の力が鮮やかに物語られている。そして、このことは、新約における主イエスの教えへとつながっていく。「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」（ルカ12：32）。（石原知弘）

テキスト 士師記7章
参照カテキズム 子どもカテキズム問11, 13, 14

〔単元のねらい〕

士師ギデオンと300人の勇士の物語である。説教中にもあるように、これはイスラエルの人々にとっても非常に大切な出来事で、神の救いを想起するために語り継がれた物語である。たった300人で大軍を打ち破らしめた神の御業の奇跡に、私たちも一緒に酔いしれたい。しかしこの奇跡の裏に、それを演出する周到な準備があったことを語り逃して、子ども達をまるでマインドコントロールするかのような説教は、私たちの本意ではないでしょう。この説教では戦略家としてのギデオンの知恵の非凡さにあまり触れてはいないが、もう少し取り上げてもいいかもしれない。子ども達に、思考停止に陥らない、正しく健全な信仰への道を備えてあげていただきたい。

「たった300人ですか!？」

今日は、イスラエルの人々がカナンで暮らし始めてからのお話をします。ヨシュアに率いられたイスラエルの人々は、先立って戦ってくださる主なる神様を信頼し、約束の地カナンに入ることができました。でもすぐに正しい道を踏み外してしまうのが、旧約聖書に出てくる人たちの歩みです。罪人の歩みです。カナンに住み始めてからも、たびたび神様の目に悪いことを行って（士師6：1）、そのたびに神様は彼らに敵を送り込んで悔い改めを求めます。この時もミディアン人が攻め込んできて、イスラエルの人々を7年にわたって苦しめました。畑をめちゃくちゃにして、羊も牛もろばも残さず奪っていってしまいます。ついにイスラエルの人々は耐え切れなくなり、神様に助けを求めて叫びました。

すると神様は叫びを聞いてくださり、ギデオンという人を召し出して、人々を率いるリーダー（士師）としてお立てになりました。神様はギデオンに言われました。「あなたはミディアン人に勝利し、イスラエルの人々を救い出すことができる。私があなたを遣わすからだ。」ギデオンはそうやって神様に背中を押されて、いよいよミディアンの大軍と戦うことになったのです。

すると神様から信じられない命令がなされました。「ちょっと待ちなさい。このままではイスラ

エルの数が多い。このまま勝利したら、またわたしのことを忘れて、自分たちの力で戦いに勝ったと傲慢になるだろう。だから数を減らそう。戦いに行くのを怖がっている人を家に帰らせなさい。」こうして2万2千人が減って、1万人だけ残りました。しかもそれだけではありません。神様は「まだ多すぎる。」と言われます。そして神様は、1万人の人を水辺に導き、ひざをついてかがんで水を飲んだ者は選ばず、手ですくって飲んだ者だけを選ばれました。すると残ったのは、何とたったの300人!？ 敵は数え切れないほど多くの戦士をそろえた大軍です。いったいどうなることか。ギデオンも、300人の戦士たちも不安でいっぱいだったかもしれません。しかし信じられないことが起こるのです。

ギデオンと共に立ち上がった300人は、夜になるとミディアン人にそっと近づき、壺の中に隠したたいまつと角笛とをそれぞれ持って、大軍の周りを取り囲みました。敵はすっかり寝静まっています。すると、ギデオンたちが一斉に壺を叩きつけて壊したので、大きな音が響き渡って、ミディアン人は驚いて飛び起きました。そして慌てて周りを見渡すと、たくさんのたいまつに囲まれている!! ように見えたのです。しかも300人が大きな声で「神様のために、ギデオンのために」と叫

んで、角笛を吹き鳴らしています。だから、イスラエルの大軍が襲ってきた!!と、勘違いしてパニックになってしまいました。さあ、もうこうなったらどうにもならない。暗闇の中で、誰が敵か味方かも分からぬままに、仲間同士で戦い始めて大混乱。慌てて逃げようとする者たちも、後ろから迫ってくるギデオンたちによって次々と倒されていきます。イスラエルの大勝利です。ミディアン人たちは、すっかり打ちのめされてしまって、それからはもう二度とイスラエルの人々の物を奪いに来ることもなくなったのです。

こういうすごい奇跡が起こったこの勝利の日、この後のイスラエルの人々はこの日を「ミディアンの日」と呼んで（イザヤ9:3、詩編83:10）、神様の偉大なお力が示された大切な思い出として長く記憶することになりました。

私たちがこの時の300人だったら、あるいはこの戦いを見ていたイスラエルの人々だったら、一体どういう気持ちでこの日を迎えたのだろうか？いつもそういうことを考えてしまいます。神様が助けてくれなければ、絶対勝てるわけがない、きっと人々はそう思ったことでしょう。でも神様はそんな人々の思いを求めておられたのです。もう自分たちの力ではどうしようもない、神様に助けていただくしかない、人々が心の底からそのように思って、神様に信頼することを始める時、そこに神様の救いは始まります。神様はいつもその時を待っておられる。そしてこの「ミディアンの日」にも、確かに人々の祈りに答え、信頼に答え、

偉大なお力を示してくださった。天地を創られたお力を、不可能を可能にするお力を、そしてイエス様を死から復活させることのできるお力を、はっきりと私たちに示してくださったのです。

このような神様のお力への信頼、それは「どんなことでも神様が助けてくださる」と、向こう見ずで無謀な行動をすることではありません。そういうのを私は、猪突「盲信」と言っています。そのような勇氣は神様が求めるものではありません。今日のお話のギデオンはとても臆病で、慎重で、「神様が本当にイスラエルを救おうとされているのか」、何度も何度もしるしを求めて確認しました（6章参照）。そしてミディアン人を攻撃する時も、必死に頭を使って、残った300人で勝つことができるように作戦を練りに練ったのです。それは自分の力を頼ったということではありません。神様に深く信頼して、必ず勝利が与えられると信じながら、自分にできることを精一杯行って、作戦を練ったのです。そして神様はそれを用いられました。だから彼は300人を勝利へと導くことができました。

大切なことは、どんな時も、神様が私たちと共に歩んでくださることを覚えて、落ち着いて現実の困難に取り組むことです。神様はあなたに必要なものをすべてご存知のお方です。人間にはできなくとも神にはできるのです。その信仰をもって力を尽くすなら、私の貧しい力が、あなたのまだ小さなその手が、そのアイデアが、きっと神様の大きなご計画のために用いられることになるのです。（坂井孝宏）

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記14章13節前半

恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。

〈ねらい〉

数でなく、人間の力でなく、主が勝利を与えて下さることを知ろう。

〈展開例〉

①お祈り

②「欠席は誰かしら？ 一週間楽しかった？」

③「今日の礼拝のお話、とてもわくわくしたけれど、お話したい人はいるかな？まず、誰が出てきましたか？」

——（答え）神様、ギデオン、ミディアン人、イスラエル人

④「水辺で水を飲んでみましょう。」（身体表現）
い）犬のように顔を水につけて舌でペロペロと飲んだ人

ろ）膝を立てて手で水をすくって飲んだ人「神様は、膝を立てて飲んだ300人を残し なさいと言われましたね。」

⑤「どうしてこんなに少ない人数で戦わせよう

となさったのでしょうか。」

兵隊の数が多いと、自分たちの力でミディアン人に勝ったと思うかも知れません（心が おごらないため7：1—8）。神様は、神様が一緒 にいて勝たせて下さったことがよくわかるよ うに、300人で戦いに行かせたのです。」

⑥「ミディアン人を攻めた場面を思い出しましょう。ここにおおぎ型の画用紙があります。絵を描いて角笛を作りましょう。そして、一緒に鳴らして、関の声をあげましょう。『主のために、ギデオンのために』ブーン！

（ミディアン人の夢の、大麦のパンのお話をしてもおもしろいでしょう。）

〈祈り〉

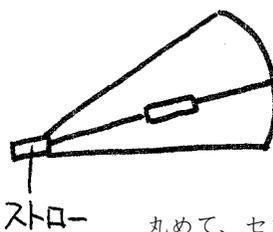
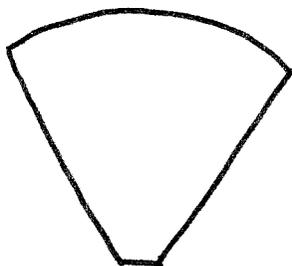
どんな時にも神様の御心を祈り求め、力を与えられ、喜んで楽しく過ごせますように。

〈やってみよう〉

角笛を作って関の声を上げよう

準備する物

おおぎ型に切った画用紙、ストロー（5cmくらいに切る）、クレヨン、セロテープ。



ストロー 丸めて、セロテープで貼ります。

☆ストローに口をつけて、「ブーン」と言います。

〈ねらい〉

ギデオンの勝利は神様による勝利であることを学び、わたしたちはたとえ少数であっても、力が弱い者であっても、主に信頼し、恐れなくて悪の力と戦う子供たちにしたい。

〈展開例〉

ギデオンは、イスラエルのために、その当時バアルの偶像を拝みイスラエルの人々から食料や財産を奪って荒らしまわっていたミディアン人や獰猛なアマレク人と戦うために、主によって選ばれた人であったが、彼自身はもともと臆病な人であった。しかし、主は明らかな召命によって、アマレクびとに立ち向かう勇士として彼を立ち上がらされました（士師記6章11節～40節）。

いよいよアマレクの軍隊にむかって戦いを始める前、主はギデオンに少数精鋭によって戦うことを求められました。それはアマレクへの勝利が人の力ではなく、神様ご自身が御力をもって戦いたもうたことを知らせるためでした。まず臆病な者二万二千人が取り除かれ、一万人が残されました。主はこれでもまだ多いとして水辺に導き、そこで水の飲み方でテストされました。犬のように舌で水をなめた者、それに、ひざをついて飲んだ者もテストに不合格とされました。水を手にすくってすすった者だけが残され、わずか300人しかいませんでしたが、主はこの300人だけを戦いの勇士としてお選びになったのでした。

ギデオンはこの300人を三つのグループに分け、ある夜の真夜中頃、たいまつを壺の中にかくして

持ち、そしてもう一方に角笛を持たせました。ギデオンは彼らにこう命じました。「わたしを見て、わたしがするようにせよ。わたしとわたしが率いる者が角笛を吹いたら、あなたたちも角笛を吹き『主のために、ギデオンのために』と叫ぶのだ。」敵陣の前に着き、ギデオンと彼の率いる百人が角笛を吹き持っていた壺を砕きました。すると、ほかの二組の小隊の兵士たちも同じように、そろって角笛を吹き、壺を割ってたいまつを左手にかざし、右手で角笛を吹きつけ、「主のために、ギデオンのために剣を」と叫びました。三組の部隊はミディアンの陣地をうまく囲むようにして、それぞれの場所に陣取って行動したので、敵の兵隊は大慌てに騒いで、真っ暗闇のなかで同士討ちになり、もう戦うことができないと思い逃げていきました。

こうして、ギデオンたちは、イスラエルの人々をミディアン人やアマレク人から守ったのです。これは、神様が共におられて助けてくださったのです。神様は、人々が苦しむ時、こうして助ける人をおたてくださり、ご自分が御力をもって助けてくださるのです。わたしたちはこの神様に信頼してお従いいたしましょう。

〈いのり〉

困っている時にわたしたちを助けてくださる憐れみ深い神様。どうかわたしたちが困ってどうしたらよいかわからないとき、わたしたちを助けてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

ヨシュアの死後、民を指導した士師12人の内の一人ギデオンの信仰を知り、子供達を取り巻く知識中心、力の支配の環境の中で何が一番大切かを学ぶ。

〈展開例〉

今日は士師記の中のヨシュアの後を継いだ指導者(12人の内の)ギデオンの勉強です。神様の導きでエリコを攻略しカナンに住めるようになったイスラエルでしたが、すぐそのことを忘れ、偶像礼拝に染まりました。人間は直ぐに悪いことを始めますね。

そこへ隣国が侵入して来ました。ミデアン人です。この時神様に召されたのがギデオンです。今日の説教からそのことを復習しましょう。

先週に続いて3択問題です。

1. ミデアン人の侵入に備えて神様はギデオンを召されました。どんな人でしたか。
a: 力の強い勇者 b: 知恵のある学者
c: どちらかと言うと気の小さい普通の人
2. ギデオンは主の使いに会いました。主の使いの言葉にどう答えたのでしょうか。
a: OK、まかしておいて下さい。
b: 私は最も小さい貧弱な者です。
c: 私に力を下さい。
3. 主の使いはギデオンに「恐れるな私が共にいる。」と言い、ギデオンはその証拠を見ました。それからギデオンが最初にしたことは何でしょうか。
a: バアルとアシュラ像ををとりこわし、偶像礼拝をやめる。
b: 戦争の準備をする。

c: ミデアン人と戦わない交渉をした。

4. イスラエルの人々はそれでどうしましたか

a: ギデオンを殺そうとした

b: ギデオンを見直した。

c: 無視した。

5. ギデオンを中心にイスラエルの兵士が集まりました。いよいよ戦いです。集まったイスラエルの軍の数は3万2千人。一方ミデアン人は13万5千人。イスラエルにとって不利な戦況です。神様はギデオンにどうせよと言われましたか。

a: 3万2千人では足りない、兵を増やしなさい。

b: 負けそうだから戦争は止めなさい。

c: 怖がっている兵を帰らせなさい。

この時、1万人の兵が残り、更に水辺でのテストで300人が残された記事は、ギデオンの精鋭として説教でも語られるので簡単に復習し、なぜ300人で勝てたのか、物理的状況を越える神様の作戦を理解するように導いてください。この時のギデオンの考えや作戦計画について、何も記されていないことに注意。聖書地図を見て、戦場となったヨルダン川の東地方エンハドルやモレの丘(標高500m余)なども調べておきたい。

〈祈り〉

※生徒に祈らせてもよい。

天の神様。今日学んだギデオンの活躍の中で、人間の知恵や力が小さなことを分らせてください。どんな時にも神様のお力を信じて進めるように導いて下さい。イエス・キリストの聖名によってお祈りします。

〈ねらい〉

勝利は人の力でなく、主が与えたもうことを知る。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えるよう無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださいと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお使いくださいと思います。

Q. 神様はギデオンと共にミディアン人と戦う民の数を二度にわたって減らされました。ただでさえミディアン人の数がまさっていたのに、神様は何故このようなことをおっしゃったのでしょうか？

→「渡せば、イスラエルはわたしに向かって心がおごり、自分の手で救いを勝ち取ったと言うであろう。」(2節) ためであった。勝利がただイスラエルの神、主の御力によることを明らかにするために、このようにされたのである。

Q. ギデオンの精兵300人の勝利は何を教えて

いますか？

→勝利をもたらすのは兵の数、人間の力ではなく、主の御力であること。

Q. 大勝利をおさめたギデオンでしたが、彼は本来どのような人物だったのでしょうか？

→「ギデオンは、ミディアン人に奪われるのを免れるため、酒ぶねの中で小麦を打っていた。」(士師6:11) 彼はとてもミディアンの脅威と戦えるはずのない臆病な小心者であった。彼が勝利できたのは、ただ「わたしがあなたを遣わすのではないか。」(14節) との主の派遣と、『わたしがあなたと共にいるから、あなたはミディアン人をあたかも一人の人を倒すように打ち倒すことができる。』(16節) ことによったのである。

Q. イスラエルの民は、神様が敵の手から救い出してくださったこの勝利の日を「ミディアンの日」と呼んで長く記憶しました。この勝利は私達とどのような関係がありますか？

→「ミディアンの日のように」(イザヤ9:3) 神様が劇的に介入されたひとりのみどりごイエス様の誕生とその王としての御支配によって、私達も主が勝利を与えてくださることを期待できる者とされた。

Q. 「あなたのその力をもって行くがよい。」(士師6:14) と主は私達におっしゃってくださいます。主の御手の中で私達の小さな力と知恵が神様のご計画のために豊かに用いられると聖書は教えています。だったら、あと必要なものは何でしょう？

→このお方を信頼して、委ねる信仰。

4. お祈り

神様に委ねる信仰が強められるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

カナンでの王制の確立までの約300年間、民は背信を繰り返して危機に陥ったが、その度に神は士師を起こされて民を救った。そして、12人の士師の最後に登場したのがサムソンである。

16章は、ペリシテに捕らえられたサムソンが最後にもう一度力を発揮して死ぬ場面である。サムソンは母の胎に宿る前から、「ペリシテ人の手からイスラエルを解き放つ救いの先駆者となろう」(13:5)と予告されていた。また、彼の父マノアの前に現れた主の御使いは自らの名を「不思議」(13:18)と言った。これらのことがすでに、サムソンという型破りな士師の活躍の根拠と方法を予言的に物語っている。

(1) サムソンの強さと弱さ (16:1-5)

サムソンは大変な怪力の持ち主で、獅子を裂いたこと(14:6)、多くの者を打ち殺したこと(14:19, 15:15)、ジャッカルを300匹捕らえたこと(15:4)などがあったが、その強さをガザでも見せつけた(16:3)。

しかし、同時にサムソンには際だつ弱さもあった。女性に対する弱さである。すでにペリシテ人であるティムナの女性にひかれるという経験があったが(14:1)、さらに敵地ガザで遊女にひかれ、またデリラという女を愛してしまうことになった。このデリラが、サムソンの怪力の秘密を聞き出すことになる。

(2) サムソンの失敗 (16:6-22)

デリラは三回にわたってサムソンの怪力の秘密を聞き出そうとするが、その度にサムソンはうそを教える(16:7, 16:11, 16:13)。同じことの繰り返しの中で、サムソンはデリラのねらいに気付いてもよいようなものであるが、しつこく迫るデリラについて真実を明かしてしまう。ティムナの女性になぞの意味を明かしてしまった経験(14:17)の教訓は生かされなかった。

サムソンは、髪の毛を切ると力が抜け、弱くなることをデリラに教えた。これは、髪の毛そのものに特別な力があったというよりも、ナジル人(新共同訳聖書付録の用語解説を参照)としてささげられた者として髪の毛は神の力のしるしであったということである。サムソンの力は、主が共におられることから来るものであった。サムソンは眠っている間にペリシテ人に髪の毛を切られてしまうが、そのとき「主が彼を離れられた」(16:20)。力を失ったサムソンは、目をえぐりだされて牢屋に入れられてしまう。

(3) サムソンの祈りと最後 (16:23-31)

サムソンは、喜び祝うペリシテ人の見せ物とされたが、その惨めさの中で、自らの強さも弱さも脱ぎ捨てて、ついに神に立ち返ることになる(16:28)。

髪が伸び始めていた(16:22)サムソンは、再び力を回復し、建物を支えていた真ん中の二本の柱を押した。すると建物は崩れ、サムソンは自らの死をもって多くのペリシテ人を殺した。「彼がその死をもって殺した者は、生きている間に殺した者より多かった」(16:30)とは、ただ数の問題という以上に、この死によってなした働きが敵を打つ士師としてのサムソンの最も大きな働きであったことを示している。この働きが祈り(16:28)の後になされたことが、サムソンの怪力の本当の源を明らかにしている。

サムソンはいわゆる模範的な信者ではなかったかもしれない。しかしそれだけに、彼の力が用いられたのは、ひとえに主の選びと恵みのゆえであったことが明らかとなる。そして、死をもって大きな働きをなしたこのサムソンの姿が、十字架の主イエスの姿と重なり合うのは、まさに「不思議」である。(石原知弘)

テキスト 士師記16章
参照カテキズム 子どもカテキズム問11, 13, 76

〔単元のねらい〕

先週に続いて士師物語である。ギデオンに比べ、いっそう型破りなサムソンの物語は、子ども達の心をとらえて離さないでしょう。そこで湧き起こってくる、神の自在な力と不思議な導きに対するすなおな「驚き」を大切にしておあげていただきたい。そのためにまず語るものが本当に驚いていただきたい。思いを超えた神の御業への驚きがないところに、神への真実の畏れと信頼が生まれることもないでしょう。また説教では、サムソンの悔い改めに至る心の動きをやや敷衍してみた。このサムソンの祈りに焦点をしばって説教を展開してみるのも、このテキストの異なる輝きを引き出す有益な方法かもしれません。

「愚かなサムソン」

先週はギデオンと300人の勇士によってメディアン人の大軍を追い払ったお話を聞きました。イスラエルの人々はこの出来事を通して、改めて神様の人々への愛の深さと、そのお力の偉大さを知って、神様に従う歩みを始めました。でもまたすぐに道を踏み外してしまって、主の目に悪とされることを行ってしまうのが、罪人の悲しいところです（士師13：1）。そんな彼らに対して神様はペリシテ人という強い民族を起こして、彼らがイスラエルを苦しめるのを、40年の間黙って見ておられました。しかし主なる神様はイスラエルを見捨てたわけではありません。やがてまた彼らのために、サムソンという若者を士師としてお立てになって、ペリシテ人に対抗する勇気を与えられました。そしてサムソンに与えられたのは、ライオンをも手で引き裂く怪力でありました。

彼はその怪力に物を言わせて、だれはばかすることなく自由奔放に行動しました。彼は怒りっぽい性格で、とっても乱暴者でしたので、すぐにペリシテ人と喧嘩になっては、次々と殴り殺してしまいます。神様にいただいたその怪力を、そうやって自分のうっぷんを晴らすためだけに使っていたサムソンです。女にもだらしなくて、本当に問題ばかり起こすので、イスラエルの人たちの中にも

迷惑に思う人はいたのです（士師15：9以下）。

さてそのように「私に勝てるものなどいるのか」とさんざんいばっていたサムソンですが、やられっぱなしのペリシテ人たちはある策略を思いついて、サムソンの愛していたデリラという女性に近づきました。彼らはデリラに言いました。「サムソンをうまくだまして、あの怪力の秘密を聞き出してくれ。そうしたらお金をたくさんあげよう。」

そこでデリラは甘えた声でサムソンにたずねました。「あなたの怪力の秘密を私だけにこっそり教えて下さいな。」サムソンは答えます。「新しい弓の弦7本で縛ればいい。そうすれば弱くなって普通の男のようになってしまうよ。」でもこれは上手なうそでした。デリラはサムソンの言葉どおりにしたのに、サムソンはそれを簡単にちぎって脱出してしまったのです。

デリラは怒って言いました。「あなたはうそをついたのね。本当のことを教えて下さい。」サムソンは答えました。「まだ使ったことのない新しい縄で縛ればいいよ。」しかしこれも効果はなく、サムソンは簡単に縄を断ち切ってしまいました。「またうそをついたのね」とデリラは怒ります。そしてまたサムソンはだまします。「長い髪の毛

を機織りで織り込めばいいのだよ。」デリラはまんまとだまされます。こうして三回もだまし合いが続きました。

とうとうデリラは真っ赤になって怒り出し、「あなたは私を愛していないのね」と言い出しました。そして「本当に愛しているなら秘密を教えて」と毎日しつこくたずねるのです。サムソンはもううんざりしてしまって、とうとう秘密を打ち明けてしまいました。「私は生まれる前から神様に身をささげているナジル人だ。その印に、生まれてから一度も髪を切ったことが無い。実はこの髪の毛が秘密の元なのだ。もし髪の毛を剃られてしまったら、私の力は抜けてしまって、普通の人のように弱くなってしまう。」

こうしてついにデリラはだまし合いに勝利しました。さあこうなったら急がなきゃ。早速デリラはペリシテ人たちをこっそりと呼び出しました。そしてひざ枕にサムソンを眠らせ、「ふふふ、よく眠ってるわ」と確認して、彼の長い髪の毛七房を、スパッとかみそりで剃ってしまいました。そうして大声で叫びました。「サムソン、ペリシテ人があなたに!!!」するとサムソンは飛び起きて、「よし、ひと暴れしてくるぜ」といつものように飛び出していきます。しかし彼の頭にはもう髪が無い。だから主なる神様の力はもう彼から離れてしまっているのです。でもサムソンは気付かない……。あわれサムソンはペリシテ人に捕らえられ、目をえぐり出されてしまいました。そして奴隷として連れて行かれ、牢屋でうすをひかされました。

さてペリシテ人たちは大喜びで、彼らが拝んでいる偶像の前に盛大ないけにえをささげて、「我らの神様が、につっきサムソンを渡してくださった」と大騒ぎ。そして「サムソンをここに呼んで見世物にしてやろう」と言い出し、3000人も

人々が集まっている家で、サムソンは大いに笑いものにされてしまいました。しかしその時、人々は気付かなかったのです。サムソンの髪の毛が、もうすでに伸び始めていたことを。

目の見えないサムソンは言いました。「私を引いて行って、この家を支えている太い柱につかまらせてほしい。」そうして両の手を柱にかけると、サムソンは心からの祈りを神様にささげました。「神様、私は愚かでした。どうか赦してください。私を思い起こしてください。そしてどうかもう一度だけ、私に力を与えてください。」自分の怪力に頼ってばかりで、それを神様から与えられた賜物だということを忘れていたサムソンです。でもそのサムソンが、今すべての力を失って、はじめて神様の助けを求め、心から神様に頼る者になりました。そうしてはじめて、心の底からの願いをこめて神様に祈ったのです。神様はそのような祈りを聞き逃す方ではありません。

サムソンが力を込めて柱を押すと、建物は音を立てて崩れ落ち、そこにいたすべての人々は下敷きになって死んでしまいました。こうしてサムソンは自分の身を犠牲にして、多くのペリシテ人を打ち倒したのです。

本当に愚かで乱暴者のサムソンでした。しかし主なる神様は、そんな彼を士師としてお選びになる方です。そして神様は、彼の生涯を台無しにすることになった大失敗さえも用いて、イスラエルの人々をペリシテ人から救い出されます。この神様の救いのご計画は、私たちの思いをはるかに超えた、自由で型破りなものです。このご計画に従って、イエス様は十字架にかけられ、死んで、そして甦ってくださった。何よりこれが、私たちの思いを超えた驚きだと言えるでしょう。(坂井孝宏)

【今週の暗唱聖句】 イザヤ書55章9節

天が地を高く超えているように
わたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている。

〈ねらい〉

力は強いが心が弱いサムソンでしたが、最後には神様に心からお祈りをしたので、神様はサムソンの祈りを聞き入れて下さいました。サムソンのように素直なお祈りができるようになろう。

〈展開例〉

①「サムソンの力の秘密は何ですか？」

(答え)「そうだね、長い髪の毛です。」

②「力の秘密をデリラに教えたサムソンは、どのようになりましたか？」

(答え)「そうだね、サムソンは髪の毛を切られてしまいました。」

③「髪の毛を切られたサムソンはどうなりましたか？」

(答え)「そうだね、力がなくなったサムソンは、ペリシテ人に捕まり、目をえぐられて牢屋に入れられてしまいました。」

④「ペリシテ人の見せ物とされたサムソンは、最後にどうしましたか？」

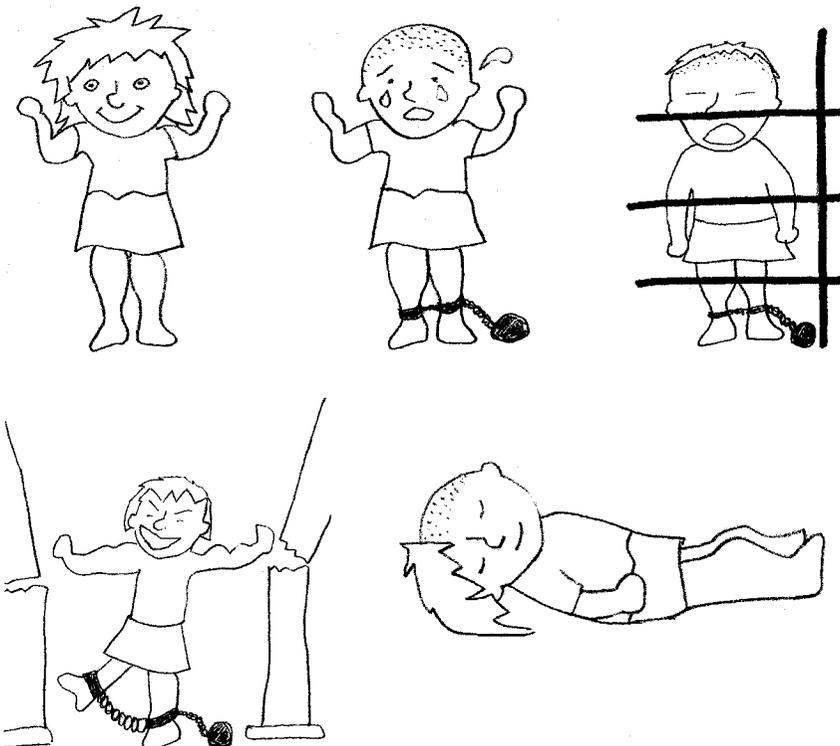
(答え)「そうだね、サムソンは心から神様にお祈りをして、神様から力を受けることができました。私たちも心からまことの神様にお祈りを捧げましょう。」

〈祈り〉

今日も教会に来ることができて感謝します。サムソンさんのように、心からお祈りができるようになって下さい。

〈やってみよう〉

色を塗って切り取り、お話の順序に合わせてカードを並べてみよう！



〈ねらい〉

サムソンの両親は、彼をナジル人として神様に捧げた。神様は彼に特別に力をくださったが、粗野なサムソンは失敗を繰り返す。とうとう自分の力の出所を明かし、力を失い、ペリシテ人の虜にされたが、最後のときにもう一度神様からいただいた力によってペリシテ人を打ち、イスラエルの人々を守った。サムソンの破廉恥な性格、行動にもかかわらず、神様は彼を用いてくださったことを通して、神様はどんな人をも神様のご用にお用いくださることを学ぶ。

〈展開例〉

イスラエルの人々が神様から離れて悪を行って神様を怒らせたので、神様は偶像に仕えるペリシテ人をイスラエルの国に送って、イスラエルの人々を苦しめられた。

その頃、イスラエルの国にマノアという人がいて、あるとき主の御使いが彼らにあらわれて、子供が与えられることを告げました。また、その子は胎内にいるときからナジル人（「聖別された者」の意、民数記6：1～に詳しい）として神様にささげられているので、その子の頭にかみそりを当ててはならないと両親に命じました（士師記13章1節～5節）。こうして、サムソンには神様から特別の力が与えられていましたので、あるとき、ぶどう畑で1頭の若いライオンに出会い、ほえながら向かってきて、サムソンは手に何も持っていなかったのですが、ライオンをつかまえてやっつけてしまいました。このように強い力は、神様が彼に与えてくださったものですが、当時、イスラエルの人々を苦しめていたペリシテ人をサムソンはその力でやっつけました。

この力の強いサムソンをなんとかやっつけたいペリシテ人は、サムソンが好きだったデリラという女の人を味方にして、サムソンの力を奪うにはどうしたらよいかをサムソンに聞くように頼みました。サムソンは「乾いていない新しい弓弦七本で縛ればいい。そうすればわたしは弱くなり、普通の人のようになってしまう」とデリラに言いま

した。これを聞いたデリラはさっそくペリシテ人に伝えたので、彼らはまだ乾いていない新しい弓弦をデリラのところに持ってきて、それで眠っているサムソンを縛りました。そして奥の部屋には待ち伏せる者を置いて、彼女はサムソンに「サムソン！ ペリシテ人があなたに！」とサムソンを起しました。ところが目を覚ましたサムソンはその弓弦を簡単に切ってしまったのです。デリラは別の日にまたサムソンに聞きました。するとサムソンは、「まだ一度も使ったことのない新しい縄で縛ればわたしは弱くなる」と言いました。デリラはそうしましたが、目を覚ましたサムソンはその縄も切ってしまいました。デリラは今度も失敗だったと知ると、またサムソンに尋ねました。こんどはサムソンはこう言いました。「わたしの髪の毛七房を機の縦糸とともに織り込めばいいのだ」と言いました。さあ、今度は本当でしょうか？ いやいや、やっぱり今度もサムソンはそれを簡単に引き抜いてしまったのです。でも、どうでしょう。こんどの場合サムソンは「わたしの髪」と言っています。本当のことにだいぶ近づいてきたとは思いませんか。そうなんです。サムソンはとうとう4回目になってデリラに本当のことを言うてしまうのです。お父さんとお母さんが神様と約束して守ってきた大事な髪の毛をそってしまえばあの怪力は取り去られることを白状してしまうのです。デリラはサムソンが寝ている間にその髪の毛をそりました。そして「サムソン！ ペリシテ人があなたに！」とサムソンを起こしました。サムソンは「いつものように出て行って暴れてくる」と言いました。でももうあの力は彼から取り去られていたのです。弱くなってしまったサムソンはペリシテ人に捕まえられました。でもサムソンは、最後にもう一度神様から力をいただいて、ペリシテ人が大勢いた建物のなかで柱を壊して屋根を落として多くのペリシテ人をやっつけたのです。

〈いのり〉

神様からいただいた力を神様のご用に使うことができますように。アーメン。

〈ねらい〉

先週に続き士師「サムソン」の信仰について学ぶ。ナジルびととして特別な誓願のもとに生まれたサムソンには型破りの怪力が与えられていた。それを神のために用いるか、あるいはイスラエルの為に用いるか、聖書はむしろ自分勝手にそれを用い誓願を裏切ったサムソンを描いているが、愛人デリラに裏切られてペリシテ人に捕らえられ両眼をえぐられた時、神に立ち返ったサムソンを信仰の人として記している。人間は誰も間違いを犯すが、最後に神に立ち返る者が救われることを学びたい。

〈展開例〉

- サムソンはライオンを引き裂くほどの力を持っていました。どうしてそんな力があつたのでしょうか。考えてみましょう。
 - 神様から与えられた。
 - 小さい時から運動をしていた。
 - 生まれつきの身体。
 (ナジルびとのことにふれてもよい)
- サムソンはその力を何に使っていましたか。
 - 神様のために使っていた。
 - 自分のために使っていた。
 - イスラエルの人びとの為につかっていた。
- そんなサムソンに彼女が出来ました。デリラと言う名前です。どんな人でしたか。
 - 信仰のあつたイスラエル人。
 - ペリシテ人で可愛い人。
 - イスラエル人できれいな人。
 (デリラとはおもわせぶりの意味)
- ペリシテ人はデリラにサムソンの怪力の秘密を探らせました。「わかったら沢山のお金を出す」と言いました(250万円ぐらい)。サムソンは怪力の秘密を明かしましたか。
 - すぐ明かした。
 - 直ぐには明かさなかった。
- そしてサムソンはデリラに何と言いましたか。

a：力が出るものを食べているから。食べるのをやめたら弱くなる。

b：弓の弦七本で縛ればよい。

c：強い酒を飲ませればよい。

6. 嘘を言ったサムソンは二番目に何と言いましたか。

a：一度も使ったことのない新しい縄で縛る。

b：一度も使ったことのない新しい毛糸で縛る。

c：一度も使ったことのない新しい絹糸で縛る。

7. 嘘を言ったサムソンは三番目にも嘘をいいました。何と言いましたか。

答は16：13ですが省略。

四度目にあまりにしつこいデリラの質問に負けて本当のことを話してしまいます。本当の秘密とは……

a：アキレス腱。

b：頭の毛。

c：頭のはげ

デリラに負けたサムソンはどうなったでしょうか(16：21を読ませる)。

捕まえられ両眼をえぐられ、大喜びのペリシテ人に見せ物にされたサムソンですが、最後にしたことは何でしょうか。

28節のサムソンの祈り(キーワード)を中心に聖書を読ませたい。そして士師としての最後の奉仕を死をもって捧げたことに注目させたい。教師は一方的に語らず生徒との会話の中で進めてください。

〈祈り〉

※生徒に祈らせてもよい。

天の神様。今日はサムソンの信仰について学びました。私たちも何度も失敗を繰り返します。こんな私たちを導いてください。イエスさまの聖名によってお祈りします。

〈ねらい〉

主の不思議な御業を仰ぐ。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 怪力サムソンは向かうところ敵なしでしたが、彼には一つの弱点がありました。それは何でしょうか？

→女性に対する弱さ。自らの立場を忘れて三人の女性にひかれた結果、どの場合も命の危機にさらされた。

Q. サムソンはデリラを愛していました。人を愛することは素晴らしいことです。ただ彼女に対して、サムソンはどのような態度を取るべきだったでしょうか？

→主を第一とする決断。デリラの愛を失うことを恐れて三度も嘘をついた挙句、敵であるペリシテ人に秘密を打ち明けてしまった。

Q. サムソンが受けた仕打ちは自業自得な所がありますが、最後に悔い改め、「彼がその死をもって殺した者は、生きている間に殺した者より多かった。」(30節) という程の敵に

対する大勝利をもたらしました。この事は、私達の力の源がどこにあると教えているでしょうか？

→主にこそ私達の力があると教える。そもそもサムソンの怪力は、ナジル人として主にささげられた者として、主が共におられることから来るものであった。

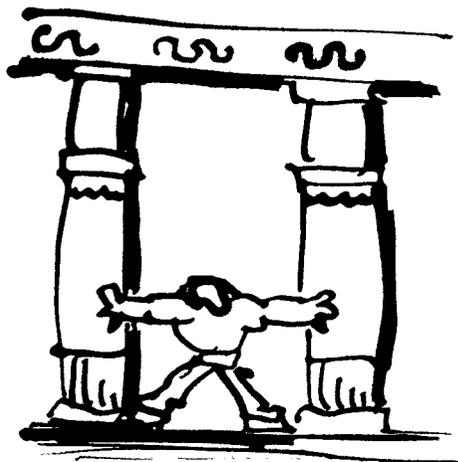
Q. 救助者サムソンの誕生を予告した主の御使いは自分の名前を「不思議」(13:18)と言いましたが、大変な力と共に愚かさをも持った士師サムソンと彼の死は、人の思いを超えた不思議な神様の御業でした。聖書の中で思い当たるものが他にあれば挙げてください。

→主の天使が「この子は自分の民を罪から救うからである。」(マタイ1:21)と予告したイエス様の十字架の死。

4. お祈り

主を第一とした信仰生活が送れるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。



わたしの神なる主よ。
わたしを思い起こしてください。

〈イスラエル人とモアブ人〉

イスラエル人とモアブ人との関係は、「主はわたしに言われた。『モアブを敵とし、彼らに戦いを挑んではならない。わたしはその土地を領地としてあなたには与えない。アルの町は既にロトの子孫に領地として与えた。——』」（申命記2：9、参照：創世記19：36, 37）と語られ、アブラハムとロト以来のイスラエルとモアブの親しい関係が示されている。

その反面、出エジプト時にモアブの平野に宿営したイスラエルに対して、モアブの王バラクが、イスラエルを呪う言葉を語った故に（民数記22：1-6）、「アンモン人とモアブ人は主の会衆に加わることができない。十代目になっても、決して主の会衆に加わることはできない」（申命記23：3）と、偶像礼拝への誘惑があることから、注意も促している。

〈イスラエル人とモアブ人の結婚〉

ルツは、オルバと共にモアブの女（1：4）であり、イスラエル人であるナオミからすれば異邦人であった。イスラエル人が異邦人と結婚することは、バビロン補囚以後は、異教的教えに汚染されないよう厳しくなっていくが、それ以前は、聖書において禁止されることはなかった。特に上記に記すとおり、イスラエルとモアブは親しい関係があったことより、モアブの地に身を寄せていたエリメレク、ナオミ一家からすれば、息子たちがモアブの女と結婚することは、無理がなかったかと思われる。

〈ナオミの決断①—帰国〉

ナオミの夫エリメレクが死に（3）、後に息子たち（マフロン、キルヨン）も相次いで死に、最後

にナオミと嫁たちのみが残される（3, 5）。

特にナオミにとっては、子も亡くなり、孫もないことにより、深い悲しみと同時に、社会的な死を宣告されたのと同然であった。そのため、ナオミは、心機一転するために、住み慣れた場所であるモアブを離れ、ユダに帰ろうと決断する（7）。

しかしこのナオミの決断の背景は、主がその民を顧みられた（6）からであり、ナオミの決断により、ルツがボアズと結婚し、異邦人であるルツがアブラハムの系図に組み込まれていくという、主の摂理があることを忘れてはならない（参照：マタイ1：5）。

〈ナオミの決断②—離別〉

一方ナオミは、二人の嫁の事を思い、二人が再婚し幸せになるようにと、離別を決断する（8, 9）。それは、ナオミには他に息子がなく、二人の夫となる者がいなかったからであり（11-13、参照：申命記25：5）、イスラエルにあって異邦人である二人の嫁が再婚することの困難さも、容易に察知したためであり、これがナオミの信仰から出てくる愛である。

〈ルツの決断〉

オルバはナオミと別れの口づけをして別れていくが、ルツは離れなかった（14）。ナオミは主なる神さまに対する信仰によって物事を判断し、行動していくが、ルツ自身もまた主なる神さまに対する信仰による決断を行ったのである（16）。旧約の時代だからという理由で、異邦人に対する救いが拒絶されていたわけではなく、主への信仰を告白する者に対する救いが約束され、神の救いの歴史の中においても、ルツに重要な位置が与えられていくのである（マタイ1：5）。（辻 幸宏）

テキスト ルツ記1章
参照カテキズム 子どもカテキズム問4, 13

〔単元のねらい〕

ルツ記は信仰に生きる慎ましい人々の美しい物語です。ナオミ、ルツ、ボアズそれぞれの優しい言葉と振る舞いを、町の人々のコーラスが取り囲む様子は旧約聖書の雅歌をも彷彿とさせます。それだけに、これを教理の説明だけに還元してしまうのは惜しい気がしますし、また、上手に語り直すのも至難の業と感ずるかもしれません。主題は「誠実な愛^{ヘセド}」です。そして、神のヘセドと人のヘセドが美しく調和したストーリーの終りに、メシア（油注がれた者）の誕生という希望の光が見えています。神への信仰に忠実であることと、隣人への愛に生きることに、善きものを与える神の摂理を私たちは信じていくことができます。サムエル記上の始まりにあるハンナとエルカナの物語を同時に想い起すとよいでしょう。また、マルコ福音書7章24節以下にある話の前景として読むこともできます。モアブ人であったルツの異邦人性は本書の重要な主張の一つです。説教にあまり多くの要素を組み込むことはできませんから、物語を生かしながらメッセージを一点に絞ってお話したいと思います。

「神さまがくれた大切なひと」

今日はダビデ王の先祖のお話をします。ダビデのお祖父さんが生まれた時のことです。ユダヤのベツレヘムという町に、ナオミさんの家族が住んでいました。ベツレヘムはイエスさまがお生まれになった町だから、みんなも知ってるね。イエスさまが生まれるよりずっと前のこと。ナオミさんには夫と二人の男の子がいました。ある時、飢饉が起って、国中から食べるものがなくなってしまった。そこで、ナオミさんの家族は、お隣の国のモアブに引っ越しました。モアブの国には聖書の神さまを知らない人たちが住んでいたけれども、しょうがない。ナオミさんたちは、イスラエルの神さまのことを忘れませんでした。

モアブでの暮らしはナオミさんには辛いものとなりました。何故かといえば、まず、夫のエリメレクが死んでしまいました。そして、二人の息子たちもモアブにいる内に続けて死んでしまったのです。なんで神さまはわたしにそんなひどいことをなさるんだろう。大切な家族を失ってナオミさんはとても悲しみました。

でも、ナオミさんは独りぼっちではなかった。二人の息子はそれぞれモアブの女の人と結婚して

いました。だから、お父さんが死んだ後は、家族五人で暮らしたのです。お嫁さんたちの名前は、オルパさんとルツさんといいました。二人の息子が死んだとき、ナオミさんとオルパさんとルツさんと、女の人ばかりが三人取り残されたのです。今では女の人でも立派に働きますけれども、昔はそうじゃない。男の人がいなければちゃんと暮らしていけなかった。だから、ナオミさんは、二人のお嫁さんたちに、もうあなたたちは自分の生まれた町に帰りなさい、といいました。そうすれば、お家の人たちが助けてくれます。オルパさんは、初めはナオミさんと別れるのを嫌がったけれども、最後は自分の故郷に帰って行きました。けれども、ルツさんは違いました。どうしても嫌だといって、ナオミさんと一緒にいたいといって、残ったのです。お家に帰れば、また自分の家族と一緒に暮らせるし、新しく素敵な人を見つけて結婚できるかも知れない。でも、ルツさんは、それよりもナオミさんといたかった。そこで、ナオミさんは独りぼっちじゃなかったのです。二人とも夫を亡くして悲しかったけれども、手を取り合って一緒にベツレヘムへ帰りました。もう、飢饉は終わっ

ていたからです。

モアブでナオミさんが暮らしたのは10年間でした。その間に、ナオミさんは家族を失って、財産も無くして、すっかり貧乏になってしまいました。苦しいことや悲しいことが重なって、神さまの罰を受けたようでした。ただ一つの慰めは、そこにルツさんがいたことです。

その不思議なモアブの娘は、ナオミさんを心から慕っていました。そしてルツさんはナオミさんが信じる神さまの名前を呼びました。ナオミさんから教わった神さまを信じるようになっていたのです。二人は大事なものをたくさん失いました。けれども、神さまはまだ二人を見捨ててはいません。ナオミさんにはルツさんを残してくれました。ルツさんは一生懸命、年をとったナオミさんを本当のお母さんのように世話をします。ルツさんにとってはベツレヘムは外国です。それでも、怖がらずについていきました。こんな人はなかなかいません。ルツさんは神さまがナオミさんのために送ってくれた大切な人でした。

ルツさんにとってもナオミさんは大切な人です。ルツさんも大事なものを無くしました。ご主人を亡くして、そして故郷を捨てて、ナオミさんについて来たのです。今大切なのは、お母さんになってくれたナオミさんと、そして、ナオミさんが教えてくれた本当の神さまです。何よりも大切

なもの、ルツさんもまた、ナオミさんからいただきました。

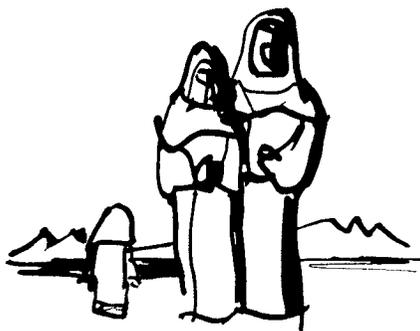
二人の苦しい経験は、神さまの罰に思えるかもしれせん。わたしたちの周りにも悲しい出来事はたくさん起ります。どうして神さまがそんなことをなさるのだろう、と思います。けれども、私たちはすべてを失ったわけではありません。そこには、神さまが送ってくださった人がいます。互いに助け合える誰かがいつも近くにいるのです。悲しいときはそれが分からないほど心が暗くなってしまうのですけれども、神さまを知る時に、それが分かります。神さまは愛する家族を、私たちの近くに作ってくださるお方なのです。

神さまは私たちに罰を与えるために、悲しいことを引き起こされるとは限りません。神さまに背くならば罰があるかも知れません。でも、神さまには、私たちの分からない、神さまのお考えがあります。神さまがルツさんをナオミさんのもとに遣わしたのは、ダビデ王をイスラエルにくださるためでした。そんなこと、ナオミさんの周りでは誰も知りません。ただ、神さまだけがご存知だったのです。神さまの心には良いことしかありません。その神さまの心を信じるならば、私たちはどんなときも、近くにいる人たちを大切にしながら、神さまの良いことが現れるのを待つことができます。(牧野信成)

[今週の暗唱聖句]

ローマの信徒への手紙12章15節

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。



マラ（苦い）と呼んでください。

〈ねらい〉

異境の地で夫も息子もなくし、数々の試練に遭いながらも主を信じ続けたナオミに、神様はまことの神様を信じる従順なルツを与えられた。神様は、主を信じ、主の前に誠実に生きる者を守り、幸せへと導いて下さることを感謝しよう。

〈展開例〉

「ナオミさんはとても優しい人です。息子が亡くなった後、お嫁さんのルツさんに自分のお母さんの所へ帰るように言いました。ルツさんは偶像礼拝するモアブ人で、ナオミさんはイスラエル人です。ルツさんは、ナオミさんの信じる、まことの神様を信じていましたので、ナオミさんについて行きました。ナオミさんとルツさんはとても仲

良しです。ナオミさんもルツさんも、とても悲しいことが起こりましたが、いつもまことの神様を信じて祈りました。私たちにも悲しいことや辛いことがあります。神様はいつも助けて下さいます。神様は、ナオミさんとルツさんにたくさんの恵みを与えて下さいました。ルツさんの名前は、マタイによる福音書1章15節の、イエス様の系図の中に出てきますよ。神様は、神様を心から信じて歩む人に、不思議な力で恵みを与えて下さいます。

〈祈り〉

神様、いつも守って下さって、ありがとうございます。ナオミさんやルツさんのように、優しい心になれるように助けて下さい。

〈やってみよう〉

今日は母の日です。カーネーションの貼り絵をしよう。

準備する物

台紙の画用紙（白）、色紙（赤、緑など）、はさみ、のり



☆出来上がったらメッセージを書いて、お母さんにあげましょう。
(お母さんのいない子がいたら、配慮して下さい。)

〈ねらい〉

イスラエルが異邦の民からの攻撃と自国の霊的退廃や飢饉という苦しみの中であって、このルツ記はとても美しい情景を私達に与えてくれます。不幸な貧しい家庭の中に信仰に基づくやさしい思いやりが息づくのを感じ、神様は小さな家庭をも深く愛して下さることを生徒に伝えたい。今日の「母の日」にもふさわしい箇所です。

〈展開例〉

エリメレクとそのやさしい奥さんのナオミは、二人の男の子を連れて、飢饉を逃れユダのベツレヘムからモアブに移ってきました。そこでしばらく生活しているうちにエリメレクは亡くなりました。ナオミはとても悲しみました。まだ母の世話をしてくれる二人の息子がいましたので慰められていました。やがてこの二人の息子たちは土地の娘さんと結婚します。名前はルツとオルパです。この二人は、そのときまだ本当の神様のことを知りませんでした。ナオミの家で暮らしているうちに真の神様を知るようになりました。

さて10年ほどたって、大変なことが起こりました。大事な二人の息子達も、お父さんと同じように死んでしまったのです。気の毒なこの家庭は女の人達だけが残されてしまったのです。そんなとき、ナオミは自分の生まれ故郷では飢饉が終わったことを聞きましたので、故郷に帰ることにしました。そこには自分の幼馴染や親戚の人もいます。それらの人達がとても懐かしくなりました。そこである日、ナオミは二人に自分はユダのベツレヘムにもどる決心をしたことを話しました。二人の亡くなった息子のお嫁さんのルツとオルパはお母さんといっしょに行きたいと言い、三人はベツレヘムに向かって旅を始めましたが、しばらく旅をした時ナオミは二人に言いました。「ここまでいっしょにきてくれてありがとう。さあ、あなたがたは自分の生まれた家に帰りなさい。あなたがたが私の二人の息子や私にしてくれた親切をとても嬉しく思います。神様があなたがたを祝福して新しい人と結婚できるようにして下さるよう

に」と言いました。二人は泣いて言いました。「いいえ、お母さん、わたしたちも一緒にお母さんの国に帰ります。」何とやさしいお嫁さん達でしょう。しかし、ナオミは言いました。「それはいけません。あなたがたは自分の国に帰りなさい。神様がわたしたちをこのようになされたことをわたしはとてもつらく思います。どうぞ自分の国に戻り、また新しい家庭を作って幸せになるように。」これを聞いて二人は泣き、オルパはやがて別れの口づけをしましたが、ルツはナオミにすがりついて離れず、「あなたを捨てあなたを離れて帰ることを、わたしに勧めないでください。わたしはあなたの行かれる所へ行き、お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる場所でわたしも死に、そこに葬られたいのです。死んでお別れするならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたら、主よ、どうか私を幾重にも罰してください。」と言うのでした。ルツがほんとうに異教の生活から離れて神様に従うイスラエル人になりたがっていることを知って、ナオミはもうルツに帰るように言うことを止め、二人は旅を続けてヨルダン川を渡り、ベツレヘムに着きました。

今日5月の第二日曜日は「母の日」です。この日はお母さんに感謝を表す日です。今日、聖書のルツ記で学んだことは、今日の「母の日」にとってもふさわしいところです。ルツさんにとってナオミさんは本当のお母さんではなかったのですが、神様が与えて下さったナオミさんに最後までついて行きました。神様は、その後ルツさんを幸福な結婚に導き、子供も与えてくださいました。その子はダビデのおじいさんなのです。やがて時がたつとこの家系から救い主イエスがお生まれになるのです。

〈いのり〉

神様、ルツのようなやさしい心でお母さん愛することができるよう。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈ねらい〉

善きものを与えてくださる神の摂理を信じ
て生きる。

あっても、いつも神さまが心の真ん中にい
らっしゃった、いつも神さまに頼って、神さ
まの御心に生きることを望んでいたことがわ
かります。

〈展開例〉

1. ナオミには移り住んだモアブの土地で夫と二
人の息子を失うという悲惨なことが起こりまし
た。そんな中でナオミとルツの決断と信仰を
聖書のみ言葉から見てみましょう。

☆ナオミの決断と信仰

大きな悲しみの中で二人の義理の娘をそれぞれ
の生まれた土地に帰らせることを決め、娘たちの
ために神の祝福を願う。

8、9節「どうか主がそれを報い、あなたたち
に慈しみを垂れてくださいますように。どうか主
がそれぞれに新しい嫁ぎ先を与え、あなたたちが
安らぎを得られますように。」

☆ルツの決断と信仰

ルツは故郷に帰り再婚を勧めるナオミの言葉を
受け入れず、ナオミと一緒にベツレヘムについて
いくことを決断した。

16節「あなたの神はわたしの神」

17節「主よ、どうか私を幾重にも罰してください」

2. なぜ、ルツはナオミと一緒にベツレヘムに行
くことを選んだのでしょうか？

→すべてを失ったナオミを一人にさせるのがか
わいそうだったから。神さまを信じ、神さま
に従って生きるナオミを心から慕っていたか
ら。と人間的な感情で考えられることもたく
さんあります。けれどもそれだけではありませ
ん。

ルツ記の中には「主が……して下さいます
ように」という表現が何度も何度も使われ
ています。ナオミやルツがどんな状況の中に

3. 人生の決断をするとき

みんなにもこれからいろんな決断をしなければ
ならない時があると思います。

どこの中学・高校に行くのか、将来どんな
職業に就くのか、誰と結婚してどんな家庭を築く
のか……。

そんな時、「神さまは一体どうすべきだと考え
ておられるのだろうか、私にどうせよと思ってお
られるのだろうか」と神さまに心を開いて、

神さまにすべてをゆだねて祈ることができたら、
それはとてもすばらしい、嬉しいことだと思います。

4. 神の摂理を信じて生きる祝福

ナオミは悲惨な出来事を「全能者がわたしをひ
どい目に合わせた」（20節）と語りました。ナオ
ミは「何故どうして自分がこんな苦しみにあわな
ければならないのか」と神を恨むのではなく、た
だ淡々とその出来事を神から与えられたものとし
て受け止めました。ナオミはどんな中にあっても
神への信頼を失いませんでした。

キルケゴールの言葉に「私に起こるどんなこと
でも、神さまに由来していることを、神さまに由
来していることはどんなことでもわたしの益とな
るだけであることを、私が考えるようにお導き下
さい」というものがあります。

ナオミのこの信仰によってナオミは悲惨な出来
事のなかでもルツというすばらしい娘が与えら
れ、神によって豊かな祝福を得ました。

〈ねらい〉

神様が与えられた信仰の絆の深さを知る。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいかと思います。

Q. 飢饉のためにモアブに移住したナオミの家族に何が起こりましたか？

→夫エリメレクが死に、二人の息子マフロンとキルヨンがモアブの女性オルパとルツを妻にめとって10年程暮らしたが、「マフロンとキルヨンの二人も死に、ナオミは夫と二人の息子に先立たれ、一人残された。」(5節)

Q. ナオミは「主がその民を顧み、食べ物をお与えになったということ」(6節)聞き、故国ユダに帰ることにしました。しかし途中で二人の嫁に対し、モアブに帰ることを勧めました。何故でしょうか？

→他の子供ができる可能性がなかったこと、イスラエルの地で異邦人が再婚することの難しさを考えたことがあるが、たった一人で生きてゆかなくてはならない孤独や困難さより、二人のためを思うナオミの信仰から出てくる愛であった。

Q. オルパは「自分の民、自分の民のもとへ帰って」(15節)行きましたが、ルツはナオミと

共にいることを選びました。人間的に考えれば、それは貧乏くじを自ら引くような愚かな行為だったでしょう。どうしてルツは踏み止まったのでしょうか？

→「あなたの民はわたしの民 あなたの神はわたしの神」(16節)という信仰に、イスラエルの神様を信ずるナオミ達との10年間に亘る生活の中で変えられていたから。その信仰で人間的には愚かと思われる選択をしたのである。

Q. ナオミは「出て行くときは、満たされていたわたしを、主はうつろにして帰らせたのです。……全能者がわたしを不幸に落とされた」(21節)と嘆きました。しかし神様は、「夫と二人の息子に先立たれ、一人残された。」(5節)と思っていたナオミに何を与えておられたのでしょうか？

→信仰をもってナオミを慕う嫁のルツを与えておられた。ナオミはそのことの恵みに十分気づいてはいないが、主は悲しみを共有し、支える者を既に送っておられた。

Q. 悲しいことや苦しいことに遭った時、神様の罰を受けていると考えてしまうことがありますか？ 神様は良いことを考えておられるのに、まだ見えないだけかもしれません。しかしその時点では、分からなくて苦しいものです。神様はそんな私達のために、共にいて支える人を送ってくださいます。それは一体誰でしょうか？ 思い起こして感謝すると共に、今、自分のために誰を神様が与えてくださっているのか、考えてみましょう。

4. お祈り

神様が与えてくださった信仰の絆の感謝。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト ルツ記2章（～4章）

〈落ち穂拾い〉

弱い者が落ち穂を拾うことを認めることは、農主の自発的な憐れみから来るものではなく、憐れみ深い主の命令であり、下記のように規定されている。「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。」（レビ記19：9－10）。そしてこの規定が、レビ記23：22、申命記24：19－21においても繰り返して語られている。つまり、罪人の集まりである人間社会にあっては、権力や地位・財力のある者たちが、全てを支配しようとする中において、主は取り残される貧しい者・寄留者・孤児・寡婦に目を向けて下さり、生きていくための必要を備えて下さる、深い憐れみをもっておられる神さまである。

〈ルツの信仰〉

一方、主によって規定されている律法といえども、その律法が守られるか否かは、その律法に従おうとする者の信仰によって左右されることとなる。従って、この憐れみを受けようとする者も、当然の権利として主張するのではなく、農主の側にも人間的な弱さがあることを理解しつつ、謙虚にこの憐れみにあずかることが必要とされた。

ルツは、異邦の民でありさらに夫を失った寡婦としての自分の立場をわきまえていた。そのことが、ルツがナオミに対して、「畑に行ってみます。だれか厚意を示してくださる方の後ろで、落ち穂を拾わせてもらいます」（2）と語る言葉に表れており、ルツの信仰者としての遜りと謙遜を理解す

ることが出来る。

〈ボアズの信仰〉

一方、農主としてのボアズはどうであったか。ボアズが農夫たちに対して「主があなたを祝福してくださいますように」と語ると、農夫たちは「主があなたを祝福してくださいますように」と返答する（4）。ここに、ボアズの主への敬虔な信仰と人々からの尊敬を見てとることが出来る。

〈神の摂理〉

ルツとボアズ、二人の信仰者が出会う。これは偶然ではない。3節の「たまたま」という訳語は、偶然と取られても仕方がないが、これまでの訳語は、「はらかずも」である。また、4節においても訳されていないが、「その時」（口語訳）・「ちょうどその時」（新改訳）と語られている。

ルツがボアズの畑に行ったことは、意図してのことではなかった。しかし、主は、御自身の救いのご計画を成し遂げるにあたり、時と場所、人を備えて下さり、落ち穂を拾いに行った異邦の女ルツが、ボアズと出会う時をお与え下さった。

この後、ボアズとルツは結婚し（4：11－12）、子どもが与えられる（4：13）。ボアズの子オベド、オベドの子エッサイ、エッサイの子ダビデであり（4：17）、ダビデの子として救い主イエス・キリストが与えられていく（マタイ1：1－6）。

ルツは、モアブ人の女として、最初の結婚において夫に先立たれ寡婦となった。しかし、主はルツを憐れみ、信仰者として救いに入れられるのみならず、ボアズとの結婚により、アブラハム、ダビデ、イエス・キリストに至る系図に名を残す祝福をお与え下さった。（辻 幸宏）

テキスト ルツ記2章（～4章）
参照カテキズム 子どもカテキズム問4, 13

〔単元のねらい〕

ナオミのために健気に振舞うルツは理想的な僕の姿をとっています。それに対するボアズも律法に忠実で憐れみに満ちたイスラエル人です。この寛大な主人のもとで異邦人女性は排斥されず、むしろその忠実さ（ヘセド）の故に称賛されます。こうして二人はイスラエルの模範的な信仰者です。この物語に支えられた理想的な信仰者像が与えられて、神の民は自分たちがどのような隣人関係を築いたら良いのか、具体的な指針が与えられます。そこにメシアを待望する人々のあるべき姿と、神が救いの御手を差し伸べられた過去の実績とが差し出されて、会衆に希望を与えるのがこの書物だと言えるでしょう。子どもたちはルツとボアズの誠実な姿を心に思い描くことで、神を信じるとはどういうことなのか、これから思い巡らす手がかりをえることができるのではないのでしょうか。

「神さまは信じる人を美しくする」

ベツレヘムに収穫の季節がやってきました。5月頃には収穫の祭りが盛大に行われます。ナオミさんとルツさんはベツレヘムに戻ってきました。けれども、二人は一文無し。ベツレヘムで一番貧しい暮らしです。そこでルツさんは畑に出かけることにしました。そうすれば、麦の穂を拾って、パンを作ることが出来るかもしれない、と思ったからです。

ルツさんがやって来たのはボアズさんの畑でした。そこでは、女の人たちが麦の刈り入れをしていました。ルツさんはその後をついて行って、こぼれ落ちた麦の穂を一つずつ拾って集めました。畑では誰もそれを咎めませんでした。何故なら、貧しい人が畑で落穂を拾うことは神さまがお許しになる、と聖書に書いてあることをみんな知っていたからです。

そこへ畑の持ち主であるボアズさんがやってきました。そして、畑で麦の穂を拾っているルツさんに目を留めました。あれは誰だね、と聞くと、ナオミさんのところにいるルツさんだと、働いている人たちが教えてくれました。そこでボアズさんは、かわいそうに思って、わざと麦の穂を落としてあげなさい、とみんなに言いました。そうして、ボアズさんの優しさのおかげで、ルツさんは

大きな袋一杯の麦をナオミさんのために持って帰ることができました。ルツさんも、ナオミさんにパンを焼いてあげたかったので、丸一日懸命でした。

驚いたことに、ボアズさんはナオミさんの親戚だったことが分かりました。ナオミさんは、ボアズさんがルツさんと結婚してくれると良いのに、と思いましたが、ルツさんは外国人でしたから、嫌われるかもしれないと思いました。ところがボアズさんはルツさんに、他の畑には行かないで、いつでも自分の畑において、と誘ってくれました。そして、いつでもルツさんのために、ボアズさんは沢山の麦を用意してくれたのです。

ルツさんは、ナオミお母さんのために、毎日一生懸命でした。町の人々もそれを知って、ルツさんを誉めました。また、ボアズさんも、ルツさんが外国人だからといって差別せず、ルツさんを誉めて、できるだけ力になってあげようと思いました。二人とも、神さまを信じて、神さまのような正しい心をもっていたのです。

ルツさんとボアズさんはどうして最後に結婚しました。ボアズさんが、ルツさんとナオミさんを引き取って一緒に暮らすことになったのです。そして二人には赤ちゃんが生まれました。元気な男

の子で、名前は「オベド」と名づけられました。神さまの「僕」という意味です。こうしてナオミさんには、初めて孫ができました。

ナオミさんはモアブにいた頃、夫と二人の息子を失うという悲しい経験をしました。神さまがわたしにひどいことをしたと嘆いていました。でも、ルツさんやボアズさんという、神さまを信じる、正しい心の人たちと出会って、その二人を通して、最後は新しい宝物、男の子の赤ちゃんを神さまからいただいたのです。神さまは、ナオミさんを見捨てたのではない。苦しい経験を通して、神さまを信じることの大切さ、そして美しさを教えてくれたのです。ナオミさんのために毎日懸命に働くルツさん、そして、やさしくて正しい人だったボアズさんという二人の信仰が実を結んで、ナオミさんを悲しみから救ったのです。

ナオミさんばかりじゃありません。イスラエルの民全体が救われることになります。生まれた赤

ちゃんのオベドはダビデのお祖父さんになった人です。もしルツさんがナオミさんを見捨ててモアブのお家に帰ってしまっていたら、赤ちゃんは生まれませんでした。また、もしボアズさんがルツさんを畑から追い出してしまっていたら、やはり赤ちゃんは生まれなかったのです。二人が神さまを信じていたから、二人は結婚してオベドが生まれ、そこからダビデが生まれることになったのです。

神さまを信じることは美しいことです。そして、神さまを信じているから希望があります。神さまは信じている人を用いて、沢山の人を救ってくださるのです。「見捨てられた」と思って悲しんでいる人々を助けてくださるのです。みんながルツさんやボアズさんのように、なることができます。神さまの憐れみは、みんなのやさしい言葉や振る舞いを通して、やってくるのです。

(牧野信成)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙8章28節

神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、
万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。



〈ねらい〉

異邦の女ルツは結婚によって、イスラエルの神を知り、その神様を信じたいと思う心が与えられました。イエス様が私たちに与えられる前に、すでに神様は私たち全ての人に希望を与えて下さいます。異邦の者であれ、(日本に住む私たちに)主は信仰者として生きるルツを通して、神様の選びと祝福があることを学びたい。

に信頼されていた人。貧しい落ち穂拾いに過ぎない、外国人であるルツに、優しく目を留めてくれました。イエス・キリストの愛を思い起こさせます。

神様の御心によって、ルツは、ボアズとの結婚によりオベドを授かったばかりでなく、イエス・キリストに至る系図に名を残す祝福を与えられました。神の愛の深さを思いたい。

〈展開例〉

先週の話の続きです。ルツさんのナオミさんへの思いやりと、献身的に仕える思い、何もかもを捨てて主に従う心。それらは良い僕の姿を表しています。ボアズさんもまた、神の人で、農夫たち

〈祈り〉

神様、どうかルツさん、ボアズさんのように、神様がいつもお守り下さっていることを信じ、周りの人にも優しくできるように導いて下さい。神様が選んで下さった恵みに感謝します。

〈やってみよう〉**落ち穂拾いをやってみよう！**

下の絵にならって、落ち穂拾いをまねてみます。中腰にならないと穂は拾えません。何時間もその姿勢でいることがどんなに大変かがわかるでしょう。人を思いやる心を育てたいです。

ぬりえ**用意する物**

下の絵を拡大コピーしたもの、色鉛筆など



〈ねらい〉

神はけって貧しい者・弱い者・生活の苦しきのなかにある者を見捨てられない御方であることを、生徒も教師も知ってほしいと願っています。聖書の学びとともに、実際の子供たちの生活の中で、そのことを分かちあえればと思います。そして憐れみ深い神がおられること、神を信じ神により頼むことは、なんとすばらしいことかを味わっていただければ幸いです。

子供たちに神が期待しておられることと、神が子供たちをも用いてくださって、ご自身のご計画を進めていかれることを知ってほしいですね。

〈展開例〉

1. ナオミとルツはどんな生活でしたか。(前回の復習)
2. 神はルツをどのようにして助けてくださいましたか。
 - ①神は困っている人のために、「落ち穂拾い」のきまりを定めておられました。(ミレーの「落ち穂拾い」の絵があれば見せる。)
 - ②優しく思慮深い信仰の人、義母のナオミを与えてくださいました。
 - ③さらに神は夫となる信仰の人ボアズを備えてくださいました。
3. ナオミとルツとボアズはどのような信仰でしたか。ナオミ→2:20、ルツ→1:16、2:11～12、ボアズ→3:13などを参考にしてください。この3人のそれぞれの働きや行い・言葉は、神への信仰から出ているものでした。
4. ルツにとって神が備えてくださったナオミとボアズに出会えたことは、本当に幸いでした。ナオミとの出会いで真の神を知り信じるようになりました。ボアズと出会い結婚へと導かれたことも神のすばらしい恵みでした。

みなさんは今までどのような出会いがありましたか。親、学校の先生や友だち、とくに教会

学校の先生や友だちと出合いました。もちろんもっともすばらしいことは、真の神を知ったことです。私たちが信じる神は私たちの天のお父様です。また神がお送りくださったイエス様を知ったこともすばらしいことですね。イエス様は私たちの救い主です。

ルツやナオミのように自分が困ったとき、あるいは友だちが困ったことにあっているとき、あなたはどうしますか。

5. 神の御計画は私たちに救い主イエス様をお与えくださったことでした。ルツ記の後の旧約聖書サムエル記上に出てくるダビデ王は、ルツとボアズの曾孫でした。そしてダビデ王の1000年後にルツとボアズ、ダビデの家系にイエス様がお生まれになったのです。このように神の救いの計画は着々と進められていきました。

〈ワーク〉

1. 神の摂理と感じた経験や、祈りが聞かれた、あるいは神の助けがあったという具体的な体験を分かち合う。
2. そして子供どうして祈りあう。
3. 今週の暗唱聖句ローマ8:28について、生徒たちといっしょに考えてほしいと思います。

〈おいのり〉

神様、私たちが思わぬ出来事にあって困ったり悲しんだりするときも、天のお父様がいつも助けてくださり、守ってくださることを感謝します。私たちのお友だちのなかに、いま悲しんでいる人がいたら、その人を助けてください。



〈ねらい〉

神を信じて、神に従って生きるルツとボアズの姿から神が与えてくださる豊かな祝福を考える。

〈展開例〉**1. 憐れみ深い神の教え**

農場で農夫たちが落とした穂を拾うことは許された行為でした。

レビ記9章9・10節を読んでみましょう。

「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である」

ボアズはわざと麦の穂を落とすように農夫に命じるなど、この神の言葉以上のことをルツにしてあげました。

2. 心の豊かさを持った人と生きる幸せ

聖書を読んで、神さまにより頼んで生きているボアズの言葉を探してみましょう。

2章4節 ボアズ→農夫

「主があなたたちと共におられますように」

2章12節ボアズ→ルツ

「主があなたの行いに豊かに報いてくださるよう。イスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるよう」

ボアズは大きな農場・たくさんの農夫を持つお金持ちでした。けれどもボアズの豊かさは富の故ではありませんでした。ボアズは神さまに従って生きる心の豊かさを持った人でした。農夫たちを愛し、思いやり、気遣う主人でした。

また、不幸の中にあった異邦人のルツに対してもボアズは同じように優しく厚意を示しました。

ボアズは自分が与えられているものは神さまから与えられているのだということを知っている人でした。ですから、自分が持っているものを豊かに周りの人たちに与えることができたのでしょう。

3. 神さまの摂理

ボアズとルツが会って結婚してかわいい男の子が与えられたのは偶然ではありませんでした。そこには神さまの確かなご計画がありました。

神さまはすばらしい祝福をボアズとルツそしてナオミに与えてくださいました。

けれどもそれはボアズたちだけに与えられたものではなかったのです。

新約聖書の「マタイによる福音書」1章を開いて見ましょう。

最初にイエス・キリストの系図が書かれていますが、その中にボアズとルツが登場します。

ボアズ・ルツ

↓

オベド

↓

エッサイ

↓

ダビデ

↓

⋮

⋮

⋮

↓

イエス・キリスト

神さまは、ボアズとルツによって全世界の人々にイエス・キリストという大きな祝福を与えてくださったのです。

〈ねらい〉

主の憐れみを知る。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えようと無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださいと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. ナオミやルツのように、神様を信じていても試練に遭うことがあります。ナオミのように自分は神様にひどい目にあわせられていると感じたことがありますか？ 聖書は、そういった私達の思いを越える神様の御計画につ

いて教え、今回の箇所でもボアズの好意、ダビデ王の祖父オベドの誕生、そしてイエス様の系図に組み込まれていったことなどに示されています。

→試練の中で信じ続け、祈り続けることの難しさ、しかし「神様、なぜ……」と思うような問題も神様のご計画の中にあること、主は御自分を信じる者を決してお見捨てにならないこと、主を待ち望んだ結果与えられる神様の素晴らしいお取り扱いを自身の経験も織り交ぜつつ、生徒達が神様を待ち望むように導き、強めることが必要である。

Q. 神様は御自分の憐れみを人を通して現されます。先週はそれを受ける経験を振り返りました。聖書は同時に、私達自身も他の人への神様の愛の担い手として用いられることを教えています。今、私達を通して神様が御業をなさそうとしておられる人がいないか、考えてみましょう。

4. お祈り

試練の中にあって、人の思いを越える神様の御計画を信じることができるようになる。

人を通して伝えられた神様の愛の感謝。

他の人への神様の愛の担い手として用いられるようになる。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト 使徒言行録2章1～13節

1. ペンテコステの出来事

「五旬節」(ペンテコステ)は、過越祭から数えて50日目に行なわれる収穫の祝いです。主イエス・キリストが、十字架で贖いの死を遂げてくださり、復活・昇天され、ついに約束の聖霊が注がれる待望のときです。

聖霊降臨は、激しい風のような音、炎のような分かれた舌、そして「ほかの国々の言葉」を語る奇跡など、誰もが見聞きできる不思議な現象を伴っていました。けれども、聖霊が歴史の中に突入するという神の奇跡は、言葉によって描くにはあまりにも不可思議な出来事なので、かろうじて比喩的に表現されるのみです(「吹いてくるような」「炎のような」)。

「炎のような分かれた舌」は、聖霊が一人一人に分け与えられ、しかもすべてが同一の御霊であることを示しているのでしょう。霊に満たされた一同は、霊が語らせるままに「ほかの国々の言葉」で話し始めます。「多言語奇跡」であり、「異言」とは区別されます。

2. 聖霊降臨の衝撃

エルサレムには、「天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいた」と言われます(5)。他国に散らされていたユダヤ人で、本国に帰還・定住して人々です。

9～11節の地名リストは、ユダヤを中心に弧を描いており、ほぼ離散ユダヤ人の所在地に重なります。はるか遠方の「ローマ」が含まれているのは、世界の「首都」としてのローマを、世界宣教の広がり象徴として選んでいるのでしょう。

彼らは、それぞれ自分の離散した地域の言葉で、「神の偉大な業」が語られるのを聞きます。神の偉大な業。それはイエス・キリストを通して神が始めまた完成してくださった、力ある救いの業です。これにまさる偉大なものは世にありません。

この驚くべき出来事に直面した人々が、すぐさま神の救いの御業への賛美と感謝に向かうわけはありません。人々の間に「驚き」が走ります。やがて、その驚きを合理的に解釈する人々が現われます。「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」。理解を超える出来事にぶつかるとき、自分の姿勢を立て直すために、合理的な「つじつま合わせ」に腐心するのです。

3. 聖霊降臨の意義

聖霊の降臨は、世にあるもろもろの霊の働きとはまったく種類を異にします。世のもろもろの霊は、人間に「名」「力」「誉れ」を与えますが、神の霊は、ただ神の栄光のためにだけ働かれます。世の霊は、諸民族の間に分裂・憎しみ・争い・騒乱をもたらしますが、神の霊は、一致・愛・和解・秩序をもたらします。

神の御霊は、恐れている者に勇氣と大胆さを与えます。わずか50日前には、大祭司の家の「女中」に主イエスを告白することができなかったペトロが、聖霊を受けると直ちに、大声で公然とキリストを宣べ伝える人になります。神の霊は、聖書のさまざまな箇所「風」に譬えられています。霊は神の自由な「命の息」そのものです。人間には不可能と思われる方法で、人を新しく造り変えるのです。弱い私たちも、聖霊を受けて自由かつ大胆にキリストを宣べ伝える人にされます。

自由の御霊は、福音を世界に伸展させる原動力です。聖霊は教会に「神の偉大な業を語る」よう励まされます。ペンテコステの霊は、人間が最も聞くべき価値のある言葉を聞かせてくださいます。聖霊は、「語らせる霊」であるとともに「聴きとる霊」です。ペンテコステは、何よりも「聴く」ことの奇跡を世界にもたらしました。

(小野静雄)

テキスト 使徒言行録2章1～13節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問68、34

〔単元のねらい〕

聖霊降臨祭、おめでとうございます。弊誌では、毎年の聖霊降臨祭の主題をほとんど「教会の誕生」としてまいりました。——厳密に言えば、「新約の教会」の誕生と言うべきでしょう。なぜなら、旧約時代の神の民も、私ども新しい神の民とキリストにあって連続しているからです。——子どもカテキズムも、信仰と教会との密接な関係、教会が信仰者の母であること強調します。弊誌は、これからも強調し続けます。しかし今回の説教は、聖霊と信仰者個人の関係にも触れます。そして、一人ひとりが、聖霊を求める祈りをさらに深めるようにと励ましたいと思います。教える者自身が、何よりも祈りの人であるべきです。日曜学校は、端的に言えば「祈る人」「祈れる人」を育てる営みだからです。各個教会、伝道所が創立20周年宣言に示された「聖霊の力あふれる教会」の形成へと不断に挑戦し続けるなら、日本キリスト改革派教会の礼拝式も日曜学校礼拝も、喜びと救いと命あふれた礼拝となるでしょう。不断に祈り求めましょう。

「天からの力を受けるところ」

今日は、僕たち私たちにとって特別にうれしい日をお祝いします。僕たち私たちの教会が、この地上に誕生したからです。今日はキリストの教会の誕生日のお祝いです。

僕たち私たちの教会は、ここに来る前には、小さなビルの狭いお部屋で礼拝を捧げていました。でも、そんなビルでの礼拝や教会も、本物の教会でした。つまり、教会というのは、建物のことではないのです。教会は、イエスさまを信じる人たちの集まりのことなのです。

集まるってというのは、誰かが「来なさい」っていうからできるんです。〇〇小学校に通っているお友達は、〇〇小学校から呼ばれているのです。だからもしも、〇〇小学校以外の学校に行ったら、どうなりますか。「勝手に来ちゃだめ」って言われると思います。それなら、教会はどうでしょうか。「来ちゃだめ」なんて言いませんよ。「来なさい」と呼んでいます。それなら、誰が呼んでいるのでしょうか。それは、僕たち私たちの神さま、天のお父さまです。

先生がこう言うと、みんなの中で、「おかしいなあ」と思うお友達もいるでしょう。「わたしは

神さまに誘われたんじゃないくて、〇〇ちゃんに誘われてきたんだけど。」あるいは、こんな風に考えたお友達もいるでしょう。「ぼくは、神さまに誘われたんじゃないくて、お母さんに連れて来てもらってるんだ。」でもそう言ったら、先生だって、おんなじです。先生も、神さまから直接、「教会に来て御覧なさい」と言われてはいないのです。でも、先生は後から分かったんです。教会に来て、聖書を読んで分かったんです。「ああ、教会に来ることができたこと、イエスさまを信じることができたことは、神さまのお恵みだったんだ。神さまの力が先生に働いてくださったから、イエスさまを信じ、教会に来れたんだ」と分かったのです。ですから、みんなも、聖書を読んで神さまの御言葉を聴いていると、どんどん分かってきます。

今日、みんなと聴いた聖書の言葉には、とても不思議なことが書かれていました。五旬祭の日、ペンテコステとも言われますが、その日に、みんなが一つの場所に、何よりも心を一つに合わせていたときのことです。突然、「ビュー、ゴォー」というような激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえました。天の窓、天国の扉が大きく開

いて、そこからそんな音が響き渡ったのです。そればかりではありません。炎のような真っ赤な舌が分かれ分かれに現れて、お弟子さんたちの上に留まったというのです。

するとお弟子さんたちは、聖霊なる神さまに満たされて、自分でも話したことがない外国語で、話し始めたのです。どんな話かという、それは、イエスさまのことで、イエスさまを通してなされたすばらしい神さまの偉大な業を語り始めたのです。

どこでお話したのかという、エルサレムです。その町は、ついこの間、イエスさまを十字架につけて殺してしまった最高法院という裁判所がある町で、イエスさまを憎んでいた人たちのいる場所、とても危険な所です。でも、イエスさまはお命じになっておられました。「エルサレムから離れてはいけません。あなたがたはこの町で、待っていなさい。神さまの約束どおり聖霊が注がれて、あなたがたは力を受けます。天からの力に覆われます。そうすると、あなたがたは、わたしが十字架についたことの意味、わたしが復活した事実をエルサレムからはじめて、世界の果てにまで語り始めるようになります。」

そして本当にそうなったのです。聖霊を受けたお弟子さんたちは、怖がらないで大胆にイエスさまのことを証しました。イエスさまを殺した人たちに面と向かって、「悔い改めなさい。イエスさまを信じなさい。罪を赦していただいて、神さまの子どもにしてくださいなさい」と、燃え上がるように語り始めたのです。炎のような舌というのは、神さまの偉大な御業、神さまの御言葉を語らせるのは、聖霊なる神さま御自身だということです。先生の舌は炎ではないけれど、イエスさまのことを話しているとカッカと心が燃えてきます。これが聖霊なる神さまのお働きなのです。

どうしてそうなったのでしょうか。それは、イエスさまの御言葉を守り、お約束を信じていたか

らです。エルサレムから離れなかったからです。お弟子さんたちは何をして待っていたのでしょうか。ゲームをしていたわけでも、遊んでいたのでもありません。お祈りしていたのです。しかも心を一つに合わせしてお祈りしていたのです。

僕たち私たちは今、教会堂にいます。礼拝を捧げています。それは、一番最初のお弟子さんたちの姿と同じです。イエスさまは、僕たち私たちにも約束してください。それは、「二人三人、わたしの名によって集まるなら、わたしもそこにいる」つまり、僕たち私たちがお互いに心を合わせて礼拝するなら、イエスさまと一緒にいてくださるということです。だったら、ここにもイエスさまはおられることは間違いありませんね。

一番最初の日。聖霊なる神さまは驚くようなすばらしい御業を始めてくださいました。たしかに今ここで、そのまま同じことが起こるわけではないのです。風の音は聞こえますか。炎のような舌が見えますか……。けれども先生の顔は見え、声は聞こえるでしょう。神さまは、先生を通して、僕たち私たちを神さまの子どもとするために、どんなに愛を注いで下さったのか、神さまの偉大な御業をいつも語ってくれるでしょう。また、ここにいるお友達を見ていると、「ああ、神さまに誘われ、呼ばれて来れたんだ。イエスさまは生きて、近くにおられるんだ」って分かりませんか。そんな不思議な目や耳が与えられるために、絶対に必要なことがあります。それを教えましょう。お祈りすることです。

今、ここで天国の窓が開かれています。ここに、聖霊なる神さまが来ておられます。だから、先生はイエスさまを語ります。みんなは聞きます。そうやってここで礼拝します。聞いたあなた、見た君は、聖霊なる神さまのお力で、イエスさまがおられるこの教会にお友達を誘うのです。聖霊なる神さまは、僕たち私たちの上に、その力を注いでおられます。 (相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書24章48～49節

あなたがたはこれらのことの証人となる。

わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。

高いところからの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。

〈ねらい〉

約束の聖霊を祈りつつ待った弟子たち。この日、力強い証人と変えられた弟子たちのように、私たちも聖霊の力を受け、教会を守り、保って下さる主に感謝し、喜び用いられる者に変えられることを祈り求めよう。

〈展開例〉

イエス様が天にお帰りになった日から、自分たちだけでは心細く、何もできなかった弟子たちは、一つの家を集まり、「聖霊が来て下さる」というイエス様のお言葉を信じて毎日祈り、待ち続けました。

ペンテコステの日にも、弟子たちは祈っていました。「ビュー」「ゴー」、急にすごい風が吹くような音が天からします。驚いた弟子たちが周りを見ると、一人ひとりの頭の上に、燃える舌のようなものがあるではありませんか。

それだけではありません。弟子たちは力を受けて、いろいろな国の言葉で神様のことを話し始め

ています。

イエス様の十字架の時には逃げ回っていた弟子たちに、「たすけ主」が送られたのです。強くされたのです。元気になって神様のなさったすばらしいことを伝えています。

ペテロさんも大きな声で言っています。「皆さん、悪い心を神様に謝って、イエス様を信じなさい。そうすれば、誰でも聖霊を受けます。」

聖霊が、ペテロさんのように私たちの心にも住み、話す勇気と力を下さり、信じる人を一つにしてくれるのです。一緒にいて私たちを助けて下さるのです。

教会に集められている私たちも、イエス様のことをたくさんのお友だちに話したり、教会に誘ったりして、力いっぱい働くことができるようになるのです。

〈祈り〉

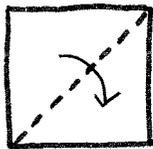
神様、私たちに聖霊を送って下さり、ありがとうございます。神様に喜ばれる子にして下さい。

〈やってみよう〉**暗唱聖句の発表会****準備する物**

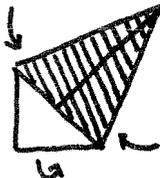
折り紙（炎をイメージする、赤・オレンジ・黄など）、筆記用具（鉛筆・クレヨン・サインペンなど）

◎指人形の作製

①折り紙の白面を表に置き斜めに谷折りにします



②開いて線に沿いさらに谷折り
白く残った部分は裏側に



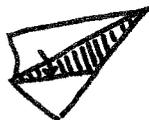
⑤白い三角に顔を描き、指人形の完成です。



③左を開いて色面を折る



④残りの左を白三角に折り入れ



大きな声で知っている聖句を発表します。

〈ねらい〉

私たちの教会とは何でしょうか。またどのようにして教会は生まれた—スタートしたのでしょうか。そして今の教会はどのようなのでしょうか。まずこのことを聖書から学びましょう。

使徒言行録2章に登場される聖霊は、この時だけでなく今日までずっとお働きを続けておられます。しかもそのお働きはいっそう豊かになっているのです。今も私たち一人一人に聖霊が働いておられます。聖霊が主イエスの体である教会を建て上げられます。そのために聖霊は私たちに、神の御言葉を語らせるとともに、神の御言葉を聞き悟らせるお働きもされます。こうして聖霊は、神の御言葉によって私たちが一つの主イエスの体となるようにしてくださるのです。

〈展開例〉

1. 私たちにも誕生日があるように、教会にも誕生日があります。使徒言行録2章には、新約の教会の誕生日のことが書いてあります。そのとき、どのようなことがおこったのでしょうか。ここでは聖霊なる神様の特別な御働きがありました。今では聖霊は、誰の目にも見えませんが、その音を聞くこともありませんね。しかし、この時は特別なことがありました。聖霊は「激しい風が吹いてくるような音」と共に、目に見える「炎のような舌」として現れてくださいました。また弟子たちに聖霊が働かれて、今まで話したことのないいろいろな国の言葉で神の御業を語り出しました。これは教会の誕生という大切なこの時だけになされた、聖霊の奇跡でした。それほど教会の誕生は大切なことでした。
2. この日は「五旬祭」(ペンテコステ)という祭りの日でした。そのためエルサレムに、世界のいろいろな国からの人たちが集まっていました。その人たちがそれぞれの国の言葉で「神の偉大な業」についての話を聞いたのです。しかし、すでに復活の主イエスは、使徒言行録1:8で伝道計画を示しておられました。五旬祭のときのこのできごとは、イエス様の伝道計画の先

触れでもありました。教会は最初から伝道する群れでした。2:17、18はどのようにいっていますか。

3. 聖霊は私たちを用いて、今日でも「神の偉大な業」を続けておられます。なかでも特別なことは、主イエスを通しておこなわれた救いの業を宣べ伝えることでした。ペトロの説教の中心は何でしたか。2:22~36に書いてあることは、主イエスの救い御業ですね。私たちもこの働きに用いられたいですね。
4. この働きは聖霊の業ですから、聖霊のお力をいただかなければなりません。目に見えない聖霊が私たち一人一人に留まり、働いて下さるにはどうしたらいいのでしょうか。みんなが一つになって祈ることですね。(1:14、15、2:1)そして一つの御霊に導かれ、一つの神の御言葉を聞き、一つの主イエスの教会を建て上げるのです。エフェソの信徒への手紙4:1~6の聖句を読んでみましょう。

〈ワーク〉

1. 主イエスの教会を建て上げるために必要なことは何でしょうか。一つ一つ考えたことを言ってください。(例：祈り、協力、神の御言葉に聞く、勇気……) 教会を建て上げるために邪魔なことは何でしょうか……。
2. 友だちがもっともっと主イエスを信じて救われるために、教会学校の仲間と祈りましょう。(分級のあとで子供たちの祈禱会をする。具体的に名前をあげて祈る。)
3. 休んだ友だち・病気などの友だちや、まだ教会に来たことのない友だちに、何かできることはありますか。(例：生徒が手紙を書く、お誘いチームを作る、など)

〈おいのり〉

聖霊なる神様、私たちにもっともっと主イエスの恵みを教えてください。そして多くの友だちといっしょに主イエスの恵みを喜ぶことができますように導いてください。

〈ねらい〉

聖霊降臨が教会誕生とする信仰について学ぶ。
目に見えない聖霊ですが、その働き、特に教会の中で起こる様々な事が聖霊の働きであることに焦点をあてたい。

〈展開例〉

ペンテコステ（五旬節）については説教で触れるが生徒に確認する。この日に起こった出来事が弟子たちが集まっていたところで起こった事に注意させたい。語られた説教に基づいて質疑応答を進める。

1. ペンテコステ（五旬節）

ペンテコステはギリシャ語の50の意味、過越しの祭りから50日目）の日集まっていた弟子達の所へ聖霊が下りました。

聖霊を見たことがありますか。見たことはありませんね。でも聖霊の働きでそれが見えます。どんな事が起こったのでしょうか。幾つでも。

- a：激しい風の音が起こった。
- b：激しい雷がなった。
- c：激しい稲妻が光った
- d：激しい 地震が起こった
- e：舌の様な炎が弟子達の上に止まった。

2. 弟子たちは聖霊に満たされて、あることをしました。どんな事でしょう。

- a：踊りだした。
- b：ギリシャ語で演説を始めた。
- c：色々な国の言葉で話し始めた。
- d：笑い出した。

参考：霊が語らせるままにとありますが神からの直接の言葉の事。集まったユダヤ人達が自分たちの故郷の言葉を聞いて、あっけにとられたとあります。故郷とは離散したユダヤ人たちの住んでいた地方の言葉。

3. 人々はそれを聴いて（見て）どう思いましたか。幾つでも。

- a：笑った。
- b：驚いた。
- c：泣いた。
- d：酒に酔っていると云った。
- e：とまどった。

参考：バベルの塔で離散した言葉の復帰。

聖霊に満たされて、ペトロは集まった人々にイエス・キリストの事を話しました。そしてその日に三千人程が仲間に入りました。大きな聖霊の働きです。奇跡は聖霊によって起こります。教会の中での信仰告白の事例。又は教師自身の体験を短く話して締めくくるのも良い。

〈祈り〉

※生徒に祈らせてもよい。

天の神様。私たちに教会を下さってありがとうございます。そしてイエスさまがいっしょにいてくださって感謝します。聖霊が私たちにいつも働いて下さることを覚えさせて下さい。イエスさまのお名前によってお祈りします。

参考：筆者は若い時の受洗で未信者の父から親子の縁を切ると言われましたが、後に父と母は揃って受洗し生涯を全うしました。



〈ねらい〉

教会のえだとされていることを喜ぶ。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. どういうきっかけで教会に来るようになったか？

→教師自身がいつ頃、どういうきっかけで教会に来て、今に至るのかを話し、一人一人が教会に導かれたきっかけを聞く。

Q. イエス様は天にお帰りになる前にお弟子達に何を約束されたでしょう？

→「あなたがたはこれらのことの証人となる。わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」(ルカ24:48~49)

Q. 弟子達はペンテコステの日は何をしていたでしょう？

→「一つになって集まって」(1節)いた。「心を合わせて熱心に祈っていた。」(使徒1:14)と思われる。

Q. イエス様の約束はどのように実現しましたか？

→「激しい風が吹いて来るような音」(2節)、「炎

のような舌」(3節)、「ほかの国々の言葉ではなしました。」(4節)といったしるしを伴う聖霊の降臨によって実現した。

Q. 聖霊の注ぎを受けたペトロ達は以前とどう変わりましたか？

→大胆に公然とイエス様を宣べ伝えるようになった。

Q. 聖霊のお働きとは何でしょうか？

→イエス様の御業を人の心に証し、キリストの証人とすること。

Q. それでは、教会に来てイエス様を信じるようになったのは、本当は一番誰のおかげですか？

→聖霊の働きによってイエス様を信じる信仰が与えられた。私達の今あるのは、ただ聖霊が私達の心に触れてくださったからである。私達の歩みの背後で確かに導いてくださっている聖霊のゆえに神様に感謝するよう導く。このお方なくして、私達はイエス様の素晴らしい愛も分からなかったのだから。

Q. この地上で聖霊が働いてくださる主な窓口があります。それはどこでしょうか？ また、私達は聖霊をどのように求めたら良いのでしょうか？

→教会の礼拝。ここで聖霊は私達を力づけて世にキリストの証人として派遣される。聖霊を求めていること。

4. お祈り

聖霊の導きの感謝。

聖霊を求める祈り。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト サムエル記上17章

17章が描くダビデ像は、王となるべき者の求められる信仰です。

ほぼ同じ時代にカナンに定着するようになったペリシテとイスラエルは土地をめぐり争っていました。ペリシテには、イスラエルにない強大な軍事力があり、巨人ゴリアトはその象徴的存在でありました。身長280センチを超え、57キロもある青銅製の鎧を身につけ、どのような攻め手もつけこむすきもない完全な防備を固め、しかも重い武器を自由に操れる強靱な体を持つゴリアトの存在自体がイスラエル人にとって脅威でした。ゴリアトはその恐るべきいでたちで毎日現れ、一騎討ちを呼びかけ、イスラエルを愚弄し続けるゴリアトの行為は、神をも愚弄するものであり、主への挑戦でありました。イスラエルは主のために立ち上がることが求められていました。しかし、イスラエルにはそのことのために立ち上がる信仰が見られませんでした。

ダビデは、ゴリアトの言葉を「生ける神の戦列に挑戦する」ものとして受けとめました。羊飼いとして「獅子も熊も倒してきた」ダビデは、「獅子や熊の手から守った主」が共にいて、「あのペリシテ人の手からも、わたしを守ってくださる」ので、「それらの獣の一匹のように」倒すことができる、とサウル王に語りました。それは、王やイスラエルが失っていた信仰です。サムエル記は、いかなる事態でも主への信頼を失わないダビデの姿を伝えています。神はこの純朴な信仰者を通し、イスラエルの王に必要なのは強大な軍事力や行政手腕ではなく、信仰を持って事態に臨み、民を導くものであることを明らかにしています。

ダビデは、サウル王から青銅の兜や鎧や剣などの武器を譲り受けますが、重すぎて身動きがとれないので、武器を脱ぎ捨て、杖と石投げだけで、ゴリアトとの戦いに挑みます。ダビデはゴリアトに向かって、「お前は剣や槍や投げ槍でわたしに向かって来るが、わたしはお前が挑戦したイスラ

エルの戦列の神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう。」「主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされない」「この戦いは主のものだ。主はお前たちを我々の手に渡される。」と告げます。

それは、主がイスラエルに求めた信仰です。2章には、不妊の女といわれていたハンナがサムエルを与えられた時に、「勇士の弓は折られるが、よろめく者は力を帯びる。……弱い者を塵の中から立ち上がらせ、貧しい者を芥の中から高く上げる」と神を称えた祈りが記されています。イスラエルには、その名前だけで最強の戦士をも屈服させる神がいます。ダビデは、この神が助けるのに、剣も槍も必要とせず、弱者を通じて強き者を滅ぼすことができると信じます。「ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主のものだ。主はお前たちを我々の手に渡される」(47節)。この言葉は、今を生きるわたしたちに語られています。

ダビデは自分の仕事に使う石投げ一振り、巨人ゴリアトを倒しました。神は与えられた持ち場で忠実に生きる少年の業を用いられます。もちろん、この業は、神の恵みです。神の導きを信じ、自分の仕事に忠実な者の業を神は省みられます。こうして巨人ゴリアトを倒したダビデは、無名の少年からサウル王に召抱えられるものとなり、王への道を歩むことになります。

30代のテモテに、「あなたは、年が若いということで、だれからも軽んじられてはなりません。むしろ、言葉、行動、愛、信仰、純潔の点で、信じる人々の模範となりなさい。」(Iテモテ4:12)とパウロは語りました。若くて弱い存在は、ダビデのような少年だけではありません。テモテのような立派に成人している大人も、まだまだ若いのです。ましてやわたしたちの信仰は若くて未熟です。しかし、そのような者を、主は用いられるのです。(鳥井一夫)

テキスト サムエル記上17章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問14

〔単元のねらい〕

少年ダビデが身長3メートルもの巨人ゴリアトを倒す物語です。物語るだけで、子どもたちに深い印象を刻むことでしょう。ゴリアトは55キロもの鎧を着、兜やすねあて、鉄器の穂先を持つ投げやりを加えれば80キロにも及ぶような防具を身につけています。対するイスラエルの武器は青銅器。サウル王も勇者ヨナタンも、たくましいダビデの兄たちも、イスラエルの神をなじるゴリアトに沈黙するのみです。そこに、少年ダビデが立ち向かいます。彼は、単純素朴に、万軍の主がともにいてくださる、この戦いが自分の力による戦いではなく、主御自身の戦いであると信じました。本当に立ち向かっておられるのは、万軍の主なる神ご自身なのです。少年少女にも、大人以上の信仰、聖霊が宿ることもあるのです。大人である私どもこそ、少年ダビデから学びとらねばならないでしょう。子どもであろうと大人であろうと、信仰の戦いとは、「イスラエル」である私どもに神がいますことを信じる戦い、証する戦いです。

「誰がゴリアトを倒せるの？」

今日から三回、ダビデについて学びながら、神さまを礼拝してまいります。

その頃、イスラエルの周りの国々には、王さまがいて、民を治めていました。けれどもイスラエルには、王さまがいませんでした。それは、イスラエルにとって決して悪いことではありません。なぜなら、神さまの民であるイスラエルの王さまは、神さまお一人だからです。ところが、イスラエルの人々は、それを忘れてしまっていたのです。そのとき、周りの国々と戦ってばかりいましたから、彼らは、サムエルという祭司に、自分たちのために強い王さまを立ててくださいと願い出しました。祭司サムエルは、サウルという青年を王さまにしたのです。サウルは、とても背が高く、かっこ良いハンサムボーイでした。

さて今、ペリシテ人の軍隊とイスラエルの軍隊とがならみ合っています。するとペリシテ人の中から一人の大男が進み出しました。名前はゴリアト。いかにもごつごつして強そうな名前ですね。身長は、なんと3メートル。「K-1」戦士の韓国のチェホンマンは、身長は2メートル以上です。先生と

チェホンマン選手と比べたら、小さな子どものようです。でも、そんなチェホンマンであっても、ゴリアトに比べれば、まるで赤ちゃんです。ゴリアトは、言いました。「俺様と戦う者はいないのか。一騎打ちで勝負しろ。もし、そいつが俺様を討ち取るようなら、わたしたちはお前たちの奴隷になってやろう。そのかわり、俺様が勝てば、反対に、お前たちは奴隷だ。」このようにイスラエルの人々と神さまに挑戦する声が40日間、響き続けました。

さて、そんな恐ろしい場所に、羊飼いの一人の少年ダビデがお弁当をもってやってきました。お兄さんたちへの差し入れをするためです。そのとき、ダビデは、ゴリアトがイスラエルを馬鹿にする声を聞いたのです。いてもたってもいられなくなりました。なんと、サウル王さまに、こう言ったのです。「わたしがあの男と戦います。」

サウル王は、ダビデの言うとおりにさせました。そして、王さまの鎧や兜を着けさせます。ところが、王様の鎧は大きすぎて、また重すぎて歩くこともできません。ダビデは、脱ぎ捨ててしまいま

した。ダビデが持っている武器といえば、羊飼いが獅子や熊、狼から羊を守るための道具、石投げの紐と五つの石ころ、そして杖だけです。

ダビデはゴリアトにこう言いました。「お前は剣や槍や投げやりでわたしに向かってくるが、私たちには剣も槍も必要ない。私たちには天と地をお造り下さったまことの神様が一緒にいてくださるのだ。神さまが戦ってくださるから、わたしたちは負けない。必ずお前を討つ。そうして、神さまは、どんなときでもわたしたちとともにいてくださること、まことの神さまが生きておられることをすべての人々に知らせてくださるのだ。」

ダビデがこう言い終るやいなや、3メートルのゴリアトが「ドドッ」と地響きを立てながら駆け寄ってきました。ダビデも恐れず、走って近寄りました。そして、用意していた石投げ紐をつかって小石を飛ばしました。するとどうでしょう。「パシッ」という大きな音がしたと思ったら、大きな体は、「ドシーン」と地面に倒れてしまいました。小さな石ころが兜で覆い切っていなかった額のわずかの部分にめり込んだのです。たった一つの石ころで、ダビデは勝ち得てあまりあったのです。

さて、この物語は、何を僕たち私たちに教えてくれるのでしょうか。それは、少年であろうが少女であろうが、ただ神さまを信じていれば、神さまのお働きをすることができるということです。確かに巨人ゴリアトは恐ろしく強いのです。彼が着ている鎧兜も頑丈です。槍の先はキラリと光り輝く鉄でできています。青銅の槍と鉄の槍が「カーン」とぶつかれば、青銅の槍など砕け散ってしまいます。大人の兵士たちは、その事実しか目に入りませんでした。つまり、自分たちには神さまが

ともにおられ、神さまが戦ってくださる、神さまの戦いであるという一番大切なことを忘れていたのです。けれども、少年ダビデは、イスラエルの民と一緒におられる神さまを見ています。神さまが生きておられ、自分たちと一緒にいてくださると信じたのです。

僕たち私たちは、ダビデ少年になれるでしょうか。ゴリアトを倒せるようになるでしょうか。確かに僕たち私たちには、武器も力も経験も何にもありません。でもダビデもおなじでしょう。どうしたらよいのでしょうか。「でもさ、ダビデは石投げが上手だけれど、自分は何にもできやしない……。」本当にそうなの？お祈りができるでしょう。「天のお父さま、イエスさま」とお名前をお呼びすれば、神様より強いものは世界に何も無いことを思い出せます。勇気がわいてきます。ダビデの強さは、信仰の強さ、お祈りの強さ、何よりも先週も学んだ聖霊なる神さまの強さなのです。

今、もしかすると、あなたにも、ゴリアトのような、「ぜったい負けてしまう」って怖いものがあるでしょうか。また、あなたのお友達の中に、怖くて泣いているお友達がいるでしょうか。お祈りしましょう。一緒にイエスさまの御名をお呼びしましょう。

神さまは、大人だけではなく、僕たち私たち、小さな子どもをも用いて、神さまが生きておられることを世界にお示しくくださいます。神さまは、日曜学校に励んでいるみんなを通して、神さまの栄光、神さまが生きて働いておられることを証してくださるのです。僕たち私たちも、イエスさまを信じて歩めば、ゴリアトに負けないのです。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] サムエル記上17章45節

だが、ダビデもこのペリシテ人に言った。

「お前は剣や槍や投げ槍でわたしに向かって来るが、

わたしはお前が挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう。」

〈ねらい〉

この物語は小さい僕たち私たちでも神様を信じていれば神様のご用ができることを教えてください。そのことを学び、感謝しよう。

〈展開例〉

「今日のお話はとてもおもしろかったね。もう一度復習してみましょう。」

イスラエルの国のベツレヘムに羊飼いの少年ダビデがいました。神様は予言者のサムエルにイスラエルの王様になる印の油をダビデに注ぐように言いました。隣の国ペリシテから戦争をしてきました。イスラエルの人々も戦争に出て行きました。ダビデの兄さんたちも行きました。べれいしての陣地から大男のゴリアトが出てきました。ゴリアトは大声で叫びました。「誰か戦う者はいないの

か。」その声を聞いただけで、イスラエルの人々は恐ろしくなっていました。ダビデはイスラエルの王様のサウルに言いました。「私がゴリアトと戦います。神様が助けて下さいます。」ダビデはゴリアトに一人で向かっていきました。また、ゴリアトに言いました。「私たちには剣も槍も必要ない。」え石投げで投げた石がゴリアトの額に当たりました。ゴリアトは倒れて縁しての兵隊は逃げてしまいました。イスラエルの人々は大喜びです。ダビデが勝ったのです。神様がともにいて下さったのです。

〈祈り〉

僕たち私たちはとても小さい者ですが、ダビデのように神様を信じて力が与えられて、神様のご用を少しでもできるようにして下さい。

〈やってみよう〉

牛乳パックで石投げの道具を作ろう！

① 底から2cmの
戸斤で切る

② 斜線部分
を切り取る
(一重の戸斤を切ると良い)

③ 上から1cmの戸斤で
両端に切り込みを
入れる(底面まで)

④ 切り込みに
輪ゴムを引かけ
でロープで止める

⑤ 余った半分のパックを
短冊型に切り
半分に折って玉を作る

〈正面図〉

「できるが!!」
「ビョーン」

「ダビデさんの
ように当て
られるか?」

くろの字の玉で「ゴムを
はさんで」飛ばそう!

〈ねらい〉

小さい子どもでも神を信じるなら、神はすばらしい御用のために、その子どもを用いてくださいます。また神を信じるなら、神はその子どもに勇気を与えてくださいます。子どもの世界で今、多くの悲しい出来事が起きています。この暗い世相の中に生きる子どもたちに、またその親たちに、神の恵みと力を伝えることは、教会学校の光栄ある使命です。教会学校の生徒から犠牲者を出さないだけでなく、より積極的に「世の光」として輝く光の子（エフェソ5：8）になってほしいと、切なる祈りと願いをもっています。

神が共にいてくださること、そして神がこの世の悪の霊の力と戦ってくださること、そして信仰の勝利を与えてくださることを知って、雄々しく前進していったほしいものです。

〈展開例〉

1. 今日の聖書のところには、長いあいだ戦争が続いていたことが書いてありました。どこどここの戦いでしたか。一方は神の選びの民イスラエル、もう一方はペリシテ人でしたね。両方の代表戦士で一騎打ちをすることになりました。ペリシテ人の代表戦士はゴリアトでした。この人はとっても強そうな戦士でした。どんな人でしたか。（サムエル記上17:4～7）イスラエルの人は神の民でありながら、おじけ付いてしまいました。なぜでしょうか。
2. そこに登場してきたのは誰ですか。そう、少年ダビデでしたね。ダビデはどんな子どもでしたか。エッサイの8人の息子たちの末っ子で、上の3人はすでにサウル王の軍の戦士でした。末っ子のダビデは羊の世話をしていました。いくつくらいだったのでしょうか。羊を守るために獅子や熊を打ち殺してしまうほどでしたから、14、5歳にはなっていたでしょう。

3. ゴリアトを恐れて、だれも一騎打ちの代表になるものはいません。そのときダビデが進みでて言いました。17：32とくに17：37、45～47。
①神は必ず守ってくださる。②万軍の主の名によって立ち向かうのだ。③イスラエルに神がおられることを人々は知る。④この戦いは主のものである。

ダビデはこのように信じて戦いました。ダビデはゴリアトと戦うとき剣や槍など使わず、石ころ一つで倒してしまいました。

4. 神を信じたダビデは神様から勇気と力をいただきました。そして大人顔負けの働きをしたのです。神はダビデのような信仰をもつ少年を用いてくださるのです。みなさんにも神から勇気と力が与えられるように祈っていきましょう。

〈ワーク〉

1. 時間があったら、ゴリアトや彼の武器を新聞紙をはりあわせて、原寸大のものを作ってみましょう。しかしそれはしよせん作り物です。破れたり燃えたりします。とても神には勝てません。大きさは聖書の巻末の度量衡表を参照。
2. 今の時代、子供たちは勇気や正義という神からの力を必要としています。神からの力を与えていただくには、どうしたらいいでしょうか。暗唱聖句、サムエル上17:45を繰り返して覚えましょう。御言葉は最強の霊的武具です。また生徒どうして、生徒と教師で、たがいに励まし合う具体的な時と場所を設けることも大切です。

〈おいのり〉

万軍の主なる神様、私たちが悪魔の力からお守りください。神様からの力をお与えください。そしてこの世界に神の正義が現されるように私たちをもお使いください。

〈ねらい〉

たとえ小さな子供であっても、神様を信じて祈るならば、神様のお働きができることを教えたい。

〈展開例〉

1. サウル王やイスラエルの兵士たちがゴリアトを恐れたのはなぜですか。

巨人ゴリアトは恐ろしく力が強く、着ている鎧兜も頑丈でした。ゴリアトがもっている鉄の槍はイスラエルの兵士たちがもっている青銅の槍を簡単に砕いてしまいます。彼らの目には、そのような外面的な力の差しか見えていませんでした。

2. ダビデ少年が、ゴリアトを恐れずに戦うことができたのはなぜですか。

神様が共にいてくださり、神様が戦ってくださることを信じていたから。

3. 私たちとダビデ少年との共通点は何でしょう。

- ①武器がない
- ②力がない
- ③経験がない
- ④神様が共にいてくださる等々

4. あなたにとって、ゴリアト（怖い存在）とは何でしょう。

一人一人にとってゴリアトは千差万別です。差し支えない範囲で、それぞれのゴリアトについて語り合うことができれば、子供たちにも、より具体的なイメージがわいてくるでしょう。

5. あなたはその怖い存在に、どのようにして立ち向かいますか。

神様よりも強い存在はどこにもいないこと。その神様がいつも私たちと共にいてくださること。そして、私たちが神様を信じて歩む時に、たとえ小さな子供であっても、神様は力を与え、守ってくださることを伝えたい。

〈お祈り〉

神様、私たちはまだ小さな子供ですから、大人のような知恵や力はありません。しかし、あなたはダビデ少年を用いて、大人が何人かかっても太刀打ちできなかった巨人ゴリアトを打ち倒して下さいました。私たちもダビデ少年のように、神様が共にいて下さることを信じて、どんな時にも諦めずに歩むことができますに。

イエス様の御名によって祈ります。アーメン。



行くがよい。主がお前と共におられるように。

〈ねらい〉

主を信じて立ち上がる。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. ゴリアテは「イスラエルの戦列に挑戦する。」と言いましたが、これは本当はどなたに対する挑戦だったのでしょうか？

→神様の民の真の王は、イスラエルを守り導いて来られた万軍の主ただお一人。ゴリアテは不遜にも生ける神の戦列に挑戦した（26、36節）

Q. ダビデが危険を顧みずに献身した動機は一体なんだったのでしょうか？

→イスラエルに対する屈辱。すなわち、イスラエルの神様に対する屈辱に対する聖なる憤りがダビデを立ち上がらせた。ダビデが戦ったのは、「全地はイスラエルに神がいますことを認める」（46節）ため、神の栄光のためであった。

Q. ゴリアテとの一騎打ちに誰も応じませんでしたが、ダビデは少年であったにも関わらず勇敢に進み出ました。この違いはどこにあったのでしょうか？

→兵士達はゴリアテの背丈、武具の力強さを見て恐れ、人間的な判断で勝ち目はないと思った。ダビデはイスラエルの戦列の神、万軍の主が共におられることを信じ、自分は少年であったが、主が勝利を賜ることを確信していた（45～47節）。

Q. ダビデの主への信頼は盲目的なものではなく、過去の主と共に生きた経験・実績に基づくものでありました（37節）。神様を信頼して、主が何とかしてくださったことがあれば話してください。

→教師は自身の信仰の経験談を話して下さると、励まし合う良き分かち合いの時を持てるでしょう。

Q. ダビデは少年でしたが、神様の働きに用いられました。ダビデだけ特別なのでしょうか？

→神様を信じて立ち上がるなら、神様は大人だけでなく少年、少女をも用いて御自身の栄光を現される。ダビデの例はそのことを教えている。

Q. 今、イスラエルにとっての巨人ゴリアテのような、恐れや不安を感じる問題や課題があるかもしれません。でも、神様より強いお方がこの世界にいますでしょうか？

→いない。直面している課題などの大きさから、神様の大きさ、そのお方がバックについている事実を目を向けよう。

4. お祈り

神様の御名があがめられるために、用いていたできるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト サムエル記上20章

聖書には友情を表す言葉がありません。ヘブライ人は、それを「契約を結ぶ」という言葉で表現しました。「ヨナタンはダビデを自分自身のように愛し、彼と契約を結び、着ていた上着を脱いで与え、また自分の装束を剣、弓、帯に至るまで与えた」（サム上18章3-4節）こうして、ダビデとヨナタンの友情は結ばれました。

このダビデとヨナタンの友情を記す美しい物語は、サムエル記全体の流れからいえば、王位に関わる問題として取り扱われています。ペリシテ人との戦いに勝利して宮廷に召抱えられることになったダビデは、民衆の間でも、王の宮廷においても、誰にも愛され、尊敬を集めました。そのゆえに、サウル王はダビデに嫉妬し、殺意をいだくようになりました。その結果、ダビデはサウルの迫害から逃れるため、宮廷を去り、難民として荒野を逃げまわらなければなりません。

そのようなダビデに、ヨナタンが命を救うために彼の逃亡に援助の手を差し伸べ、変わらない友情を表したことを、この物語は伝えています。

20章13-15節のヨナタンの言葉は、彼が次の王位につくのが自然なのに、ダビデのためにそれを放棄し、彼を助け、ダビデにより、自分とその家の将来を託そうとするものです。ヨナタンの名には「主は与えた」という意味があります。ダビデに対する主の愛顧がヨナタンの友情を通して表されます。

新月祭の時に示す態度で、サウルが本当にダビデの命を狙っているか確かめるべく二人は行動しますが、ヨナタンはダビデに一つのことを要望しました。それは、ダビデが王位についた時、自分と自分の子孫に対して、慈しみの態度を示して欲しいという要望です。それは、新しい王は古い王家一族の反逆の芽を根絶やしにするため、残虐な仕打ちをもって臨むという風習を踏まえての嘆願でありました。二人の友情は、根底に契約が存在します。ダビデはこの契約に誠実です（下9章）。

ヨナタンは、本来なら自分が来るべき王となるべきはずなのに、ダビデこそ王にふさわしい人物と認め、彼の慈しみに期待し、自分と自分の子孫の命を預けています。ダビデこそ主の選びの器であるという信仰があったからです。ヨナタンは「ダビデを自分自身のように愛していたので」（17節）、ダビデにその命を預けます。命を預けるといふ行為には、そのような信仰がいます。

ヨナタンは、「わたしとあなたが取り決めたこの事については、主がとこしえにわたしとあなたの間におられる」（創世記15:15参照）といって、それが決して破り得ない取り決めであることを強調しました。

新月祭の時、限られた者だけがつくことが許される王の食卓が用意されました。用意されたのは、王サウル、王子ヨナタン、王の従兄弟で軍の長アブネル、そしてダビデが座る四つだけです。しかしその最後の席にダビデはいません。ヨナタンからその理由を聞いたサウルは激怒し、ヨナタンを激しく罵倒し、槍を投げつけました。ヨナタンは、父の態度を見て父が本当にダビデを殺そうとしていることを知り、ダビデにダビデそのことを伝えます。

二人は口づけし、共に激しく泣き、二人とその子孫との間には、主が共におられることを確認して、断腸の思いで別れます。激しく抱きあい、口づけして、共に泣く、その姿は実に感動的です。この後、二人は再会することなく別の道を歩みますが、とこしえにいます主が二人の間を取り持ち、その友情を支え、離れ離れになっても、二人を強く結びつけています。両者の間には、常に主が聖なる橋のように結節点として存在しています。後にサウルとヨナタンがギルボア山の戦いで戦死したとの報を受けたとき、ダビデは、ヨナタンの友情を、「女の愛にまさる驚くべきあなたの愛」（サムエル記下1章26節）といって哀歌を歌っています。（鳥井一夫）

テキスト サムエル記上20章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問34

〔単元のねらい〕

5月27日の項で、日曜学校は、「祈る人」を育てる営みと記しました。先週も、祈りへと励まし、導きました。ここでは、子どもたちの信仰の成長と教会生活への定着に決定的に大きな影響を与えるのは、信仰の友であることを覚えます。日曜学校の営みにおいて、教師の働きがどれほど重大な影響を与える光栄な務めであるかは、言うまでもありません。しかし、青少年の信仰者にとって、同年齢の信仰の友を得ることは、それに勝るとも劣らないほど決定的に重要です。学んだことごと、その信仰を共に分かち合い、共に生きる仲間がいることによって、福音は生きて働き、その実も結ばれて行くのです。福音は、常に、「共に」味わわれ、生きられ、共同体を育むものだからです。普段の分級や夏期キャンプなど、また、契約の子のための特別の集会などを開いて、信仰の友をつくる場所を与えてあげることも教師の重要な責任であると言えます。友情や、何よりも友なる主イエスをこの物語を通して語ることもできると思います。

「ヨナタンとダビデの間に何がある？」

先週は、少年ダビデとゴリアトのお話をして礼拝を捧げました。

ダビデはサウル王さまのところに行って、勝利の報告をしました。そこには、王様の息子であるヨナタンという若者がいました。このヨナタンもとても勇敢な青年でした。たったの二人で、ペリシテ人のところに行って、20人の兵士たちを討ったこともあるのです。

このヨナタンが、ダビデを初めて見、その話しぶりを聞いたとき、すぐに思いました。「友達になりたい。」聖書にはこう書かれています。「ヨナタンの魂はダビデの魂と結びつき、ヨナタンは自分自身のようにダビデを愛した。」「ビビッ」と来たのでしょうか。友情が芽生えたのです。ヨナタンは、すぐに王子である自分の上着や剣や弓などの武器をダビデにプレゼントしました。

ダビデは成長し、ますます強い人になって行きました。ところが王さまサウルは、そんなダビデのことが気に入りません。自分の強さや偉大さよりも、イスラエルの人たちの心がダビデに向かってゆくのを、嫉妬しました。そればかりか、こうも考えていました。「このまま行けば、やがてダ

ビデが王さまになってしまうかもしれない、そうなるとヨナタンはどうなるのか。」そこで、ダビデをわざわざいつも戦いの最前線、とても危ないところに行かせたのです。そればかりか、サウル自身、三度も自分の手下にダビデを殺させようとたくらみました。しかし、神様がダビデとともにおられたので、いつも守られ、勝ち続けました。

ダビデは、自分の命がよりによって愛するヨナタンのお父さんである王様に狙われています。どれだけ、つらい思いをしていたことでしょうか。もう耐えられないような苦しみだったと思います。ダビデは、ついに、もう逃げるのにも疲れ、ヨナタンのところに助けを求めに行きました。

もしも皆がヨナタンだったらどうするでしょうか。「しかたがない。お父さんは、僕を王様にさせるために、ダビデを殺そうとしているのだ。もう、ダビデの友達にいることはやめよう。」と思うのでしょうか。ヨナタンは、ダビデに約束してこう言いました。「僕は君の友達だって約束したね。だから、君を裏切ったりしないよ。君が望むことを何でも言ってほしい。何でもしてあげたいんだ。」

でもそれは、こういうことを意味しますね。お

父さんを真っ向から否定することです。お父さんに逆らうことです。

とうとう、お父さんのサウル王は、ヨナタンがたくらんだことを知って、心の底から怒りました。怒っただけではありません。なんと、ヨナタンにも槍を投げつけたのです。あぶなく殺されかけたわけです。それでも、ヨナタンは、ダビデを裏切りませんでした。ヨナタンは、徹底的に、ダビデの味方、友達であり続けたのです。

そしてダビデもまた、ヨナタンへの友情を裏切りませんでした。ダビデは、彼に約束しました。「ぜったいに、お父さんを、サウル王さまを殺さないし、王様の子孫を殺したりはしない。」ダビデはこの約束を命にかけても守ったのです。

しかしとうとう、悲しい別れのときが来ます。サウル王は、ヨナタンがダビデを助けることを決して許そうとしないからです。ダビデとヨナタンとはついに離れ離れになります。その最後の別れするとき、お互いに抱き合って、涙を流しました。そしてヨナタンは、最後にこう言いました。「安心して行ってくれ。大丈夫だから。僕と君の間にも、僕の子孫と君の子孫の間にも、神さまがいつまでもいっしょにいてくださるのだから。大丈夫。僕の約束を信じて、安心して行ってくれ。」

ダビデは、この後も、本当に苦しい目に遭います。逃げて逃げて、逃げ続けます。でも、ダビデは負けませんでした。会えなくてもダビデには親友のヨナタンがいるからです。ダビデにはヨナタンの友情、ぜったいに裏切らないという約束の言葉、そして聖書にははっきりとは記されていませんが、ヨナタンのとりなしのお祈りがあったのです。ヨナタンがいてくれたからこそダビデは力強い人間になり、やがて本当に王さまになって行くのです。

今日の暗唱聖句は、イエスさまの御言葉です。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うなら

ば、あなたがたはわたしの友である。」ここに本物の友情があります。皆は、そのような友達が欲しいですか。そんな友達がいますか。先生には、います。それは、この御言葉を語ってくださったイエスさまご自身のことです。イエスさまは、本当にわたしのために命を捨ててくださったのです。つまり、先生の友達になってくださったのです。ですから、先生は、イエスさまの命じる御言葉を真剣に守り行って行きたいのです。そうすれば、ますますイエスさまの友達として親しくなれるからです。イエスさまももっともっと親しくなりたいたいです。

皆も、イエスさまに友達になっていただいたひとり一人のはずです。それなら、イエスさまの御言葉を守りたくないですか。それが、イエスさまとの友情を深めるために僕たち私たちがすべきことです。そしてそれは、ヨナタンとダビデの間にもあったことでした。彼らは、お互いの言葉を信頼しあい、守りました。もし、僕たち私たちが、誰かと、ヨナタンとダビデのような親友となりたいたい願うのなら、同じようにすればよいのです。

最後に、ダビデとヨナタンのすばらしく深い友情の秘密を教えましょう。それは、ヨナタンが言った最後の別れの言葉にあります。「僕と君の間にも、僕の子孫と君の子孫の間にも、神さまがいつまでもいっしょにいてくださる。」本当のいつまでも続く友情は、神さまが二人の間においてこそ成り立つのです。それなら、本当のお友達は、日曜学校のお友達同士ではないですか。中会の夏のキャンプなどに行けば、そんなお友達とも会えるかもしれません。たくさんつくりたいと思います。

学校に親友や仲良しがいますか。一番すばらしい友情は、日曜学校に誘ってあげることでしょう。何度、断られても、お祈りしてあげること。それが友達です。皆が、イエスさまを間にしたお友達をたくさんつくれるようにとお祈りしています。先ず、あなたから始めてください。（相馬伸郎）

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書15章12～13節

わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。

友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。

〈ねらい〉

ダビデとヨナタンの話を通して、本当の友情を学び、子どもたちに、お友だちのことを心から大事にする気持ちを喚起する。

〈展開例〉

立体絵本を使って、ダビデとヨナタンの話をする。

- ①「この人は誰ですか？王子様のヨナタンです。」（絵は金ぴかの格好をしたヨナタン）
- ②「この人は誰ですか？ダビデです。」（絵は羊飼いのダビデ）
- ③（二人を交互に見せながら）「王様になるのは二人のうちどちらですか？ダビデさんです。」

④「それで、ヨナタンは悲しんだり怒ったりしないでしょうか？」

⑤「いいえ、ヨナタンはダビデが王様になることを喜んでいました。二人はとても仲良かったからです。」

⑥「二人は離ればなれになっても、ずっと仲良しでした。そして互いに祈り合っていました。」

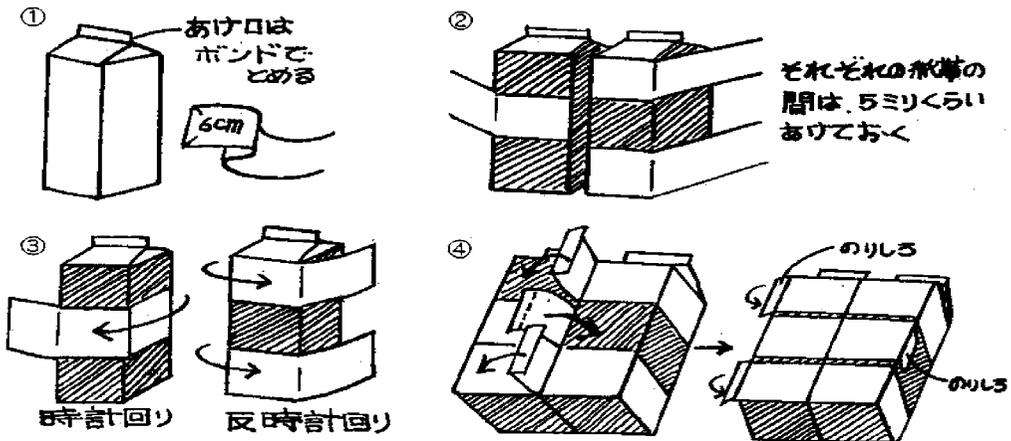
〈祈り〉

私たちはすぐにお友だちのことをうらやましく思ったり、嫌いに思ったりしてしまいます。どうぞ、ずっと大好きでいられるように助けて下さい。そして、いつもお友だちのためにお祈りができますように。

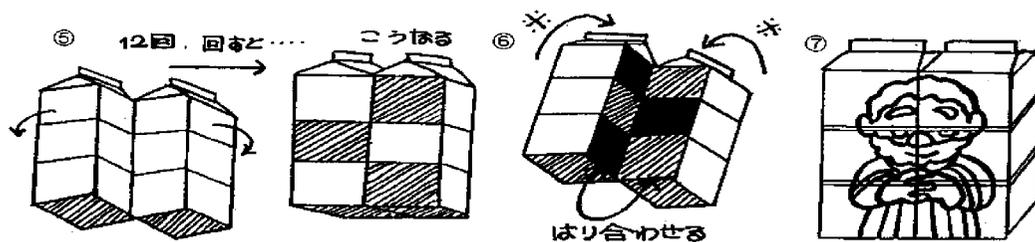
〈やってみよう〉

立体絵本をつくらう！

- ①牛乳パックを二つ、幅6センチ×長さ75センチの紙の帯を三本用意する。
- ②紙帯の端を図のように牛乳パックにボンドではる。
- ③牛乳パックに紙帯を巻きつけていく。
- ④巻き終わったら牛乳パックを合わせ、紙帯の残った一面を逆方向に戻してボンドではる。



- ⑤ ボンドがかわいたら、矢印の方向へ5回、回す。
 - ⑥ 黒のところにボンドをつけて、二つの牛乳パックをはり合わせる。
かわいたら、※の矢印の方向に回して、いちばんはじめの状態にする。
 - ⑦ いちばんはじめの面に絵をはる。さらに次の面に回して次々に絵をはっていく。
全部で4場面。
- はる絵は自由に書いてください。下の絵をコピーして使ってもよいでしょう。



(CS 成長センター、『成長』、No. 87 より)



〈ねらい〉

教会学校の目的は、子どもたちが「真の神を知る」ことにあります。当然それは子どもたち一人一人に、自覚的な、個人的な信仰理解と決断が求められます。そのための伝道であり教育です。

また教会学校会では、契約の子だけでなくすべての生徒たちが、主イエスにつながる主の教会の有機的な交わりの中に、はぐくまれています。主の体である教会においては、本質的に孤独ではありません。このことをもっともよく言い表すのは、平易な言葉ですが「友だち」ではないでしょうか。友は共につづじます。

その点で、本課のダビデとヨナタンの友情物語ほど、優れた教材はないと思います。教会学校の子どもたちを見ていると、ときには言い争いになるようなことがあっても、子どもどうしの間での安心、気がねない付き合い、楽しさがあることを感じます。昨今、いじめや児童虐待の悲しい出来事が報道されています。真の友情について教え、また真の友情の実現が可能な場としての、教会学校の責任と光栄を覚えます。

そのためには生徒も先生も徹底して、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ15:13）といわれる、主イエスの福音にあずかることです。命をかけて友となってくださった主イエスを抜きにして、「お互いに良いお友だちになりましょう」という道徳的訓話だけなら、新たな律法主義を生み出し、やがて行き詰まりを招くことになります。キリストの福音こそは、主イエスに結ばれた友が、共に主の教会で生きることを可能にします。

そして主イエスを中心にして、子どもどうしが自分たちで祈祷会を行い、祈り合えるようになればと願います。確実にそこには主イエスがともにあります（マタイ18:20）。

〈展開例〉

1. ダビデとヨナタンの友情物語は、ストーリーの展開がきわめて明確です。サムエル記上20

章を丹念に読むことがたいせつです。

2. サウル王は多くの手柄を立てたダビデにたいし、激しい嫉妬心を燃やしました。なぜ妬んだのでしょうか。妬みも神に対する罪です。しかもその罪は、相手の人を殺そうとするほど強いものです。ダビデはサウル王に命を狙われ、逃げまわらなければなりません。
3. ところが王子ヨナタンはサウル王の息子でありながら、ダビデの大の親友でした。ヨナタンは何とかして、親友のダビデを助けたいと思いました。なぜならヨナタンとダビデは、強い友情によって結ばれていたからです。二人は神様の前で契約を結んでいました。いつでもどんなときでも友だちでいようという約束を交わしました。サムエル上18:1~4、20:8、16を読んでもみましょう。その約束は神の前で誓い合ったものでした。サムエル上2:42。
4. 新月祭のとき、王の食卓に招かれていたダビデは身の危険を感じて出席しませんでした。欠席したダビデをかばった王子ヨナタンにまで、サウル王は槍を投げつけました。王の怒りの大きさを知ったヨナタンは、かつて約束していたように、野原へ行ってダビデに急いで逃げていくように合図をしました。
5. 信仰の友、そしてその友情は何とすばらしいのでしょうか。神が私たちに、このような友情を与えてくださるようお願いしましょう。皆さんのいちばんすばらしい友、大切な友は誰ですか。
6. 主イエスは私たちの友となってくださいました。暗唱聖句のヨハネ15:12、13について、みんなで話し合ってみましょう。

〈おいのり〉

天の神様、私たちに教会学校の友だちを与えて下さり、ありがとうございます。とくにイエス様が私たちの友となって下さり、私たちを救うために十字架にまでかかってくださったことを心から感謝します。

〈ねらい〉

信仰の友の大切さを教えたい。

ダビデの約束：ヨナタンへの友情を決して裏切らない。サウル王とその子孫を殺さない。

〈展開例〉

1. サウル王は、なぜダビデを殺そうとしたのですか。

ダビデの成長は目覚ましく、ますます強い人になっていった。ダビデの活躍に人々の注目は集まり、サウル王はダビデに嫉妬した。また、やがてダビデが王様になってしまうことを恐れた。

2. ヨナタンは、父であるサウル王がダビデを殺そうとしていることを知って、ダビデの友達であることをやめてしまったのでしょうか。

いいえ。友達であり続けた。

3. ダビデが逃げるのに疲れてヨナタンに助けを求めた時に、二人はある約束をしました。それはどのような約束でしたか。

ヨナタンの約束：ダビデへの友情を決して裏切らない。ダビデを助ける。

4. 二人はこの約束を守りましたか。

はい。守りました。

5. ダビデとヨナタンの友情をかたく結びあわせていたものは何ですか。

神様を信じる信仰。ダビデとヨナタンのような神様を信じる信仰によってかたく結びあわされた友達をつくることの大切さを伝えたい。

〈お祈り〉

神様。ダビデとヨナタンの物語を通して、あなたを信じる信仰によって結び合わされた友情が、いかに素晴らしいものであるかを知りました。私たちも同じ信仰によって結ばれた友達を沢山つくるができますように。また、学校のお友達にも、ぜひ教会学校に来てもらいたいです。どうか、あなたが教会学校に導いてください。

イエス様の御名によって祈ります。アーメン。



矢はあなたのもっと先だ

〈ねらい〉

信仰の友を喜ぶ。

などで会う友達など。教師自身も立場は違えどそうでしょう。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

Q. ダビデとヨナタンの友情から、いつまでも続く友情の要素を学ぶことができます。それは何でしょうか？

2. 分かち合い

→1. 二人の間に神様がいて、神様がお互いを友達として与えてくださったと知っていること。

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

2. お互いを神様に愛されている存在、使命を与えられた選びの器として尊敬すること。

Q. 分からなかったことは？

3. 必要とあれば、友のために自己放棄し、犠牲を払えること。

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えようと無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださいと思います。

Q. 私達を誰よりも愛しておられる変わることのない一番の友達はどうなんでしょうか？ 私達はこのお方と生きる中で本当の友情を学びます。

→イエス様。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(ヨハネ15:13) イエス様はまさに私達のために自分の持てる全てを放棄して犠牲としてくださって本当に愛してくださった私達の永遠の友である。このお方との関係の中で、受けるよりも与える方が幸いな健やかな人間関係を学んでゆくのである。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 活躍するダビデを見て、サウル王はねたんで殺そうとし、ヨナタンは変わらない友情をダビデに示し続けました。この違いはどこにあったのでしょうか？

Q. 教会以外の学校などのお友達のためにできることは一体何があるのでしょうか？

→サウルは自身の人間的な思いでダビデを見、ヨナタンはダビデこそ神様の選びの器であるという信仰のまなざしでダビデを見ていた。

→教会学校に誘うこと。救われるようにお祈りすることなど。

Q. ヨナタンの友情があればこそ、苦境の中でダビデは支えられました。人は一人では生きていけません、信仰を持って生きてゆくこともそうです。神様が私達に与えてくださった信仰の友達は誰でしょうか？

4. お祈り

信仰の友達が与えられていることの感謝。

お互いを神様をご覧になるように見ることができるようになる。

教会に来ていないお友達のために。

→日曜学校の友達、契約の子の仲間、キャンプ

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト サムエル記下7章

〔主の慈しみに満ちたダビデへの契約〕

ダビデは王として最初の七年六か月の間ヘbronでユダを治め、三十三年の間、エルサレムでイスラエルとユダの全土を統治し、実に四十年間王位にありました（サムエル記下5：4, 5）。エルサレムは、山に囲まれた要害でエブス人という異邦人の町でした。ダビデはこの要害を奇襲して陥落し、この町を「ダビデの町」と呼び、周囲に城壁を築き、ついにここに安住することになります（5：9, 7：1）。

このとき、ダビデは主の箱をエルサレムへ運び入れ、天幕の中に安置すると、主の御前に焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげました（6：11）。

そして、ダビデは、「わたしはレバノン杉の家に住んでいるが、神の箱は天幕を張った中に置いたままだ」（7：2）と言い、神の箱のために特別の場所を建築する必要を覚えます。この時、預言者ナタンに「あなたがわたしのために住むべき家を建てようというのか。わたしはイスラエルの子らをエジプトから導き上った日から今日に至るまで、家に住まず、天幕、すなわち幕屋を住みかとして歩んできた」との主の言葉が臨みます（7：5, 6）。これは、まことの神の臨在するところは人の建造物ではないという否定を含みながらも、まことの神、主自ら定められるところに建てられることをかえって、明らかにするものです。

実際に、「ダビデは神の御心にかない、ヤコブの家のために神の住まいが欲しいと願っていましたが、神のために家を建てたのはソロモンでした」（使徒言行録7：46）。しかしながら、この時、言わば、ダビデの息子ソロモンの神殿建設の基礎とも言える大切な神の契約がダビデと取り交わされることになります。このダビデへの契約は、「主があなた（ダビデ）のために家を興す。あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者がわたしの名のために家を建

て、わたしは彼の王国の王座をどこしえに堅く据える。」（サムエル記下7：11-13）という、主がダビデとその子孫を祝福されるという慈しみに満ちたものでした。

〔ダビデへの契約とキリストにある喜び〕

ダビデは、思いがけないこの祝福に満ちた主の言葉を聞き、感嘆の叫び声をあげて、「主の御前に出て座し」、「主なる神よ、何故わたしを、わたしの家などを、ここまでお導きくださったのですか。……あなたは、この僕の家の遠い将来にかかわる御言葉まで賜りました」と祈ります（7：18以下）。

そして、ダビデは、主なる神がイスラエルを救い出してください御自分の民とされたみ業をほめたたえ、エジプトと異邦の民とその神々からイスラエルの民を救い出してくださいくださったことを感謝するのです。そして、神の約束のみ言葉に基づいて祈ることによって、「勇気を得ました」（7：27）と告白します。さらに、「主なる神よ、あなたは神、あなたの御言葉は真実です。あなたは僕にこのような恵みの御言葉を賜りました。どうか今、この（あなたの）僕の家を祝福し、どこしえに御前に永らえさせてください。主なる神よ、あなたが御言葉を賜れば、その祝福によって（あなたの）僕の家はどこしえに祝福されます。」（7：28, 29）と祈りは締めくくられます。

実に、このダビデへの契約は、「アブラハムの子ダビデの子」（マタイ1：1）イエス・キリストの降誕という驚くべき神のみ業において、わたしたちの住む世界のただ中に実現しました。使徒言行録13章23節で「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださいました」と言われているとおりです。この神の契約にしっかり立って救いの恵みを共に受け継ぎつつ、主イエスに喜びと感謝をささげましょう。（宮武輝彦）

テキスト サムエル記下7章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

与えられている聖書箇所はサムエル記下7章であるが、6章の神の箱をエルサレムへ運び上げたことと神殿建築の願いについて取り上げて、一回の説教とした。神の箱を運び入れることと神殿建築の願いは一つのこと、神礼拝を大切にすることと結びついている。礼拝をエルサレムの中心に据えようとしたのである。私たちにおいても、神礼拝こそが人生の土台である。主なる神は、主を喜びとして生きる、そのような礼拝する人生を喜ばれる。18節以下のダビデの祈りを取り上げることは断念した。

「エルサレムに神殿を！」

ダビデのことを続けて学んできました。これまでのことを思い出しておきましょう。まだ少年であった頃、ダビデは、たて琴をかなでてサウル王さまを慰めるために召し出されました。次に、ペリシテ人との戦いのときに、ゴリアトという大男と戦って勝ち、いちやく勇士として有名になりました。その後、ダビデは次々と戦いに勝利しました。ところが、そのことがかえってサウル王さまの怒りとねたみを買うことになり、ダビデは逃げ出して、荒れ野をさまよう生活をしなければなりません。そのときに助けてくれたのが、ヨナタンでしたね。ダビデは、若い頃、たいへん苦勞したのです。

さて、今日は、ダビデが王さまになったときのお話です。ずいぶんと間がとびましたね。ダビデの生涯にはいろいろなことがあって、荒れ野に逃げ出してから王さまになるまでの間にもいろいろなことがありました。それらは、またいつか別のときにお話しましょう。

ダビデは、サウル王さまが亡くなって、それは戦いのときに命を落として亡くなって、そのあと、みんなから王さまになってくださいと頼まれました。「あなたこそ、イスラエルとユダの王さまにふさわしいお方です、ぜひ王さまになってください」とお願いされて、ダビデは王さまになりました。ダビデが30歳のときです。

実は、ダビデは、まだ小さな子どもの頃、お父

さんのエッサイと一緒に暮らして、羊飼いをしていた頃のこと、油を注がれていました（サムエル上16章）。油を注ぐというのは、神さまの大切な務めをする人として召し出されるということです。サムエルという預言者によって、油注ぎを受けていたのです。神さまの大切な務めをするということが、このとき、まさに王さまになることによって実現したのですね。

そのダビデ王さま。王さまになって、いったい何をしたでしょうか。今日は、そのことをぜひみんなに知ってほしいと思います。

ダビデ王さまは、エルサレムという町を自分の住む町にすると決めました。エルサレムの町は、ちょっとした山の上にある町で、周りから攻め込むことが難しい場所だったのです。だから、王さまが住むにふさわしい場所だと考えたのかもしれませんが。エルサレムは、「ダビデの町」と呼ばれるようになります。

そして、ダビデ王さまは、そのエルサレムに、神の箱を運び上げました。神の箱というのは、出エジプトをしたイスラエルの民に主なる神が命じて造らせたもので、契約の箱とも言われます。十戒の御言葉を刻んだ二枚の石の板がおさめられていて、主なる神さまがそこにおられるというしるしなのです。神さまとイスラエルの民が契約を結んだしるし、まことの神さまがイスラエルの民と

一緒にいてくださるしるしです。その神の箱をエルサレムに運び上げて、ですから、エルサレムを、ただ王さまの町、ダビデの町とするのではなく、神さまを中心とする町にしようとしたのです。神さまを中心にして、町づくりをするのです。

そして、ダビデ王さまは、神さまのためにレバノン杉の家、神殿を建てようと考えました。自分はきちんとした家を建てて住んでいる。でも、神の箱はまだテント（天幕）の中に置いたままだ。きちんとしたレバノン杉の家を建てて、そこに神の箱をおおさめしよう。そこで、主なる神を礼拝しよう。ダビデ王さまは、そのようにして、エルサレムの町とそこに住む人たちを、まことの神さまを礼拝するものとして整えようとしたのです。

このことは、私たちにとってはどういうことでしょうか。エルサレムをまことの神さまを礼拝するところとして整える。それは、ただ町のことだけではなく、その町に生きる人たちの人生を、まことの神を礼拝する人生として整えようということです。私たちにとって大切なことは、まことの神さまを礼拝することこそが人生の土台になる、また人生の幸いであるということです。『子どもカテキズム』問1にこうあります。「私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです」。このことを思い起こします。

ダビデは、まことの神さまに信頼して、人生を生きてきました。「この戦いは主のものだ」と信じて、主に依り頼んでゴリアトと戦い、勝利を得ました。ダビデは、主なる神に依り頼むところにこそ幸いがあることを知っていたのです。

私たちも同じです。主なる神に依り頼むところにこそ人生の幸いがあります。私たちは、主なる神を礼拝して、人生の土台とするのです。

主なる神は、神殿を建ててエルサレムの中心にしようと思った、そのダビデの思いを喜ばれました。ダビデを祝福されました。

ただし、神殿を建てるといふことそのものは、お許しになりませんでした。神さまは、人の建てた家に住むことはなさらないとおっしゃって、神殿建築の願いをしりぞけられました。戦いに勝利することによってイスラエルの礎を据えたダビデです。神殿建築まで成し遂げてしまうと傲慢になってしまうかもしれないと、主なる神はその危険を見抜かれたのかもしれないと。

かえって主なる神ご自身がダビデのために家を興すと、約束されました。ダビデの子孫を祝福し、その王国を揺るぎないものにする、約束されました。その子孫の中から主のために家を建てて者が出るのです。このような約束、契約を与えてダビデを祝福し、労苦を顧みてくださいました。

やがて、ダビデの息子の一人であるソロモンが王さまになり、エルサレムに神殿を建てます。約束が実現したのです。

しかし、主なる神は、そのような地上のエルサレム神殿のことばかりを約束されたものではありません。やがて時満ちて、ダビデの子孫として、救い主イエス・キリストがお生まれになりました。このキリストこそが、まことの主の名のために新しい家を建てました。それは、キリストの十字架と復活に土台を置く、キリストの教会です。主イエス・キリストの据えた礎を土台として、まことに神さまを礼拝して人生を生きる、幸いな民がおこされました。私たちは、そのキリストの教会のひとえだとされて、礼拝をささげています。

礼拝こそ、私たちの人生の土台である。その幸いを感謝して、この一週間も、日々御言葉に聴き、祈りをささげて、歩んで参りましょう。

(望月 信)

[今週の暗唱聖句] サムエル記下7章13節

この者がわたしの名のために家を建て、
わたしは彼の王国の王座をどこしえに堅く据える。

〈ねらい〉

神礼拝こそが人生の土台である。主なる神様は、主を喜びとして生きる人の礼拝と人生を喜ばれる。そのことを教えたい。

〈展開例〉

「6月になって、ダビデさんのお話はこれで3回目ですね。今日はダビデさんが王様になってからのお話です。ダビデさんが王様になって自分の家に住んでいました。そして、神様のためにもお城を造ろう、真の神様のための神殿を建てようと考えました。そして預言者のナタンさんに相談したら、ナタンさんも大賛成でした。ところがその後、神様がこのナタンさんに現れて、ダビデに次のように伝えるように言いました。わたしがあな

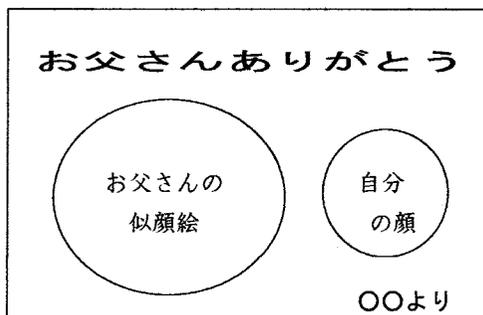
たのために家を興し、あなたの王国を永遠に守るのだと。王国は、ダビデさん、ダビデさんの子ども、そのまた子どもへとずっと続く。そして国が大きくなることによって、神様のお名前も皆に知られるようになるのだと。これが、神様がダビデさんに与えて下さった約束です。そして、その通りに神様は、ダビデさんのずっと後に、ダビデさんの子孫としてイエス様を与えて下さったのです。

〈祈り〉

ダビデさんはどんな時にも神様を忘れずにお礼拝をしました。私たちもダビデさんのように、神様とイエス様が共にいて下さることを、いつも感謝できるようにして下さい。

〈やってみよう〉**父の日のカードを作ろう****用意する物**

画用紙、書く物（クレヨン、色鉛筆、マジックなど）



☆お父さんのいない子がいたら、配慮して下さい。

〈ねらい〉

神は信じるものを決して見捨てられません。また私たちの神を愛する思いと働きを、私たちが考えている以上に祝して下さいます。

神の国についての神の御計画は、主イエスによって実現し、その王国は永久に続くことを学びます。なによりもただ主イエスを信じるだけで、私たちがその王国の民とされるのです。

〈展開例〉

1. ダビデはサウル王に忠実に仕え、多くの手柄もたてました。しかしサウルのために働けば働くほど、ダビデはサウルに憎まれました。洞窟や荒れ野を逃げ回っていました。どうしてサウルはこんなにもダビデを憎んだのでしょうか。
2. しかしサウル王も王子ヨナタンもペリシテ人との戦いで死んでしまいました。ダビデは30歳で全国を統一して、イスラエルの王となりました。サウルが死んでからは、もう敵らしい敵もいなくなり、逃げ回る必要もなくなって、自分の王宮に落ち着くことができました。ダビデは神に心から感謝しました。これはダビデを決して忘れず、守り続けて下さった神のお恵みです。
3. そしてふと気が付くと、神の契約の箱はみすばらしい天幕の中に置かれたままになっているではありませんか。ダビデは自分の信仰の先生であった預言者ナタンに、神のために立派な神殿を造ろうと相談しました。ナタンはダビデの考えを喜んだことでしょう。あなたがダビデだったら、どんなことを考えますか。
4. しかしナタンにあった神の御言葉は、以外なことでした。その内容は次のようです。①神はずっと今まで天幕を住み家としてきて、自分の家、神殿を建てよと言われたことはなかった。②むしろ神がイスラエルとダビデのために家を興し、彼らに約束の地で安らぎを与える。③ダビデの子孫が跡を継ぎ、ダビデの王国を揺るぎないものとする。④そしてその人が神の家・神殿を建てる。

5. 神殿を建てるダビデの子孫とは誰のことでしょうか。それは王子のソロモンですね。ソロモンがダビデの次の王となったとき、立派な神殿をエルサレムに建てました。次週、ソロモン王の神殿建築のことを学びます。
6. しかしこのナタンをとおして神が言われたことには、それ以上のことがありました。ダビデの子孫、とこしえの王国とその王座、これはみな主イエスの王国についての約束でした。主イエスこそ、王の王、主の主ですね。

〈ワーク〉

1. 自分たちの祈り・願いに、神はどのようにお応えくださったのでしょうか。先生や生徒一人一人の経験した恵みを分かち合ひましょう。
2. サムエル記下7章の登場人物は誰ですか。ダビデと預言者ナタン、それに神ご自身ですね。聖書からそれぞれの台詞を要約して、生徒たちが言ってみましょう。

〈おいのり〉

天の神様。今までもこれからも、いつも共にいて下さり、私たちを守って下さることを感謝します。私たちを神様の子どもにして下さり、天の御国に入れて下さる御恵みを感謝します。



この者がわたしの名のために家を建て、
わたしは彼の王国の王座をとこしえに堅く据える。

〈ねらい〉

子供たちに神様の契約の恵みを実感させ、祈りと礼拝へと導く。

〈展開例〉**1. この契約が与えられたときの状況は？**

ダビデは、2章で油を注がれユダの王となりました。その後、イスラエルとの戦いが続き、その結果、5章ではイスラエルの王としても油を注がれました。さらに、彼はダビデの町としてエルサレムを攻め落とし、そこを中心としたダビデ王国の支配が始まりました。つまり、やがて強い力を持つダビデの国の基礎が、徐々に整えられてきている状況だということです。

その中でも欠かせない出来事は、6章にあるように神の箱が天幕の中に運び込まれたことです。7章に記されている神殿建築の幻と、この出来事は切り離せないものです。なぜなら、神の箱があるということは、その神殿の中心が神様であるということだからです。さらには、それはダビデの王国が神様を中心とするためでもありました。ダビデの時代に与えられたこの神殿建築の幻は、その子ソロモンの時代に現実となります。

2. ダビデへの契約はどのようなものか？

11節から13節にあります。大きく2つのポイントを挙げる事が出来ます。

- ①ダビデの王国が、様々な敵からことごとく守られること。
- ②ダビデのために家が興され、その子孫の王国が堅く揺るぎないものにされること。

以上のように、この契約は、ダビデにとって遠い将来のことまで約束された圧倒的な恵みでした。このダビデへの契約は、1章から6章までの

いろいろな出来事の総集編のようなものであり、最も輝く場面なのです。様々な出来事に悩まされ、苦勞していたはずのダビデにとっての「安らぎ(11節)」の約束でもあったにも違いありません。

3. この約束を受けたダビデはどうした？

この圧倒的な契約を受けたダビデは、ただ「なぜわたしの家を…… (18節)」と言う他はありませんでした。神様のあまりの恵みに、ただ、出エジプトの救いを思い出して神様を賛美し、御言葉がその通りになりますようにと願うしかありませんでした。

ダビデの子孫であるイエス様の救いの約束も、このダビデ契約の先にあります。このイエス様の救いを受けた者は、ダビデと同様、神様への祈りと礼拝へと導かれるのです。

4. 話し合ってみよう

- ・現在の神殿である教会について、みんなはどう考えている？ (ただの建物？、それとも、神様が中心の場所？)
- ・祈りと礼拝について。(それは、やらされるもの？ それとも、ダビデのように神様への感謝と喜びに溢れたもの？)

〈おいのり〉

神様、御言葉を感謝します。あなたがダビデに与えて下さった祝福が、今イエス様を通して私たちにも与えられていることをありがとうございます。どうか、神様のことを忘れやすい弱い私たちが、感謝と喜びに溢れてあなたを礼拝することが出来ますように。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。

〈ねらい〉

神中心の信仰生活。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えるよう無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださいと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. ダビデは何故、主のために家を建てようと思ったのでしょうか？

→1. 主を喜ばせるため。主のために良いことと思ったから。

2. 礼拝をエルサレムの中心に据え、神様を中心とした町にしようとした。

Q. 私達の人生の中心は何ですか？ 何のために生きていますか？

→進学、恋愛、家族など……。しかしそれらを

貫く人生の主な目的がなければ、それらにとられ、何のために生きているか分からずに空しさを感じてしまうだろう。神様を知り、喜び、神様の栄光を現わすことこそ、真に生きがいを与える人生の土台である。『子どもカテキズム』問1参照。教師自身が神様と出会う前に持っていた価値観、人生観と、信仰を持った後のそれとを比較しながら証しすれば助けとなるかもしれない。

Q. 神様はダビデの計画に対して、どのようにお応えになりましたか？

→「主があなたのために家を起こす。」(11節)とおっしゃり、この子孫が主のために家を建てると約束された。

Q. この子孫とは誰を指しているのでしょうか？ 建てられた家とは何ですか？ 私達とはどのような関わりがあるのでしょうか？

→ソロモンとエルサレム神殿。しかし神様とダビデの間に立てられたこの約束＝ダビデ契約は、ダビデの子であるイエス様において成就し（「神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。」ルカ1:32）、イエス様は真の神殿である御自分の教会を建てられた（マタイ16:18）。私達はこの救い主イエス様とキリスト教会を通して神様を礼拝し、喜ばれるように生きる幸いな人生を教えられ、そこに参与してゆくのである。

4. お祈り

神様中心の幸いな人生を歩めるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

〔ダビデへの契約の実現としての神殿完成〕

ダビデは「主の御名のために」（歴代誌上22：7）神殿建設の志を与えられながら、その実現を息子ソロモンに託することになります。そして自身の死を前にして神殿建設のために金十萬キカル（約3420トン）、銀百万キカル（約34200トン）、大量の青銅、鉄、材木、石材、さらには、色彩豊かな石などあらゆる種類の宝石と大量の大理石を準備するとともに、個人の財産を大量に寄贈します。また、多くの職人、採石労働者、石工、大工、あらゆる分野の達人を整え、そして前廊、さまざまな建物、貯蔵室、階上の間、奥の部屋、贖罪所などあらゆるものの設計図をソロモンに手渡します（歴代誌上22：14-16, 29：2-5, 28：11, 12）。「今こそ、心と魂を傾けてあなたたちの神、主を求め、神なる主の聖所の建築に立ち上がれ。」（歴代誌上22：19）と、ダビデはソロモンを支援するようにイスラエルの高官たちすべてに命じました。

このようにして、ソロモンは父ダビデの王座を継いで、四年目に神殿建築に着手し、七年を要してその神殿建築を成し遂げます（列王記上6：38）。さらに、ソロモンは主の神殿に置くためのあらゆる祭具を作り、その仕事がすべて完了すると、父ダビデが聖別した物、銀、金、その他の祭具を運び入れ、神殿の宝物庫に納めました（7：48-51）。

そして、ソロモンはイスラエルの長老、すべての部族長たちを召集し、主の契約の箱のみならず臨在の幕屋も、幕屋にあった聖なる祭具もすべて担ぎのぼって、イスラエルの全共同体と共にその箱の前でいけにえとして羊や牛をささげました（8：1-5）。契約の箱の中には、モーセの十戒の板二枚がありました（8：9）。

「祭司たちが聖所から出ると、雲が主の神殿に満ちた。……主の栄光が主の神殿に満ちた……」（8：10, 11）ように、主はこの神殿を祝福され、その臨在を表されました。実に、「主は約束なさ

たことを実現された。」（8：20）のです。

〔人の心をご存じでおられる神の前に祈る〕

このようにして主の神殿を完成したとき、ソロモンは、「イスラエルの全会衆の前で、主の祭壇の前に立ち、両手を天に伸ばして」（8：22）祈りました。それは、「神は果して地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。」（8：27）との告白を伴うものです。これは、主なる神がどこか一定の領域に限界づけられることなく、すべてを通じて遍在したもうことを意味しています（カルヴァン『キリスト教綱要』第3篇第20章第40節）。そして、ソロモンは、この地上にある神殿に主なる神がその臨在を表してくださることを、主の御言葉の約束に基づいて告白しつつ、その祈りの全体として、罪の赦しを嘆願します（8：30, 39, 47, 50）。

この嘆願の中で、ソロモンは、「まことにあなただけがすべての人の心をご存じます。」（8：39）と告白します。これは、「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか。心を探り、そのはらわたを究めるのは主なるわたしである。」との真の預言者エレミヤの告白同様（エレミヤ17：9, 10）、人の心の中の罪そのものも、真実に知っておられるのは神お一人であるという深い畏怖に満ちた言葉です。このような信仰の姿勢に学ぶとき、わたしたちは、罪を自ら裁く者から、神の裁きにすべてをゆだねる者へ変えられます。

父ダビデもその王国の黄金時代に大きな罪を犯した時に、「神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐってください。」（詩編51：3〔新共同訳〕）と祈りました。いつも、神の前に心の目を明らかにしているように努めつつ、祈りましょう（ルカ11：35参照）。（宮武輝彦）

6月24日 「ソロモンの神殿建築と祈り」 説教展開例

テキスト 列王記上8章22～53節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問3, 66, 68

(単元のねらい)

ダビデの願い求めた神殿建設が、その子ソロモンによって成し遂げられた。ソロモンは、神殿を建てて契約の箱をおさめ、いけにえをささげて主なる神を礼拝した。今日は、その礼拝に際してささげられたソロモンの祈りを取り上げる。祈りはいくつもの項目に及んでいるが、とくに神殿建築の榮譽を神に帰す祈りと神殿の祝福を願って神の憐れみを求める祈りに目を留める。主なる神を礼拝する営みは、まったくもって神の御業によって始められ、成し遂げられるものなのである。今日は、主イエス・キリストのあがないの御業により、新しい神殿である教会が建てられ、礼拝がささげられている。この礼拝も、主なる神のへりくだりと約束に基づいている。感謝して、わたしたちも神の祝福を求めたい。

「ここに御目を注いでください！」

ダビデは、主なる神さまに神殿を建築することを願いました。主なる神さまは、けれども、それはダビデのすることではないとおっしゃって、神殿建築をお許しになりませんでした。エルサレムに神殿を建築したのは、ダビデの子ソロモンです。

しかし、ダビデの、主なる神さまのために神殿を建てたいと願う気持ちはたいへん強いものでした。彼自身が建てることは許されませんでした。建てるための準備をしておこうと考えました。ダビデは、神殿建築に必要なさまざまな資材を整え、ダビデ個人の財産も寄贈したようです。

ダビデが死に、ソロモンが次の王さまになりました。ソロモンは、さっそく神殿の建築に取りかかりました。レバノン杉の木材や石材の用意を整えて、ソロモンが王さまになって四年目のこと、神殿の建築を始めました。神殿は、たいへん大きくて立派なもので、十三年の年月がかかって、ようやく完成しました。

ソロモンは、その神殿に神の箱を運び入れます。神の箱とは、十戒の戒めの刻まれた石の板をおさめた箱であり、契約の箱とも言われます。主なる神が共にいてくださることのしるしです。その契約の箱を神殿に運び入れ、いけにえをささげて礼拝をささげました。そのようにして、主の御名をほめたたえたのです。主なる神がイスラエルの民

を祝福し、またエルサレムの町を守られるようにと祈って、礼拝をささげました。

さて、この神殿建築は、ソロモンが王さまになって最初の大事業でした。ダビデが王さまになってエルサレムの町づくりをする、その最初に神の箱を運び上げて、神殿を建てたいと願ったように、ソロモンも、王さまとしてのまず最初の大事業として、神殿を建築することに取りかかりました。これは大切なことです。ここに、ソロモンの信仰の姿を見ることができます。

先週もお話しましたが、エルサレムに神殿を建てることは、生活の中心に神さまを礼拝することを置くということです。神さまを中心にする生活、礼拝をささげる生き方を、神さまは喜ばれます。ソロモンも、イスラエルの人たちが神さまの御言葉に聞き従って生活すること、礼拝をささげて生きることを願って、神殿を建築したのです。

ソロモンは、神の箱を神殿に運び入れて礼拝をささげたときに、イスラエルの民を代表してお祈りをささげました。そのお祈りから、ソロモンの信仰の姿勢を学びたいと思います。

一つには、ソロモンは、主なる神に感謝をささげて祈りました。「心を尽くして御前を歩むあな

たの僕たちに対して契約を守り、慈しみを注がれる神よ」と呼びかけて、約束を守り、成し遂げてくださる神の御業に感謝をささげました。神殿を建て上げるとは、決して人のわざではありません。人はそのために用いられますが、神の御心、神の御業でないならば、成し遂げられることはありません。主なる神がダビデに約束し、応えてくださったから、こうして、神殿を建てるといふ大事業をなし終えたのです。資金や資材、人材がすべて与えられ、整えられたのも、主の憐れみです。ソロモンは、ご自身の約束を成し遂げてくださる主なる神の御業をほめたたえました。

次に、ソロモンのお祈りで非常に印象的な言葉があります。「神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません」。ここには、ソロモンのへりくだった信仰の姿があらわれています。主なる神は、天と地をお造りになったお方であり、人間の建てた神殿にお住まいになるような小さなお方ではありません。神殿を建てて、そこに神がお住まいになる、それは、そこに神さまを拘束し、束縛し、さらには小さなお方としてしまうことになりかねません。ソロモンは、人間が建てる神殿の、この危険性を知っていました。ですから、神殿が主なる神にふさわしくないことを率直に認めます。その上で、なお、このところに「わたしの名をとどめる」と約束してくださった主の御言葉に目を留めます。主がこの神殿にいてくださるとは、ただ主の憐れみ、へりくだりなのです。主なる神よ、どうか、ご自身の約束に基づいて、このところにいまして、私たちの礼拝と祈りをお受け入れくださいと願います。主なる神の憐れみのゆえに、この神殿において神との生きた交わりが与えられるようにと祈り、祝福を求めます。

ソロモンは、ほかにもいろいろ祈りをささげました。罪の赦しを求めて祈り、罪を犯したとき

にあなたに立ち帰ることができるようにと願いました。災いや病気、悩みのときに私たちの訴えを聞いてくださいと祈りました。イスラエルの民ばかりでなく、外国人であっても、主の御名によって祈るなら、耳を傾けてくださいと祈りました。

それらのどのお祈りも大切なのですが、とりわけ先ほどのお祈り、主なる神がへりくだって地上の神殿に住んでくださると約束してくださっているということを心に留めたいと思います。

神殿は、そこに神がへりくだって、人とお交わりくださる、礼拝の場所です。主なる神は、ご自身の約束に基づいて神殿を建て上げ、へりくだってここにとどまり、そのようにして、まさに神ご自身が礼拝の基となってくださいました。

この神殿は、やがて来られる主イエス・キリストを目指しています。ダビデに対する約束は、ただ地上の神殿のことだけではありませんでした。ダビデの子としてこられる救い主イエス・キリストこそが、まさにご自身の御業によって新しい神殿を建ててください、礼拝の基となってくださったことを思い起こします。主なる神は、今は神殿はありませんが、キリストの体である教会があります。ご自身の十字架と復活の御業によって新しい神殿である教会を建て上げ、私たちがまことの神さまを礼拝することができるようにしてくださいました。

今日の教会も、罪人の集まりであって、主なる神をお迎えする器としてふさわしいものではありません。しかし、主のへりくだりによって、また主の約束に基づいて、教会は、主の宮、神殿であり、神をほめたたえる群れとされています。教会に集められて礼拝をささげる幸いを喜びましょう。そして、教会に「わたしの名をとどめる」と約束し、私たちを招いてくださっている主に感謝して、神の憐れみの大きさをほめたたえたいと思うのです。 (望月 信)

[今週の暗唱聖句] 列王記上8章29節前半

そして、夜も昼もこの神殿に、この所に御目を注いでください。

ここはあなたが、「わたしの名をとどめる」と仰せになった所です。

〈ねらい〉

神様は、ソロモンを導いて神殿を建てられたように、私たちの教会も建てて下さり、守っていて下さいます。そのことを覚え、感謝しよう。

② 「ソロモンは神様に何をお祈りしましたか？」

(答え) 「そうだね、ソロモンは、神様が私たちをいつも見守っていて下さるようにお祈りしました。私たちも同じようにお祈りしましょう。」

〈展開例〉**① 「主の神殿が完成した時、ソロモンは何をしましたか？」**

(答え) 「そうだね、ソロモンは心からの感謝のお祈りをしました。」

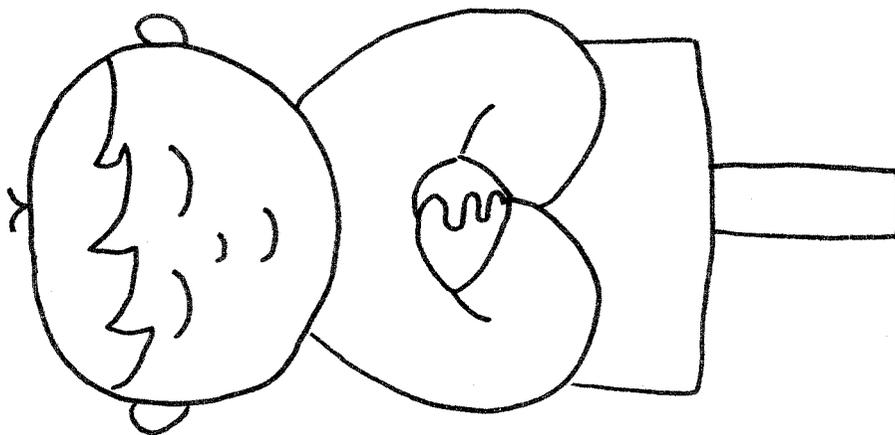
〈祈り〉

私たちの教会をいつもお守り下さり感謝します。今日お休みしたお友だちは、来週は日曜学校に来ることができるようにして下さい。

〈やってみよう〉**みんなでお祈りの歌を歌おう！**

下図のようなペープサートを作り、“おいのりはね、フムフム……”を歌いながら、持っているペープサートを隣の子に渡していく。

ペープサートは、画用紙に描き、色を塗って切り取り、割り箸をテープで留める。(お祈りの姿勢は参考図ですので、各自お考え下さい。)

**三つの約束 (1節のみ)**

おいのりはね (フムフム)
まいにちするんだぜ (OK!)
いつもイエスさま
きいてくれるから

(太平洋放送協会、『友よ歌おう』より)

〈ねらい〉

ソロモンが立派な神殿を建てたのは、父ダビデに約束され命じられていたことでした（列王記上8:17～19）。ソロモンにとってこのような仕事は、大きな喜びであり光栄だったことでしょう。私たち自身もキリストの体であり聖霊の神殿です。子どもも大人も、喜んで神殿を建て上げる働きにあずかっていきましょう。

神殿は何をするところだったのでしょうか。次のことを知って欲しいと思います。①そこは祈りの家でした。ソロモン自身の献堂式の祈りの中で、神殿が民の祈りの場であると言われていました（8:30、33、42他）。主イエスも神殿を祈りの家と言われます。②そこはまた神と私たちの交わり、「会見」の場でもありました。幕屋が神の「臨在の幕屋」であり、そこは神が「イスラエルの人々に会う」会見の場（出エジプト記29:42～44）であったのと同じ恵みでありました。今日の教会での礼拝の恵みそのものでもあります。③しかしそのためには、罪の贖いと赦しが必要でした。ソロモンは人々の罪の赦しを祈り求めています（8:30、36、39他）。そして幕屋の時と同様、和解の献げ物、焼き尽くす献げ物がささげられました。これは今日、私たちが贖い主、主イエスによって与えられる恵みです。

〈展開例〉

1. ソロモンは父ダビデの跡を継いで、イスラエルの王となりました。王となって4年目に神殿建築にとりかかりました。もともとダビデが建てることを願っていたのですが、神はダビデではなく彼の息子が神殿を建てるように言われていたのです。
2. さてソロモンが建てた神殿は、どのようなものだったのでしょうか。大きさは奥行き27m、間口9m、高さ13.5mでした。金で被われたりして、たいへん立派なものでした。神の契約の箱も至聖所といわれる神殿の一番奥に安置

されました。礼拝で使われる物も、ていねいに造られました。全て完成するのに7年もかかったのです。神の栄光が神殿に満ちました。

3. しかしどんなに立派な神殿でも、神を建物のなかに閉じ込めることなどできませんね。いや天や地でさえもできません。

ソロモンは、神殿に神が御目を注いでくださり、そこでイスラエルの人たちがささげる祈りを、お聞き下さるようにお願いしました。またそこで神がイスラエルの人たちにお会いして下さるよう願いました。神の民にとって、祈りが聞かれ、神にお会いできることほど素晴らしいことはないからです。

4. そのためには自分たちの罪が許されなければなりません。そうでなければ聖なる神の御前には出ることはできないからです。神殿ではそのため、贖いの犠牲の動物がささげられました。これが神殿での礼拝の中心でした。今では私たちのために贖い主として、主イエスがすべての救いの御業を成し遂げてくださいました。だれでも主イエスを救い主として信じる人は、罪を許されて神の御前に立つことができるのです。

〈ワーク〉

1. ソロモンの神殿について、聖書辞典などで調べ、どのようなものであったか確かめてみましょう。神殿の絵があるといいですね。またそこにはどのようなものが置かれていましたか。
2. 神殿での礼拝と教会での礼拝とを、比べてみましょう。同じ所と違うところがありますね。なぜでしょうか。

〈おいのり〉

神様、私たちを礼拝へと招いて下さりありがとうございます。日曜日の礼拝から次の礼拝まで、神様がいつも共にいて下さり、私たちを守り、導いてください。神様が共にいてくださることをここから感謝します。

〈ねらい〉

約束の実現に対して、神様を喜び感謝し、祈りへと子供たちを導く。

〈展開例〉

1. ついに、神殿が完成した！

ダビデが望み、神様が約束された神殿建築はソロモンの時代に始まり完成しました。そのことを成し遂げたソロモンはもちろん、イスラエルの民全体にとっても有頂天となるほどの喜びであったかもしれません。けれども、それは何も神様を忘れた喜びではありませんでした。まず、彼らが行ったこと、それは、礼拝であり祈りでした。彼らの喜びは、礼拝と祈りの中にありました。この神殿建築は、最初から最後まで神様の導きの中で行われました。その確かな証拠が、祈り、そして、礼拝ということなのです。

2. ソロモンの祈りとは？

このソロモンの祈りの特徴は、それが、全く神様を中心として献げられている祈りだということです。25節までの箇所、ソロモンは先週学んだダビデの契約を思い起こし、それが今後もなされるよう祈ります。そこから、ソロモンはひたすらイスラエルの民の祈りが神様に聞き届けられるように祈ります。イスラエルの民の歩みは、神様の交わり（祈り）が無ければ成り立ちません。ソロモンはそのことを良く知っているのです。

ソロモンは、ここで、神殿建築をした自分が凄いと行って自慢しているのではありません。かえって、神様の大きさと人間の小ささを祈っています。そこには、人間の凄さどころか、人間の罪に染まった醜さが祈られています。そして、そのような人間への救いが願われているのです。

ソロモンの神殿建築の中心にあったのは神様でした。だから、その喜びも神殿建築をしたという人間的なものではなくて、祈りと礼拝の中にある

のです。

3. 神様の契約は確実に実現する！

先週のダビデに与えられた約束は、その子供ソロモンの時代に成されました。神殿建築が行われ、ソロモンの時代にその王国は揺るぎないものとなりました。

ですから、神様の契約は確実になされるということ、私たちは今日の箇所から確認することが出来るのです。私たちは神様の契約に確信して、安心して委ねることが出来るのです。

4. 話し合ってみよう。

- ・イエス様によって救いの約束が実現したが、私たちはそのことを実感できているか。
- ・自分に与えられた救いの約束の成就を感謝して神様に祈っているか。

〈おいのり〉

神様、あなたが私たちに確かな救いの約束を与えてくださり感謝します。私たちは弱いですから、すぐにその確かさを忘れてしまいますが、どうか、私たちがイエス様の救いの確かさをいつも覚えることが出来ますように。神様に感謝の祈りと礼拝を捧げることが出来るようにお導きください。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。



この神殿に来て祈るなら

〈ねらい〉

ソロモンの祈りを通して信仰の姿勢を学ぶ。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 神殿建築を成し遂げたソロモン王は祈りを捧げましたが、どのような思いで祈ったのでしょうか？

→父ダビデ王に約束なされたことを御手をもって成し遂げてくださった神様の真実を賛美した。

Q. ソロモン王は「これはイスラエルの神様の偉大さにまさにピッタリの神殿だ！」と考えていたのでしょうか？

→ソロモン王は、「イスラエルの神、主よ、上は天、下は地のどこにもあなたに並ぶ神はありません。」(23節)と信じていたので、「神は果たして地上にお住まいになるのでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。」(27節)と神殿の限界をもわきまえていた。ソロモンの謙遜は、人間には決してとらえつくすことの出来ない神様の偉大さを知っていたことによる。

Q. ソロモン王は、「ここはあなたが、『わたしの名をとどめる』と仰せになった所です。」との約束に基づいて神様に神殿において神様との生きた交わりが与えられるように、祝福を請い願いました。「わたしの名をとどめる」とは、どのような意味でしょうか？

→聖書において、名前は単なるラベルではなく、そのものの本質を表している。だから、この意味は、神様が神臨在し、共にいてくださるということである。

Q. 偉大な神様が何故、「罪を犯さない者は一人もいません」(46節)のような人間の造った神殿に共にいてくださるのでしょうか？

→神様のへりくだり。それを受ける資格のない者への一方的好意である恵みによる。

Q. 私達にとって神殿とは何でしょうか？

→一人ひとりがそうである(コリントー6:19)と共に、その集まりである教会こそ神様の神殿である(エフェソ2:21~22)。

Q. 私達は罪人で、その集まりである教会さえ「すべての人の心をご存じ」(39節)である神様の御目の前には「罪人の集まり」に過ぎません。そのような私達と本当に神様は一緒にいてくださるのでしょうか？

→「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタイ28:20)。神様の恵み深さをほめたたえよう。

4. お祈り

神様のへりくだりの恵みに感謝しよう。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

第1課 キリスト者と「善き生活」**はじめに**

「一つ善き生活とは何ぞ。我らは律法主義者にあらず、また律法廃棄論者にあらず。キリストによる贖罪に基きて聖霊なる神の我らの内に恵みたまう聖化は信仰者の必ず熱心に祈りて求むべきものなり。完全聖化は地上においては与えられず、我らは日ごとに己の罪の赦しを求め、また己に罪を犯す者の罪を赦さざるべからずといえども、聖霊に感じて互いに兄弟の罪を戒むるはキリストにある者の為すべき事なり。宗教改革運動の主潮流たる改革派教会最大の指導者ジョン・カルヴィンの働きしジュネーヴの教会が信仰生活の訓練に関して模範的実績を示せしは周知の事実なりとす。」

少々長くなりましたが、私たちの『日本基督教改革派創立宣言』より引用しました（旧字体は読みやすく改めた）。「善き生活」についての改革派教会の神学的・実践的立場を簡潔に言い表した優れた告白です。とりわけ、「我らは律法主義者にあらず、また律法廃棄論者にあらず」という冒頭の言葉は重要で、これを正しく理解することが全聖書66巻を「信仰と生活の唯一の基準」として持つためのカギとなります。

今年度の成人科では、「善き生活」ということをテーマに、私たちがキリスト者として今日の社会で神の律法、とりわけ「十戒」を生きるとはどういうことなのかを学んでまいりたいと思います。この学びを通して、私たちが、今の世から逃避するのも妥協するのもなく、「むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるように」なって（ロマ12：2）、力強くかつ晴れやかに生きて行くことができるようになれば、と願っています。

命の道

創世1-2章、ハイデル問6、詩編1：1-3、
申命30：16、詩編19：8-11、ロマ7：12・14。

万物は、混沌とした闇から神の御命令によって命にあふれた秩序ある世界へと創造されました。同様に、神のかたちに創造された人間もまた、神の戒めによって初めて秩序ある生活を営むことができるようにされたのです。それはとりもなおさず、人が神との幸いな命の交わりの中で生きるための神の御配慮なのでした。

ですから、神の御意志の啓示である律法は、本来、霊的なものであって、聖であり善いものです。またそれは、その本質において、人を創造された御父の愛の言葉であり、人を真に生かす命の道だということをまず理解しましょう。

愛の律法

申命6：5、サム上15：22、詩編119：97、
ロマ13：8-10、ウ大99：2、マタイ22：37-40。

律法が神の愛の表明であるならば、従う者もまた、全身全霊をもって主を愛することが求められます。主に聞き従うことはいけにえにまざる、と言われるのはそのためです。実際、旧約の信仰者たちは、しばしばこの律法への愛をあらわしました。神の御旨を尊ぶことと神を愛することは、一つのことだからです。

神を愛することはまた、隣人を愛することでもあります。なぜなら、神は隣人の主でもあられ、私たちと同様、隣人も神によって創られ、神のかたちを宿しているからです。

したがって律法全体は、主イエス御自身がおまどめになったように、次の二つの愛にまとめられ、これら二つは切り離すことができません：

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」

「隣人を自分のように愛しなさい。」

律法の完成者キリスト

マタ5：17、ロマ10：4、ガラ3：13、2：20・21。
「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである」。

主イエス・キリストこそ、律法の完成者であり目標です。なぜなら、キリストは神の義と愛の完全な現われだからです。

主イエスは、地上での御生涯を通して、律法の真の意味を明らかにされたばかりか、人として果たすべき律法のすべての要求を完全に実現されました。それは、私たちの罪のゆえに呪いとなってしまった律法から私たちを解放するために、罪のない方が呪いとなるためでした。こうして主は、十字架上での死によって私たちを贖い、律法によらない命の道を開いてくださったのです。

したがって、私たちはもはや自分自身のものではなく、キリストのものでした。私たちが神の御心にならざるに生きる道は、キリストに結び合わされる以外にありません。

自由の律法

Ⅱコリ5：17、エフェ2：10、ウ告白9：4、
ロマ12：1-2、ウ告白15：6、16：2-3、
ヤコ2：26、ガラ5：6、ハイデル86、60周年、
マタ5：16。

私たちを律法の呪いから解放してくださったキリストは、御自身の霊によって、私たちを生まれ変わらせてもくれます。キリストに結び合わされた私たちは、善い業をするように命の御霊によって新しく創造された者なのです。

ですから私たちは、強いられるのではなく、御国の子らとして、今や全く自由に神に仕える者とされています。私たちは、ただ主に対する感謝の思いから、御霊によって何が神に喜ばれることかをわきまえ知り、自分のすべてを自ら捧げて主を愛します。

行いを伴わない信仰は、死んだも同然です。私たちは、与えられた神の恵みをいっそうかきたて、主の律法に従う生活によって福音の告白を飾り、隣人をもキリストにある命の喜びへと招くのです。それは、私たちを通して御国の栄光が現され、ただ天の父の御名があがめられるためです。

十字架の道

マタ16：24、ウ告白15：2、6、ガラ4：19、
Iヨハ1：9、4：12、ガラ5：14、フィリ2：1-9。
キリスト者の生活は、しかし、十字架の道です。

私たちは世にある間、自分自身の罪と弱さ、世の誘惑や悪と戦わなければなりません。私たちは、主の憐れみを祈りつつ、ますます自分に死んで、キリストに生きることを学ぶのです。

キリストが内に形づくられるまで、キリスト者の一生は悔い改めの生涯です。私たちは、神の御前に自分の罪を認めて告白し赦しを乞うと同時に、すべての罪から離れて神に立ち返り、神と共に歩むことを決意しなければなりません。私たちはまた、自分の罪で傷つけた隣人に対しても心からの赦しを乞い、悔い改めを明らかにする必要があります。そうして互いに赦し合い受け入れ合うことによって、悔い改めは真実なものとなります。神への愛は、隣人愛によって全うされるからです。

このようにして私たちが打ち砕かれて行くことが、イエスの命を帯びることであり、とりもなおさず福音を帯びることなのです。私たちは、キリストの徹底的なへりくだりに倣うことを通して、キリストに似る者となりその栄光にあずかります。

天を目指して

ハイデル114、60周年、マタ6：19、
フィリ3：14、フィリ1：6、ハイデル115、
Iヨハ3：2。

この世においては、最も聖なる業も罪を免れません。にもかかわらず、どのような奉仕の業も無駄にはならず、栄光の御国において永遠の意味を持ちます。私たちは、この世にありながら、神の国を現実に生き始めているからです。

私たちは、この世の富や名誉や幸福を求めることなく、朽ちることのない天上の命を慕い求めます。それは、キリストとともにある永遠の命です。地上の生活のすべては、この目標に向かう中においてのみ、正しく意味づけられ整えられるのです。私たちの内に始められた善い業は、やがて、この生涯の後に、完成という目標に到達します。私たちは、主イエスに全く似た者へときよめられ、御心を完全に行う者として、栄光の御国へと迎え入れられるのです。

ディスカッションのために：

- 1 「律法主義者」と「律法廃棄論者」の問題は？
- 2 キリスト者の「善き業」の特徴は何か？

第2課 感謝の生活の基準 (十戒序文)**十戒序文**

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」

キリスト教会と十戒

キリスト教会は昔から、善き業の基準としての「十戒」を重んじてきました。それは、何よりもまず、主イエス・キリスト御自身が十戒を前提とし(マタイ19:18-19)、むしろその霊的本質を明らかにされたからであり(マタイ5:21, 27)、パウロなどもそれを継承したからです(ロマ7:7, 13:9)。もちろん、キリスト者の生活ということから言えば他にもたくさんの教えがありますが、やはり十の戒めにまとめられている点が、「使徒信条」や「主の祈り」と同様、覚える上でも教える上でも便利であったという実際的理由もあるのでしょうか。

十戒の区分

「十戒」(申命4:13, 10:4)と言う言葉は、文字通りには「十の言葉」という意味で、そこからDecalogue(デカログ)という呼び名が生まれました。シナイ山で神によって告げられた数ある戒めの中で、ユダヤ教とキリスト教は出エジプト記20章(2-17節)と申命記5章(6-21節)にある戒めを伝統的に「十戒」と呼んできました。とは言え、もともとそれぞれの戒めに番号が振られていたわけでもなく、二枚の石の板にどのように刻まれていたのかもわかりません。そこから、内容はともかく、十戒の数え方や構造の理解にいくつかのバラエティーが生じるようになりました。

戒めの数え方は大きく二つの伝統が、キリスト教の初期から存在してきました。一つは、ローマ・カトリック教会などで伝統的に受け継がれてきた数え方で、私たちの数え方で言うところの第一戒と第二戒とを合わせて第一戒とし、以下順次繰り下って最後の第十戒を二つに分けて数を十にす

るというやり方です。これは、アウグスティヌス以来の伝統で、ルターとルター派教会でも採用されました。もう一つの数え方は、イエス時代のユダヤ教に端を発し、主としてギリシャ教父やヒエロニムスなどによって受け継がれ、カルヴァンや改革派・英国国教会などで採用された数え方です(ただし多くの場合、序文は第一戒に含まれます)。十戒は神に関する戒めと隣人に関する戒めからなっており、前者の数え方では三つと七つという完全数によって分けられ、後者では四つと六つに分けられます。いずれの場合でも、内容そのものには変わりはありません。

十戒の普遍性

ウ告白19:2・5、エフェソ4:14、ハイデル91。

第1課で学んだとおり、神の律法である十戒は、永遠に変わることのない神の御意思の表明です。ですからそれは、時代によって変わるような人間の教えや思いつきとは異なり、その本質において、いつの時代にもあてはまる恒久的・普遍的な規範なのです。それはまた、造り主なる神の戒めですから、私たち人間のあるべき姿を根本的に規定し方向付ける言葉でもあります。諸々のルールを守ることによって社会の営みがスムーズに行くように、創造者のお定めになったルールに従うことが人間にとって最も安全かつ幸いな道なのです。

十戒の性質

ウ大99、Iヨハ4:7-8、マタイ5:21-47。

十の戒めは、一人の神の御心であるがゆえに、互いに関連し合い、有機的に結びついています。つまり、一つの戒めは全体に、全体は一つに関わっているのです。神を愛することなく隣人を真に愛することはできず、隣人を愛さずに神を真に愛することもできません。

各々の戒めには積極的な面と消極的な面の双方があり、禁じられている場合は反対のことが命じられており、命じられている場合には反対の罪が禁じられています。しかし、禁止にはより恐れお

ののき、命令にはより従順であることが求められていることも真実です。

私たちは、かつて始祖が犯した過ちを繰り返す事のないよう、戒めに表された神の愛の御旨を深く求め、これに謙遜に従う必要があります。何より主イエスの御教えと御生涯が、律法の完全な意味であり模範であることを心に留めましょう。

感謝の生活の基準～序文の意義

ウ大97、ハイデル86、ウ大101、Iヨハ4:10、
申命27:9-10、ヨハネ20:28、ジュネ129、
ハイデル91、ウ告白16:1-2、ウ大91、
ウ小2:39、Iペト2:9-10。

十戒は、すべての人に対する普遍的基準であると同時に、とりわけ神によって救い出された人々の感謝の生活の基準であり指針です。このことをよく表しているのが、十戒の序文です。

「エジプトの国、奴隷の家」とは、この世の力や罪の力にがんじがらめになった人間の状態、と
言うことができるでしょう。出エジプトに現された神の救いの御業は、やがて十字架上で成し遂げられる主イエス・キリストの救いの予型です。罪の奴隷状態からの解放とは、まさに私たちに実現した神の救いの出来事なのです。

そうして、万物の主・全能の神であるお方が、私たちの主また神とられました。これはただ一方的な驚くべき神の恵み・神の愛のなせる業です。私たちはこの神の御業を深く心に刻みつつ、私たちの主となってくださった方の御意思を一言もおろそかにしないようにと励むのです。

神と私たちとのこのような関係を、恵みの契約と呼ぶ事ができます。私たちが行うより先に、神の真実な恵みがこの関係を支えているからです。それ故、十戒のすべての戒めは、この神の恵みという視点から理解されなければならないでしょう。

全生活にわたる感謝

ルカ17:11-19、Iテサ5:18、エフェ5:20、
ジュネ128-130、ハイデル2:86-90、
ウ告白16:2、ウ大97、Iヨハ3:16、
ルカ7:47、ウ告白20:1-2、Iテサ5:18、
コロ3:16、フィリ4:6、エフェ5:4。
「ただ恩恵のみ」の救いに対する最もふさわし

い応答は、「ただ感謝のみ」です。神がお求めになるのは、私たちが救われるために何かをすることではありません。むしろ、その救いを感謝し大喜びする心なのです。

神の救いの恵みに、いつでも感謝できることはキリスト者の特権です。墮落以前の間も、自ら進んで御心に従っていたかもしれませんが、けれども、神がどれほど忍耐強くどれほど深く私たちを愛して赦すお方であるかは知りませんでした。

神の無償の救い・キリストの赦しの愛を知った私たちは、誰から強制されることもなく、恐れることもなく、御父への感謝に満ちた心に促されて、全く自由に自発的に応答するのです。多く赦された者は、多く愛するからです。

主にある感謝は、私たちの思い煩いや悪い思いに打ち勝つ力ともなります。御自身の体と魂を捧げて私たちをお救い下さった主に、全身全霊をお捧げして全生活にわたる感謝を現すことが、キリスト者の生きる力なのです。

私たちの感謝・わたしの感謝

ロマ14:1-10・17、エフェ4:16。

神の救いの恵みが一人一人にふさわしく与えられるように、感謝のかたちもまた人によって多様です。ですから、私たちは、互いの奉仕や生活の優劣を比較したり、ましてそれらを侮るべきではありません。神の国は平和と喜びの国です。皆の感謝を寄せ集め、互いに支え合い補い合って、愛の内に成長して行くことが、キリストの教会の建て方なのです。

感謝の生活の基準としての十戒は、ですから、贖われた神の民の道標であると同時に、その御旨は一人一人に告げられてもいます。私たちは、世にある間、自分自身に与えられた状況の中で、与えられた賜物をもって、具体的な御教えを一つ一つ真剣にしかし喜ばしい希望をもって生き抜いて行くのです。

ディスカッションのために：

- 1 礼拝の中で十戒を唱えることの意味は何か？
- 2 感謝の生活に基準が必要なのはなぜか？
- 3 教会での奉仕のあり方を再考してみよう。
- 4 感謝できないような時はどうすればよいか？

第3課 神を神とすること (第一戒)**第一戒**

「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。」

神を神とすること

ハイデル94、ウ大1、104、ジュネ218-219、
Iテモ6：15-16、ロマ11：36、使徒4：12、
ヨハ17：3、マタイ10：28-31、フィリ2：6-8。
自分を神としたことが人間の墮落の始まりでした。それと同じように、神を神とすることが人間再生の第一歩です。

第一戒が教えていることは、一神教を信じなさいということでは必ずしもありません。神が一か多かということが問題なのではなく、「わたしは主、あなたの神」と御自分を啓示してくださった方を、そしてこの方だけを、ただお一人の生けるまことの神として真実に受け入れ・礼拝し・愛し抜くことができるかということが問題なのです。

このお方こそが神であります。神は祝福に満ちた唯一の主権者して創造者、王の王、主の主、唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住み、だれ一人見たことがなく、見ることのできない聖なるお方です。すべてのものは、この方から出て、この方によって保たれ、この方に向かうのです。

しかし、私たちにとって根本的なことは、このお方が、キリスト・イエスにおいて聖霊を通して、私たちの父となってくださったということです。ですから、私たちにとって、神と呼べるお方は、この父・子・聖霊なるお方以外には存在しませんし、あつてはなりません。私たちを創造し、私たちを愛し、私たちを救ってくださったお方のみが、私たちの神であります。

人の主な目的は、実に、このお方の栄光を表し、このお方のみを永遠に喜ぶことです。それだけが、人間にとっての究極的な幸いであり、この方を知ることが私たちの命なのです。私たちの感謝と喜びに満ちた生活は、ここから始まりここに帰って

きます。それは、礼拝的人生とも言えるでしょう。他方、神を神とすることは、決して人間の軽視にはなりません。むしろ、礼拝的人生こそが人間として真に尊厳に満ちた生き方であり、神ならぬ他の何物にも縛られない真に自由な生き方です。

また、神だけを神とする者は、自分を神とはいたしません。謙遜に、すべての人と分け隔てなく公平に、差別や偏見にとられることなく接し愛するのです。私たちは、そのような真の人間の姿を人となられた御子イエスの御生涯に見ることができるでしょう。

神への誠実さ

創世2：7、詩編121：3-5、列王上8：57-58、
ウ小48、ウ大106・104、ハイデル94、マタ6：24。

「わたしをおいてほかに（直訳：わたしの顔の前に）神があつてはならない」とは、この方と私たちとの間に、いかなる邪魔も入れてはいけないということです。この方は、私たちに真摯に向き合う神であります。ちょうど人を創造なさった時、命の息を御自分で吹き入れられたように、神は片時も私たちから顔を背けようとはなさいません。ひたすら誠実に私たちに向き合っておられます。

したがって、私たちもまた、すべてのことをご存知であられるお方に対し、何の隠し立てもせず、誠実に向き合って生きることが必要です。まして、キリストに結ばれた私たちは、キリストに愛されている花嫁として、この方だけを喜び・愛し、この方だけに二心なく仕え・語りかけるべきでしょう。この方を裏切るくらいなら、むしろすべての被造物の方を捨てる覚悟で生きることです。

不信仰や疑いを抱いてはなりません。このお方は、不変であり正しい方ですから、すべての信頼を置くことができます。絶望したり高慢になってはいけません。全能であり善でありますから、すべての希望を置くことができます。この方に対して、無関心でいたり息憤であつてはなりません。無限であり慈しみ深い方ですから、すべての愛をささげることができるのです。

荒れ野の誘惑の中で

マタ4：1-11、詩編14：1、マタイ10：37、
19：23、黙示2：4・10、3：1・16、Iペト5：8、
ハイデル94、マタ5：13、ヨハ15：4-5、
フィリ4：12-13、詩編46：11。

しかし、この世の荒れ野を生きるキリスト者は、主イエスがそうであったように、絶えざる悪魔の試みにさらされています。それは、神のみを神として礼拝し信頼し続けられかという試みです。私たちの心の置き場所が問われるのです。悪魔は実に様々なかたちで、神ならぬものを神として拝み信頼するようにと、巧みに誘いかけてくるのです。——人生に対する不安や思い煩いをおおっては、神への不信感を抱かせ、占いや魔術や諸々の迷信へと引き込もうとします。

——私たち自身が人生の主であると錯覚させ、神に頼る必要はないとささやきます。

——人間のエゴイズムや優越感を掻き立てて、家族や家系、民族や国家、時には自分の信仰さえも絶対化させ、自分だけが正しいと思わせます。

——テレビや雑誌など様々なメディアを通して宣伝される人間中心の世界観により、神信仰を相対化し、絶対者への恐れを希薄にします。

——時には、暴力や権力によって、強制的に神への忠誠を曲げようとするさえます。

——現世がすべてであるように錯覚させ、今の生活を守ることのみに没頭させて、来る世への喜びに満ちた希望を取り去ります。

——人間の欲求や快楽をおおひ、この世の誘惑の奴隷にしようとする。

——さらにまた、私たちの信仰生活をなまぬるく生気のないものにするによって、神への愛を冷ましてしまいます。形だけの命のない礼拝や信仰生活、信仰者どうしの仲違いや教会の分裂・腐敗などがそれです。

塩気を失った塩は、何の役にも立ちません。私たちは、キリストにつながり続けることによってのみ、命を得るのです。この方からのみ得られる救いと祝福を失わないよう、心の雑音を静めて、この方こそ私たちが寄り頼むべき唯一の神であることを絶えず自分に言い聞かせましょう。

コラム・デオ（神の御前に生きる）

ミカ6：8、Iヨハ1：9、マタ7：11、
ロマ8：32、ガラ4：6、ジュネ141、
ロマ8：26-27、コロ3：1-5、Iコリ13：12。

神の御前に誠実に生きるとは、何よりもまず、私たちがへりくだって神とともに歩むことです。神の御前で、誇れることなどありません。私たちは、自分の罪も弱さもすべてを主の御前にさらけ出して赦しを乞い、しかし神の計り知れない赦しの愛の中を、安んじて晴れやかに生きるのです。

また、神だけが神でありますから、神ならぬものを必要以上に恐れません。御子をさえ惜しまずに私たちにくださったお方に、すべてのことを期待し、すべてをただ御父からの賜物として感謝して受け・満足し・こだわりを持ちません。すべては恵みであり、すべてこの世のことから自由なのです。

私たちが誘ってやまない世俗主義への最も強力な抵抗は、祈りです。真摯な祈りこそ、神が真の主であること、この方の御手の中に自分と世界の一切があることの告白です。祈りには、ただお一人の神への賛美と感謝、自らの罪の告白や嘆き、隣人への愛のとりなし等が含まれます。御子イエス・キリストにより「父よ」と呼びかけ、聖霊のとりなしによっていっそう確実に聞かれる祈りの交わりは、私たちが生ける神の御前で全生活を整える最も確実な道なのです。神の御前で生きるとは、この祈りの姿勢を生きることに他なりません。

こうして私たち地上のものに心引かれることなく、天上のお方へと心を高く上げるのです。私たちの主であられるキリストとの目に見えない、しかし確かな絆は、やがて御許へと引き上げられ、顔と顔を合わせて主とお会いする時の保証となります。その日、この方のみが真の神であられたことをはっきりと知るに至るでしょう。

ディスカッションのために：

- 1 神から引き離そうとする誘惑には、上記の他にどんなことがあるか？
- 2 日常生活の中で頼ってよいものと頼ってはいけないものとの区別は何か？
- 3 祈りの生活の意義と祝福は何か？

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満6年となり、第25号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ50教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています（2006年4月中部中会第一回定期会にて自由募金願いを可決承認）。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

いのちのぱん

ひと ぱん だけ い
「人はパンだけで生きるものではない。」



かみ くち ひと ひと こと ば い
「神の口からでる一つ一つの言葉で生きる。」

またい ふくいんしょ たい しょう せつ
(マタイによる福音書第4章 4節)

にちよう がっこう ともだち
日曜学校のお友達へ！ 「いのぱん」使ってますか？

できない ひ があっても、がっかりしないで！ と 飛ばしても、いいんだよ。

さて、こんげつ から「いのぱん」は ちょっと あたら 新しくなります。

「こどもカテキズム」(300円)を使います。いっしょに開いて読んでね。

も 持っていないお友達は、せんせい に 言ってくださいね。



せいしょ ことば かみ
聖書のみ言葉は、神さまが、あなたに語りかけてくださる「いのちのことば」。

かみ にちよう び れいはい まいにち はなし
神さまは日曜日の礼拝のときだけではなく、毎日、あなたにお話 くださいます。

イエスさまは毎日、君のために、天のお父さまにお祈りしていただきます。

だから、ぼくたちわたしたちは、毎日、神さまのみ言葉を聞くのです。

そして、「イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン」とお祈りするのです。

「いのぱん」は、そんなあなたの友達になりたいのです。

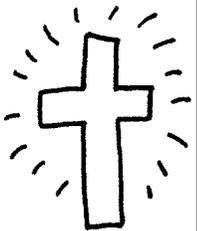
にほんじゅう ともだち おな ことば き いの
日本中にいるお友達が同じみ言葉を聞いて、お祈りしているよ。すてきだよ。

(☆☆☆めんどくさがらずに聖書を開いてくれるとうれしいな。

いっ せつ よ まえ うし よ
一節だけ読んでもいいし、前と後ろを読むととってもいいし…☆☆☆)

イエスさまの祝福が愛するお友達の上にゆたかにありますように

いのちのばん

<p>4月2日（月） 問1 一コリ10章31節 すべて神の栄光をあらわすために</p> <p>天のお父さま、どんなに弱く小さなわたしであっても、ただ神さまを信じていれば、神さまのすばらしさが、あらわされてゆくことを感謝します。今日の一日も、イエスマと一緒に過ごさせてください。</p> 	<p>4月5日（木） 問1 ローマ11章36節 すべてのものは、神から出て</p> <p>天のお父さま、このひろい世界も、宇宙も神さまがお造りくださいました。だから、安心して今日の一日を過ごすことができます。そのこと教えてください。くださってありがとうございます。ごぞいます。</p> 
<p>4月3日（火） 問1 一コリ10章31節 食べるにしろ飲むにしろ</p> <p>今日の朝ごはんは何ですか。好き嫌いを言わないで食べられましたか？ごはんを食べることも、お水を飲むことも、元気な体のためには必要です。神さまは、あなたのために食べ物を与えてくださいます。感謝して、つまりお祈りして食べる人は、神さまの栄光をあらわしています。</p>	<p>4月6日（金） 問1 ローマ11章36節 神によって保たれ</p> <p>天のお父さま、今日の新しい一日が、どんな一日になるか分かりませんが、けれども、神さまがお始めくださり、お守りくださっています。ですから安心して、神さまのために、お友達のために、生きられます。</p> 
<p>4月4日（水） 問1 一コリ10章31節 何をするにしてもすべて～</p> <p>天のお父さま、がんばれるときも、がんばれないときもあります。がんばれないときは、神さまの栄光をあらわせないのですか？いいえ違います。神さまを愛している人なら、たとえ病気で寝ていても、そのまま、神さまの栄光を現しているのです。</p>	<p>4月7日（土） 問1 ローマ11章36節 神に向かっているのです。</p> <p>天のお父さま、神さまがいっしょにいてくださることがわからなくなるような、いやなことや、つらいことがあります。でも、神さまより強いものはありません。神さまが勝ってくださいることを信じます。</p> 

いのちのパン

<p>4月9日（月） 問1 ローマ11章36節 栄光が神に永遠にありますように</p> <p>まことの神さまは言われます。「あなたは、わたしの栄光をあらわすためにわたしが命をあたえた、わたしの子どもです。」「神さまの栄光のために！」これが、私たちのこたえです。生きる目的です。いつでも、どんなときでも、これを僕たち私たちの「合言葉」にしましょう！</p>	<p>4月12日（木） 問1 ヨハネ17章22節 栄光を、わたしは彼らに与え</p> <p>天のお父さま、「神さまの栄光のために」とがんばりたいのですが、できません。でもイエスさまは、イエスさまの栄光をわたしにもあたえてくださったと仰いました。今日も、そこからはじめさせてください。</p> 
<p>4月10日（火） 問1 ローマ5章11節 神を誇り（喜び）としています</p> <p>あなたはイエスさまによって神さまの子どもとされています。天のお父さまは、あなたが神さまの子どもであることを喜んでおられます。嬉しいですね。一緒に神さまが天のお父さまであることを喜びましょう。神さまは、あなたが喜べば喜ぶほど、ますますあなたを喜んでくださいます！</p>	<p>4月13日（金） 問1 ヨハネ17章22節 栄光を、わたしは彼らに与え</p> <p>天のお父さま、今日も日曜学校のお友達たちの信仰をお守り下さい。場所は離れていても、イエスさまによって神さまの家族です。「いのちのパン」を読んでいる日本中のお友達を祝福してください。お互いに祈りあうことが、神さまの栄光をあらわす道だからです。</p>
<p>4月11日（水） 問1 ローマ5章11節 神を誇り（喜び）としています</p> <p>天のお父さま、わたしは、毎日、お祈りしよう、「いのちのパン」をしようとしても、できないときがあります。それでも、わたしのことを誇りに思ってくださいね。あなたこそわたしの誇りです。</p> 	<p>4月14日（土） 問1 詩編73章28節 彼に近くあることを幸いとす</p> <p>わたしたちの生きる目的は、神さまを知ることです。それは、神さまを天のお父さまとして知ることです。神さまの子どもとしていつも近づくことができること、こんなに嬉しいことはありません。いつまでも近くにいたいですね。これがわたしたちの幸せであり、最高の喜びだからです。</p>

いのちのばん

<p>4月16日（月） 問2 エフェ5章8節 主に結ばれて、光となっています。</p> <p>イエスさまを信じる人は、イエスさまの光を浴びます。ただそれだけで、あなたもキラキラと美しく光り輝いています。神の栄光を浴びているからです。それが神の栄光をあらわすことです。自分も周りの人も、その輝きをよく見れません。でも大丈夫です。天のお父さまは見ておられます。</p>	<p>4月19日（木） 問2 ヨハネ1章12節 神の子となる資格を与えた</p> <p>天のお父さま、わたしはイエスさまを信じています。ただそれだけで、神さまの子どもとなることができました。これ以上の宝物はありません。このお恵みを心から感謝します。わたしのお友達も神さまの子としてください。</p> 
<p>4月17日（火） 問2 エフェ5章8節 光の子として歩みなさい。</p> <p>天のお父さま、僕は光であるイエスさまを信じて、光の子どもになりました。自分で光ることはできません。今日も、光の子どもとして、光のイエスさまを見上げて過ごさせてください。</p> 	<p>4月20日（金） 問2 ヨハネ1章13節 神によって生まれたのである。</p> <p>イエスさまは、神さまの独り子、つまり神さまです。けれども、クリスマスの夜に、マリアさんからお生まれになられて人間とされました。何のためでしょうか。それはあなたを神さまの子どもにするためです。イエスさまを信じるあなたも、神さまによって新しく生まれた人間なのです。</p>
<p>4月18日（水） 問2 ヨハネ1章12節 その名を信じる人々には、神の子と</p> <p>イエスさまのお名前前の意味は「罪からの救い」です。神さまに罪を赦していただかなければ、誰も救われません。イエスさまは、あなたの罪を赦すために、あなたの身代わりになって神さまからの裁きを十字架でお受けになりました。イエスさまの死を、心から感謝して生きて行きましょう。</p>	<p>4月21日（土） 問2 ルカ19章5節 ザアカイ、急いで降りてきなさい。</p> <p>ザアカイは、自分のことばかりを考えて、お金持ちになりました。だから、みんなの嫌われ者。ところが、イエスさまだけは違います。ザアカイのところに近づいて来てくださいます。イエスさまは、どんな人のところにも近づいて行かれます。ザアカイさんって、誰のことなのでしょう。</p>

いのちのばん

<p>4月23日（月） 問2 ルカ19章5節 あなたの家に泊まりたい</p> <p>イエスさま、どうしてザアカイの家になんか泊まりたいのですか。ザアカイは、悪いことをしてお金をもうけている、みんなの嫌われ者なのに。イエスさまはザアカイの友達になられました。あなたは、今日、誰の友達になりますか。</p> 	<p>4月26日（木） 問2 ルカ19章10節 失われた者を探して救うために</p> <p>失われた者って、何のこと、誰のことでしょう。神さまから離れて生きている人は、神さまにとって失われている人なのです。つまり、神さまを信じていない人です。ザアカイはイエスさまによって探し出されました。わたしもイエスさまに見つけていただいて、神さまのもとに戻して頂きました。</p>
<p>4月24日（火） 問2 ルカ19章5節 あなたの家に泊まりたい</p> <p>ザアカイの家に喜んで泊まれたイエスさま、わたしの心の家にも入ってください。決してきれいな部屋ではありません。でも、イエスさまが入ってくださいれば、きれいになります。いつまでも心の中にお住まい下さい。</p> 	<p>4月27日（金） 問2 ルカ19章10節 失われた者を探して救うために</p> <p>イエスさまが来られたのは、神さまから離れて、迷子になっている人を探し出すためです。あなたが教会に来て、イエスさまを信じたとき、そして今信じているあなたをどれほど神さまは喜んでおられるでしょう！ あなたも、神さまの喜びを満たすために、お友達を探してあげてください。</p>
<p>4月25日（水） 問2 ルカ19章9節 この人もアブラハムの子なのだ</p> <p>イエスさまは、ザアカイを「アブラハムの子」、つまり神さまの救いに選ばれた人と見ておられました。心の中にイエスさまをお迎えしているあなた、そう、教会に来ている君も、赤ちゃんのときに洗礼を受けたあなたも、イエスさまに、「アブラハムの子」と認められ、紹介していただけます。</p>	<p>4月28日（土） 問2 ローマ3章26節 イエスを信じる者を義となさる</p> <p>天のお父さま、神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすことは、ただイエスさまを信じて救われることによることを感謝します。明日の礼拝に、みんなが揃ってイエスさまを礼拝できますように。</p> 

いのちのばん

4月30日（月） 問3 ヨハネ4章23節
まことの礼拝をする者たち
 天のお父さまは、神さまを礼拝する
 人を求めておられます。なぜなら、礼
 拝することこそ、人間の生きる目標そ
 のものだからです。わ
 たしたちの一周間は、日
 曜日の礼拝から始まり、
 次の日曜日をめざして
 進んで行くのです。



5月3日（木） 問3 ヨハネ20章26節
トマスも一緒にいた。
 日曜日に復活されたイエスさまは、
 お弟子さんたちにお姿を現されまし
 た。ところが、トマスさんだけは、一
 緒にいなかったのです。だから、イエ
 スさまにお会いできず、信じることも
 できなかったのです。わたしたちも今、
 日曜日に教会に集ることによって、イ
 エスさまとお会いできるのです。

5月1日（火） 問3 ヨハネ4章24節
霊と真理をもって礼拝しなければ
 神さま、あなたは目で見ることも、
 手で触ることもできません。けれど
 も、教会の礼拝で聖書のみことばや先
 生の説教を聴いて礼拝することがで
 きます。そのような僕たちの礼拝が、
 霊と真理の礼拝であることをありが
 とうございます。次の日曜日に、一人
 でもお友達を誘えますように。

5月4日（金） 問3 使徒2章1節
一同が一つになって集って
 天のお父さま、みんなで集って礼拝
 しているときに、聖霊の神さまが注が
 れました。わたしも日曜日には、お友
 達といっしょに礼拝して、皆と一つに
 なることができました。今は、みんな
 と離れて一人でお祈りしていますが、
 イエスさまによって一つとされてい
 ることを信じて、感謝します。

5月2日（水） 問3 ヨハネ4章26節
あなたと話をしているこのわたし
 イエスさまは、サマリアの女の人
 に、「あなたの目の前にいるこのわた
 しが救い主なのです。」と教えてくだ
 さいました。イエス
 さまを信じ、そのお
 話を聴いて、礼拝す
 ることこそ、真の礼
 拝なのです。



5月5日（土） 問3 使徒20章7節
パンを裂くために集っていると
 天のお父さま、僕は礼拝に出ていま
 すが、まだ「聖餐」のパンを食べ、ぶ
 どうジュースを飲んだことがありま
 せん。イエスさまと
 一つとされるための
 大切なお祝いに、僕
 もあずかることがで
 きますように。



いのちのばん

5月7日（月）問3 マタイ21章13節
わたしの家は、祈りの家と呼ばれる

教会はイエスさまの家です。教会は祈りの家、つまり、みんなで神さまを礼拝するところです。あなたが礼拝するなら、教会はあなたの家にもなります。礼拝とは皆で順序正しくお祈りすることです。お家でするのは「小さなお祈り」、日曜学校の礼拝は「大きなお祈り」です。

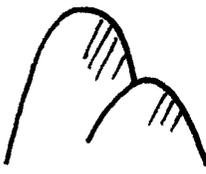
5月10日（木）問3 使徒12章5節
教会では彼のために熱心な祈りが

教会はいつも、悩みや苦しき、悲しみや痛みを持っている人のために祈りします。教会、とくにあなたの分級の先生は、あなたのために日々、お祈りしています。あなたも先生のために、教会のために、祈ってくださいね。



5月8日（火）問3 マタイ14章23節
祈るためにひとり山に登りに

イエスさまは、お弟子さんたちと一緒に祈りするだけではなく、ひとりぼっちになってお祈りされました。小さな祈りを大切にされました。イエスさまと親しくなる小さな祈りの楽しさをあなたも知ることができるよう。



5月11日（金）問3 使徒14章23節
長老たちを任命し、断食して祈り

天のお父さま、パウロさんたちは、教会の大切なことを決めるとき、ご飯を食べるのをやめてまで、お祈り続けました。わたしも大切なことを決めるとき、自分かってに決めないで、神さまに相談し、お導きに従うことが出来るようにしてください。



5月9日（水）問3 ルカ22章17節
杯を取り上げ、感謝の祈りを唱え

イエスさまを信じているお友達は、ご飯を食べる前に必ず、感謝のお祈りをします。「天のお父さま、与えてくださったご飯を感謝します。これを食べて体を元気にしてください。食べられない人たちにもご飯を与えてください。イエスさまのお名前によって、アーメン。」（一つの例）

5月12日（土）問3 一テサ5章17節
絶えず祈りなさい。

いつも喜び、どんなことにも感謝できたら素晴らしいと思いませんか。そのひけつはお祈りすることです。お祈りはイエスさまと一つになることです。遊んでいるときも勉強しているときも、イエスさまを信じていれば、イエスさまとつながっています。声に出すだけが祈りではないのです。

いのちのばん

<p>5月14日（月） 問3 ニコリ1章11節 いのちのえんじょ 祈りで援助してください。</p> <p>パウロ先生はイエスさまを伝えるために死ぬような苦しい目にあいました。けれども、神さまは何度もなんども、助けてくださったのです。パウロ先生は、教会の人たちがお祈りしてくれたら助けられると考え、お祈りを願っています。あなたは誰のためにお祈りしますか。</p>	<p>5月17日（木） 問3 ヤコブ5章14節 いのち 祈ってもらいなさい。</p> <p>お祈りする気持ちがなくなってしまうそう……。何をどうお祈りしたらよいか分からない……。そんなときは先生にお祈りしてもらってください。そして一番大切なことを忘れないで！ イエスさまは、今も、天のお父さまの隣で、あなたのためにお祈りしてくださることを。</p>
<p>5月15日（火） 問3 サム上3章9節 しゅ 主よ、お話しください。</p> <p>お祈りは、神さまとのお話です。ですから、神さまのお話をしっかり聴くことからお祈りは始まります。聖書のお話を聴くこともお祈りなのです。そして、聴いたら「はい」と返事をします。それがお祈りの基本なのです。</p> 	<p>5月18日（金） 問3 エフェ6章18節 こんき 根気よく祈り続けなさい。</p> <p>天のお父さま、毎日「いのちのばん」を続けようと思います。でも、できないときの方が多かったです。お祈りしてもきかれないと考えてしまうこともあります。自分の力に頼らないで、みことばの約束を信じて、祈り続けさせてください。</p> 
<p>5月16日（水） 問3 ローマ8章26節 いのち どう祈るべきか知りませんが</p> <p>もしあなたがお祈りしたいな、しなくちゃいけないなと思ったなら、聖霊なる神さまがあなたの心に働きかけ、呼んでおられるのです。もし、そんな気持ちもなくなってしまうたら……。大丈夫。必ず聖霊なる神さまが助けて下さいます。お祈りは聖霊なる神さまのお働きによってできるのです。</p>	<p>5月19日（土） 問3 詩編68編20節 この香は聖なる者たちの祈り</p> <p>わたしたちの礼拝は天国の礼拝とつながっています。天国の礼拝では、イエスさまに「豎琴」つまり賛美がさげられ、「金の鉢」つまり宝物がさげられています。その宝物の中身はあなたのお祈りなのです。あなたのお祈りは、きらきらした金の入れ物の中にしっかり収められています。</p>

いのちのばん

5月21日（月） 問4 マルコ12章30節
主を愛しなさい

「わたしを愛しなさい！」って言うのは、誰よりもあなたのことを愛している人だけのはずです。神さまはあなたへの愛に自信をもっておられます。だから、あなたもこたえて下さい。「わたしも神さまを愛します。」そうすると、神さまの愛がよく分かってくるのです。

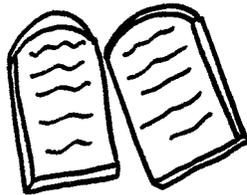
5月24日（木） 問4 エレミ31章3節
とこしえの愛をもってあなたを

天のお父さま、わたしは、いつも良い子ではないけれど、神さまは終わりのない愛、変わらない愛をもって愛し続けてくださることを心からありがとうございます。神さまの愛を世界中の人が知ることができるようになります。



5月22日（火） 問4 出エジ20章6節
わたしを愛し、私の戒めを守る者

天のお父さま、今日もわたしの心の中を神さまの神でいっぱいにして下さい。その愛があふれて、神さまの望んでおられることと、神さまとお友達を愛することができるようになって下さい。



5月25日（金） 問4 ホセア6章6節
わたしが喜ぶのは 愛

昔イスラエルの人は、たくさんのお金を出して、形ばかりの立派な礼拝をささげていけばよいのだと考えていました。けれども神さまが喜ばれる礼拝は、神さまを心を込めて愛すること、わたしたちを愛して下さる神さまをたくさん知ることなのです。

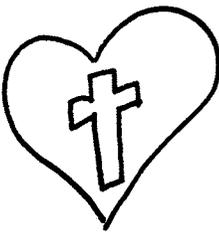
5月23日（水） 問4 申命10章12節
主を畏れ……主を愛し……主に仕え

神さまがあなたに求めておられることは、聖書のまことの神さまだけを礼拝し、主なる神さまを神し、お仕えることです。そうするとあなたは必ず幸せになると約束されています。あなたが楽しく喜んで生きるための、神さまの神の命令です。嬉しいね。

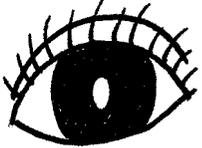
5月26日（土） 問4 ヨハネ13章1節
この上なく愛し抜かれた

お弟子さんのヨハネは、イエスさまのことを思うといつも胸が熱くなりました。イエスさまが、ご自分の愛の全部を注ぎきるように愛してくださいました。その愛は、今この御言葉を読んでいるわたしたちにもまったく同じように注がれています。

いのちのばん

<p>5月28日（月） 問4 ヨハネ13章34節 わたしがあなたがたを愛したように</p> <p>「愛」って何でしょう。それはイエスさまの事です。聖書を読んで、イエスさまをじっと見つめていると、愛が分かります。その愛で君も愛されているのです。そして君もイエスさまを愛しているでしょう。イエスさまと君の間に愛があります。愛は、君を暖かくし、愛へと動かしてしまいます。</p>	<p>5月31日（木） 問4 ヨハネ15章9節 あなたがたを愛してきた</p> <p>天のお父さまはイエスさまを愛しておられます。そのまったく同じ愛で、イエスさまはわたしを愛していただきます。天のお父さまとイエスさまが一つであるように、わたしとイエスさまも一つに結ばれているのですね。なんとすごいことでしょう。</p>
<p>5月29日（火） 問4 ヨハネ13章34節 互いに愛し合いなさい</p> <p>天のお父さま、イエスさまは、お弟子さんたちの顔をじっと見つめて、何度もお互いに愛し合いさないとお命じになりました。今日の一日をいっしょに過ごすすべての人を心から愛せるように助けてください。</p> 	<p>6月1日（金） 問4 ヨハネ15章9節 わたしの愛にとどまり</p> <p>天のお父さま、ときどき、大好きなイエスさまのことを忘れて、お祈りをしないときがあります。愛されていることを忘れてしまいます。イエスさまの愛の中にいつまでもいさせてください。</p> 
<p>5月30日（水） 問4 ヨハネ13章35節 互いに愛し合うならば</p> <p>イエスさまを信じている人はどこにいますでしょうか。どうしたらその人たちのことがわかるのでしょうか。教会に来ている人？ 洗礼を受けている人？ その通りです。でも、お互いに愛し合っていないければ、他の人たちにはわかりません。今日も日曜学校のお友達のために祈りましょう。</p>	<p>6月2日（土） 問4 ヨハネ15章13節 これ以上に大きな愛はない。</p> <p>イエスさまは、友のために命を捨てる以上に大きな愛はないのですと仰って、あなたのために十字架にかかって死んで下さいました。あなたはイエスさまの友達にいただいたのです。これ以上に大きな愛はない、そのような愛で今日もイエスさまの愛の中に守られています。</p>

いのちのばん

<p>6月4日（月） 問4 ローマ5章8節 わたしたちに対する愛を</p> <p>神さまは、あなたがとても良い子だからお救いくださるのでしょうか。とても賢い子だから日曜学校に来ることができたのでしょうか。神さまは、あなたが汚い心をもって、悪いことをするのを知っていて、それでも、あなたを神さまの子として愛しておられます。そのままのあなたを。</p>	<p>6月7日（木） 問4 一コリ13章13節 愛を追い求めなさい。</p> <p>パウロ先生は、神さまの愛をたたえます。そして、あなたも愛を追い求めなさい、つまり愛する人になりなさいとお命じになられます。加えて、イエスさまの愛を伝えることができるようになりなさいとも勧めています。そのために、聖書を読んで、先生のお話を聴くことが大切です。</p>
<p>6月5日（火） 問4 ローマ8章35節 だれが、キリストの愛から</p> <p>この世の中で一番偉いのはイエスさま。一番強いのはイエスさま。一番やさしいのはイエスさま。一番賢いのはイエスさま……。どんな悪い力が襲ってきても、イエスさまの愛の力からあなたを引き離すことはできません。たとえ、あなたの悪い心、不信仰の心がどんなに強くて。</p>	<p>6月8日（金） 問4 イザヤ43章4節 わたしはあなたを愛し</p> <p>天のお父さまは、わたしのことを、イエスさまの命を身代わりにしてもかまわないほどに、貴いものと見ていてくださいます。愛されていることを感謝します。わたしもわたしをそう見てあげることができま</p>  <p>すように。</p>
<p>6月6日（水） 問4 一コリ13章13節 もっと おお 最も大いなるものは、愛である。</p> <p>天のお父さま、御言葉によって毎日イエスさまの愛、神さまの愛を教えてください、ありがとうございます。愛されていることを感謝します。イエスさまから受けた愛を独りじめにしな</p>  <p>いで分けてあげられますように。</p>	<p>6月9日（土） 問4 コロサ3章14節 愛は、すべてを完成させるきずな</p> <p>天のお父さま、赦せない人、愛せない人がいます。わたしの心の中に本当の愛がないことに気がつきます。でも、こんなわたしを赦して愛してください。イエスさまがおられます。どうぞ、わたしの心をすべてを完成させるイエスさまの愛でいっぱいにして下さい。</p>

いのちのばん

6月11日(月) 問4 ヘブラ13章1節
兄弟としていつも愛し合いなさい。

イエスさまを信じている人は、神さまの家族です。イエスさまがすべての人の一番上の長男です。わたしは弟、あなたは妹です。わたしとあなたはイエスさまによって兄弟姉妹です。神さまが喜ばれるのは、兄弟姉妹が愛し合うことです。



6月14日(木) 問4 一ヨハ4章10節
神がわたしたちを愛して

あなたのもっているイエスさまへの信仰や愛はどうして始まったのですか。それは、まず神さまの方からの愛と信頼を受けたからです。信仰も愛も、神さまからの働きかけで、わたしたちは受けるだけです。愛することは自分の力ではできません。神さまに愛を求めましょう。

6月12日(火) 問4 一ヨハ3章16節
わたしたちは愛を知りました。

世界で一番素晴らしいのはイエスさまの愛。世界で一番幸せな人はイエスさまに愛されている人。世界で一番大切な知識は、あなたのためにイエスさまが十字架の上でこの上なく貴い命をお捨てになられたこと、あなたが愛されていること。あなたは世界で一番幸せな人であることです。

6月15日(金) 問4 一ヨハ4章21節
神を愛する人は、兄弟をも愛すべき

天のお父さま、このひと月、毎日、神さまがわたしたちに望んでおられるのは神さまを愛することと、家族やお友達を愛することだと学んできました。愛することがどれほどむづかしいのか、そしてこんなわたしをも愛し続けてくださる神さまの愛のすばらしさが分かってきました。感謝します。

6月13日(水) 問4 一ヨハ3章18節
行いをもって誠実に愛し合おう。

世界で一番幸せなあなたは、その幸せ、神さまから受けた愛を、友達に分かち与えることができます。愛は行動です。最高の愛の行いは、お友達にイエスさまを紹介してあげること、日曜学校に誘うことです。



6月16日(土) 問4 二ヨハ6節
愛とは、御父の掟に従って歩むこと

神さまを愛することと家族やお友達を愛することとは、別のものではありません。御父の掟、つまり十戒や神さまのご命令を守ること、神さまとお友達を愛することもまた一つのことです。真理とは愛に生きること。イエスさまを信じて、御言葉を口ずさんで生きる人は、掟を守っています。

いのちのパン

6月18日（月） 問5 ニテモ3章15節
 おきな ひ せいしょ した
幼い日から聖書に親しんで

これまで学んで来たすばらしい神さまのことは、何によって知ることができたのでしょうか。それは、あなたの前に開かれています聖書の御言葉によってですね。あなたは幼い日から聖書に親しんでいます。本当に幸せですね。



6月21日（木） 問5 ヨハネ19章24節
 こうして、せいしょ ことば じつげん
こうして、聖書の言葉が実現した

旧約聖書には、イエスさまのこと、どこでどのように十字架につけられ、どんなことが行われるのか……、何百年も前から詳しく書かれています。神さまの御言葉はことごとく必ずその通りになるのです。そんな本は聖書だけです。御言葉を信じる人のあゆむ道は確かです。

6月19日（火） 問5 ニテモ3章15節
 しんこう とお すく みちび ち え
信仰を通して救いに導く知恵を

聖書の中に書かれてあるもっとも大切なことって何でしょうか。それはイエスさまのこと、イエスさまを信じて救われて、あなたが神さまの子とされていることを知ることです。聖書を読んでイエスさまのことを思う。イエスさまがどんどん好きになる。これが聖書の正しい読み方です。

6月22日（金） 問5 一コリ15章4節
 せいしょ か
聖書に書いてあるとおり

イエスさまがお甦りになられることも前もって聖書に書かれています。聖書に書かれてあることは必ずその通りになるのです。たった一つだけまだその通りになっていないのは、イエスさまがもう一度来られる約束です。



6月20日（水） 問5 ニテモ3章16節
 すべて 神の霊の導きの下に書かれ

聖書には人間の言葉が書いてあります。書いたのはわたしたちと同じ人間です。でもその人たちは、聖霊なる神さまに導かれて、神さまからの御言葉を記したのです。聖霊なる神さまが聖書の著者です。だから、お祈りして、聖霊なる神さまによって分からせていただくのです。

6月23日（土） 問5 ニペト1章21節
 わたしが命のパンである。

「命のパン」、それはイエスさまのことです。イエスさまは今、聖書の御言葉によってあなたにお会いしてくださいます。ですから聖書もまた「命のパン」です。このパンを食べると心が元気になります。神さまの愛や永遠の命も与えられます。



いのちのばん

6月25日（月） 問5 使徒17章11節
毎日、聖書を調べていた
 天のお父さま、毎日、聖書を読むことができるように助けてください。聖書を読む習慣をつけさせてください。そのために、いつも聖書をそばにおいておけますように。読めない日が続いても、あきらめてやめてしまうことがないようにお守りください。



6月28日（木） 問6 詩編19編8節
主の律法は完全で、魂を生き返らせ
 天のお父さま、わたしのために、今日も聖書を通して御言葉を語りかけてくださったことをありがとうございます。わたしの心は元気になります。もっともって御言葉を聞くことが大好きになって、イエスさまの愛で満たしてください。

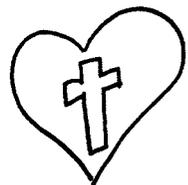


6月26日（火） 問5 マタイ22章29節
聖書も神の力も知らないから
 聖書は、昔も今も世界中で一番読まれている本です。でも、人だ人がみんなイエスさまを信じて救われているわけではありません。かえって、まちがったことを教え始めたりする人も多いのです。神さまを愛して従おうとしないで、自分中心、自分勝手に読むからです。

6月29日（金） 問6 ヨシュ1章7節
律法を……どこに行っても成功する
 神さま、あなたが読むように与えてくださった毎日の御言葉を心に留め、覚えさせてください。そうすれば、神さまがいつも一緒にいてくださることがわかるようになります。わたしを通して神さまの御心が実現して、神さまの栄光をあらわす、素晴らしい毎日になるからです。

6月27日（水） 問6 ニペト1章20節
自分勝手に解釈すべきではない
 聖書のことばは神さまの御言葉です。聖書は教会によって読まれ、お話されるために与えられたものです。ですから、日曜学校の礼拝のお話、分級のお話はとても大切です。分からないところは先生に聞くことが大切です。先生はそんな君の質問を喜んで待っています。

6月30日（土） 問6 ニテモ3章16節
生まれたばかりの乳飲み子のよう
 生まれたばかりの赤ちゃんは、4時間おきにミルクを飲みます。天のお父さまは、わたしたちを神さまの子どもらしく育ててくださるために、あふれるように「霊の乳」、**「いのちのパン」**を与えてくださいます。**「ゴクン、ゴクン。」**



2007年7～9月カリキュラム（第26号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
7月1日	王国の分裂	列王記上11～12章	ヨハネ15:5a	63, 64 31
	王たちの罪ゆえ王国は分裂するに至った。なお民を憐れまれる神の愛を知ろう			
7月8日	バアルとの対決	列王記上18章	申命6:566	66 33
	バアルとたたかうエリヤ。主こそまことの神であることを知ろう			
7月15日	残りの者	列王記上19:1－18	使徒18:9b－10a	66
	主は共におられ、残りの者を残しておられる。主の励ましに耳を傾けよう			
7月22日	裁きの預言	エゼキエル6章	エゼキエル6:14b	
	バビロン捕囚は偶像礼拝に対する主なる神の裁きである。罪の大きさを知ろう			
7月29日	回復の預言	エゼキエル34章	エゼキエル34:14a	
	主ご自身がまことの羊飼いとて民を導かれる。救いの御業を待ち望もう			
8月5日	燃え盛る炉	ダニエル3:1－30	ダニエル3:18b	72 39
	神はご自身を礼拝する者を守ってくださる。まことの神にのみひれ伏そう			
8月12日 平和主日	ライオンの洞窟	ダニエル6章	ダニエル6:28	74 42
	異教の王さえ主なる神をほめたたえるに至る。主に従うことの力を知ろう			
8月19日	城壁再建	ネヘミヤ2章	マルコ9:23	77
	主は人の心に志を起こし、知恵と力を与えられる。主に仕えることを喜ぼう			
8月26日	主を喜び祝う	ネヘミヤ8:1－12	ネヘミヤ8:10c	78
	主を喜び祝うことこそ、力の源である。礼拝をささげる喜びを味わおう			
9月2日	役人の息子のいやし	ヨハネ4:43－54	イザヤ55:11	
	主イエスの言葉は力である。神の言葉を信じる者に与えられる幸いを知ろう			
9月9日	ベトザタの池でのいやし	ヨハネ5:1－18	ヨハネ5:17b	12
	「起きよ」と命じられる主イエス。主イエスにいやされて生きる幸いを知ろう			
9月16日 (17敬老の日)	生まれつきの盲人のいやし	ヨハネ9:1－12	ヨハネ9:3b	
	主は人を用いて神の御業を現してくださる。神の器とされていることを喜ぼう			
9月23日	ラザロを生き返らせる	ヨハネ11:1－44	ヨハネ11:25	33 49
	ラザロの生き返りは主イエスの十字架と復活を指し示す。命の主を仰ごう			
9月30日	キリストの十字架	ヨハネ19:28－30	ヨハネ19:30	46 66
	十字架は神の御業の成就。くすしき御業を成し遂げられた神をほめたたえよう			

※「対応表」欄の上段は、『教会学校教師指導書（旧約編・新約編）』（日本基督改革派教会大会教育委員会発行）の該当する単元を示しています。「対応表」欄の下段は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

2007年度 年間カリキュラム

(2007年4月～2008年3月)

二年サイクルの聖書物語（救済史）と教会暦の併用カリキュラム

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2007年 25号	4月1日	受難週・進級式	キリストの受難	ルカ23:13－25
	4月8日	復活祭	復活のキリスト	ルカ24:36－49
	4月15日		ヨルダン川を渡る	ヨシュア3章
	4月22日		エリコの攻略	ヨシュア6章
	4月29日		ギデオンの精鋭	士師記7章
	5月6日		サムソン	士師記16章
	5月13日	母の日	ナオミとルツ	ルツ記1章
	5月20日		ルツとボアズ	ルツ記2章（～4章）
	5月27日	聖霊降臨祭	新約の教会の誕生	使徒言行録2:1－13
	6月3日		ダビデとゴリアト	サムエル上17章
	6月10日	花の日	ダビデとヨナタン	サムエル上20章
	6月17日	父の日	ダビデへの契約	サムエル下7章
	6月24日		ソロモンの神殿建築と祈り	列王記上8:22－53
26号	7月1日		王国の分裂	列王記上12章
	7月8日		バアルとの対決	列王記上18章
	7月15日		残りの者	列王記上19:1－18
	7月22日		裁きの預言	エゼキエル6章
	7月29日		回復の預言	エゼキエル34章
	8月5日		燃え盛る炉	ダニエル3:1－30
	8月12日	(平和)	ライオンの洞窟	ダニエル6章
	8月19日		城壁再建	ネヘミヤ2章
	8月26日		主を喜び祝う	ネヘミヤ8:1－12
	9月2日		役人の息子のいやし	ヨハネ4:43－54
	9月9日		ベトザタの池でのいやし	ヨハネ5:1－18
	9月16日	(17敬老の日)	生まれつきの盲人のいやし	ヨハネ9:1－12
	9月23日		ラザロを生き返らせる	ヨハネ11:1－44
9月30日		キリストの十字架	ヨハネ19:28－30	

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題 (仮題)	聖 書 箇 所
2007年 27号	10月7日		復活の主イエスとペトロ	ヨハネ21:15－19
	10月14日		主イエスの昇天	使徒1:6－11
	10月21日		聖霊の降臨	使徒2:1－13
	10月28日	宗教改革記念日	ペトロの説教	使徒2:14－42
	11月4日		美しの門でのいやし	使徒3:1－10
	11月11日		アナニアとサフィラ	使徒5:1－11
	11月18日		ステファノの殉教	使徒7:54－60
	11月25日		サウロの回心	使徒9:1－19a
	12月2日	アドベント	待降節・義の太陽	マラキ3:19－24
	12月9日	アドベント	待降節・マリアへの告知	ルカ1:26－38
	12月16日	アドベント	待降節・マリアの賛歌	ルカ1:39－56
	12月23日	クリスマス	降誕祭・主イエスの誕生	ルカ2:1－20
	12月30日		ペトロに示された幻	使徒10:9－33
2008年 28号	1月6日	新年	エルサレム会議	使徒15:1－21
	1月13日		異邦人への伝道	使徒16:6－15
	1月20日		看守の救い	使徒16:16－34
	1月27日		アレオパゴス説教	使徒17:16－34
	2月3日		土の器なれど	コリント二4:1－15
	2月10日	レント (信教の自由)	競争を走り抜くパウロ	フィリピ3:12－21
	2月17日		喜びへと励ますペトロ	ペトロ一1:3－9
	2月24日	レント	天上のキリスト	黙示録1:9－20
	3月2日	レント	天上の礼拝	黙示録4章
	3月10日	レント	新しい天と新しい地	黙示録21:1－8
	3月17日	受難週	受難・十字架のキリスト	マタイ27:45－56
	3月23日	復活祭	復活祭・復活のキリスト	マタイ28:1－10
	3月30日		再臨を待ち望む	黙示録22:6－21

〈執筆よりひとこと〉

- 幼い子に理解できることばを探しながら、全員で執筆を担当致しました。感謝です（関キリスト教会教会学校教師会）。
- テキストである聖書の筋道に従うことを基本としました。聖書を何度も読みました。とても恵みをいただき感謝です（那加教会教会学校教師会）。
- 実際に教案誌の執筆にたずさわってみて初めて、この働きの大変さと有り難さを実感することが出来ました。感謝です（千里摂理教会教会学校教師会）。
- 中学生達のために奉仕できる幸いを主に感謝いたします！（岡本告）。
- 世界とこの国の状況の中で、ろばお子に乗って凱旋がいせんされたお方こそわたしたちのまことの王であることを心に刻み、この王に従い続けたいと思います（木下裕也）。
- 一年一年の積み重ねで、七年目を迎えることができました。皆様のご支援とお祈りに感謝しています（望月信）。

〈成人科のご紹介〉

- 2007年度の成人科は、吉田隆牧師による「善き生活」についての学びです。「全生活にわたる感謝～『十戒』を生きる」という主題で執筆してくださいます。吉田隆牧師は、『ハイデルベルク信仰問答』（新教出版社、1997年）の翻訳で広く知られている先生です。
- 成人科は、各月ごとに行われる男子会、婦人会、青年会などの会合で用いられることを念頭に置いています。ぜひ学びのためにお用いください。

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』（300円）をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第20号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

名古屋岩の上伝道所 相馬伸郎まで

〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

- 副読本『主は羊飼』は在庫切れとなりました。申し訳ありません。

〈訂正とお詫び〉

- 第24号に誤りがありました。4ページ、「まえがき」の執筆者名が「鈴木牧（雄湘南恩寵伝道所協力牧師）」となっていますが、正しくは、「鈴木牧雄（湘南恩寵伝道所協力牧師）」です。もくじの「鈴木牧」も、正しくは「鈴木牧雄」です。訂正し、お詫び申し上げます。

〈あとがき〉

- 新しい年度を迎えました。2007年度は、救済史に基づく二年間のカリキュラム（聖書物語を中心にしたもの）の第二年目です。聖書の物語には、神の驚くべきみわざが満ちあふれています。神のみわざのすばらしさをほめたたえて、子どもたちに語り伝えて参りましょう。
- 「いのちのパン」が二年目に入ります。今年度の「いのちのパン」は、『子どもカテキズム』を用いる形式で執筆されます。掲げられている聖書と『子どもカテキズム』を読み、「いのちのパン」に導かれて、黙想と祈りのときをお持ちください。「いのちのパン」は、自由にコピーして配布し、お用いください。切り取ると、MDケースにおさまるサイズになっています。
- 恐るべき悪法、「改正・教育基本法」が成立してしまいました。日本キリスト改革派教会は、この基本法の改悪に断固反対の立場を公にしています。また、中部中会の多くの教会・伝道所では、成立に伴い「断食の日」を設け、悔い改めと信仰の戦いのために祈りを集めました。私どもの日曜学校伝道も、契約の子らの公教育の現場での信仰生活もいよいよ厳しい環境へと進まざるを得ないでしょう。今号は、特集として座談会と二つの原稿を収めました。今こそ、「沈黙は罪」であり、抵抗の意思を公にすべきではないでしょうか。皆様からのご意見、ご感想を切に求めます。「時が良くても悪くても」御言葉を宣べ伝えなさいとの命令を、今こそ、実践してまいりましょう。
- 弊誌の発行は、教会と個人からの自由募金なしには成り立ちません。対外献金先を祈られるとき、弊誌のことも思い出してくださいませ。

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	牧野信成 (千里山教会牧師)
木下裕也 (名古屋教会牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
巻頭説教	望月 信 (高蔵寺教会牧師)
吉岡契典 (仙台カナン教会牧師)	分級展開例
教会学校・日曜学校訪問	幼稚科
園田教会教会学校教師会	関キリスト教会教会学校教師会
特別寄稿	小学科下級
中山 仰 (東広島伝道所宣教教師)	那加教会教会学校教師会
特別企画	小学科上級
木下裕也 (名古屋教会牧師)	千里摂理教会教会学校教師会
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	中学科
聖書研究	岡本 告 (秩父教会牧師)
中根汎信 (那加教会牧師)	成人科
宮崎彌男 (筑波みことば伝道所宣教教師)	吉田 隆 (仙台教会牧師)
石原知弘 (北神戸キリスト伝道所宣教教師)	いのちのパン (子ども聖書日課)
辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
小野静雄 (多治見教会牧師)	船田真奈 (名古屋岩の上伝道所日曜学校教師)
鳥井一夫 (八事伝道所宣教教師)	表紙イラスト
宮武輝彦 (芸陽教会牧師)	吉田恵美子 (千里摂理教会)
説教展開例	本文イラスト
安田恵嗣 (勝田台教会牧師)	新海敬造 (名古屋岩の上伝道所)
木下裕也 (名古屋教会牧師)	船田真奈 (名古屋岩の上伝道所日曜学校教師)
坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)	

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2007年4・5・6月号 (季刊)
第25号
2006年2月25日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ 〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価	900円 (本体価格)
